東京都国分寺市

恋ヶ窪遺跡調査報告Ⅳ

1988.3

国分寺市遺跡調査会
国分寺市教育委員会

28号土壙出土硬玉製大珠（½）

序

国分寺市内には、保存計画策定を進めております武蔵国分寺跡をはじめとして数多くの埋蔵文化財が存在しています。中には今から３万年前まで遡る遺跡もあり、市域が古くから人々の生活の場となっていたことが解ります。これらは市東南部の野川流域に沿った武蔵野台地と呼ばれる高台に多く在ります。国分寺崖線から湧き出す豊富な湧水が育くんだ遺跡と言えます。

恋ヶ窪遺跡は、野川の源泉を見下ろす高台にある縄文時代の大集落跡です。昭和51年に発足した恋ヶ窪遺跡調査会では押し寄せる都市化の波に対応しながら調査を進めてまいりました。このたび、恋ヶ窪遺跡３地点の成果がまとめられたことにより、今後の調査・研究に大きく寄与するものと思われます。

この調査実施にあたりましては、文化庁、東京都教育委員会、国分寺市文化財保護審議会の皆様をはじめ、調査会の団長、役員の方々にご指導をいただきながら進めてまいりました。また、地元住民、関係者の深い理解と暖かいご協力がありましたことを厚く御礼申し上げます。調査により得られた貴重な資料は、広く市民の方に公開・活用していただきたいと思っております。

最後に、本報告書が恋ヶ窪の古代文化、国分寺の歴史の解明に少しでも供することができれば幸いです。すでに刊行されました恋ヶ窪遺跡調査報告書Ⅰ・Ⅱ・Ⅲと合わせて広く活用されることを願ってやみません。

昭和63年３月31日

調査会長　星　野　亮　勝

例　　言

1．本書は東京都国分寺市西恋ヶ窪に所在する恋ヶ窪遺跡の第12・13・15次調査報告である。

2．調査は恋ヶ窪遺跡範囲確認調査として恋ヶ窪遺跡調査会（団長 永峯光一）が実施した。発掘調査は広瀬昭弘が担当し、秋山道生・小松眞名・砂田佳弘・実川順一が調査員として協力した。尚、昭和61年4月の組織改正により事業は国分寺市遺跡調査会（団長 滝口宏）に受け継がれた。

3．本書の執筆・編集は広瀬・遠藤佐が行なった。

4．発掘調査ならびに整理作業に参加していただいた方々は次のとおりである。

発掘参加者

安藤健一、石川朗、入江渉二、上村、大森聰、小田、斧原、川岸、鈴木陽一、中道雄二、西山和成、細坪、堀江義孝、山崎和巳、吉岡哲也

整理参加者

石川朗、石田美恵子、内田勝巳、絹川一徳、小松明美、斉藤さだ子、猿橋敬子、品田圭二、助川剛栄、関欣子、冨山正明、中村宣弘、那知上清、楢岡ゆう子、翠川泰弘、皆川洋一、原俊二、深瀬恵津子、山崎和巳

5．発掘調査から報告書作成にいたる過程で、次の方々や機関から御協力、御助言を賜った。厚く御礼申し上げます。

青木豊、秋山道生、安孫子昭二、伊藤富治夫、植田真、岡崎完樹、河内公夫、小林達雄、佐藤宏之、砂田佳弘、高林均、舘野孝、谷口康浩、中島庄一、早川泉、樋口昇一、松沢亜生、宮崎博、山崎和巳、東京都教育庁文化課、神奈川県立埋蔵文化財センター

凡　　例

1．遺構番号は原則して確認順に連続番号を付した。整理工程の事由により必ずしも調査次数順とはなっていない。

2．遺構挿図のレベルポイントは第12次調査76.0m、第13次調査76.7m（縄文）、77.0m（歴史）、第15次調査76.0、76.2mを原則とする。例外は図に示した。

3．石器実測図でスクリーントーンは磨耗痕・磨面を表現する。

4．挿図の縮尺は次を原則とする。

住居址 1/60、炉・埋甕 1/30、屋外埋甕 1/25、集石 1/30、土壙（坑） 1/40、溝跡 1/80、土器（実測図）1/6・（拓本）1/3、石器2/3・1/2・1/3、土製品・石製品1/2

5．写真図版の縮尺は次を原則とする。

土器（完形）1/4・（破片）1/4、石器1/3、土製品・石製品1/2、但し、石器は1/2・1/4も一部ある。

目　　次

序

Ⅰ　調査の経緯 …… 1

Ⅱ　遺跡概観 …… 3
1　遺跡の環境 …… 3
(1)　地理的環境と周辺の遺跡　(2)　地形と遺跡立地　(3)　野川流域の遺跡分布
(4)　調査地点
2　層序 …… 10

Ⅲ　第12次調査 …… 11
1　縄文時代 …… 11
(1)　検出遺構　(2)　出土遺物

Ⅳ　第13次調査 …… 82
1　縄文時代 …… 82
(1)　検出遺構　(2)　包含層の遺物分布　(3)　出土遺物
2　歴史時代 …… 95
(1)　検出遺構

Ⅴ　第15次調査 …… 100
1　先土器時代 …… 100
(1)　遺物の出土状況　(2)　出土遺物
2　縄文時代 …… 111
(1)　検出遺構　(2)　出土遺物

Ⅵ　まとめ …… 122
1　遺構について …… 122
(1)　恋ヶ窪遺跡の広がりと構造　(2)　住居址群と墓域　(3)　集落外縁部の様相
2　遺物について …… 131
(1)　打製石斧について

引用参考文献 …… 136
あとがき …… 139

挿 図 目 次

第１図　恋ヶ窪遺跡と周辺の遺跡…… 2
第２図　遺跡周辺の地形…… 4
第３図　野川流域の遺跡分布…… 6
第４図　調査地点…… 9
第５図　層序……10
第６図　第12次調査遺構全体図……12
第７図　22号住居址・炉址……13
第８図　23号住居址・出土土器……15
第９図　24号住居址……16
第10図　１～３号屋外埋甕……17
第11図　６～10号集石……20
第12図　25・26・29～31・36・37・40・41号土壙……24
第13図　27・28・32～35・38・39号土壙……26
第14図　遺構全体図（ピットを含む）……29
第15図　22号住居址出土土器……32
第16図　22号住居址出土土器……33
第17図　24号住居址出土土器……35
第18図　１～３号屋外埋甕出土土器……37
第19図　その他の遺構出土土器……39
第20図　その他の遺構出土土器……41
第21図　遺構外出土土器……43
第22図　遺構外出土土器……45
第23図　遺構外出土土器……47
第24図　遺構外出土土器……49
第25図　22号住居址出土石器……52
第26図　22号住居址出土石器……53
第27図　22号住居址出土石器……55
第28図　22号住居址出土石器……56
第29図　24号住居址出土石器……59
第30図　24号住居址出土石器……61
第31図　その他の遺構出土石器……63
第32図　遺構外出土石器……65
第33図　遺構外出土石器……67
第34図　遺構外出土石器……68
第35図　遺構外出土石器……69
第36図　遺構外出土石器……71
第37図　遺構外出土石器……72
第38図　打製石斧接合図……77
第39図　分割礫接合図……78
第40図　土製品・石製品……80
第41図　第13次調査縄文時代遺構全体図……82
第42図　11号集石・42～44号土坑……83
第43図　縄文時代遺物分布図……85
第44図　出土土器……87
第45図　出土土器……88
第46図　出土石器……90
第47図　出土石器……91
第48図　土製品……94
第49図　歴史時代遺構全体図……95
第50図　溝跡・１～６号土坑……96
第51図　ＳＦ１道路跡……98
第52図　第15次調査遺構全体図…… 100
第53図　先土器時代遺物分布図…… 103
第54図　先土器時代遺物分布図…… 104
第55図　先土器時代遺物分布図…… 105
第56図　先土器時代遺物分布図…… 106
第57図　先土器時代出土石器…… 108
第58図　先土器時代出土石器…… 109
第59図　43・44号住居址…… 111
第60図　45・48号土坑…… 113
第61図　46・47号土坑…… 115
第62図　14・50・51号土坑…… 117
第63図　土坑主軸方向…… 118
第64図　出土土器…… 120
第65図　出土石器…… 120
第66図　遺跡の立地と遺構分布…… 123
第67図　恋ヶ窪遺跡全体図（勝坂式期）…… 126
第68図　恋ヶ窪遺跡全体図（加曽利Ｅ式期）…… 127
第69図　時期別遺構分布（勝坂式期）…… 128
第70図　時期別遺構分布（加曽利Ｅ式期）…… 129
第71図　打製石斧計測グラフ…… 133

表　目　次

第１表　第12次調査出土土器一覧……30
第２表　第12次調査出土石器一覧……51
第３表　22号住居址出土石器計測表……57
第４表　24号住居址出土石器計測表……61
第５表　その他の遺構・遺構外出土石器計測表……74
第６表　遺構外出土石器計測表……75
第７表　第13次調査出土土器一覧……87
第８表　第13次調査出土石器一覧……93
第９表　出土石器計測表……93
第10表　先土器時代出土石器計測表…… 110
第11表　第15次調査出土土器一覧…… 118
第12表　第15次調査出土石器一覧…… 118
第13表　出土石器計測表…… 118

図　版　目　次

図版１　遺跡
図版２　第12次調査　調査区全景
図版３　22号住居址
図版４　24号住居址，屋外埋甕全景
図版５　１～３号屋外埋甕
図版６　集石
図版７　集石・土壙・発掘風景
図版８　22号住居址出土土器
図版９　22号住居址出土土器
図版10　24号住居址出土土器
図版11　屋外埋甕出土土器
図版12　その他の遺構・遺構外出土土器
図版13　その他の遺構・遺構外出土土器
図版14　遺構外出土土器
図版15　遺構外出土土器
図版16　遺構外出土土器
図版17　遺構外出土土器
図版18　遺構外出土土器
図版19　22号住居址出土石器
図版20　22・24号住居址出土石器
図版21　その他の遺構出土石器他
図版22　遺構外出土石器
図版23　遺構外出土石器
図版24　石器接合資料
図版25　土製品・石製品
図版26　第13次調査　調査区全景他
図版27　溝跡・出土土器
図版28　出土土器
図版29　出土石器
図版30　第15次調査　調査区全景他
図版31　43・44号住居址
図版32　土坑
図版33　先土器時代出土石器
図版34　出土土器・石器
図版35　石器使用痕他

Ⅰ　調査の経緯

1　調査の経緯と方法

恋ヶ窪遺跡では昭和51年の「恋ヶ窪遺跡調査会」設立以来、恋ヶ窪遺跡の範囲確認調査や各種開発行為に伴う緊急調査等を実施してきている。これまでの調査で遺跡の広がりが大まかに把握されるようになり、遺跡内の状況も徐々に明らかにされつつある。今回報告する3地点の調査もこうした一連の調査によるものである。尚、今までの調査成果や過去の調査内容については「恋ヶ窪遺跡調査報告Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ」(1979，80，82) を参照されたい。以下、今報告の3地点の調査を概述する。

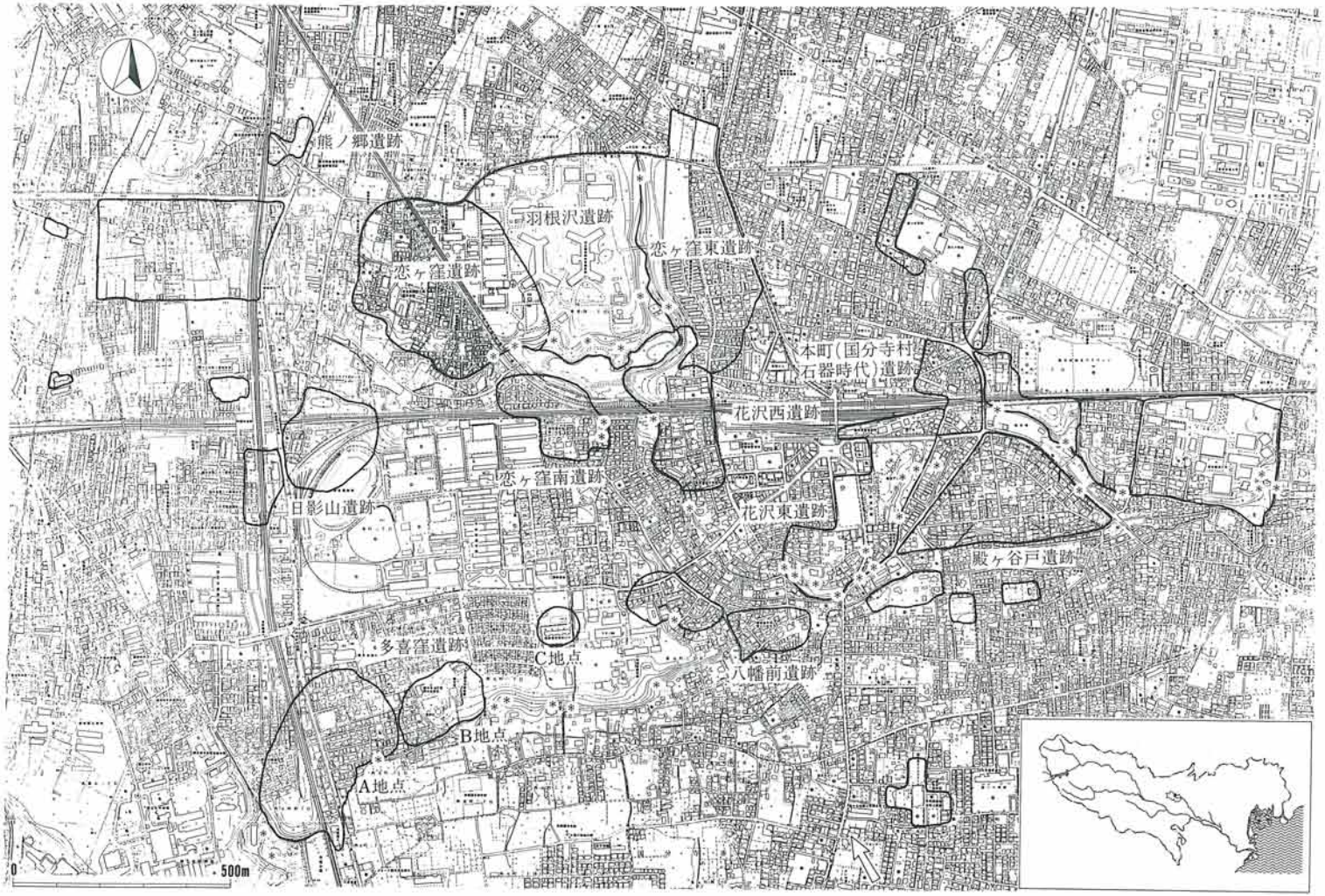
第12次調査　恋ヶ窪遺跡中央域。範囲確認調査の一環として実施。調査地は国分寺市西恋ヶ窪1丁目167番地で、昭和54年 (1979) 10月12日から翌55年2月16日まで延べ64日を費やして調査を行った。調査面積は264㎡。住宅に挟まれた畑地で調査地を半々に反復して調査を行う。しかも、調査期間が冬期となったため遺構調査は極めて困難な状態であった。今まで明らかでなかった墓壙群がみつかる。土壙内から硬玉製大珠も出土した。

第13次調査　恋ヶ窪遺跡北辺域。個人による共同住宅建築に伴う調査として昭和55年(1980) 8月25日から10月17日まで実施。調査地は国分寺市西恋ヶ窪1丁目210番地。延べ32日間で378㎡を調査した。遺構・遺物が希薄な地点で調査はスムーズに進行した。東西に走る2条の溝（時期不詳）の掘り上げにやや手まどる。調査区西側で南北に貫く溝は後の検討により武蔵国分寺より伸びる道路跡と判明。

第15次調査　恋ヶ窪遺跡西辺域。第13次調査と同様に個人による共同住宅建築に伴う調査である。調査地は国分寺市西恋ヶ窪1丁目175番地。昭和56年 (1981) 4月23日から5月27日まで延べ22日間で640㎡を調査した。包含層が殆ど残っていないためローム層上面まで機械で除去作業を行い、その後遺構確認をする。検出遺構は「Tピット」と呼ばれる土坑が多く主軸方向が類似する傾向がある。調査終了間際に先土器時代の遺物集中地点2ヶ所が見つかる。急拠先土器時代の調査を行う。恋ヶ窪遺跡における最初の先土器時代文化層の調査である。

以上が3地点の調査概要である。調査実施後報告まで長期間を費やしてしまった。この間各種調査が恋ヶ窪遺跡内や周辺遺跡で多発した事も一要因であるが、整理作業の遅延を深く反省している。

調査方法は「恋ヶ窪遺跡調査報告Ⅲ」に記した方法とほぼ同じである。調査区南西隅を基点とし2mグリッドを設定、できる限り遺物はドットマップ化したが微細片や礫などはグリッド一括で取り上げている。但し、第12次調査では南側の第10次調査（「恋ヶ窪遺跡調査報告Ⅲ」で報告）の調査区を踏襲した。



第1図　恋ヶ窪遺跡と周辺の遺跡

Ⅱ　遺跡概観

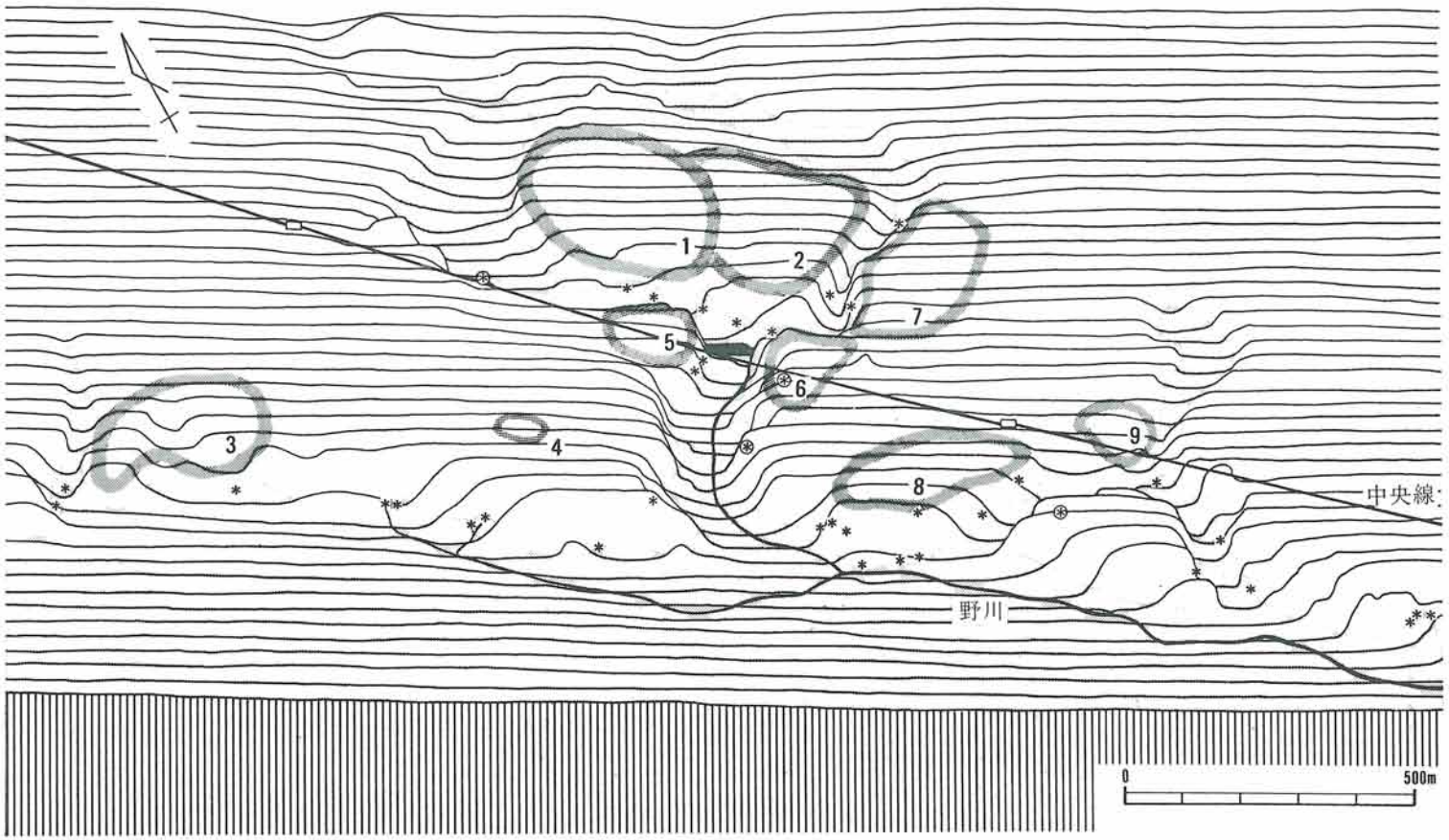
1　遺跡の環境

(1)　地理的環境と周辺の遺跡

過密都市東京も都心から少し離れるとその趣は変貌する。副都心新宿から西へ20㎞に国分寺市はある。周囲の処々に武蔵野の面影を残す雑木林がみられる住宅街である。恋ヶ窪遺跡はこうした環境の市内西恋ヶ窪１丁目、東恋ヶ窪１丁目に所在する縄文時代中期の大集落跡である。東京西郊の地形は大まかに中位面の武蔵野台地（段丘面）下位面の立川段丘面と、より低位の多摩川沖積低地とに分けられ、各々は国分寺崖線や府中崖線と呼ばれる崖によって区切られている。この内、武蔵野台地は青梅付近を頂点とした東西40㎞、南北30㎞におよぶ扇状の台地である。恋ヶ窪遺跡はこの武蔵野台地の南縁に立地し、眼下に野川の源流となる谷低地を見おろす（第１図）。遺跡は野川の開析谷に北側を除く三方向を囲まれた舌状台地の南西縁に占地している。台地は標高76～77ｍで東西約600ｍ、南北約400ｍの大きさを有する。崖線下には枯渇も含め各所に湧泉地（＊印）がみられ、これらが集まり野川の源となる。崖線は12m程の比高差がある国分寺崖線で通称ハケとも呼ばれている。台地を刻む谷の内、南から西側に伸びる恋ヶ窪谷は比較的幅広な谷で傾斜も緩やかである。恋ヶ窪遺跡の北西で西側に向きを変え浅い谷となる。一方、東から北側に伸びるさんや谷は幅狭で急傾斜の谷であるが、台地北側に廻ると急に浅い凹地状の谷となり武蔵野台地に連なっていく。

野川流域にあたる国分寺市東南部には恋ヶ窪遺跡以外にも数多くの遺跡が偏在している。縄文時代を主に周辺の遺跡をみてみたい。

国分寺市における縄文時代遺跡は恋ヶ窪遺跡や多喜窪遺跡Ａ地点（以下多喜窪遺跡と記す。）等を中心とした中期の遺跡が主体を占め、他時期の遺跡が少ないという特徴がある。まず縄文早期前半の遺跡としては多喜窪遺跡Ｂ地点、同Ｃ地点等があげられる。いずれも撚糸文系土器群後半から終末期にかけての土器群が出土している（国分寺市史　1986）。Ｃ地点では住居址が１軒検出されている（武蔵国分寺遺跡調査会　1985）。早期後半では恋ヶ窪南遺跡がある。早期末葉の住居址が20軒を超えて検出され、土坑群とも併せた集落形成が窺える（国分寺市遺跡調査会　1987）。前期の遺跡は非常に少なく花沢東遺跡で諸磯ｂ式期の住居址が１軒検出されたに止まり、出土遺物もこれ以外では散見されるのみである。中期前葉の五領ヶ台式期は恋ヶ窪南遺跡で検出されている。住居址３軒の他集石土坑が11基と数多く、土坑内には大形の炭化材が残っていた。近接する日影山遺跡、花沢西遺跡でも該期遺物が出土している（国分寺市史1986）。中期中葉から後葉にかけては市内遺跡の殆どで遺物が出土し、遺跡数は飛躍的に増加する。恋ヶ窪遺跡、多喜窪遺跡、本町（国分寺村石器時代）遺跡などでは大規模集落が形成され、周辺遺跡でも各種遺構が少量検出されている。次の後期になると遺跡は再び急激に減少



1．恋ヶ窪遺跡　2．羽根沢遺跡　3．多喜窪遺跡A地点　4．多喜窪遺跡C地点　5．恋ヶ窪南遺跡　湧泉地

6．花沢西遺跡　7．恋ヶ窪東遺跡　8．花沢東遺跡　9．本町(国分寺村石器時代)遺跡　立川面・谷低地

第2図　遺跡周辺の地形

する。立川段丘面に立地する八幡前遺跡で石器製作址と思われる遺構と共に堀之内式・加曽利B式土器が出土した（吉田　1951）ほかにまとまった資料はない。近年、立川段丘面の武蔵国分寺跡下層などで後期の土器等が出土している。中期までの武蔵野台地上の集落から立川段丘面微高地への遺跡占地の変化が窺える。市内では今日までのところ後期後半から晩期の遺跡は発見されていない。

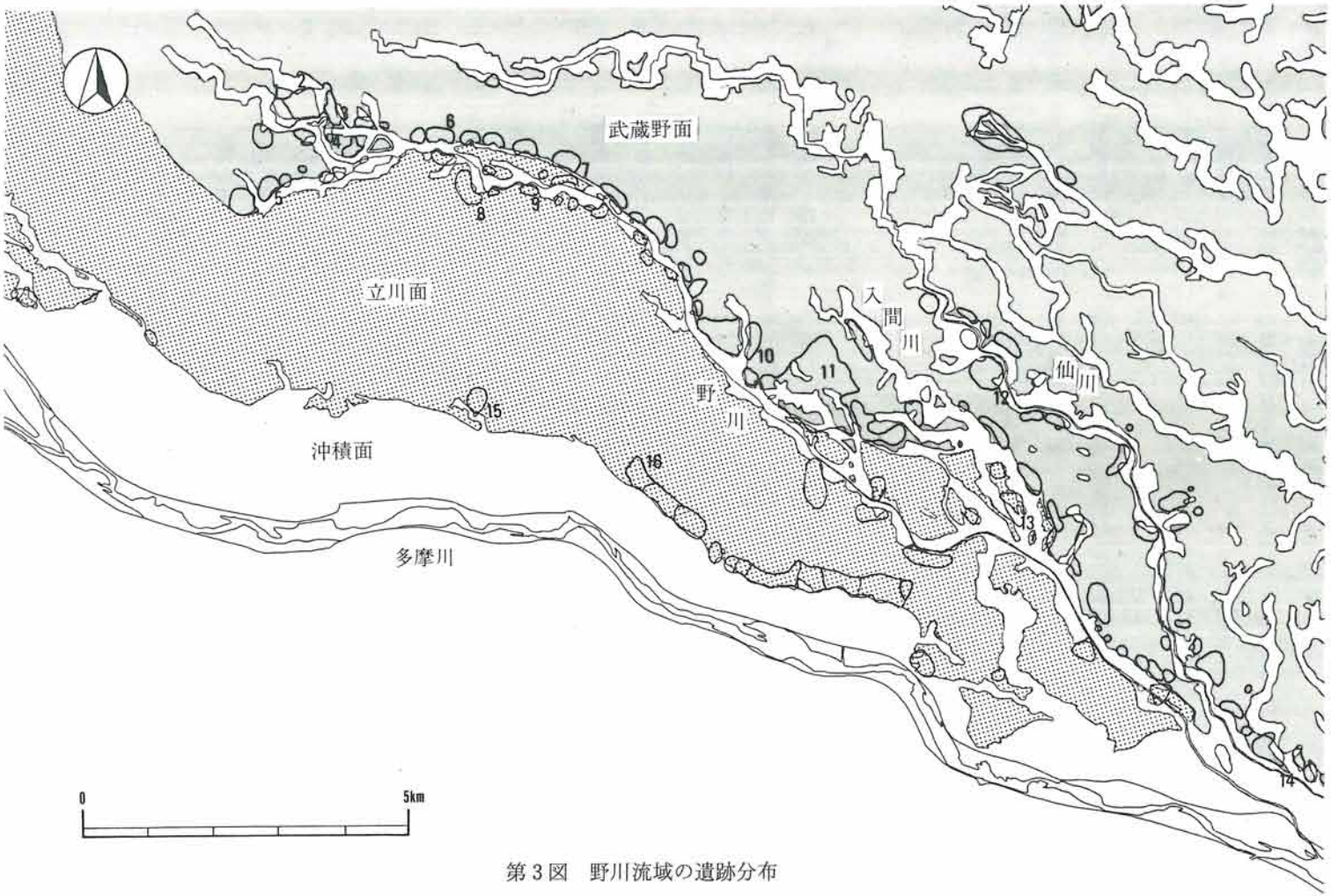
縄文以前の先土器時代遺跡は縄文時代遺跡と重複している傾向があり、花沢東遺跡では複数の先土器時代文化層が検出されている。また、熊ノ郷遺跡や殿ヶ谷戸遺跡といった学史に残る遺跡もある。一方、縄文時代以降では花沢西遺跡で弥生時代中期の土器片が少量出土し、古墳時代前期の甕が国分尼寺北方より出土している程度で遺跡は殆ど認められない（国分寺市史1986）。

(2)　地形と遺跡立地

遺跡を占地するにあたっては諸々の条件があり、それを満たすべく深慮・選択が働いたであろう。その中で地理的条件が占める比重は大きく、一般的には遺跡立地に適した場所として日当りの良い南向きの台地上などと言われている。しかし、似た様な地形の中で何故その場所を選んだかとなると中々難しい問題である。ここでは地形と遺跡立地について若干考えてみたい。第2図は恋ヶ窪遺跡と周辺の遺跡を東南方向（第1図の矢印）から俯瞰した図である[1)]。図中遺跡範囲は中期の遺構を検出している遺跡を表わしている。また、㊛印は手前の断面によって隠れてしまう湧泉地を示している。

まず、この図の長・短所について触れておきたい。俯瞰図によって表わされる最大の利点は遺跡と地形との関係が立体的な視覚で捉えられる事である。第1図の様な地形図では遺跡の位置は明確になるが周辺の地形等との関係は明瞭に示しえない。況して市街地化された場所では尚更である。遺跡の立地している台地の大きさ、谷の深浅や広狭、水系などがこの図では一目瞭然で理解することができる。しかし利点だけがこの図にある訳ではない。図が断面図の集合であるため手前の断面により後方の低地形を表現できない点や、地形に直交しない部分では地形読解にやや難がある点などが短所として挙げられる。また、断面の縮尺や作図方法にもよるが微地形を如何に表現するかなど改良すべき点もある。但し、短所・改良点を差し引いても遺跡を表わす図としては非常に有効である。

次に図で表わされた遺跡と地形との関係を縄文中期の遺跡で具体的にみていく。恋ヶ窪遺跡は北側の一部を除いた周囲を谷に囲まれた舌状台地の南西部に占地している。前面の谷底地には随所に湧泉地があり、当時の人々の生活水と共に近くに住む動物にとっても恰好な水飲み場となったであろう。羽根沢遺跡は恋ヶ窪遺跡と同一台地上にあるが、台地中央部の小支谷を挟んだ南東縁に小規模に形成された遺跡である。台地東側の狭く深い谷にも湧泉地はあるが、台



第３図　野川流域の遺跡分布

地南側の谷低地より湧き出す湧泉を恋ヶ窪遺跡と同様に活用していたのであろう。両遺跡の前面となる南側崖線は緩やかである。一方、北側は浅い凹み状の谷を介して広大な武蔵野台地へと連なっている。採集経済の縄文時代では集落地以外に広い空間を周囲に持つことが必要となる（宮崎　1986）。恋ヶ窪遺跡北方の広い武蔵野台地はこの空間として利用されたであろう。

多喜窪遺跡は恋ヶ窪遺跡の南西約１kmの武蔵野台地上に立地する。東西両側を小支谷に刻まれた台地縁辺である。後背に広い台地面を保有すると共に、前面の崖線下にも立川段丘面が広がっている。崖線下には湧泉地がある。多喜窪遺跡東方の台地上では多喜窪遺跡Ｃ地点で僅かに配石址が検出されたのみとなっている。これは恋ヶ窪遺跡や多喜窪遺跡との関係で集落地外の空間を確保できないため、崖線下に湧泉地を持つ台地南縁という好条件にも拘わらず集落が形成されなかったと考えられる。

本町（国分寺村石器時代）遺跡は二方向からの開析谷が交錯する地点にあり、地形変換点の要所を押さえた占地である。他の遺跡も微細に観察すると地形変換点を含む台地縁辺部に占地している傾向が窺える。湧泉や周囲の空間の点を考えれば正に適地を選んでいるといえよう。

(3)　野川流域の遺跡分布

野川は国分寺市西恋ヶ窪付近を源とし国分寺崖線下の湧泉を集めつつ東流し、世田谷区二子玉川園で多摩川に注ぐ河川である。全長20.2km、流域面積6,960ha（69.6㎢）を測る。野川流域には100箇所を超える縄文時代遺跡が確認されている。縄文中期を中心とした野川流域遺跡群については既に基礎資料の提示と問題提起がされている（広瀬・秋山・砂田・山崎　1985）。ここではそれを基に野川流域遺跡群をみていきたい。

第３図は野川流域の縄文時代遺跡分布図である。野川本流や入間川・仙川に面した武蔵野台地縁辺に立地する傾向が強く、立川段丘面微高地に立地する遺跡は少ない。しかし、近年野川に沿った地域で低湿地遺跡を含む新たな遺跡が確認されており、遺跡の立地面比率は若干修正されてこよう。国分寺市域の野川最上流部は開析谷が樹枝状に台地を刻み、遺跡は支谷や崖線によって区切られた面に立地する。恋ヶ窪遺跡（１）などはこの典型である。小金井市域から三鷹市原遺跡（10）までの上流域は、弧を描く国分寺崖線上の湧泉をもつ凹み（ノッチ）を囲む様に立地する。立川段丘面では浸食による沖積低地に面した微高地に占地している。前者の例として貫井遺跡（６）、中山谷遺跡（７）などがあり、後背地には武蔵野台地が大きく広がっている。後者例として貫井南遺跡（８）・前原遺跡（９）がある。入間川が合流する辺りまでの中流域では武蔵野台地が樹枝状の支谷により細長く入り組んだ台地に分割され、立川段丘面でも野川が崖線下より大きく南側に張り出しその間を支谷が刻み複雑な地形となっている。遺跡はこの中で要所を占め深大寺遺跡群（11）や城山遺跡（13）が武蔵野台地の先端部に立地している。また、この地域には中台面と呼ばれる低位の武蔵野段丘面も認められる。入間川合流

以下多摩川に注ぐまでの下流域は国分寺崖線が直線的に走り、それを仙川や谷戸川などが深く刻んでいる。多摩川縁では崖線下が沖積低地となる。遺跡は武蔵野台地端に多く分布する。

数多い遺跡には住居址が多く検出される遺跡や、僅かな遺構が検出されるだけの遺跡があり千差万別である。野川流域の縄文中期を小林達雄氏のセトルメント・システム論（小林　1973）に沿って分類してみると、住居址や墓壙などの遺構が多く検出され集落の存続期間も長いＡまたはＢパターンの拠点的な集落に、僅かな遺構が検出されるのみのＣパターンや殆ど遺構を伴わないＤパターンの遺構が近接して存在していることが窺い知れる。拠点的な集落としては恋ヶ窪遺跡（１）、多喜窪遺跡（５）、貫井遺跡（６）、貫井南遺跡（８）、中山谷遺跡（７）、深大寺東原遺跡（11）、三鷹五中遺跡（12）、堂ヶ谷戸遺跡（14）などが挙げられる。パターンの組み合わせ例としては恋ヶ窪遺跡に羽根沢遺跡（２）、恋ヶ窪東遺跡（３）、花沢西遺跡（４）などがＣ・Ｄパターン遺跡として近くに存在する。拠点的な集落は２～３㎞間隔で形成され、上流部ではその間隔がやや狭い。また、多摩川流域にも南養寺遺跡、清水ヶ丘遺跡（15）、飛田給遺跡（16）などが府中崖線に沿って点在する。

武蔵野台地には野川以外にも多くの河川がある。その大半は海抜50ｍ付近に存する谷頭を源としている。各河川流域にも縄文時代遺跡は多数確認されているが、この谷頭より上流部での遺跡は非常に少ない。一方、野川流域では他流域の谷頭にあたる深大寺遺跡群より更に上流にも広く遺跡が分布している。国分寺崖線の随所に認められる豊富な湧泉を活用できてこそ可能な遺跡形成であろう。野川流域で提示した様な基礎資料を整え、各流域毎の分析や他流域との比較検討を押し進める必要性を痛感する。

(4)　調査地点

今回報告する地点は第12次・第13次・第15次調査の３地点である（第４図）。調査の経緯でも触れているので、ここでは各調査地点が恋ヶ窪遺跡の中でどの様な位置を占めるかを記す。

第12次調査地点は集落中央域にあたり、住居址群の内側に構築された墓壙域と考えられる地域である。南側の第１次・第10次調査地点では住居址群が検出されている。また300ｍ程北側の調査地点でも住居址群が検出されている。

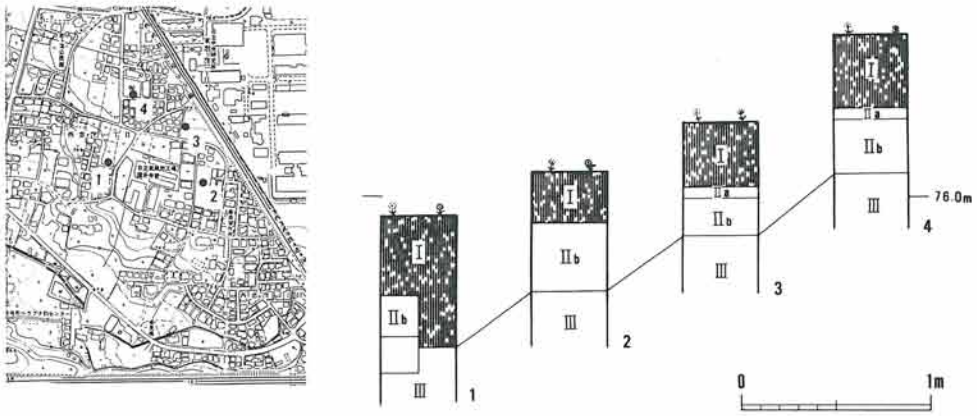
第13次調査地点は恋ヶ窪遺跡の北辺域である。周辺部では遺構が希薄で、本地点より更に北では僅かな土坑と小穴だけといった調査状況（第８次調査「恋ヶ窪遺跡調査報告Ⅱ」）となる。

第15次調査地点は恋ヶ窪遺跡西辺域で、調査地の西方100ｍ程で崖線となる。調査地の一部は既報告の第６次調査（「恋ヶ窪遺跡調査報告Ⅱ」）と重なる。遺構は希薄な地域である。

注）

１）図作成にあたり宮崎博、山崎和巳、松沢亜生各氏より指導・助言を受けた。記して感謝いたします。

第4図　調査地点



第５図　層序

２　層序

恋ヶ窪遺跡は武蔵野台地面に立地する。その層序は、基盤である武蔵野礫層上部に武蔵野・立川両ローム層が厚く覆い、最上部は浅い黒色土となっている。遺跡の主体である縄文中期の遺構は黒色土層中位から下位にかけて形成されている。

第５図は今回報告地点を含む恋ヶ窪遺跡４地点の層序をモデル化したものである。これを基に遺跡の層序について概述する。遺跡の占地する台地は中央部に向い極緩やかに傾斜しており、ローム面も台地縁辺部（①第15次調査地点）より台地中央部（④第13次調査地点）に向って上昇している。ローム層上部の黒色土層は各地点に拘らず60～70cm前後でほぼ一定である。

Ⅰ層　黒色の表土層。30～40cm。締りなくボソボソしている。若干の遺物を含む。

Ⅱａ層　黒色土層。遺存状態の良好な地点でのみ僅かに確認されている。５cm前後。粒子粗く粘性も弱い。第13次調査検出の歴史時代溝や土坑覆土はこの層に似る。

Ⅱｂ層　暗茶褐色土層。縄文時代の遺物包含層。20～35cm。富士黒色土層相当層である。堅く締り赤色スコリア・ローム粒子等を含む。上部はややボソボソしスコリア粒の含有が少なく、中位から下部にかけては粘性が増し、スコリア粒、ローム粒も多く含まれる。これにより上・下二層に細分可能であるが、畑耕作等により細分しにくい地点が多い。遺物は本層の中位に多く、集石等の確認面の高い遺構も同じ層位で検出される。以下では遺構が伴わないと遺物は急に減少する。縄文中期の生活面は上・下細分層下層の中程にあたるのであろう。

Ⅲ層　黄褐色軟質ローム層　Ⅲ層以下は立川ローム層である。Ⅲ層はその最上部にあたりソフトロームと呼ばれる部分で、第15次調査地点では本層中より先土器時代末期の文化層が検出された。恋ヶ窪遺跡では他にナイフ形石器が１点出土しているが、明確な文化層は今のところ第15次調査地点のみである。

Ⅲ　第12次調査

1　縄文時代

(1)　検出遺構

第12次調査により検出された遺構は、住居址３軒、屋外埋甕３基、集石５基、土壙17基を数える（第６図）[1]。これらはすべて縄文中期中葉勝坂式期から後葉加曽利Ｅ式期に属する。検出数では土壙が17基と最も多く、その広がりは調査区北半域にまとまりをみせる。屋外埋甕は加曽利Ｅ式後半期のものが３基近接して検出され、土壙群と重なる分布を示す。５基の集石は調査区南東域にまとまっている。住居址は土壙群、集石群の外側に位置し、土壙の一部と重複する。いずれも加曽利Ｅ式期に属する。こうした遺構の状況は、本調査地点のすぐ南側にあたる第10次調査地点（恋ヶ窪遺跡調査報告Ⅲ）における住居址主体とは大きく様を違えており、土坑・集石のみが検出された本調査地点北東隣接地の第４次調査地点（恋ヶ窪遺跡調査報告Ⅱ）の様相に似かよっている。この点については後に詳述するが、第12次調査地点が集落居住域である住居址群と集落内中央部につくられた土壙群との接点にあたる地点であることを示しているといえよう。

１）住居址

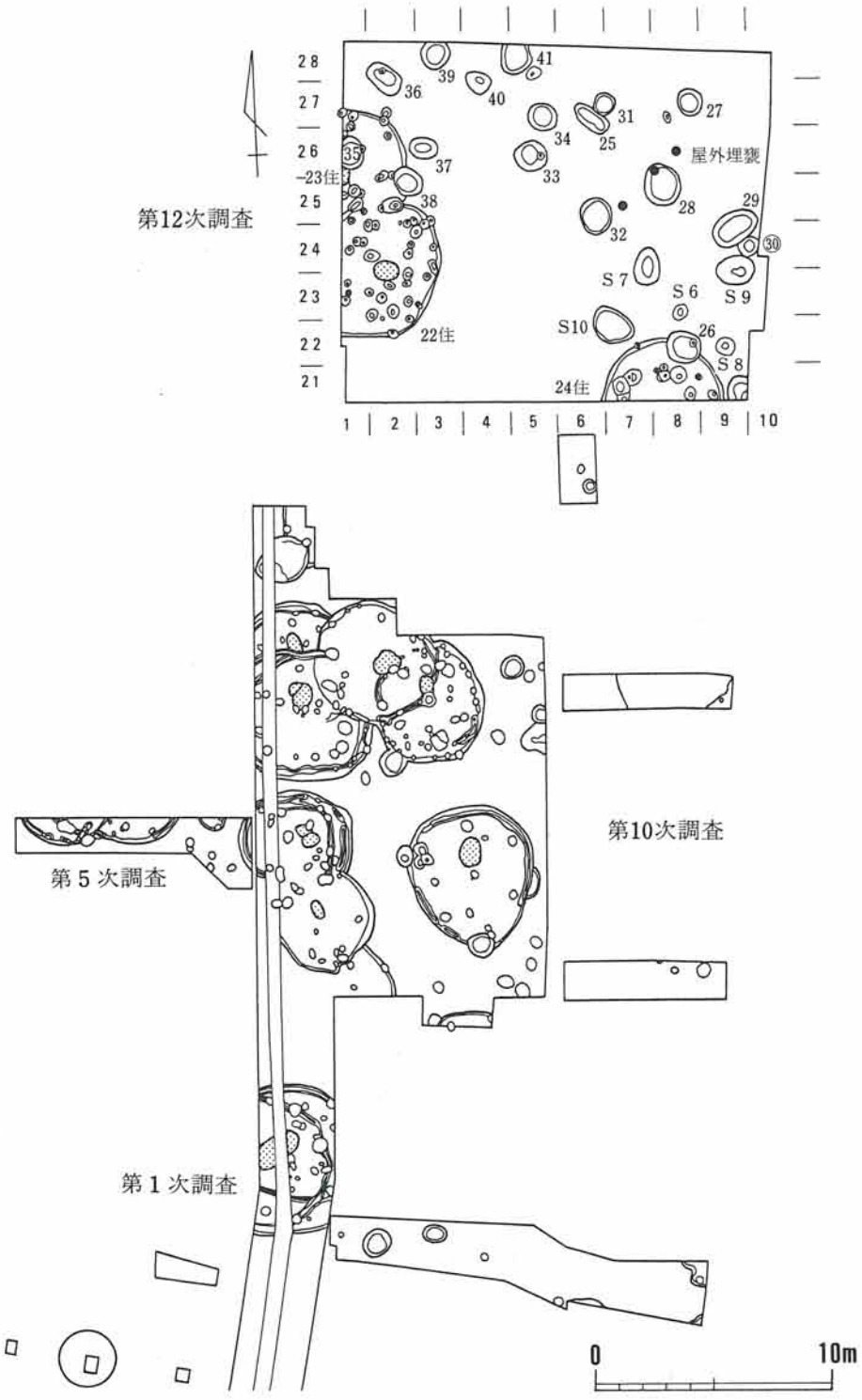
22号住居址（第７図　図版３）

〈位置〉　調査区西端の（１～３，22～25）区に位置する。西側⅓程度は調査区域外の道路に広がる。北側は23号住居址と重複する。

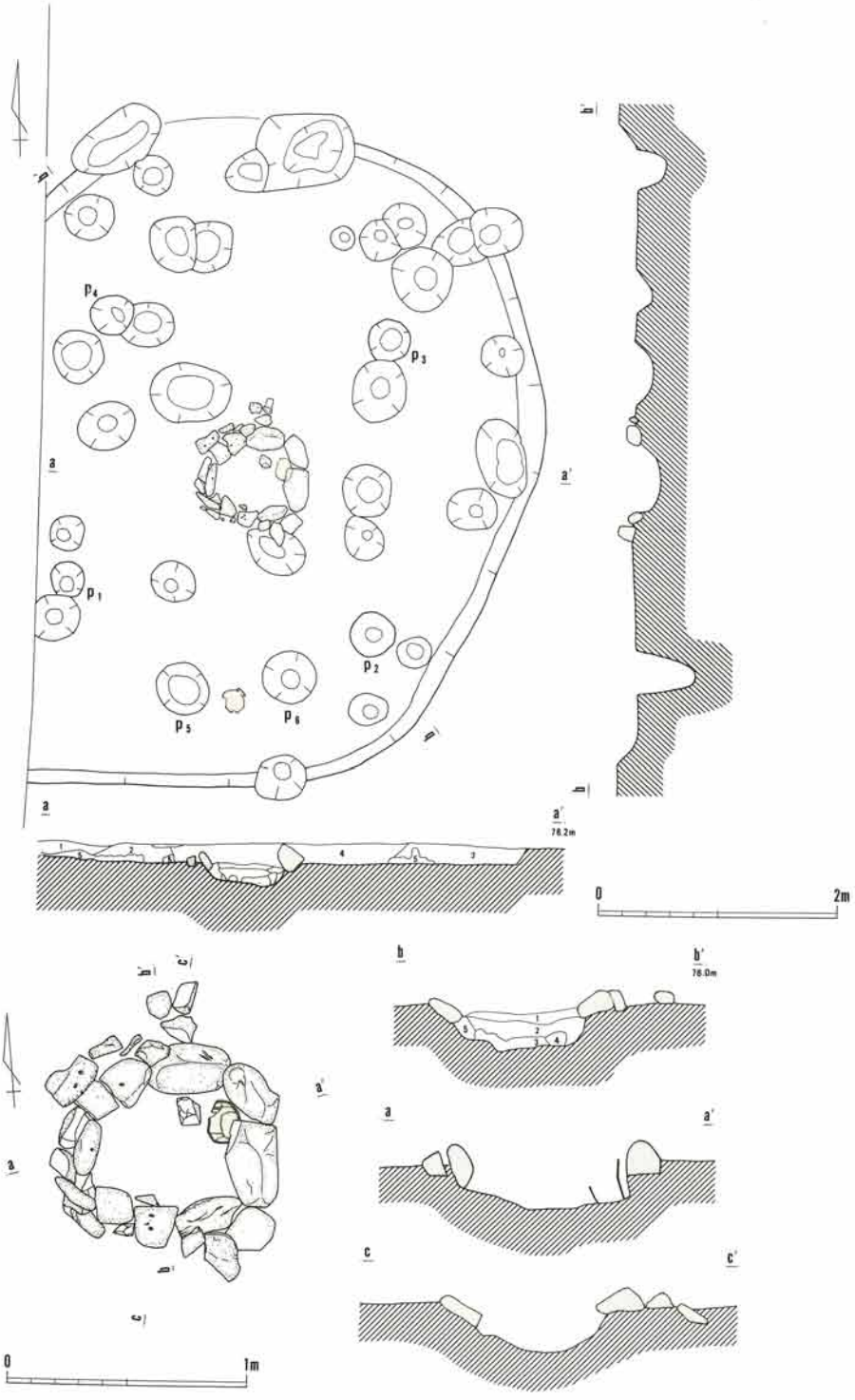
〈形状〉　径５～5.5mの不整円形を呈すると思われる。遺構確認面(ローム漸移層上面)からの掘り込みは10～15cmと浅く、ローム層上面を床面としている。このため床面、壁面の状態は明瞭ではない。床面はほぼ平坦であるが、住居址中央部から南側にかけてやや低くなっている。周溝は廻っていない。

〈覆土〉　遺構確認面より下部の観察のみであるが、住居址中央部に赤色スコリア、炭化物等を基本層序Ⅱｂ層よりも多く含みやや暗い色調の暗茶褐色土（２，４層）が堆積し、壁・床面近くでは色調の明るい茶褐色土（３層）やローム質の暗黄褐色土（５層）となっている。炉の上部は比較的黒味が強く、大粒の炭化物、焼土粒等を含む。

〈炉〉　ほぼ中央部に位置し、直径１m程の大きさの石囲埋甕炉である。石囲は炉縁を全周し、大形の石を多用している。東縁は特に大形の河原石を用いていて、床面より約15cm飛び出ている。一方、南縁から西縁にかけては石皿の転用や小形の河原石が使われ、内側に石を立てその外側を別の石で固めた二重構造となっている。28個の炉石の内９個が石皿の転用で接合するものもある。炉内は中央から東側が深く掘り窪められ、東端に胴下半部を欠失させた炉体土器（第15図２）が炉中央を向くように傾けて据えられている。炉覆土は上部に焼土粒・炭化物



第 6 図　第12次調査遺構全体図



第7図　22号住居址・炉址

を含む暗茶褐色土（１，２層）がつもり、中央下部は厚い焼土層（３層）が観察された。炉床もよく被熱していて、ロームが硬化して赤褐色を呈している。

〈埋甕〉　南壁から70cm内側のピット間で検出された。炉は埋甕の北1.5mである。直径20cm弱のピットを穿ち、その中に底部の一部を欠失させた深鉢形土器（第15図１）を正位に埋設している。埋甕の上面は住居址床面より約10cm出ている。

〈柱穴〉　大小37本のピットが検出されたが、床面からの深度が20cm前後と浅いものが多い。比較的深度のあるP1～P4が主柱穴と思われるが、未調査部分もあり判然としない。各深度はP133cm、P249cm、P340cm、P442cmでP1のみがやや浅い。また、埋甕の両側に位置するピット（P5、P6）はそれぞれ21cm、24cmの深度があり、入り口構造に関係する柱穴かもしれない。

〈出土状態〉　遺構確認面より下部の覆土中での遺物出土量はさほど多くない。炉の付近を中心に床面からやや浮いた状態で同一個体を含む土器片、打製石斧等の石器が散漫に出土した。そのため整理後の復原個体も少ない。

〈時期〉　加曽利Ｅ式第Ⅴ段階[2)]。

23号住居址（第８図）

〈位置〉　（１～２，25～27）区で調査区西端に位置する。南側は22号住居址と重なり、西半部は調査区域外に広がる。1964年調査のＡ号住居址であり、再調査したものである。住居址床面下より35号土壙が検出され、東壁にかかり38号土壙が重複している。

〈形状〉　北東部⅓程の再調査のため明確ではないが、以前の調査で推定されたように径５ｍ位の規模と思われる。壁・床面は以前の調査では不明瞭であったが、今回の調査で一部を明らかにできた。床面は22号住居址よりやや高く、確認面からの掘り込みも５cm前後と浅い。

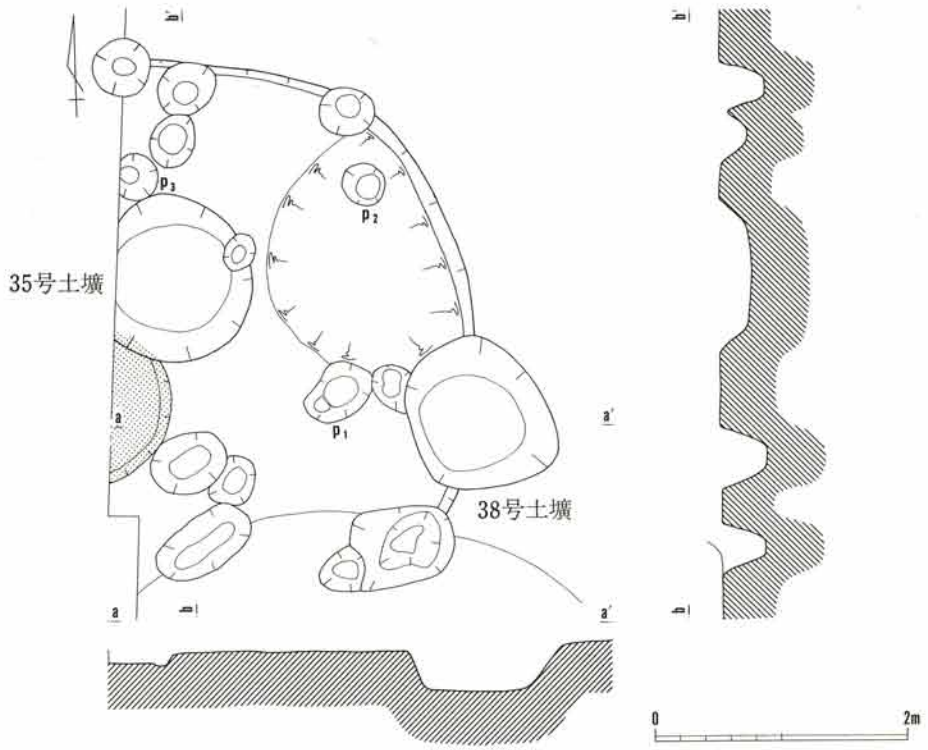
〈覆土〉　再調査のため覆土の状況は明らかでない。床面直上に茶褐色土が僅かに認められた。

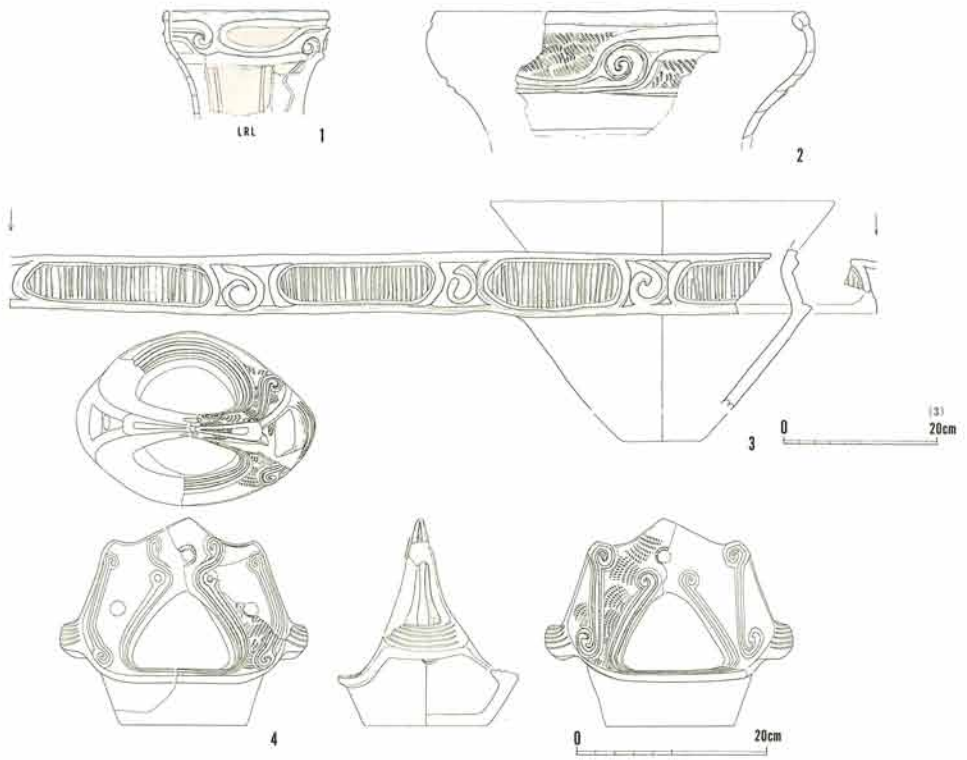
〈炉〉　今回の調査では炉掘り方の一部を再検出した。以前の調査によると石囲炉である。尚、35号土壙は炉及び住居址床面下より検出され、23号住居址より古い段階のものである。

〈柱穴〉　以前の調査においては床面より30～50cmの深度を持つ柱穴が６本検出されたと記載されているが、今回再検出したピットの内P1～P3がその一部かもしれない。深度はP142cm、P246cm、P343cmを測る。

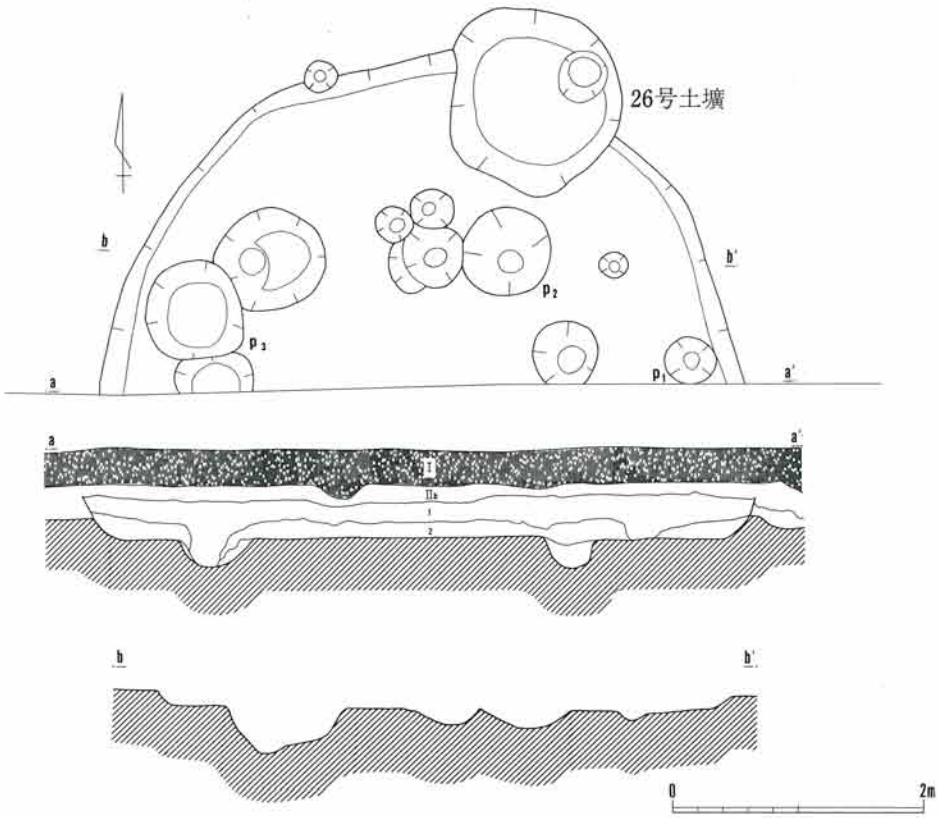
〈出土状態〉　再調査のため今回は僅かの土器片が出土したのみである。

〈時期〉　加曽利Ｅ式第Ⅲ段階。1964年調査出土遺物より認定した。主な出土土器は再録したが、調査報告の再録及び発掘資料の再整理成果については「恋ヶ窪遺跡調査報告Ⅱ」に詳しいのでそちらを参照されたい。尚、１の土器は1964年調査の報告ではＡ号住居址（23号住居址）出土とされているが、時期から見て重複する22号住居址の遺物である蓋然性が高い。４の釣手形土器は炉の南側40cmより出土したと報告されている。





第8図　23号住居址・出土土器



第９図　24号住居址

24号住居址（第９図　図版４）

〈位置〉　調査区南東隅の（７～９，21～22）区に位置する。北半½弱の調査で半分以上は南側調査区域外に広がる。北壁に26号土壙が重複する。

〈形状〉　径５ｍ以上の円形を呈すると思われるが詳細は不明。遺構確認面からの掘り込みは10cm程度と浅く、壁面も不明瞭である。床面も堅緻でなく場所によりレベル差がある。

〈覆土〉　上部の１層はⅡｂ層に類似し、スコリア粒、炭化物がやや多い。下部の２層はスコリア粒が多く、やや大粒の炭化物を含む暗黄褐色土で、床面近くではローム質土がブロック状に認められる。

〈炉〉　調査区内では検出されなかった。未調査部分に存在するのであろう。

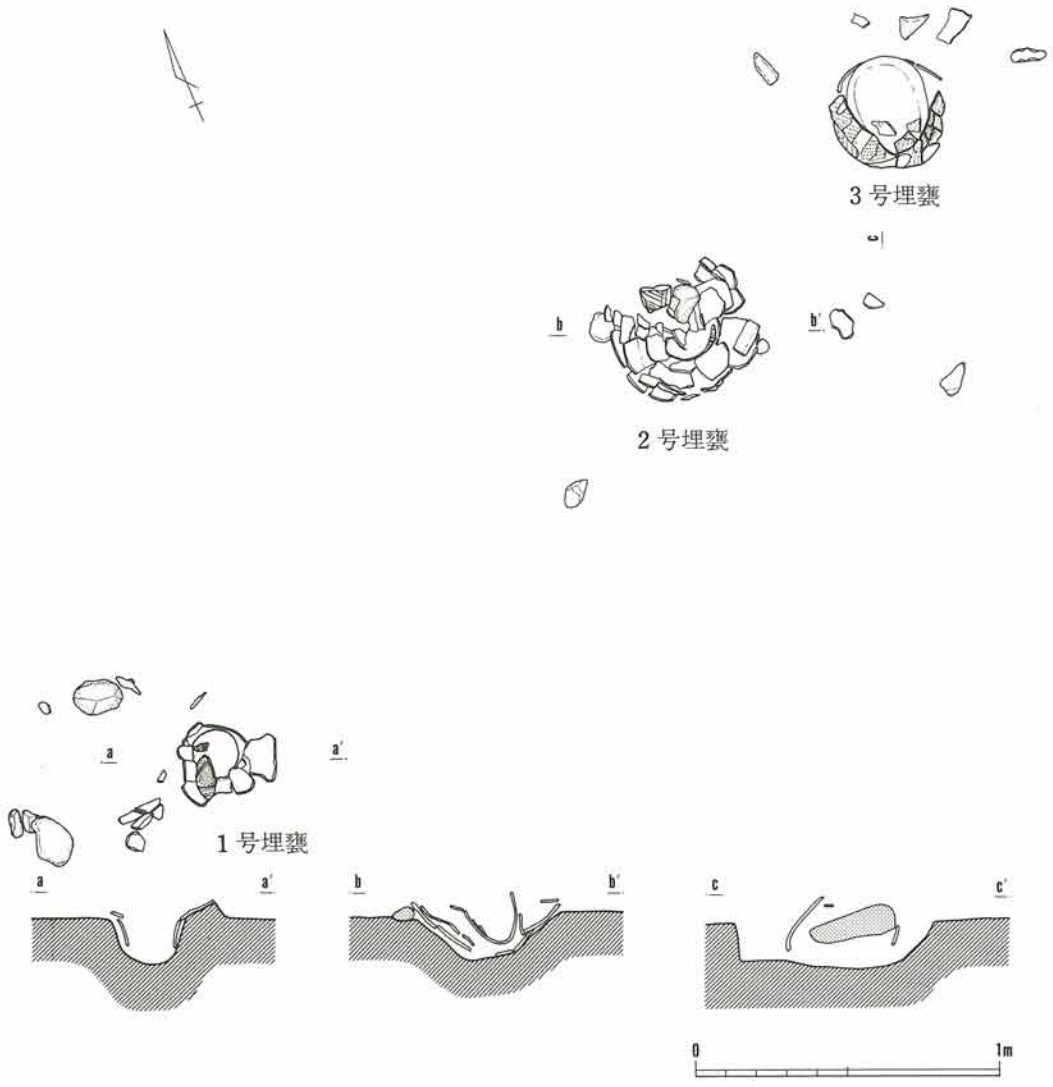
〈柱穴〉　大小10本が検出されたが主柱穴は明らかでない。深度も20～30cm程度の浅いものが多い。

〈出土状態〉　遺物は少く、東壁寄りの覆土上部でやや多く出土した他は散漫である。

〈時期〉　出土遺物が少く時期決定が難しいが、加曽利Ｅ式第Ⅴ段階の住居址と思われる。

2）屋外埋甕

住居址外で土器が単独に埋設された遺構である。調査区北東部の（7～8，25～26）区において3基が近接して検出された（第10図、図版4・5）。3基の屋外埋甕はほぼ直線上に並び、1号埋甕と2号埋甕の間は約2m、2号埋甕と3号埋甕の間は約1mを測る。いずれも加曽利E式後半の第Ⅵ段階のものであり、3基は有機的なつながりを持って一時期に構築された遺構といえよう。屋外埋甕の検出面は基本層序Ⅱb層中位で、住居址、土壙より高く集石の検出面と大体同一である。



第10図　1～3号屋外埋甕

1号埋甕（図版５）

〈位置〉　（７，25）区に在り、３基の中で最も南側に位置する。

〈出土状態〉　深鉢形土器が正位に埋設されている。埋甕の周囲には礫や石器が僅かに散在している。遺存状態はさほど良好でなく、埋設土器の一部は囲りに散ったり、土器内に倒れ込んだりしている。埋甕下に明確な掘り込みは認められなかった。

〈出土遺物〉　埋設土器（第18図１）のみで、埋甕内からは何も出土しなかった。土器は口縁と胴下半部を欠失させた深鉢形土器で、胴部にも欠失部が目立つ。近くから出土した石匙（第32図17）は埋甕に伴うか否か明らかでない。

〈時期〉　加曽利Ｅ式第Ⅵ段階

2号埋甕（図版５）

〈位置〉　１号埋甕の北東約２ｍに在り、調査区は（８，26）である。

〈出土状態〉　入れ子状態で３個体の土器が埋設されている。各々の土器は僅かな隙間を持つだけで重なり合い、いずれも正位である。埋甕の下部は一部分硬玉製大珠を出土した28号土壙と重複するが、埋甕底面では土壙の存在が明確でなかった点と位置が少しずれている事からみて埋甕は28号土壙より新しい時期の遺構といえよう。

〈出土遺物〉　３個体の埋設土器（第18図２～４）の他には、埋甕の脇及び埋甕内より礫が数個出土したのみである。外側の土器（４）だけが略完形の鉢形土器で、他の土器は欠失部を持つ深鉢形土器である。真中の土器（２）は胴下半部を、内側の土器（３）は口縁部を欠失させている。内側の土器（３）は欠失部がやや目立ち、同一個体片が周辺でグリッドからも出土している。文様のモチーフは１号埋甕に類似する。

〈時期〉　加曽利Ｅ式第Ⅵ段階

3号埋甕（図版５）

〈位置〉　（８，26）区で、２号埋甕の北東約１ｍに位置する。

〈出土状態〉　胴下半部を欠失させた深鉢形土器を逆位に埋設し、土器上面には土器とほぼ同じ大きさの扁平な河原石を被せている。周囲からは礫や石器（打製石斧）が僅かに出土したのみである。埋甕下の掘り込みは確認できなかった。

〈出土遺物〉　埋設土器（第18図５）は胴下半部を大きく欠失させるが、口縁部は全周する。土器に被せられている河原石は半面を打ち割り、扁平にしたものである。埋甕内からは何も出土していない。

〈時期〉　埋設土器は１、２号埋甕の埋設土器よりもやや古く加曽利Ｅ式第Ⅴ段階の後半に位置づけされるが、遺構としては他の埋甕同様加曽利Ｅ式第Ⅵ段階と理解したい。

3）集石

調査区南東隅にまとまって5基の集石が検出された（第11図，図版6・7）

6号集石

〈位置〉　（8，23～23）区に位置する。

〈形状〉　東西0.9m×南北1mの範囲に礫の集中がみられ、そこより南西方向に広がって散漫な礫分布が認められる。集石下に土坑を持ち、礫集中部よりやや東側にずれ長径75cm、短径60cmの楕円形を呈する。礫の平面分布は集中部でもあまり密でなくやや疎らである。垂直分布は土坑確認面より10cm程上部に集中するが、土坑内にも少し入り込んでいる。

〈礫の状態〉　488個の礫で構成され、総重量15.1kgを測る。礫はすべて被熱し、灰白色に変色したものが多い。他に赤化礫やタール状付着物がつく礫も認められる。完形礫は全体の2％弱のみで、大半は原形を止めない程の破砕礫で20g以下の小礫が大半を数える。用礫の平均重量は31.0gである。以上重量を増す毎に礫数は減り150g以上のものは3％弱となる。石質は砂岩が70％以上を占め、チャートが20％強でそれ以外の石質は極く少量である。この傾向は他の集石にも認められ、用礫の供給地における石質比率を示していよう。恋ヶ窪遺跡の用礫供給地としては多摩川を想定できよう。

〈時期〉　集石内から時期決定のできる遺物は出土しておらず明らかでないが、勝坂式期か加曽利E式期であろう。

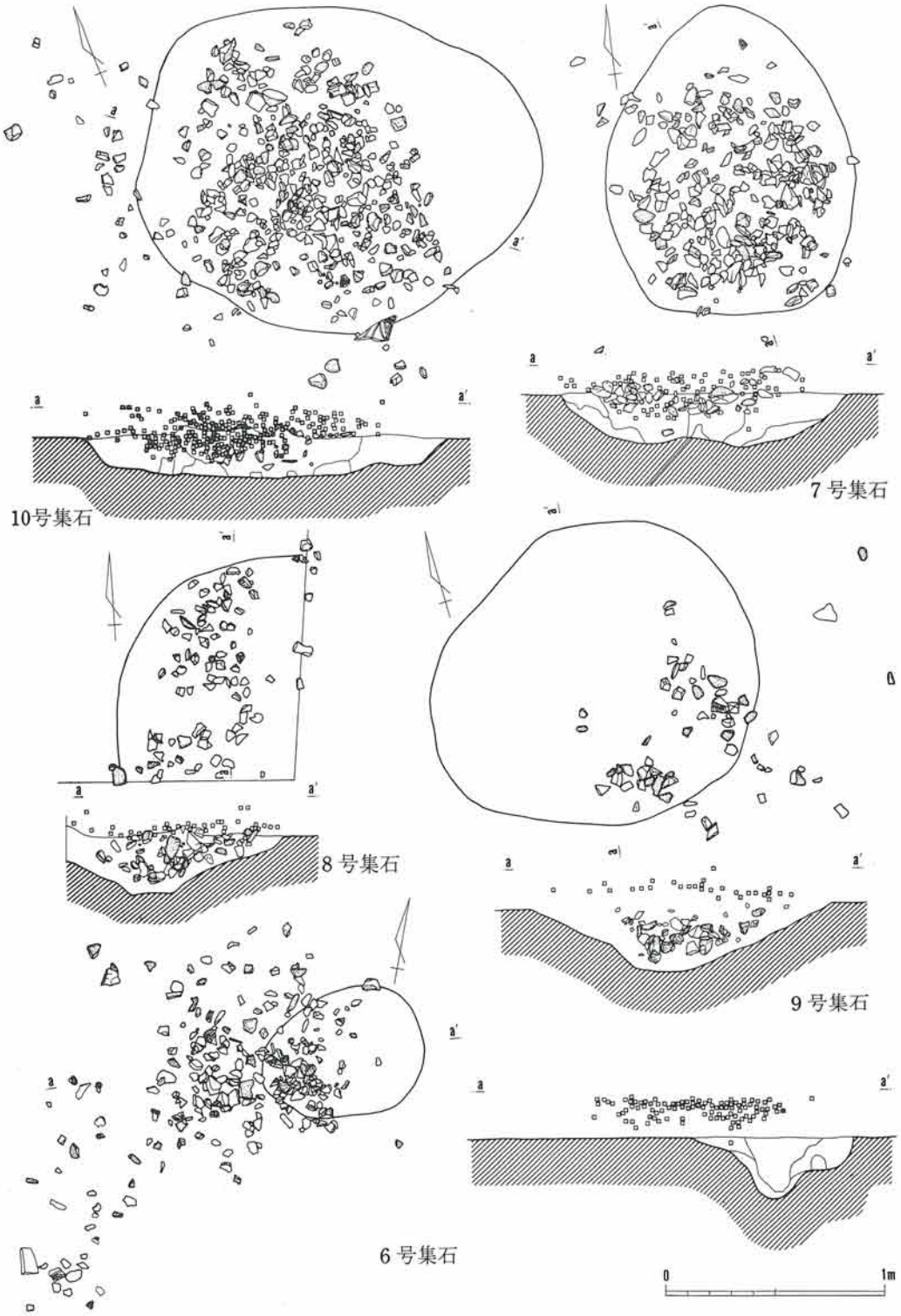
7号集石

〈位置〉　（7～8，23～24）区に位置する。

〈形状〉　東西1m×南北1mの範囲に礫が集中して分布する。集石下部には土坑があり、長径1.4m、短径1.1mの長楕円形を呈し、断面形はタライ状となっている。礫の平面分布は土坑内に限られ、中央部分では密に詰まるが周縁部ではやや疎らとなる。垂直分布では土坑上面に集中がみられ、土坑内にも礫は混在する。土坑内の礫は覆土中程までで坑底との間に10cmばかりの間層が認められる。土坑覆土はスコリア粒の多少、色調の明暗等で分層したが、基本的には茶褐色土（1～3層）で壁際はローム質の暗黄褐色土（4層）となっている。

〈礫の状態〉　集石全体の用礫は879個で、総重量は46.2kgを測る。礫は火熱を受けタール状付着物がついたり灰白色に変色しているものが多いが、被熱の弱い礫も15％程度含まれる。礫の大半は直径5cm未満の破砕礫である。重量では30g以下が半数を越えるが、200g以上の礫も少量含まれ、平均重量は5基の集石で最大の52.6gとなる。石質別では砂岩が70％以上、チャートが20％程度で他の集石と類似した傾向を示す。

〈時期〉　礫以外の遺物が出土しておらず時期は確定できないが、中期勝坂式期から加曽利E式期にかけてのものであろう。



第11図　6～10号集石

8号集石

〈位置〉　調査区南東角の（9，21）区に位置する。

〈形状〉　全体の¼程度を調査したのみで、規模、形状等は明らかでない。南北、東西とも1m以上の広がりがある。集石下部には土坑をもつが、擂り鉢状の断面形を示す以外は不明である。礫の分布は検出面では散漫だが、土坑内には多くの礫が詰まっている。但し、土坑下部の10cm弱は礫の混入のない土層である。土坑覆土は炭化物、スコリア粒を含む暗茶褐色土で、下部ほど色調が暗い。確認面からの掘り込みは約30cmである。

〈礫の状態〉　1090個の用礫で構成され、総重量39.4kgである。被熱破砕礫が大部分を占め、20g以下の小礫が約半数を数える。平均重量は36.2gとなる。礫の状態は赤化が比較的多く40%弱を占めるが、灰白色に変色したものもある。石質は6、7号集石の比率と同様である。

〈時期〉　時期不祥であるが中期勝坂式か加曽利E式期に属するであろう。

9号集石

〈位置〉　（9，23～24）区に位置する。

〈形状〉　検出面での礫分布は疎らで、東西0.9m×南北1.1m程の範囲に散漫に広がっている。集石下に土坑があり、土坑内から多数の礫が出土した。集石下の土坑は長径1.5m、短径1.4mの不整円形で、断面は擂り鉢状を呈する。土坑内の礫は底面近くまで詰まっているが、最下部の10cm程は礫の混入がない。集石の状況は8号集石に類似している。

〈礫の状態〉　用礫は1133個で総重量は37.9kgを測る。礫1個の平均重量は33.5gとなる。すべて被熱し、7個の完形礫を除き他は破砕礫である。破砕礫は2～3cmとなって原形の大きさを止めない小形のものが大多数で、20g以下が約半数で、80gまでで全体の90%を占める。被熱により灰白色になったり赤化した礫が圧倒的に多い。石質比率は他の集石と同じで、砂岩が大半を占め、チャートが少量等となっている。

〈時期〉　時期不詳であるが中期の所産であろう。

10号集石

〈位置〉　（6～7，22～23）区に位置する。

〈形状〉　7号集石と並んで遺存状態の良好な集石である。東西1.6m×南北1.6mの範囲に多数の礫が集積されている。礫の分布範囲は集石下部の土坑範囲とほぼ一致するが、西側では土坑外にも散在するのに対し東側では土坑周縁部でも礫がみられず、西側に偏在する分布となっている。分布密度は中央部が多く外側ではやや疎らとなる。垂直分布も同様に中央部では多くの礫が土坑中程まで詰まった状態を示すが、壁寄りでは大半が土坑確認面に止まり土坑内に入り込む礫は少量となる。土坑底面近くにも少量の礫は認められるが量は少ない。集石下部の土

坑は長径1.8m、短径1.5mの楕円形を呈する。遺構確認面からの掘り込みは20cm程度であるが、集石確認面からでは30cm位の深さとなる。断面はタライ状をなし、覆土は中央部に大粒の炭化物を多く含む黒褐色に近い暗茶褐色土（１層）がつもり、壁際は炭化物の混入が少ない茶褐色（２層）となり、底面近くにはローム質の暗黄褐色土ブロック（３層）も認められる。土坑底面より５～10cm上面で勝坂式期の土器片が出土している。

〈礫の状態〉　用礫は検出した集石の中で最も多く2,178個を数え、総重量は61.5kgとなる。礫は被熱を受け灰白色に変色したり、赤化したり、タール状付着物がついたりしている。灰白色に変色した礫は他の４基を含め目立つ存在で、表面は手で触れると崩れる程にボロボロとなっている。しかもこれらの礫は元の形状を止めない程に小さく破砕し２～５cm大程度となっているものが多い。また、礫面が赤色に変化した赤化礫も灰白色に変色した礫と並んで多い。こうした礫の変化は用礫の使用時間、回数などの頻度に由来するものであり、今回検出の５基の集石は長期間にわたり使用されていた可能性が高い。石質別では砂岩が70％と圧倒的に多く、次いでチャートが25％程を占める。90％弱が小形の破砕礫のため礫の平均重量は28.2ｇと小さい。

〈時期〉　勝坂Ⅲ式期。土坑覆土下部及び集石内出土土器より決定した。

４）土壙

17基の土壙が検出され、その分布は調査区北側から東側にかけて広がる。他の遺構と重複せず単独で構築されるものが多いが、住居址と重複するもの３基、屋外埋甕と重なるもの１基、土壙同士が接するもの２基などもある。これらの土壙群については、調査地点が集落居住域である住居址群の内側に位置する「場」であること、数基ではあるが覆土中より硬玉製大珠や粗製石匙などの副葬品と考えられる遺物が出土したものもある点などから「墓壙」と考えられる。

25号土壙（第12図）

〈位置〉　（６～７，26～27）区に位置し、31号土壙と接する。

〈形状〉　長軸1.7m、短軸75cmの隅丸長方形を呈する。主軸方向は北西－南東を示す。遺構確認面からの掘り込みは50cmと深く立ち上がりも急である。底面は平坦となっている。

〈出土遺物〉　勝坂Ⅲ式１点、加曽利Ｅ式第Ⅳ～Ⅴ段階３点、加曽利Ｅ式と思われる土器片５点の計９点の土器片が出土している。

〈時期〉　出土遺物が微量のため判断し難いが、加曽利Ｅ式期の可能性が高いと思われる。

26号土壙（第12図）

〈位置〉　（８，22）区にあり、24号住居址と重複して検出された。

〈形状〉　直径1.5mの円形を呈する。遺構確認面からの掘り込みは40cmである。本土壙は24号住居址の北壁を精査中に検出したもので、同住居址（加曽利Ｅ式第Ⅴ段階）より古い時期のも

のといえる。

〈出土遺物〉　18点の土器片が出土したが、時期が判明したのは勝坂、加曽利E式各1点ずつである。他に礫が34個出土した。

〈時期〉　上記の出土遺物からでは時期決定は困難であるが、住居址との関係を考慮すれば勝坂式期の土壙と考えられるかもしれない。

27号土壙（第13図）

〈位置〉　（8，16）区に位置する。

〈形状〉　直径1.1mの円形をなす。遺構確認面からの掘り込みは45cm程で、立ち上がりも急である。底面はほぼ平坦である。

〈出土遺物〉　12点の土器片、礫10点が出土遺物である。土器片で時期が明らかなのは勝坂式が1点だけである。

〈時期〉　中期の所産であるが詳細の時期決定は難しい。

28号土壙（第13図　図版7）

〈位置〉　（7～8，25～26）区に位置する。本土壙の北壁上面において2号屋外埋甕が一部重なる状態で構築されている。2号屋外埋甕の項でも触れたが、土壙と屋外埋甕とは重複位置にずれがあり、埋甕下で土壙が明確でなかった点より、土壙と屋外埋甕とは時期の異なる遺構といえる。

〈形状〉　直径1.7mの円形を呈し、検出土壙の中では最大級の大きさである。遺構確認面からの深さは40cmを測る。床面はほぼ平坦で、やや緩やかな立ち上がりを示している。

〈出土遺物〉　本土壙の出土遺物で特筆されるものは2個の硬玉製大珠（第40図18，19）である。この2個の大珠は土壙底面より5～10cm上面で近接して出土した。平面的位置では土壙の北西寄りにあたる。大珠以外の遺物としては中期の土器細片25点が出土した。

〈時期〉　出土土器からは時期を明らかにできないが、2号屋外埋甕（加曽利E式第Ⅵ段階）より古い段階の土壙である。勝坂式期から加曽利E式期前半に位置付けられよう。

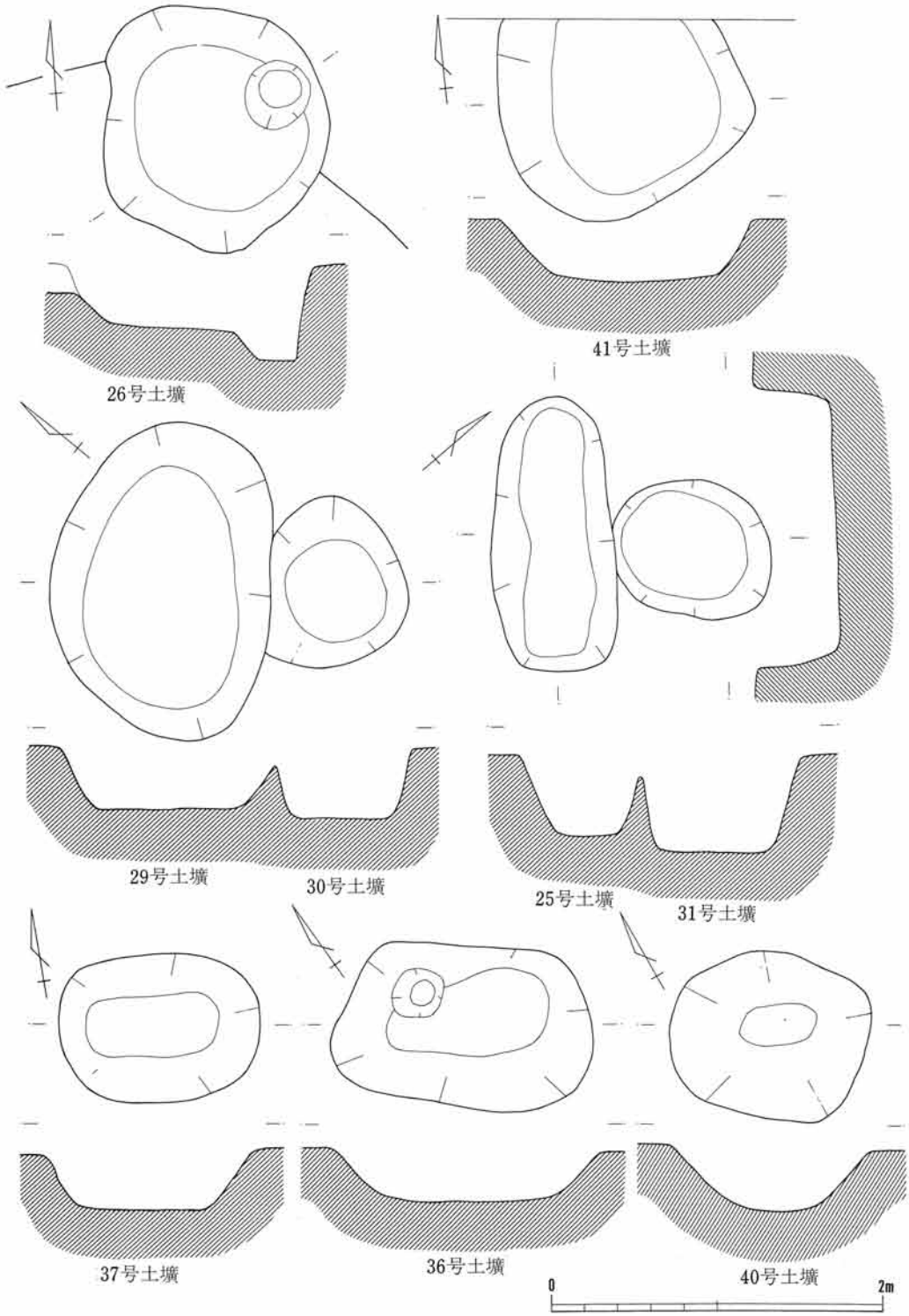
29号土壙（第12図）

〈位置〉　（9，10，24～25）区に位置し、南側に30号土壙が接する。

〈形状〉　長径1.9m、短径1.3mの楕円形をなす。遺構確認面からの掘り込みは40cm弱である。立ち上がりは緩やかで、壁面は明瞭ではない。

〈出土遺物〉　中期土器片5点のみである。

〈時期〉　中期であるが詳細は不明。



第12図　25・26・29～31・36・37・40・41号土壙

30号土壙（第12図）

〈位置〉　（９～10，24）区にあり、29号土壙に接している。

〈形状〉　直径１ｍ程の円形を呈する。遺構確認面からの深さは40cmを測る。底面からの立ち上がりは比較的急になっている。

〈出土遺物〉　15点の土器片が出土したが、時期が判明したのは勝坂式期の２点のみである。

〈時期〉　微量の出土遺物で判断し難いが、勝坂式期に属するのかもしれない。

31号土壙（第12図）

〈位置〉　（６～７，27）区に位置する。南側に25号土壙が接している。

〈形状〉　直径１ｍ、短径80cmの楕円形を呈する。約60cmと掘り込みは深く、底面からは急な立ち上がりを示している。

〈出土遺物〉　中期の土器片７点が検出されただけである。

〈時期〉　中期であるが詳細は不明

32号土壙（第13図）

〈位置〉　（６～７，24～25）区に位置する。

〈形状〉　長径1.4m、短径1.3mの不整円形をなし、28号土壙と並んで大形の土壙である。遺構確認面からの掘り込みは深く55cm程を測る。土壙底面からの立ち上がりは垂直に近い位に急である。底面はほぼ平坦となっている。

〈出土遺物〉　21点の出土土器の内８点が勝坂式期のものである。他に127個の礫が出土した。

〈時期〉　出土遺物からみて勝坂式期の土壙である。

33号土壙（第13図）

〈位置〉　（５，26）区に位置する。

〈形状〉　直径1.2mの角張った円形をなす。遺構確認面から35cmの深さがある。立ち上がりは緩い。

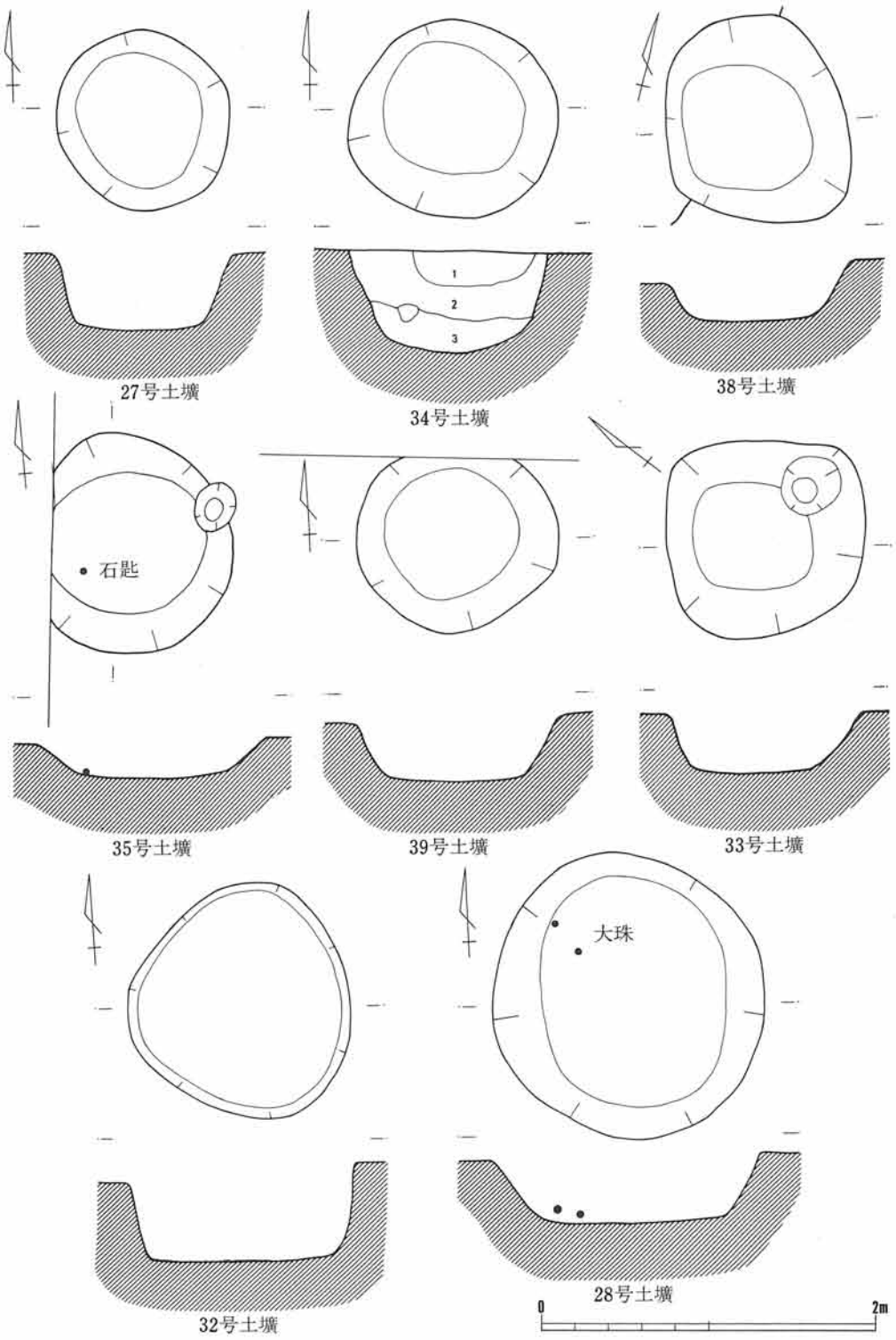
〈出土遺物〉　９点の土器片が出土し、１点は加曽利Ｅ式第Ⅴ段階である。

〈時期〉　出土遺物が少量で時期決定は難しい。加曽利Ｅ式期かもしれない。

34号土壙（第13図）

〈位置〉　（５，26～27）区に位置する。

〈形状〉　直径1.2mの円形を呈する。遺構確認面からの掘り込みは60cmを測り深い土壙である。底面は中央部がやや低くなっており、断面形は丸味のある鍋底状を示す。



第13図　27・28・32～35・38・39号土壙

〈出土遺物〉　土器片26点が出土し、その内12点が勝坂Ⅱ式である。

〈時期〉　出土遺物からみて勝坂Ⅱ式期の土壙である。

35号土壙（第13図）

〈位置〉　（1，26）区で、23号住居址内に位置する。西壁部は調査区外に伸びる。

〈形状〉　直径1.3mの円形を呈する。23号住居址床面からは25cmの深さがあり、本来は35cm程度の掘り込みを有していたのであろう。底面は平坦で、立ち上がりは緩やかとなっている。覆土は暗茶褐色土の一層のみで、一気に埋め戻されたと考えられる。

〈出土遺物〉　土壙底面に接して粗製石匙（第31図4）が出土した。他には中期の土器片が出土したのみである。

〈時期〉　出土遺物からは時期決定できない。しかし、本土壙が23号住居址の床面を精査して検出された事、住居址の炉が土壙に一部重なっている事などから、住居址（加曽利E式第Ⅲ段階）より古い土壙である。勝坂式期かもしれない。

36号土壙（第12図）

〈位置〉　（2，27～28）区に位置する。

〈形状〉　長軸1.5m、短軸1mの隅丸長方形を呈する。遺構確認面からの掘り込みは30cm前後で、立ち上がりは緩やかである。底面隅にピットがある。

〈出土遺物〉　23点の土器が出土し、加曽利E式が5点である。他の破片でも加曽利E式期と思われるものがある。

〈時期〉　出土遺物より加曽利E式第Ⅳ段階であろう。

37号土壙（第12図）

〈位置〉　（2～3，26）区に位置する。

〈形状〉　長径1.2m、短径90cmの楕円形を呈する。40cm弱の深さを測り、立ち上がりは緩やかである。

〈出土遺物〉　41点の土器片が出土し、内訳は勝坂式7点、加曽利E式2点で他は時期が定かでない。礫は29個出土した。

〈時期〉　出土遺物からは勝坂・加曽利E式どちらか判断し難いが、勝坂式期と考えた方が良いと思われる。

38号土壙（第13図）

〈位置〉　（２～３，25～26）区に位置し、西壁部は23号住居址と重複する。

〈形状〉　長径1.2m、短径1.1mの不整円形をなす。遺構確認面からは40cm弱の掘り込みをもつ。立ち上がりは緩やかである。

〈出土遺物〉　29点の土器が出土し、時期が判明したのは６点の勝坂式土器である。

〈時期〉　出土遺物からみて勝坂式期の土壙で、23号住居址より古い遺構である。

39号土壙（第13図）

〈位置〉　（３，28）区にあり、北側は調査区北壁にかかる。

〈形状〉　直径1.2mの不整円形を呈する。遺構確認面からは35cm程の深さを測る。

〈出土遺物〉　土壙内及び周辺より勝坂式土器がまとまって出土し、復原された（第20図１）。他にも土器片が少量出土している。

〈時期〉　出土土器より勝坂Ⅲ式期である。

40号土壙（第12図）

〈位置〉　（４，27～28）区に位置する。

〈形状〉　長径1.2m、短径１mの楕円形を呈する。40cmの掘り込みを測り、立ち上がりが緩やかで底面は小さい。断面は丸い鍋底状を示している。

〈出土遺物〉　41点の土器片が出土し、20点が勝坂式である。

〈時期〉　出土量の多い勝坂式末期である。

41号土壙（第12図）

〈位置〉　（４～５，28）区にあり、北壁部は調査区域外に伸びる。

〈形状〉　直径1.4m程の不整円形をなし、遺構確認面からの掘り込みは35cmを測る。立ち上がりはやや緩やかで、底面はほぼ平坦である。

〈出土遺物〉　24点の土器片が出土したが、時期の判明したものは勝坂式１点、加曽利E式２点のみである。

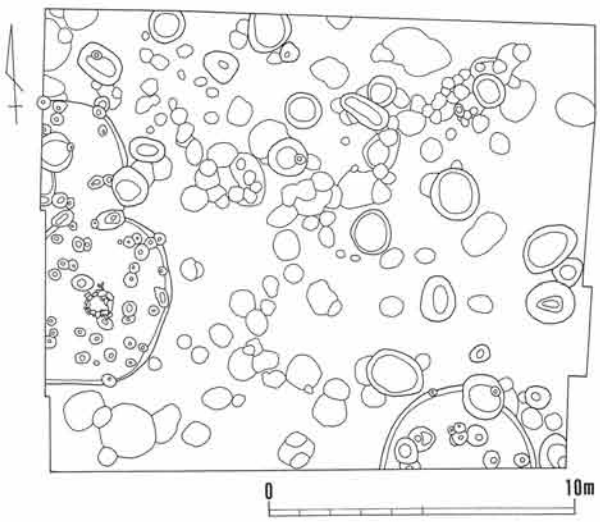
〈時期〉　勝坂式、加曽利E式期どちらに属するか明らかにできない。

５）その他

第12次調査における各種遺構は概述してきた通りである。しかし、調査ではこれ以外に大小様々なピットが多数検出されている（第14図）。このピット群の内数基については遺物が比較的まとまって出土したり、覆土も各種遺構と類似した暗茶褐色土で、何らかの遺構と思われるも

のもある。これに対し大部分のピットは遺物を伴わず、掘り込みが明瞭でなく壁面や底面が判然としない形状を呈している。覆土も遺構と異なり、上面に茶褐色土をもつのみで下部は茶褐色土と暗黄褐色土の混土層やローム質の暗黄褐色土となっている。このピット群は遺構確認面においてもやや薄暗い部分としてみられるだけで、そのプラン等は明確ではなかった。各遺構を精査中に壁面にかかり発見されたり、再度の遺構確認で暗い部分として残ったものを発掘した結果である。殆どは木の根、しみ等の落ち込みと考えられる。第6図の調査全体図では各遺構の状況を理解しやすい様にこれらピット群を除外して示した。こうした結果については調査期間が真冬にあたり、西陽のため遺構確認が非常に困難であったということにも要因があるが、調査方法などに反省を残してしまった。

（広瀬）



第14図　遺構全体図（ピットを含む）

注）

1）国分寺市史（1986）では整理途上にあり、遺構数を正しく把握できていなかったため、今報告の記載と内容が異なってしまっている。今報告をもって正とする。

2）加曽利E式の細分は安孫子・秋山・中西　1980「東京・埼玉における縄文中期後半土器の編年試案」神奈川考古10号に準処している。

(2) 出土遺物

1）土器

第12次調査において出土した土器は総点数10159点に及ぶ。それらの殆どが縄文中期に比定され、僅かながら縄文後期の土器も混じる（第1表）。しかしこの内の約72%は細片等で所属時期を決定し得ず、属性の抽出が可能な土器は約28%と少数である。ちなみに所属時期比定が可能な資料の内、勝坂式期は28.1%、加曽利E式期は71.5%を占め、五領ヶ台式期及び縄文後期

種別 / 出土区	深鉢形土器																	浅鉢形土器	不明	合計
	五領ヶ台	勝坂				阿玉台	加曽利E								曽利	後期				
		I	II	III	勝坂		I	II	III	IV (連孤文)	V	VI	VII	加曽利E						
22号住居址					62	2		16	19	33	(12)	317	18		37	102	1	3	1689	2299
24号住居址					69	3		26	16	7	(5)	61	3		19	67			713	984
埋甕													5							5
25号土壙				1						3	(1)								5	9
26号土壙			1			1									1				15	18
27号土壙																			12	12
28号土壙												1							24	25
29号土壙								1											4	5
30号土壙			2																13	15
31号土壙																			7	7
32号土壙			5	3				1											12	21
33号土壙																				0
34号土壙			12						2			1							11	26
35号土壙																			2	2
36号土壙								1		4	(4)								18	23
37号土壙				2		3						2							35	42
38号土壙				6															23	29
39号土壙			2	1		1													51	55
40号土壙			2	19								1							19	41
41号土壙				1				1				1							21	24
6号集石																			1	1
7号集石																				0
8号集石																				0
9号集石												1								1
10号集石					16							2							22	40
その他									15	24	(16)		8		2	4		1	24	78
遺構外	1		8	91	445	49	2	100	73	109	(108)	390	63	3	125	366	8	10	4554	6397
合計	1		32	124	592	59	2	146	125	180	(146)	777	97	3	184	539	9	14	7275	10159

第1表　第12次調査出土土器一覧

は１％に満たない。また勝坂式期の内、勝坂式は92.7％、阿玉台式は7.3％、加曽利Ｅ式期の内、加曽利Ｅ式は66.6％、連弧文土器7.1％、曽利式26.3％の比率を成す。

22号住居址（第15・16図，図版８・９）

本住居址西側約⅓が未調査であるが、第12次調査の住居址３基の中で遺物量は飛び抜けている。しかし、総点数2299点中約半数は判別不可能な資料である。また、時期的には勝坂式～後期に至る各期の資料が出土したが、主体は加曽利Ｅ式第Ⅴ段階である。

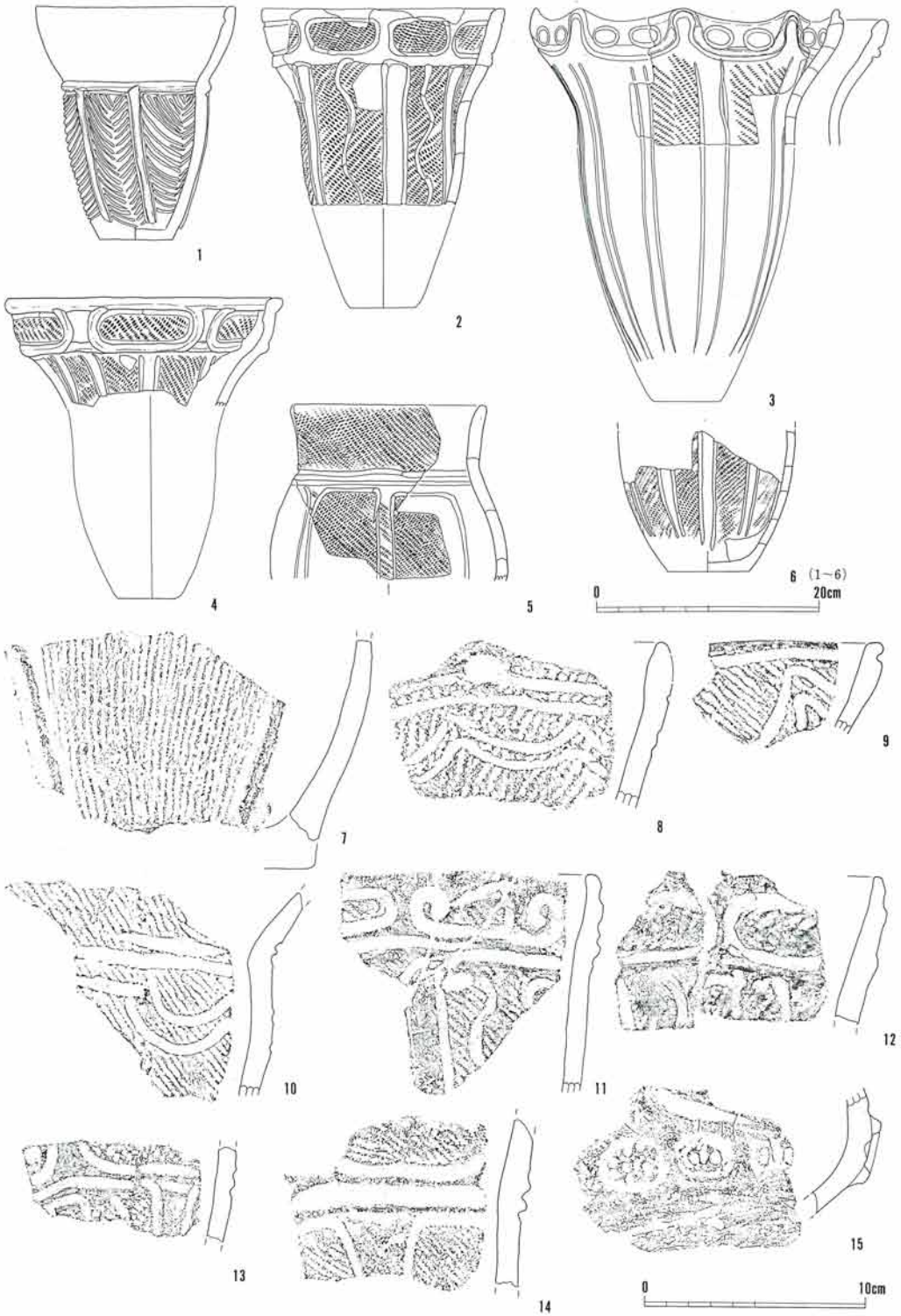
１．埋甕に転用されていた土器で、口縁部約½及び底部を欠失する。推定口径18cm、底径7.2cm、器高21cmを測る。器形は頸部で屈曲し、口縁部は若干内湾気味に外傾する。口縁部は無文で、頸部に一条の隆帯が廻る。胴部は頸部から垂下する隆帯によって６単位に区画され、区画内は棒状工具（或いは竹管背面、以下も同様）による一本単位の沈線によって綾杉状文が描かれる。口縁部内・外面とも右下りのミガキ調整が施される。胎土は細砂粒を少量含み、焼成良好、色調は淡赤褐色を呈する。また外面にはタール状の付着物が認められる。

２．炉体土器として転用されており、口縁部約½・胴部下半を欠失する。特に胴部は粘土帯接合部において明確に割れており、炉設置時における意識的な欠損と考えられる。推定口径21.6cm、現高17.6cmを測る。器形は口縁が若干外傾しながら立ち上がり、文様帯は口縁部と頸胴部に二分される。口縁部に隆帯貼付によって区画文を配し、その後に縄文ＲＬを区画内及び胴部に縦位に転がす。区画内は隆帯脇に沈線を施すことによって調整し、胴部は逆Ｕ字状文・蛇行懸垂文によって７単位に区画される。逆Ｕ字状文内は磨消が施されるが、一部は縄文が残る。胎土は石英・長石・角閃石・小礫を含み、焼成良好、色調は淡赤褐色を呈する。

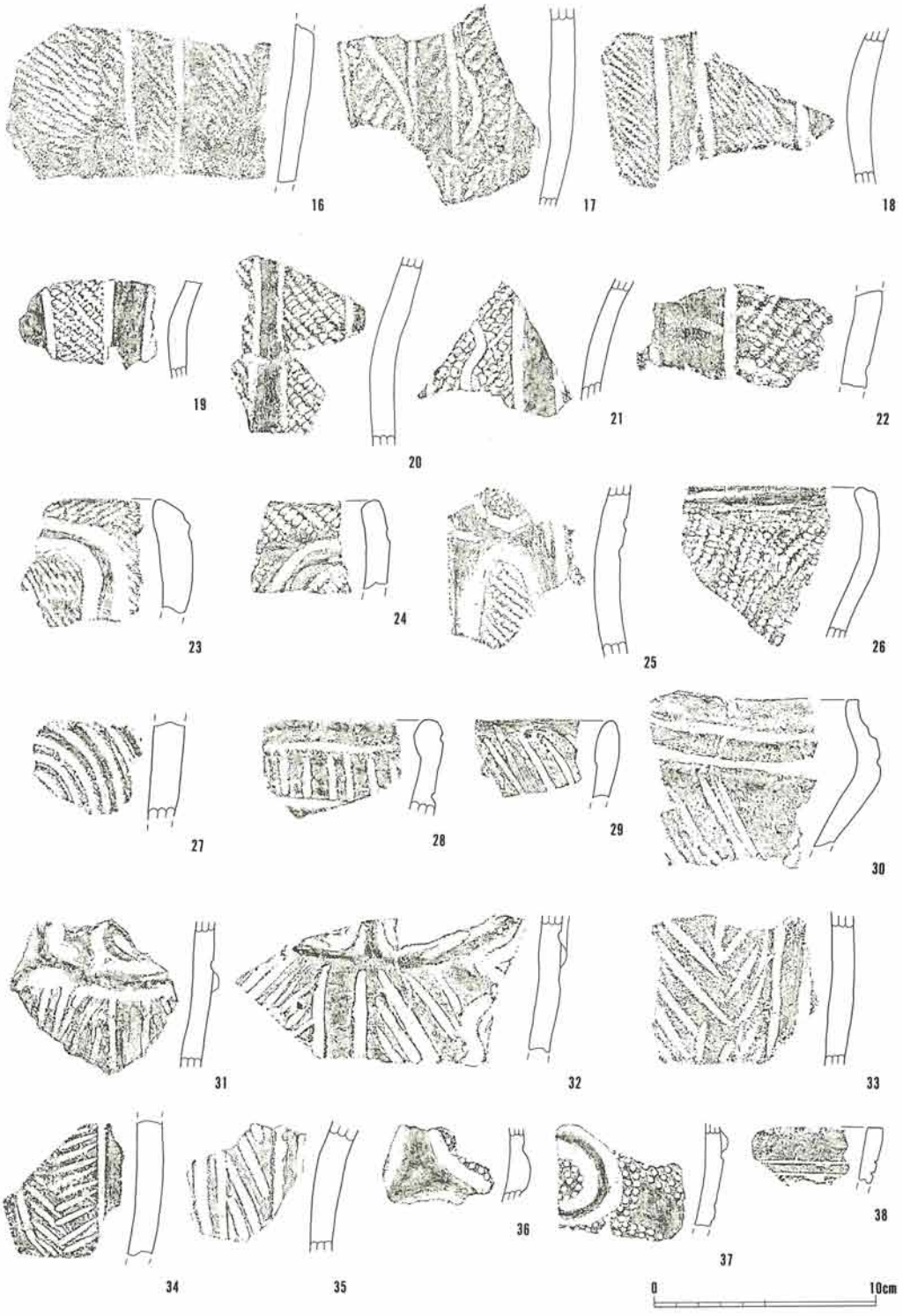
３．口縁部約¼のみ現存する。推定口径27.6cm、現高12.4cmを測る。８単位の小波頂をもつと考えられる。隆帯によって波頂下で連結する区画文を有し、区画内は沈線によって円文を描く。頸部及び胴部は縄文ＬＲ縦位施文の後二条一組の沈線が懸垂され、沈線間を磨消される。内面は横位ミガキが施される。胎土は砂粒を含み、焼成やや良好、色調は暗黄褐色を呈する。

４．口縁部約½のみ現存する。推定口径25cm、現高10cmを測る。器形はキャリパー形で口縁部文様帯と胴部文様帯とに二分される。口縁部文様帯は断面カマボコ状を呈する隆帯によって楕円区画文を施し、隆帯脇は沈線によって調整される。胴部は磨消帯を挟んだ二条の沈線によって縄文帯が懸垂される。縄文はＲＬを横位に転がす。胎土は砂粒及び白色不透明粒子が含まれ、焼成やや良好、色調は暗褐色を呈する。

５．口縁約⅓及び胴部の一部のみ現存する。推定口径17.6cm、現高12.8cmを測る。胴部が張り出し、口線はほぼ直立する。頸部に二条の沈線を廻らし、口縁部文様帯と胴部文様帯に二分される。地文に縄文ＲＬを横位に転がし、口縁部文様帯は縄文のみの素文帯、胴部文様体は方形に連結する沈線を垂下させる。胎土には砂粒、角閃石を含み、焼成良好、色調は淡赤褐色を



第15図　22号住居址出土土器



第16図　22号住居址出土土器

呈する。

6．胴下半部約⅓のみ現存。推定底径7.4cm、現高12.8cmを測る。地文に縄文ＲＬを縦に施し、沈線二条による磨消帯を懸垂させる。また底部付近には横位ミガキが施される。胎土には砂粒、白色不透明粒子を含み、焼成良好、色調は淡赤褐色を呈する。

7は加曽利Ｅ式第Ⅱ段階に比定される。胴下半部の破片で、地文に撚糸文Ｒを施し、脇に沈線を沿わせた隆帯を懸垂させている。8～10は所謂連弧文土器である。8・9は口縁部破片、10は胴部破片であり、8は弧線文、9は波状文、10は横位沈線と連結した弧線文が描かれている。また8の口縁には突起状の小波頂が付けられる。11～22は加曽利Ｅ式第Ⅴ段階に比定される。11～14は頸部が窄まらずに立ち上がる。口縁部に渦巻文、区画文を施し、胴部に磨消懸垂帯を有する。15は口縁部が強く張り出す器形で、口縁部の区画文内に刺突文を充塡する。16～22は磨消帯を有する胴部破片で、蛇行懸垂文を描くものもある（17・21）。

23～25は加曽利Ｅ式第Ⅵ段階に比定される。23は縄文Ｌ、24は縄文ＲＬを口縁部・体部に異方向に転がす。27～35は曽利式系統の土器である。27は竹管状工具によって渦巻文を描く。また28～35は前述の11～22における縄文が斜位及び綾杉状の沈線に置換されたものと考えられる。

36・37は隆帯脇に細かい刺突文を施す。比較的薄手で、内外面とも丁寧なミガキが施され、さらに内面には赤色顔料を塗彩した痕跡が看取される。

38は口唇部断面が角張り、横位の平行沈線を施す。縄文後期前半に比定できよう。

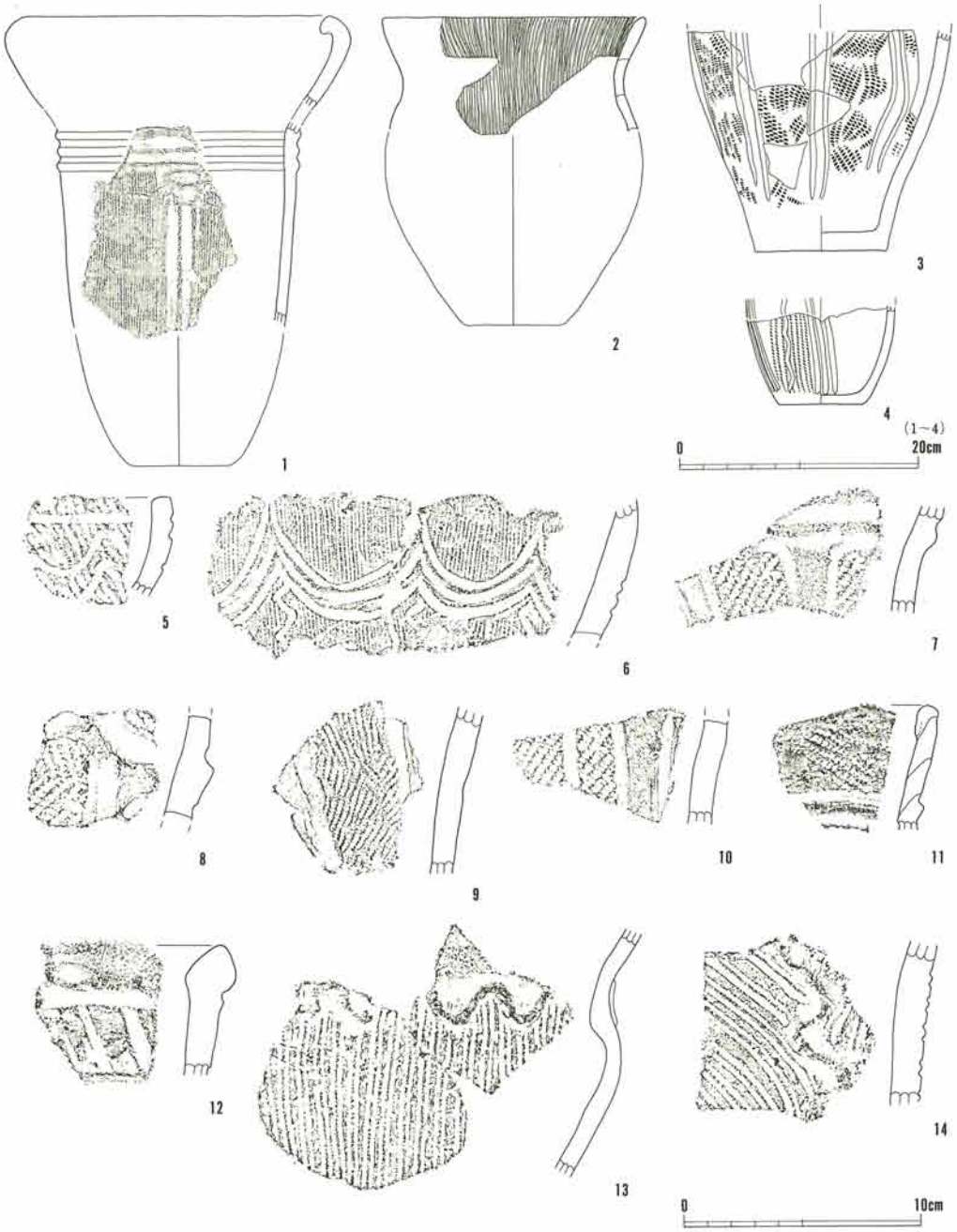
24号住居址（第17図，図版10）

本住居址は今次調査区の南壁にかかり、住居址の北側半分のみ調査された。出土土器の総点数は984点と少なく、土器の全容を知り得る復元個体も少ない。本住居址からは勝坂・加曽利Ｅ式期両期の遺物が出土しているが、数量的に主体を占め、且つ遺存状況が良好な資料が多い加曽利Ｅ式第Ⅴ段階が本住居址の所属時期と考えられる。

1．口縁部及び胴部上半部のみ出土。土器片は殆ど接合せず、実測図上で器形等を想定した。推定口径25.2cm、現存高26.1cmを測る。胴部はほぼ直立し、頸部で外に開き口縁部は内曲する。頸部に三条の隆帯を廻らし、幅広の沈線によって脇を調整する。胴部は同様の調整を行なう隆帯を3本垂下させ、頸部との結合部にＣ字状の隆帯を更に貼り付ける。その後胴部には櫛歯状工具による条線を縦走させる。1㎜大の雲母、白色不透明粒子を極めて多量に含み、焼成がやや不良なことと併わせて、他の出土土器との違いが明瞭である。

2．推定口径21cm、現存高9.5cmを測る。口縁部は外に開き、頸部に括びれ部を持つ胴張りの器形と考えられる。口縁部から胴部にかけて条線を縦位に施す。胎土は砂粒を少量含み、焼成良好、色調は明黄褐色を呈する。

3．胴下半部のみ現存する。底径11.2cm、現高18.4cmを測る。二本一組の沈線を9単位垂下



第17図　24号住居址出土土器

させ、区画内に縄文ＬＲを転がす。沈線間に丁寧なミガキが加えられ、また底部付近においても横位ミガキを施す。胎土は砂粒を若干含み、焼成良好、色調は明黄褐色を呈する。また土器内面底部付近にタール状の付着物が若干認められる。

４．３と同様胴下半部のみ現存する。底径7.2cm、現高6.2cmを測る。三本一組の沈線を６単位垂下させ、区画内には蛇行沈線を垂下させる。地文は撚糸文Ｒを縦位に施す。砂粒を多量に含み、焼成良好、色調は赤黄褐色を呈する。

５・６は連弧文土器の口縁部及びその付近の破片である。５は波状文、６は弧線文と蛇行懸垂文が描かれる。また施文技法として５は棒状工具、６は竹管腹面が用いられ、地文として５には縄文ＲＬ、６は条線が施される。９は加曽利Ｅ式第Ⅵ段階に比定される資料で、縄文帯の区画として微隆起線文を描く。12～14は曽利式系統の資料であるが、すべて加曽利Ｅ式第Ⅴ段階に比定できよう。13は頸部屈曲部に波状の隆帯を貼付し、胴部には条線を施す。また14は蛇行する隆帯を区画として区画内に斜位の沈線を施す。

１号屋外埋甕（第18図１，図版11）

調査区東側（７，25）区において検出された。

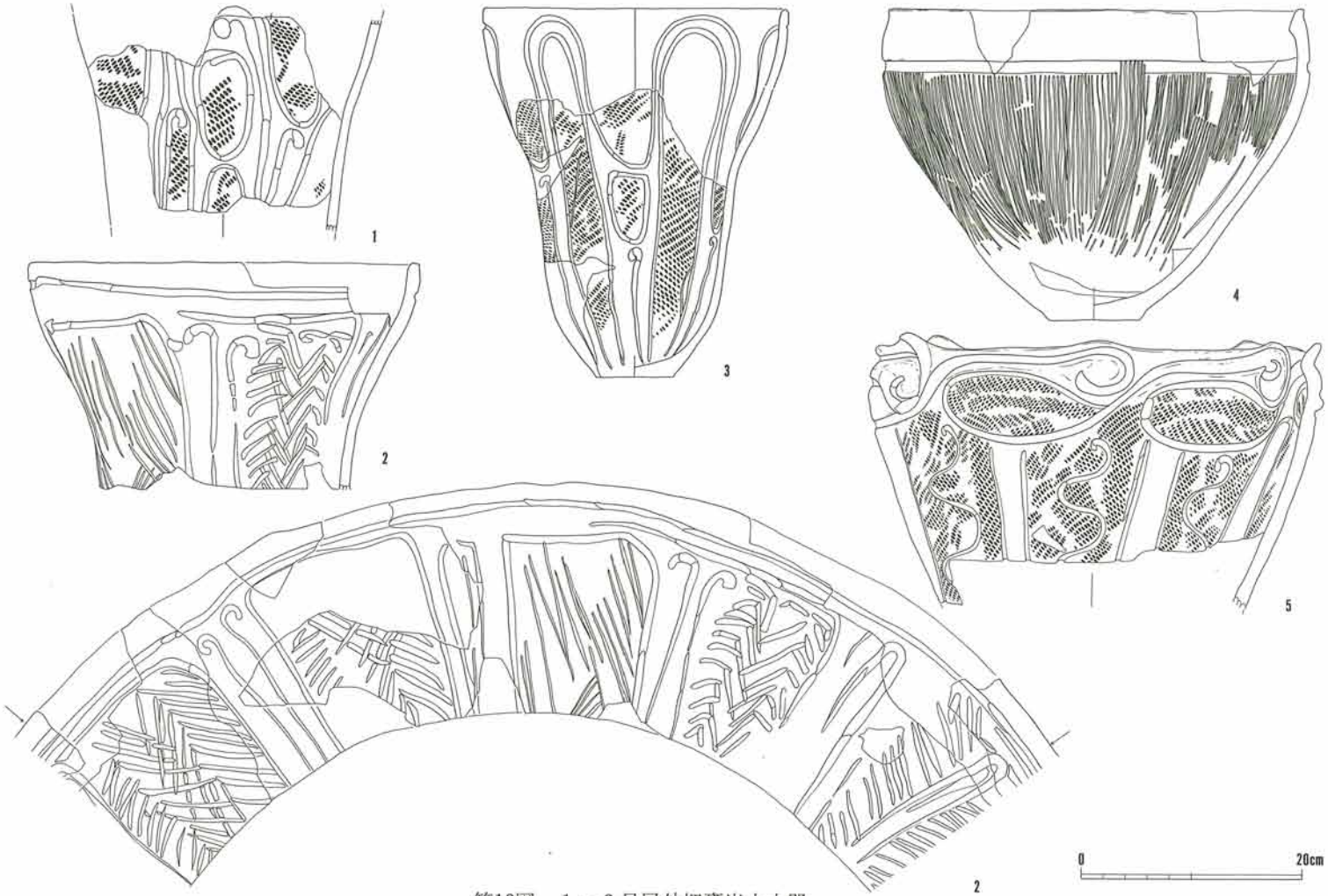
口縁部、胴下半部を欠く。現高19cm。胴部上半から若干外に開きながら立ち上がる。沈線によって蕨手状懸垂文・Ｕ字状文・楕円文等を描き、区画内に縄文ＲＬを転がす。文様は口縁下部より懸垂される蕨手状文により一応の区画が為されるが、個々の文様配置での規則性は看取されない。また、沈線脇は未調整のためミミズ張れ状を呈する。胎土には小礫・砂粒を含み、焼成は良好、色調は暗褐色を呈する。加曽利Ｅ式第Ⅵ段階に比定される。

２号屋外埋甕（第18図２・３・４，図版11）

（８，26）区において検出された。３個体の土器によって入れ子状態に設置されている。内側より３・２・４と設置されるが、殆ど隙間のない状態で重なり合っており、３点とも同時に設置されたものであろう。

２．胴下半及び口縁以下¼を欠損する。推定口径34.8cm、現高20.5cmを測る。口縁より緩やかに窄まる器形で、文様はすべて沈線で描かれる。口縁に一条の沈線を廻らし、口縁部と体部の区画とする。体部は逆Ｕ字状区画文によって４単位区画され、区画間は蕨手状懸垂文とその崩れた懸垂文が描かれる。また一部の区画は広さの調整を行なっており、文様描出の始点と終点が推察される。区画内は綾杉文・斜位沈線文が描かれる。胎土には角閃石・石英・長石等を含み、焼成は良好、色調は淡黄褐色を呈する。

３．胴部約½現存。底径７cm・現高26cmを測る。胴部中程から緩やかに外に開く器形で底部付近より急速に窄まる。口縁及び胴部上半にかけて大きな波状文を描くと考えられる。その波



第18図　1～3号屋外埋甕出土土器

状文に囲まれた形で逆U字状文を垂下させ、その区画間には小形の区画文・蕨手状文を描く。区画内は縄文ＲＬを縦位に転がす。胎土は砂粒を若干含み、焼成は良好である。色調は淡赤褐色を呈する。

４．口縁以下約¾が現存する。口径37.2cm、底径8.0cm、器高28cmを測る。器形は口縁が若干内湾しながら立ち上がる鉢形の土器である。口縁下の最も外に張り出す部分に沈線を廻らし、口縁部無文帯と胴部文様帯の区画とする。胴部には条線を縦位に施す。胎土には白色砂粒を含み、焼成良好、色調は淡黄褐色、口縁部は暗褐色を呈する。また一部は被熱し赤化している。内面及び口縁部無文帯には丁寧なミガキが施され、光沢をもつ。

以上３点とも加曽利Ｅ式第Ⅵ段階に比定される。

３号埋甕（第18図５，図版11）

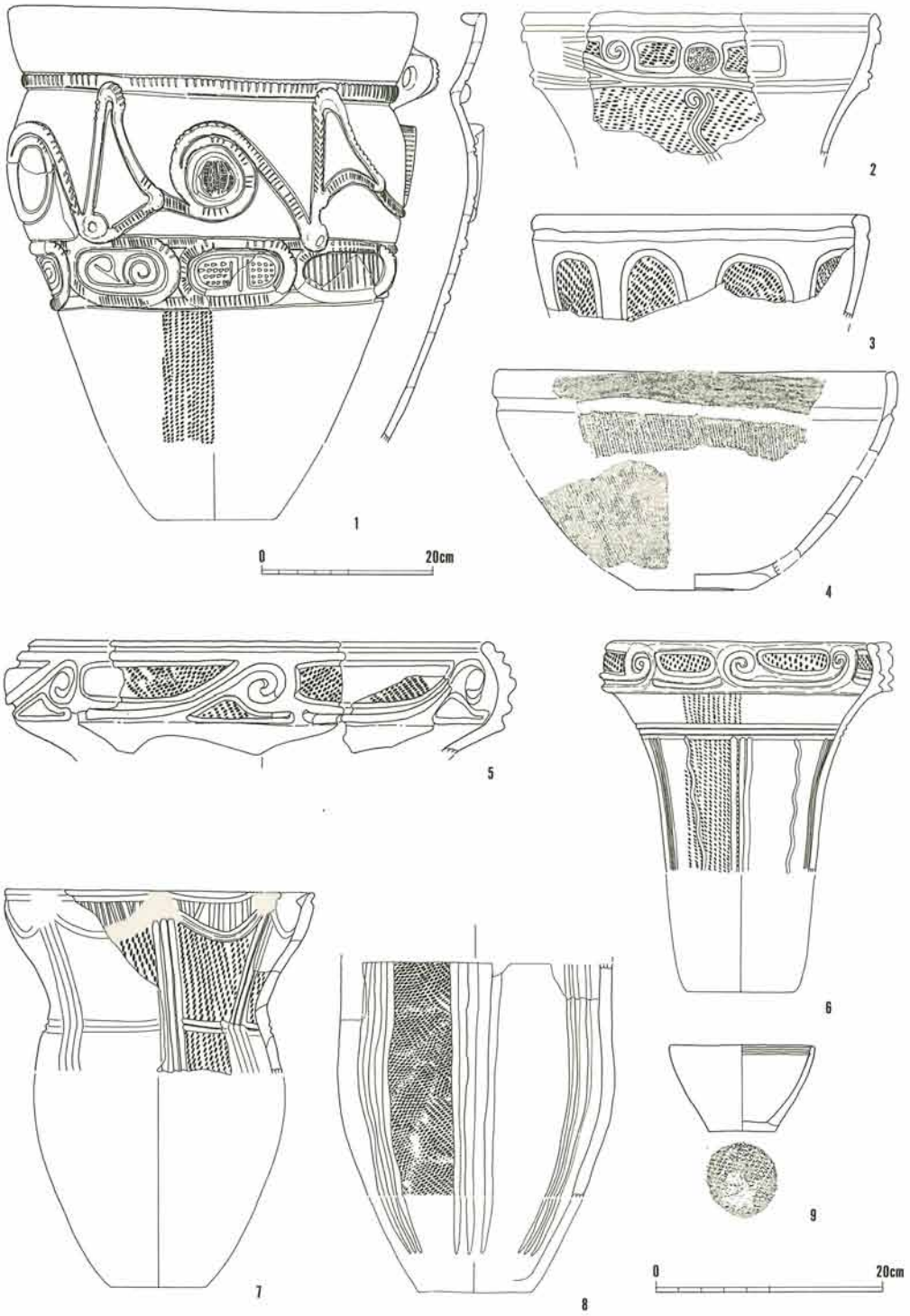
（８，26）区において検出された。２号埋甕より北東約１ｍに位置する。

胴下半部を欠損し、口径40cm、現高24cmを測る。底部より外に開きながら内湾する口縁につながる器形である。文様帯は口縁部と胴部とに二分されるが、明瞭な境界をもたない。口縁部は隆帯による渦巻文と沈線による崩れた区画文が連結して入組状に展開する。文様単位は６単位である。渦巻文は上端部が肥厚し小突起状となる。胴部は二本一組の縦位沈線によって６単位に区画され、区画内には縄文ＬＲを施し、更に蛇行懸垂文を描く。また、一部の相対する区画線が連結して逆U字状となる箇所がある。胎土は細砂粒を微量に含む緻密な土器で、焼成良好、色調は淡赤褐色を呈する。本資料は加曽利Ｅ式第Ⅴ段階後半に比定されよう。

その他の遺構（第19図１～４・第20図，図版12～14）

本調査地区では住居址・屋外埋甕の他、土壙17基、集石５基、ピットと考えられる小穴が多数検出されている。しかし殆どの遺構より出土する土器は破片であり、復原もしくは推定復原が可能な個体は少ない。

１．39号土壙出土。口縁以下½及び胴下部を欠失する。推定口径48cm、現高48cmを測る大形の深鉢である。頸部に屈曲部をもち、胴部は若干外に張り出す。また口縁部は外傾し、口辺で「く」の字状に内屈する。文様帯は頸部屈曲部の隆帯により、口縁部と胴部の大きく二つに分帯され、胴部は更に上・中・下の三文様帯に細分される。口縁部は無文帯となる。胴上部は三角文・渦巻状円文が連結されて推定４単位展開する。円文内は弧線文が描かれ、刻目文、交互刺突文によって最終的空間処理が為される。胴中部の楕円区画帯は胴上部の三角文、円文と対応する推定８単位構成で、区画内には渦巻文、集合沈線文等が描かれる。また、二文様帯の主たる文様は刻目文で加飾する隆帯によって描かれるが、刻目文も「ハ」の字状やヘラ状工具による細い刻目文と、施文手法も多様である。胴下部は撚糸文Ｌを縦位に転がす。胎土には小礫



第19図　その他の遺構出土土器

・白色砂粒を含み、焼成良好、色調は茶褐色を呈する。本資料は勝坂Ⅲ式に比定されるが、本土壙からこの他、第20図14・15が出土している。14は断面方形を呈する隆帯によって三角形区画文を描き、脇を押引文が沿う。勝坂Ⅱ式に比定されよう。15は内湾気味に立ち上がる口縁に隆帯を廻らし、刻目文によって加飾される。勝坂Ⅲ式に比定されよう。

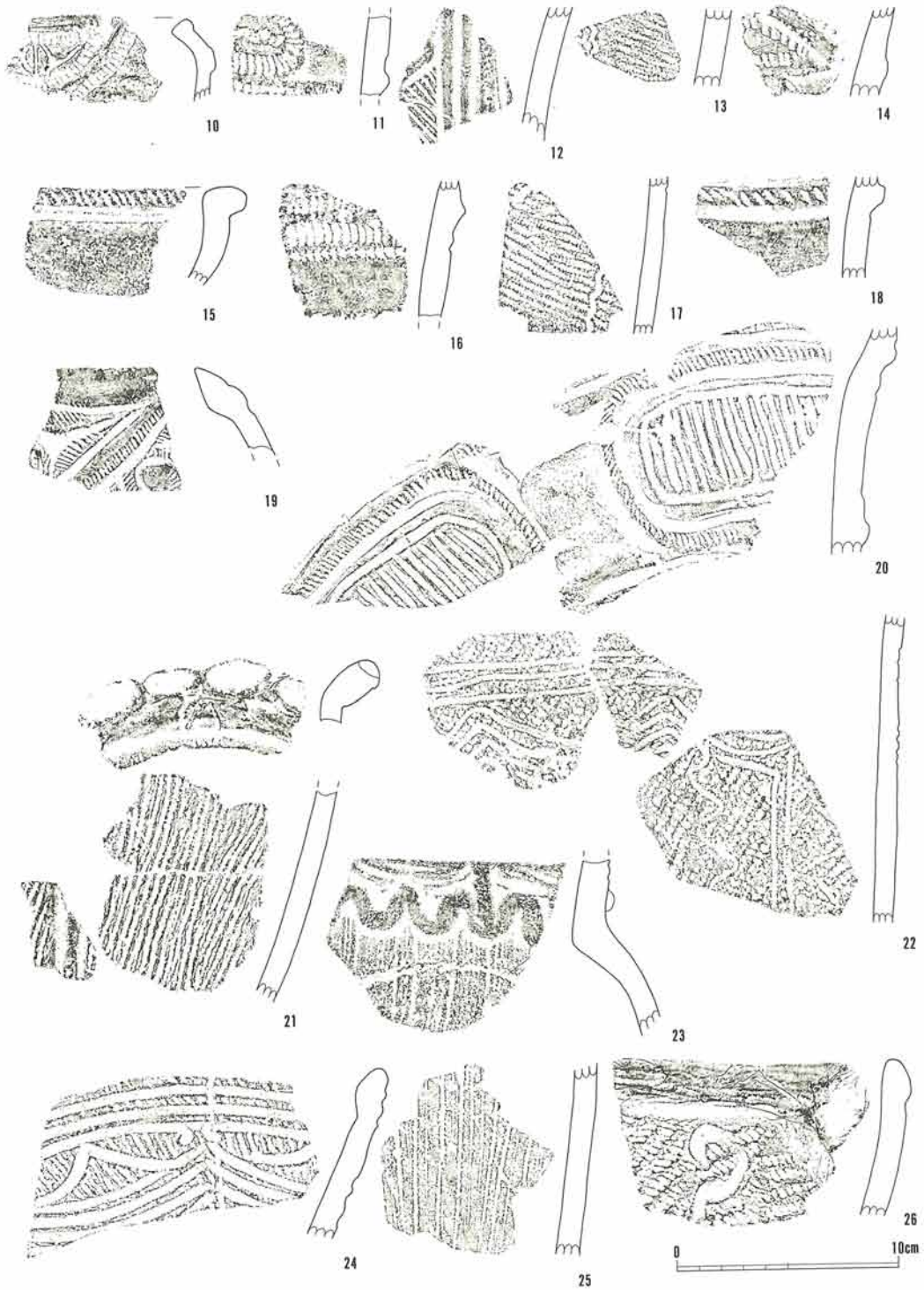
2．41号土壙に近接するピットより出土した。口縁部約⅓が現存するものの、各々接合しない。推定口径30.8cm、現高12.4cmを測る。頸部が若干外傾し、口縁部は屈曲せずになだらかに立ち上がる。口縁部は隆帯によって渦巻文・区画文が配され、区画文は方形・円形を呈する。円形区画内には竹管による円形刺突文が施され、他は縄文ＲＬを充填する。頸部には上端が渦巻となる蛇行懸垂文が描かれる。胎土は小礫・砂粒を含み、焼成良好、色調は赤褐色を呈する。内面は横位の丁寧なミガキが施され、平滑な器面となる。加曽利Ｅ式第Ⅲ段階に比定されよう。このピットからは他に第20図22・23が出土している。22は縄文ＲＬを地文とし、比較的細い沈線によって文様が描出される。４本単位の連弧状モチーフを描き、それと連結して懸垂文・蛇行懸垂文を下ろす。本資料は同一個体と思われる破片が16点出土している。23は胴張りの器形で、頸部屈曲部に波状の隆帯を貼付し、胴部は条線を施す。また隆帯上部には平行沈線による連弧状モチーフを描く。22・23共に加曽利Ｅ式第Ⅳ段階に比定される。

3・4．27号土壙付近のピットより出土した。両資料の他、第20図26も本穴出土である。３点とも加曽利Ｅ式第Ⅵ段階に比定される。３は口縁部約⅔が現存する。口縁下に一条の沈線が廻り、胴部には逆Ｕ字状の区画文を推定８単位配する。区画内には縄文ＲＬを横位に転がし、また無文部には丁寧なミガキが施される。胎土には小礫・白色砂粒を多量に含み、焼成は良好、色調は淡黄褐色を呈し、一部は被熱して赤化しており、黒斑も認められる。４は口縁部から底部の大破片が出土しているにも拘らず、各々接合せず、図面上で器形を復原した。推定口径35cm、推定器高19cm、底径10.4cmを測る。口縁下に一条の沈線を廻らし、以下に縦位の条線が施される。胎土は小礫・白色砂粒を多量に含み、焼成良好・色調は淡黄褐色を呈し、黒斑や被熱による赤化が見られる。26は口縁に渦巻文を隆帯によって描出する。以下は縄文ＲＬ地上に蛇行沈線を描く。

以下は破片のみの出土土器を説明する（第20図）。

10・11は38号土壙出土。２点とも勝坂Ⅱ式に比定される。図示された２点以外の資料も時期判別可能な資料はすべて勝坂Ⅱ式に比定できる。10は口縁部破片であり、逆三角形モチーフを描く隆帯脇にキャタピラ文を沿わせ、区画内に三叉文を向きあわせて描く。２は１と比較して幅広の工具を用いたキャタピラ文を沿わせ、区画内には先端の丸い工具を用いた波状の押引文を施す。２の胎土には雲母を多量に含み、焼成はやや悪い。

12・13は34号土壙出土。12は所謂縦位区画文を描く。区画文は斜位の沈線を充填させる。また13は縄文ＲＬを横位に施し、無文部に蛇行する三角押文を描く。両者とも勝坂Ⅱ式に比定さ



第20図　その他の遺構出土土器

れ、本土壙からは同時期に比定される破片が10点出土している。

16～18は32号土壙出土、16は11と同様、キャタピラ文脇に三角押文を施す。また17は縄文RL地上に波状沈線を施す。また18は隆帯を刻目文で加飾するものである。16・17は勝坂Ⅱ式に、18は勝坂Ⅲ式に比定される。

21は40号土壙出土。口縁部と胴部の同一個体破片が出土している。口縁を外屈させ、先端に楕円状の加飾を施すものである。胴部は撚糸文Lを縦位に転し、断面カマボコ状の隆帯を垂下させる。勝坂Ⅲ式でもより新しい時期に比定されよう。

24は36号土壙出土。地文に撚糸文Lを施し、沈線手法によって横位及び弧状のモチーフを描く。所謂連弧文土器であり、加曽利E式第Ⅳ段階に比定される。

25は25号土壙出土。浅い平行沈線によって縦位の集合沈線が施される。加曽利E式第Ⅳ段階もしくは第Ⅴ段階に比定されよう。

19・20は10号集石出土。19は隆帯上及び三叉文を描いた空間に刻目を施す。また20は刻目が加飾された楕円区画文内に集合沈線を描く。両者とも勝坂Ⅲ式に比定される。

遺構外出土土器（第19図５～９・第20～24図，図版12～18）

第12次調査の出土土器の半数以上は遺構に伴わず、Ⅱb層より出土している。またその大半が時期比定の困難な資料であることは、前述の遺構出土土器と同様である。

五領ヶ台式期の土器（第20図１）

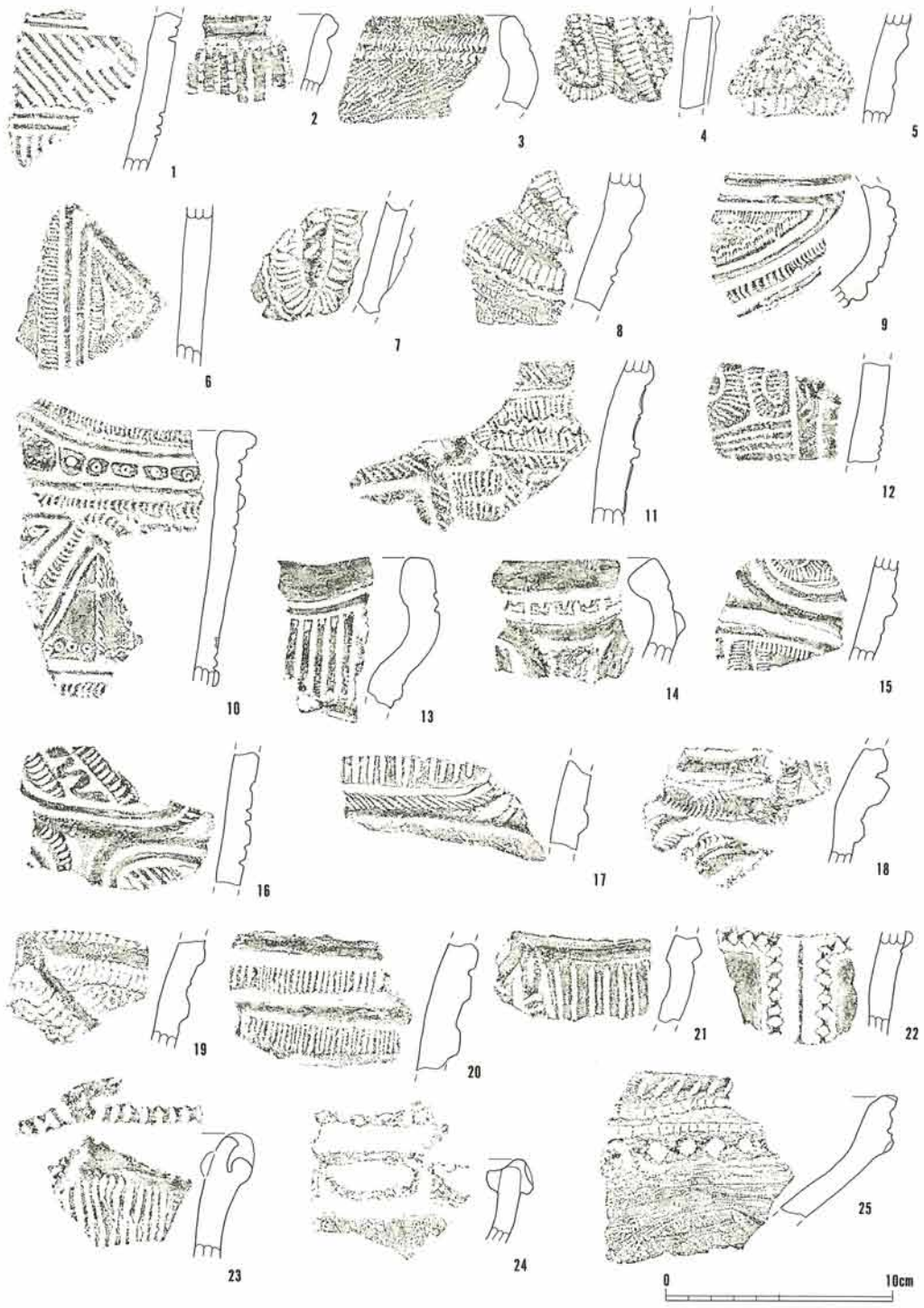
１点のみの出土であるが、本調査区出土土器の中で最も古い時期に位置付けられるものである。幅６㎜程の細かい竹管状工具を器面に深く引く半隆起線によって文様が描出される。横位の半隆起線による横帯区画内に各々斜位・縦位の半隆起線が密に施文される。胎土には小礫・細砂粒を多量に含み、焼成は良好である。五領ヶ台式の中でも古く位置付けられるもので、山口明氏の編年における第１段階（山口　1978）に比定されるものである。

勝坂式期の土器（２～35）

勝坂式期に所属する資料は593点を数え、遺構外より出土した時期比定可能な資料のうちの32.3%を占める。しかしすべて破片のみの出土であり、復原・実測の可能な資料はない。

２は区画内に先端の角張った工具による角押文を縦位に施文する。勝坂式最古段階もしくは若干先行する時期と考えられる。３は幅の異なる三角押文二条、５はキャタピラ文と三角押文の組み合わせによって文様が展開される。４・５は雲母を多量に含み、他の資料とは趣を異にする。以上は勝坂Ⅰ式に比定される。

６～16は勝坂Ⅱ式に比定される。６は縦位区画文の空間処理として、三叉文、蓮華文が埋められる。７・８は所謂抽象文を描く。７は刻目を付けた隆帯脇をキャタピラ文・波状文が沿い、８は隆帯脇に角押文・キャタピラ文・波状文を沿わせる。９は斜位に流れる隆帯によって区画



第21図　遺構外出土土器

がなされ、空間処理は6と同様三叉文・蓮華文が描かれる。10は口縁直下に“玉抱き連続「コ」の字文”（三上　1986）を施す。しかし三上氏によればこの文様は楕円文内における“最終空間処理手法”として描かれるのに対して、本資料の場合は一文様帯内における主要文様要素であることや、四方を沈線によって囲む浮彫り手法であることなど、相違点が見られる。刻目文を施す隆帯によって分帯される胴部文様帯は同様の隆帯によって連続三角文が描出され、区画内には円形竹管刺突文・連続刺突文・波状文が施される。隆帯上の刻目は竹管文B_5'（可児　1969）に分類されるもので、9も同様である。11・12は同一個体と考えられる。隆帯上及び区画内に刻目文が隙間なく埋められる。13～16は勝坂Ⅱ式の中でも前述の土器群よりも後出すると考えられる。16は区画内に斜位の集合沈線を引き、更に刻目文・交互刺突文を空間に施す。

17～25は勝坂Ⅲ式に比定される。21～23には隆帯上に施す刻目文が棒状工具による太い刻目に変わることが見られ、また17、21、22のように区画内の文様も無文或いは縦位の集合沈線のみとなり、刻目文等の空間処理が為されない。また23のように口唇部に刻目文を施し、胴部は撚糸文のみのものや、24のように口縁部に突起状の楕円文を貼付する手法など勝坂式終末期の様相を呈するものもみられる。25は浅鉢形を呈する。口縁下の隆帯上に押圧状の太い刻目を施すもので、区画内には押引文が見られる。

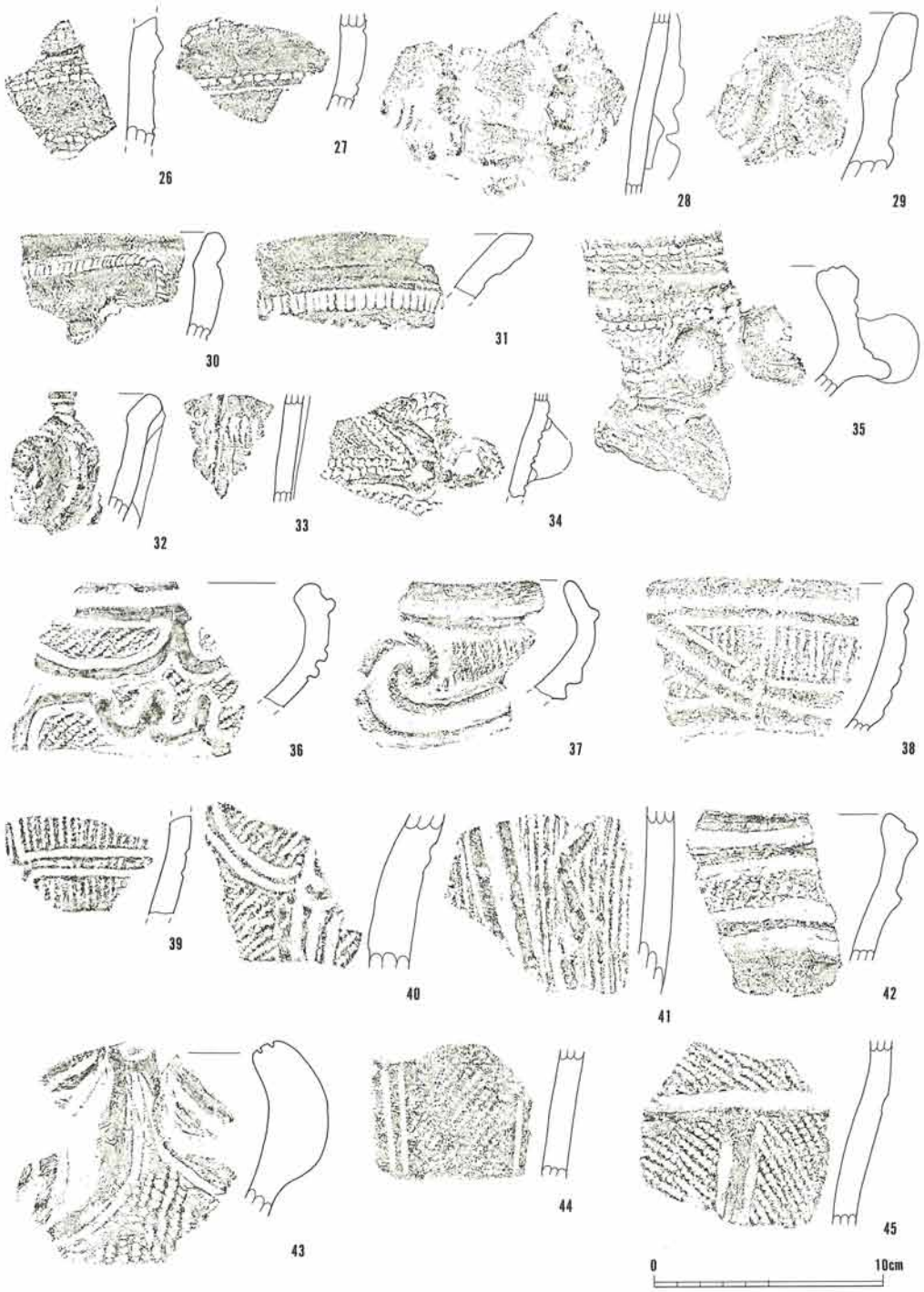
26～35は阿玉台式に比定される土器群である。26は断面三角形を呈する隆帯脇に押引文を二条施す。27も同様に施すが、隆帯に沿わず独立した文様となる。両者は半截竹管腹面を浅く押引する手法、（可児　1969）のD_4'が採られる。34・35も同様で、35には口唇部にも押引文が施される。28は口縁部に付けられた扇状把手の下部と考えられる。波頂より垂下されたと思われる突起状の隆帯に刻目を施し、竹管状工具背面を用いた幅1㎝の爪形文を廻らせる。33も同様の爪形文が廻る胴部破片で、隆帯を一条垂下させる。両者は胎土・焼成も近似することから同一個体とも考えららる。30は所謂角押文によって連続U字状のモチーフを描く。31は浅鉢であろう。すべて阿玉台Ⅰb式と考えられる。

加曽利E式期の土器（第19図5～8，36～76）

当該期の資料は1231点を数え、時期比定可能な遺構外出土土器の内、67.2%を占める。このうち、実測が可能な資料が4点あり、先ずこれを説明したい。

5．（10，23）区出土。口縁部のみ約⅓現存。キャリパー形を呈する深鉢である。頸部は無文帯で、口縁部は隆帯及びそれに沿う沈線により、渦巻文・区画文を描出する。区画内は縄文RLを充填する。胎土は細砂粒を含む緻密な土器で、焼成は良好、色調は暗黄褐色を呈する。加曽利E式第Ⅱ段階に比定される。なお（10，23）区には本資料の他、浅鉢等の土器がややまとまって出土している。

6．同一個体37点が出土しているものの、互いに接合しない。しかし各部位の破片を観察す



第22図　遺構外出土土器

ることにより、各部径・器形・文様構成等を推定し、図上において復原した。推定口径22.6cm。器形はキャリパー形を呈し、口縁部・頸部・胴部の各部文様帯に3分される。隆帯及びそれに沿う沈線により、渦巻文、方形区画を構成する。渦巻文は異なる二方向の渦を連続させることにより、大きく4単位の文様構成をとると考えられ、区画内には縄文RLを充填する。頸部以下は撚糸文Rを地文とし、沈線手法によって頸・胴部の区画線・三本単位の懸垂文・蛇行懸垂文等を描く。胎土には砂粒を多く含み、焼成は良好、色調は暗褐色を呈する。加曽利E式第Ⅲ段階に比定されよう。

7．口縁部¼が現存する。推定口径27cm。現高16.2cmを測る。地文に撚糸文Rを転がし、口縁下に波状隆帯を推定8単位貼付する。また、それに沿う沈線によって波頂部（口縁直下）に渦巻文を描出すると考えられるが、波頂部は剝落している。波状文によって区画された区画内には縦位沈線を充填するが、図の向かって左側の区画内は竹管腹面による浅い平行沈線、右側の区画内には背面による浅い沈線を施す。胴部は波頂部より三本一組の沈線を垂下し、胴括れ部に二本一組の沈線を横位に廻らせる。胎土には角閃石、砂粒、小礫を多く含み、焼成良好、色調は淡赤褐色を呈する。加曽利E式第Ⅳ段階に比定される。

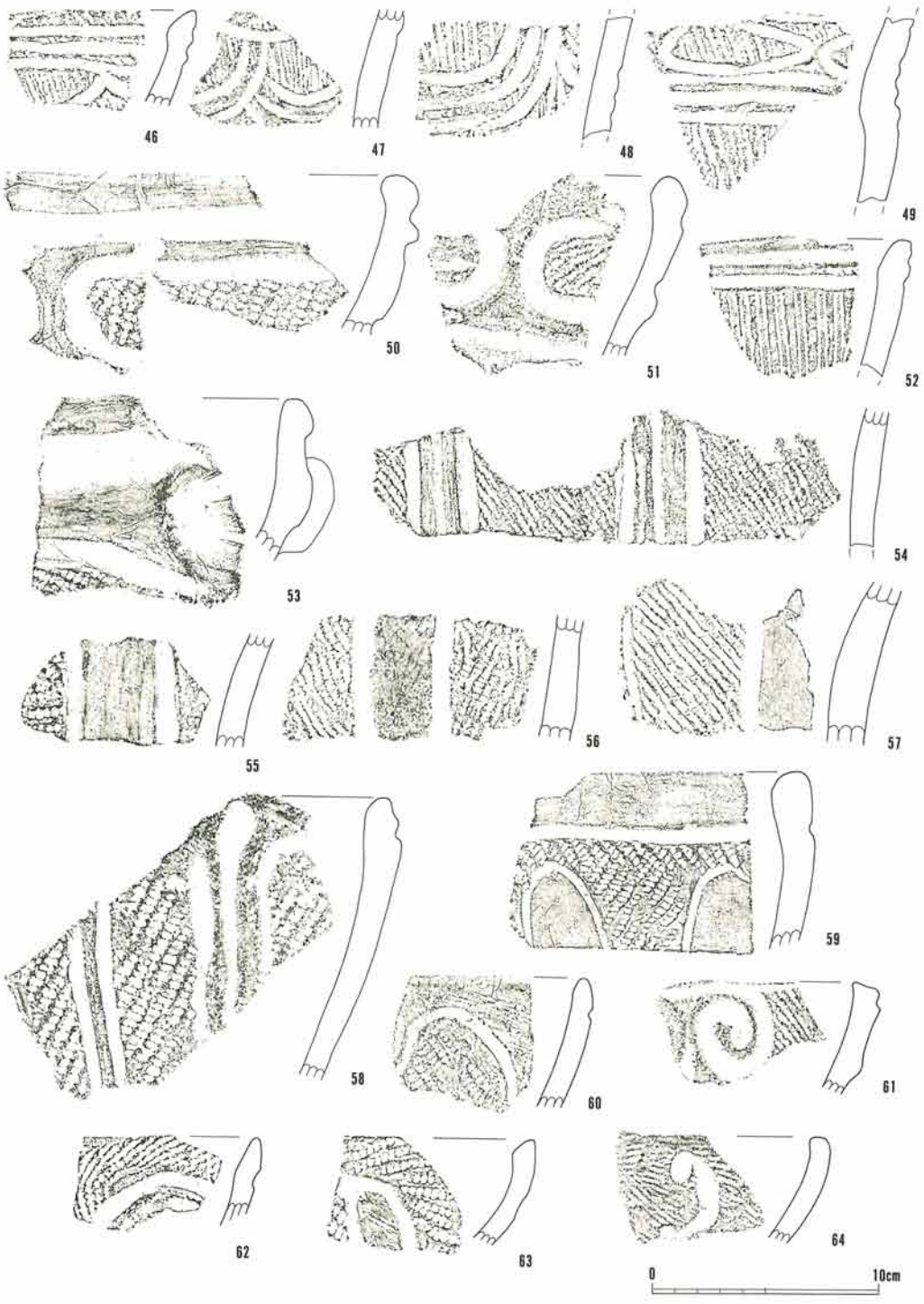
8．胴部のみ一周して現存。現高20.6cm。地文に縄文LRを縦位に転がし、沈線を垂下させる。沈線は三本一組を9単位描くことを基本とし、そのうち2単位が二本一組で構成される。沈線間は磨消しを行ない、一部の沈線は磨滅している。胎土には細砂粒を多量に含み、焼成良好、色調は赤褐色を呈し、黒斑が二帯横位に廻る。加曽利E式第Ⅳ段階。

以上の他、各段階に比定される破片資料を第21～24図に示した。

36と37・38は各々第Ⅰ・Ⅱ段階に比定されるキャリパー形深鉢の口縁部破片である。36は隆帯脇を沈線で調整し、一部は未調整の箇所がある。隆帯の断面は方形を呈する。37は文様描出に沈線が加わり、断面三角形を呈する。38は37と同様に第Ⅱ段階に比定されるが、隆帯は竹管腹面で調整されて描出される。渦巻文も37と比較して間延びするようである。口縁部の形態も、36と38では内湾の程度に違いが見られる。39と40・41についても距形文と連結渦巻文・蛇行懸垂文といった其々第Ⅰ段階、第Ⅱ段階に特徴的な文様描出を行なう。43は波状口縁となる。波頂部には円文が施される。

46・49は同一個体で、49は胴括びれ部に位置する。口縁部及び胴括びれ部に三条の沈線を廻らし、文様帯区画とする。47は弧線文の終始点にズレが見られる。46～49の文様描出には竹管背面を用いた浅い沈線による。また、46・49の地文には撚糸文L、47は条線、48は密な平行沈線を用いる。第Ⅳ段階に比定される。

52は劣截の竹管腹面を用いて文様描出を行なう。縦位の沈線を引いたあと口縁直下に二段の沈線を廻らす。50・51・53は口縁部破片で、楕円区画のみで渦巻文を伴わない51や、突起状の渦巻文のみで楕円区画の伴わない53など、口縁部文様帯において基本文様単位の欠落が見られ



第23図　遺構外出土土器

る。54～57は磨消帯を懸垂させる胴部破片で、本調査区から出土した破片では同様の資料が多い。以上50～57は第Ⅴ段階に比定される。

58～70は第Ⅵ段階に比定される。口縁部文様帯が喪失し、逆U字状文が主たる文様となる。逆U字状文を懸垂帯とする59・60・62・63では縄文を充塡する位置にバラエティーが見られる。またこれら懸垂帯に蕨手状文が付加する資料も見られる（58，66）。68・69は逆U字状文・楕円文・波状文等によって多段化される。65は口縁直下に円形文が並ぶ。また61・70にはつまみ出し状の微隆起線文によって文様描出が為される。

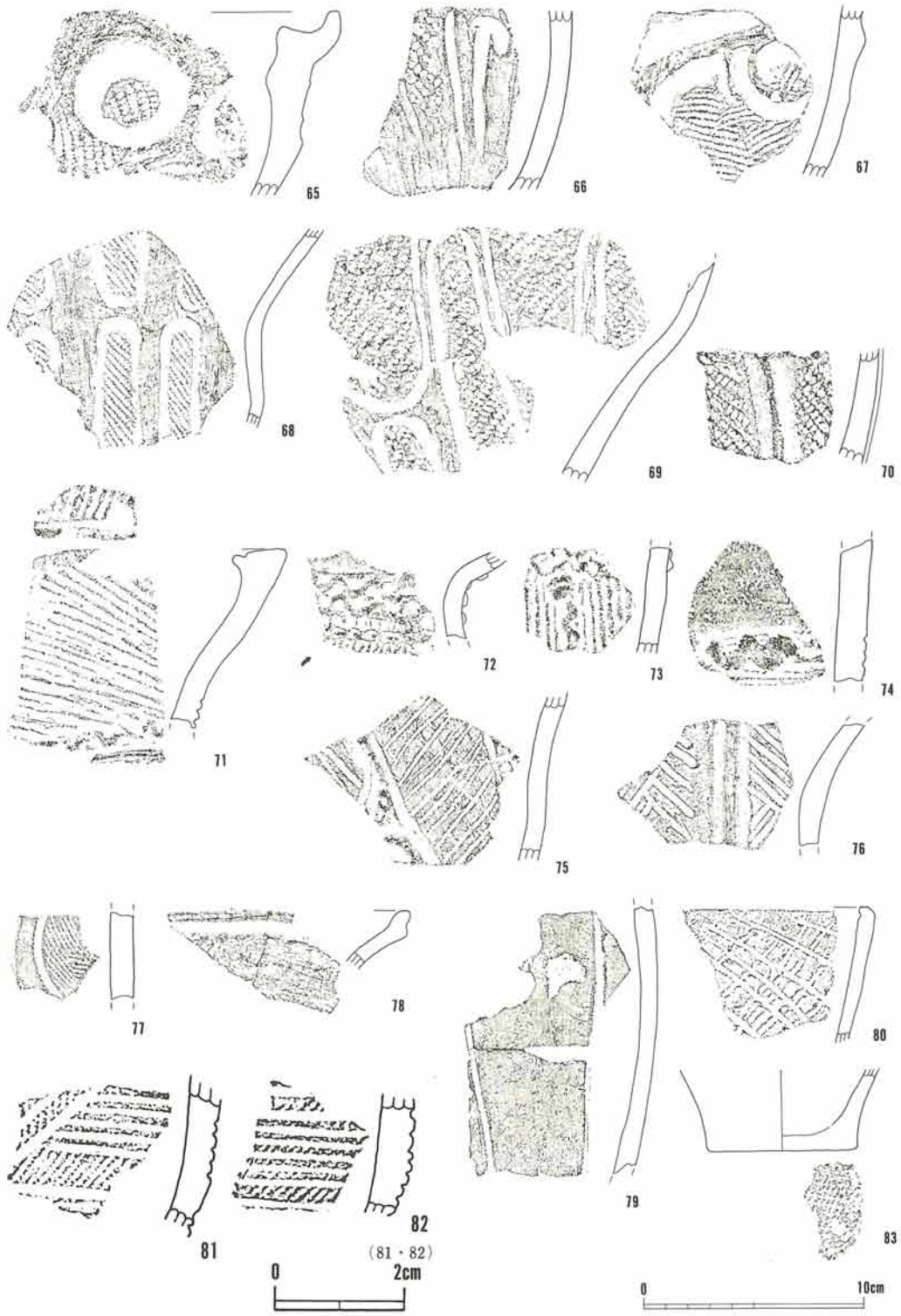
71～76は曽利式或いは曽利式に類似する土器群である。71・72は口縁が外傾し、頸部に括れを持つ。71は頸部屈曲部に三条の平行沈線を廻らし、上に波状の粘土紐を貼付する。その後口縁部に斜位の平行沈線を密に施す。口縁部上端の平坦面には同様の平行沈線が施され、横位の沈線が一周する。72は口縁部が無文で、胴部には地文として縦位の平行沈線が施されると考えられる。屈曲部には四条の隆帯が廻り、その内中の二条は波状を呈し、下部の一条は竹管腹面の押引文が加飾される。また下部の二本間は竹管背面を用いた押引文が施される。75・76は区画文内に斜位或いは綾杉状沈線を充塡するものである。75は区画帯が斜位に傾いており、区画文も隆帯によって描出されるなど、76よりも時期的に古い属性が看取される。

縄文後期の土器（第19図９，77～83）

本調査区において９点出土した。

77は沈線による曲線区画を描き、区画内に縄文Lが充塡される。称名寺Ⅰ式に比定されよう。78は無文の口縁部に一条の沈線が廻らされ、79は無文の胴部に縦位の沈線を施す。両者とも堀之内式に比定される。

９．口縁部の約½を欠損するのみの鉢形土器で、他の後期土器と比較して遺存状態は極めて良好である。口径13.4cm、底径6.0cm、器高7.4cmを測る。口縁内側に二段の沈線が廻る。内外面とも丁寧な横位ミガキが施される。底部には編物圧痕が見られる。経の条に対して緯の条が「２本越え、１本潜り、１本送り」に編まれる。胎土には雲母・長石・石英等の細粒を多量に含む緻密な土器で、焼成良好、色調は暗褐色を呈し、外面の一部に黒斑が認められる。80は格子状の斜位沈線を施し、内面の口縁直下に一条の沈線を引く。81・82は薄手の細片である。細沈線を密に横・斜位に描き、比較的幅広な沈線間に縄文ＬＲを転がし、縄文帯とする。非常に細かい縄文で、節は幅１㎜に満たない。83は底部圧痕を有する。編み方は９と同様である。推定底径７cm。以上９及び80～82は加曽利ＢⅠ式に比定される。



第24図　遺構外出土土器

2）石器

第12次調査において出土した石器の総点数は1073点を数える。そのうち多数を占めるのは石核・剝片類（60.1%）、次いで打製石斧（25.6%）、石皿（4.9%）、磨石（3.3%）、石鏃（1.6%）、叩き石（1.3%）と続く。石槍、掻器、石匙、ピエス・エスキーユ、スタンプ形石器、砥石等は１%に満たない。石質は砂岩が大半を占め、次いで粘板岩、安山岩、黒曜石、チャートや大形石器の素材となる花崗岩、緑泥片岩などがある。

さて、本文においては、出土石器の説明を各遺構毎に行うが、更に遺構を越えた、或いは後述する第13・15次調査出土石器を含めた検討の前提として、ここで一部の器種の分類基準を述べておきたい。

〈石鏃〉　「恋ヶ窪遺跡調査報告Ⅲ」において、側縁と基縁をそれぞれ分類している。本文においてもこれを踏襲する。

側縁　第Ⅰ類　両側縁が心もち外側に向かって弧を描き尖頭部を形成する。

第Ⅱ類　両側縁が若干内側（個体）に向かって弧を描き尖頭部を形成する。

第Ⅲ類　両側縁が若干開き気味に直線状を成し、それをつなぐ形で刃縁も直線状を呈する。

基縁　a　器体に向かってやや内湾し、脚部が若干認められる。

b　器体に向かって内湾し、脚部が明確に作出される。

c　器体に向かってやや尖角状に抉入し、脚部が若干認められる。

d　器体に向かって尖角状に抉入し、脚部が若干認められる。

e　外側に向かって心もち弧を描き、舌部を形成する。

f　器体に向かって若干弧を描き、舌部を形成する。

以上、側縁３類、其縁６類に分類するが、今回の調査においては、側縁Ⅲ類・其縁ｅ・ｆは出土しなかった。

〈ピエス・エスキーユ〉

石鏃と同様「恋ヶ窪遺跡調査報告Ⅲ」で呈示された定義と平面形態による分類を踏襲する。

定義　(1)　表裏面にネガティブな剝離面をもつ。

(2)　ひとつの剝離面は上下両縁に打面をもち、器面の全体をおおう。

(3)　上下両縁に微細な剝離痕をもち、ときに潰れ痕が認められる。

(4)　縦断面は紡錘形を呈する。

分類　第Ⅰ類　上下両縁が先細り、長幅比２対１の紡錘形を呈する。

第Ⅱ類　上下両縁が先細るか、直線状で、三角形を呈する。

第Ⅲ類　上下両縁ともに直線状で、四辺形を呈する。

第Ⅳ類　上下両縁が先細り、第Ⅰ類に比較し幅のある紡錘形を呈する。

〈磨石・叩き石・石皿〉

磨石・石皿については従来の凹石、叩き石の一部を含めて、下記に分類する。

磨石　第Ⅰ類　平面形態が楕円形もしくは長円形を呈する。

a　磨り面のみを有する。

b　敲打痕（凹面を含む）を併わせもつもの

第Ⅱ類　細長の柱状を呈する。

a　磨り面のみを有する。

b　上下端或いは側縁の一部に敲打痕をもつ。

第Ⅲ類　全面が磨滅し、球形或いは卵形を呈する。

第Ⅳ類　上記以外

石皿　第Ⅰ類　片面或いは両面に磨滅による凹みを有するもの

第Ⅱ類　磨り面を有する偏平礫

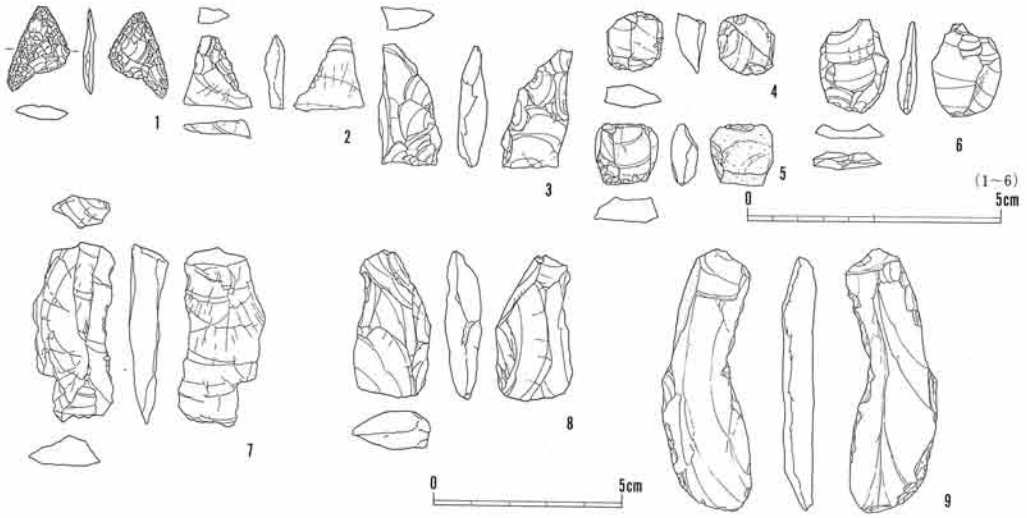
第Ⅲ類　上記以外の形態で磨り面をもつ大形礫

磨石第Ⅱ類bには「磨る」や「潰す」機能を同時的なものと考え、敲打痕のみを有するものについても本類に含めることとした。従って本文でいう叩き石は比較的硬質で手に持ち易い棒状礫を用いて、石器製作時の打撃を行なったと想定し得るもののみである。つまり側面や上下端に細かな打痕をもつもので、擦痕を併わせもつものもある。

また、以上の分類については記号のみで表記することとする（例　第Ⅰ類aはⅠa）。

種別／区	打製石斧 完	打製石斧 欠	磨製石斧	素材打製石斧	石鏃	石槍	掻器	石匙	ピエスエスキーユ	石皿	磨石	形石器スタンプ	叩き石	砥石	石錘	小計	残核	剝片	合計
22号住居址	22	27	4	6	3				3	12	3		1			81	12	129	222
23号住居址	2	2									1					5	6	7	18
24号住居址	10	24		2	1	1		1	1	2	18		5			65	2	85	152
27号土壙																0		1	1
28号土壙																0		2	2
32号土壙																0		4	4
33号土壙									1				1			2			2
35号土壙								1								1			1
その他		2	2	1	1				1							7		10	17
7号集石	1															1		3	4
8号集石		1														1		1	2
9号集石																0		1	1
10号集石																0		1	1
遺構外	81	103	3	4	12		2	2	3	32	14	2	6	1	1	266	10	370	646
合計	116	159	9	13	17	1	2	4	9	46	36	2	13	1	1	431	30	614	1073

第2表　第12次調査出土石器一覧



第25図　22号住居址出土石器

22号住居址（第25～28図，図版19～20）

22号住居址より出土した石器の総点数は222点を数え、本次調査出土石器の約21％を占める。

石鏃（１～３）

１は黒曜石製。尖頭部・右脚部欠損。主要剥離面を残さない細かな調整が為される。裏面には比較的大きな剥離面が見られるが、厚さを調整するための剥離と考えられる。脚部の折損は上位（表面）からの圧力による。

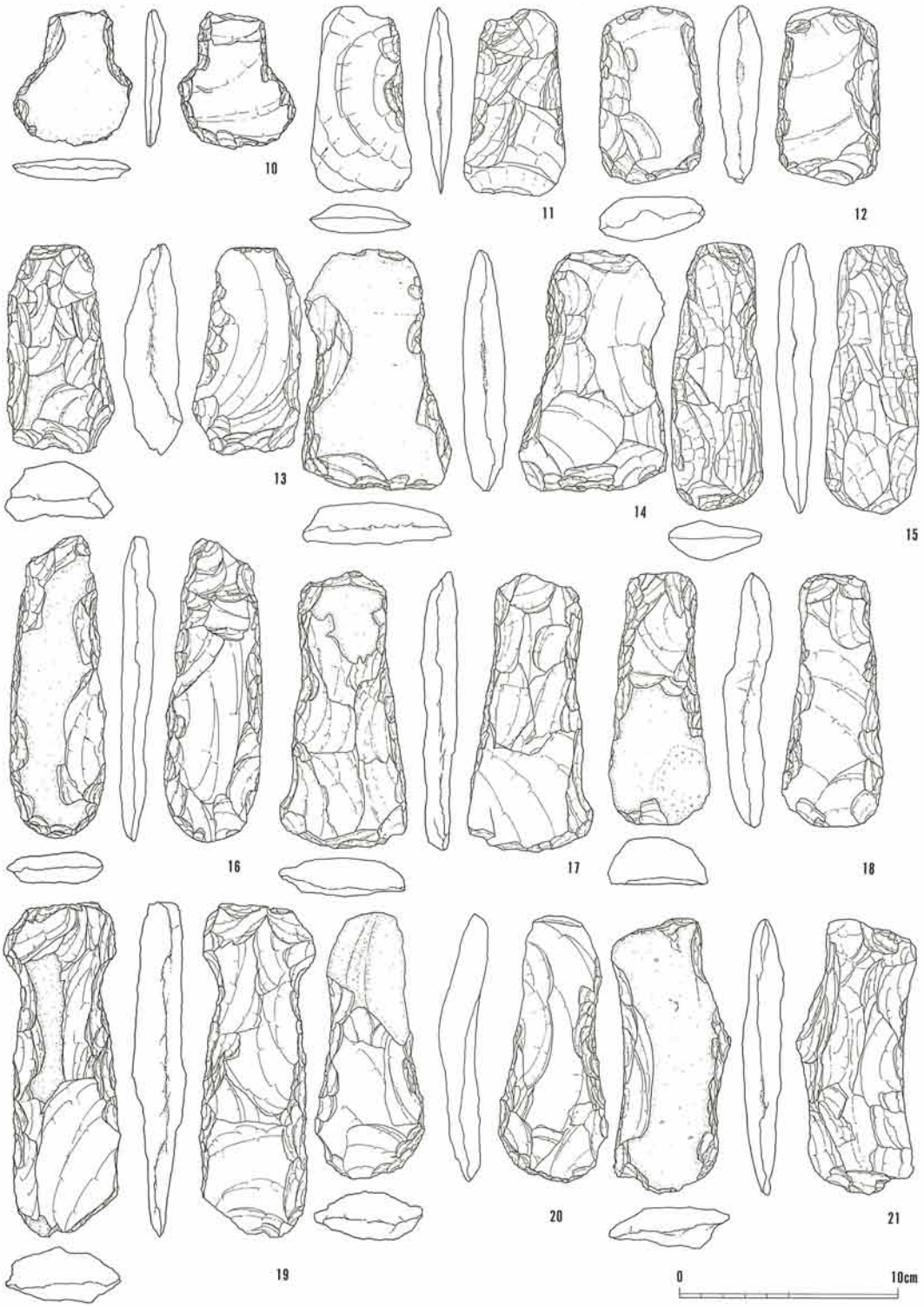
２・３は未製品と考えられる。２は左側縁の截断面を打点とする細かな剥離を施す。また３は基縁に比較的大形の剥離面を持ち、基縁の抉りを意識したものと考えられよう。２は下縁に３は左側縁に最も新しい段階の折断面が見られ、これによって製作を放棄したと考えられる。

ピエス・エスキーユ（４～６）

４は下端の一部、５は上下端、６は下端に潰れ痕が認められる。４は典型的な楔状を呈し、更に側縁の一方にも截断面、他方に複数の細剥離面を持つ。６は４・５に比較して大形で薄手のつくりである。

使用痕ある剥片（７）

左側縁に使用によると思われる微細剥離痕を有する。単剥離面を打面として剥片を得る。剥片剥離角101°、刃縁角50°を測る。



第26図　22号住居址出土石器

打製石斧（8～21）

本住居址からは49点出土している。その内13点を図示した。

8．長さ3.9cmを測る極めて小形の打製石斧である。側縁に「ツブレ」（斎藤　1978）を有し、側縁上部が若干抉れる。主要剝離面を大きく裏面に残す。刃部は剝片調整段階の縁辺をそのまま利用する。基部左縁を欠損する。折損は表面からの加力による。

9．側縁がほぼ平行に反る左右非対称形の小形打製石斧である。左側縁に自然面を残し、それを打面とする横長剝片を素材とする。側縁に粗い剝離を施すのみで、殆ど「ツブレ」は看取されない。

10．ほぼ表面全面に自然面を残す。側縁上部は平行し、刃部近くで急激に広がる。全周に調整が施され、側縁には「ツブレ」が見られる。裏面刃部の一部に稜の磨耗痕が看取される。

11．10・12と同様比較的小振りである。11は剝片剝離の前段階に同方向から剝片を剝ぎとったと考えられる。側縁の「ツブレ」は約2/3にわたって為される。12は両面とも剝離面の稜線が磨滅している。刃縁に打点を残す比較的大きな剝離面が一面あり、刃縁が大きく波打つ。使用による剝落と考えられよう。

13．裏面にネガティブな剝離面を有し、厚さを調整するための剝離と考えられる。側縁の「ツブレ」は調整剝離の剝離面に切られており、特に左側縁では顕著である。

14．自然面を残さない。10と同様剝離面の稜が全面にわたりトロトロとなる。17も同様であるが、14の石質は砂岩、17は粘板岩である。

19．基部付近に最大幅をもつ。側縁に細かな剝離が集中するが、明瞭な「ツブレ」を持たない。身部中央部分に自然面を残し、刃部にも若干残す。

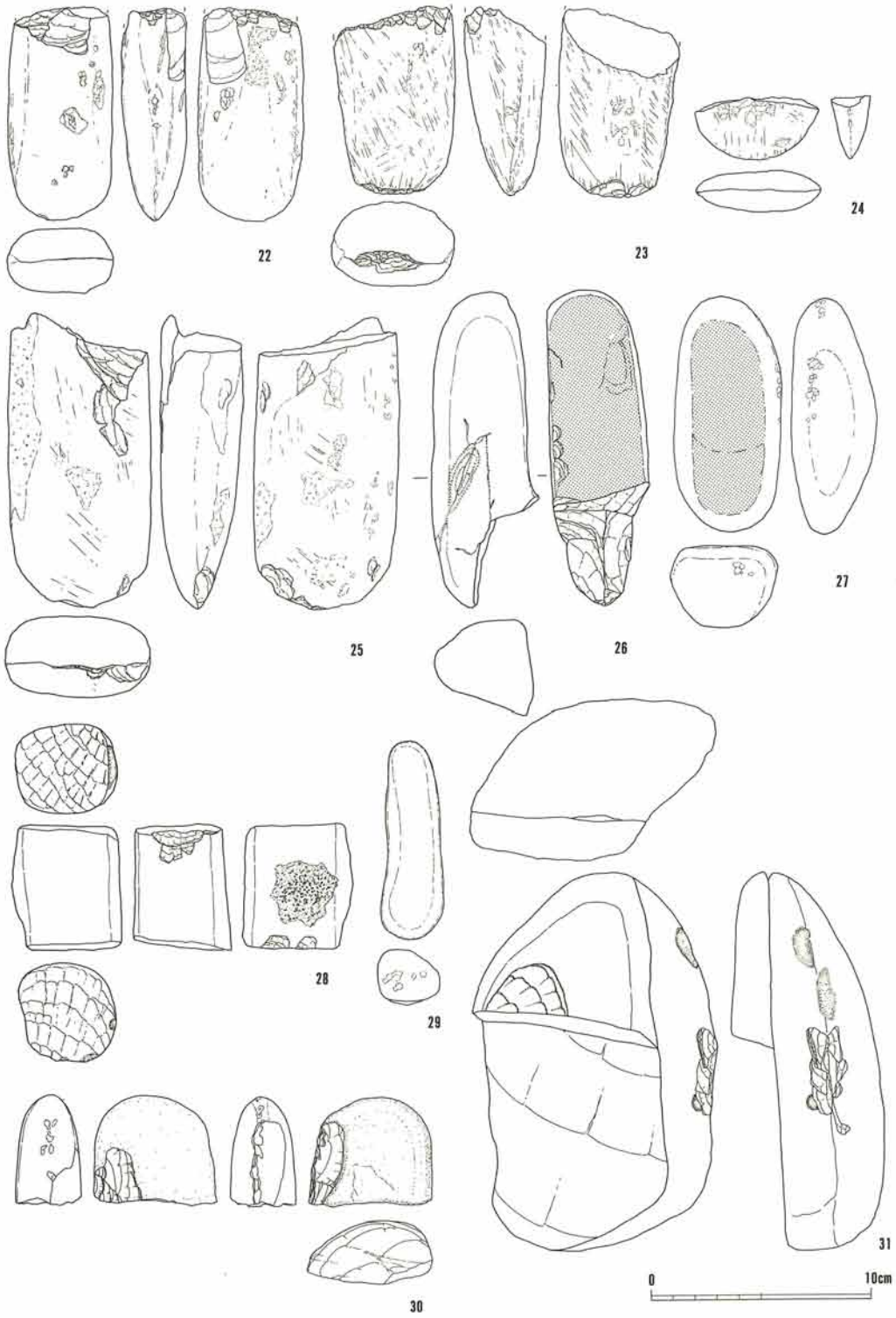
磨製石斧（22～25）

4点出土している。刃部のみ現存の24を除き、3点とも基部を欠損する。22と24は側縁が平行するが、23は身部幅が刃部幅を上回る。4点とも両刃で平面形態は円刃を呈する。身部の断面形は長円形を呈し、明確な稜は作出されない。全面を敲打によって整形し、その後丁寧に磨きあげる。22・25は敲打痕を側縁に残し、23は研磨時の擦痕が見られる。素材の硬度にも起因しよう。4点とも裏面からの加力によって折損する。22・23には折損後に細かな剝離が加えられており、再生の意志が窺われる。刃縁の正面観はすべて直線状を呈し、刃部の剝落・損耗は右側に偏っている。縦斧を想定できよう。

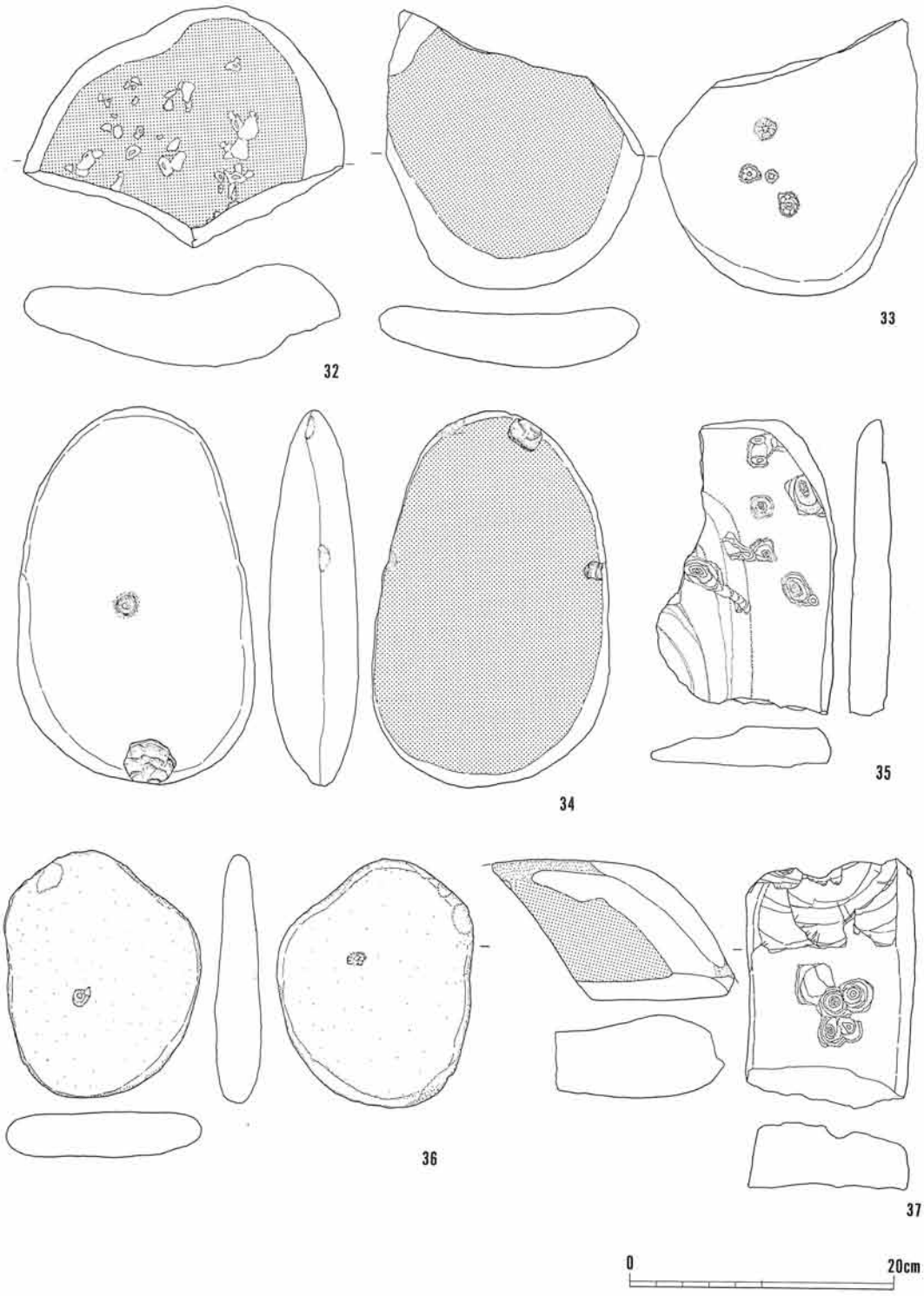
磨石（26～28）

26．節理面を主たる作業面とする。断面はほぼ三角形を呈し、縁辺に若干の「ツブレ」が見られる。27も同様に平坦面を利用している。

28．断面四角形を呈する。上・下端の節理面は「潰し」の作業を行ったと考えられる。裏面も同様に敲打痕が見られる。Ⅱbの使用が進んだ形態と考えられよう。



第27図　22号住居址出土石器



第28図　22号住居址出土石器

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	遺存状態	備考
1	石鏃	1.7	1.2	0.3	0.4	黒曜石		第Ⅰ類c
2	石鏃未製品	1.5	1.4	0.4	0.7	チャート		
3	石鏃未製品	2.4	1.3	0.6	1.7	チャート		
4	ピエスエスキーユ	1.0	0.9	0.3	0.6	黒曜石		第Ⅲ類
5	ピエスエスキーユ	1.1	1.1	0.3	0.9	黒曜石		第Ⅲ類
6	ピエスエスキーユ	1.9	1.4	0.4	0.8	黒曜石		第Ⅲ類
7	使用痕を有する剥片	4.8	2.2	1.0	8.1	チャート		
8	打製石斧	3.9	2.0	0.9	9.0	砂岩		
9	打製石斧	6.7	3.1	0.9	16.2	砂岩		
10	打製石斧	6.3	5.4	5.9	37.0	硅質砂岩		
11	打製石斧	8.6	4.7	1.3	52.7	砂岩		
12	打製石斧	8.2	4.8	2.0	108.0	砂岩		
13	打製石斧	9.5	4.8	2.3	125.0	砂岩		
14	打製石斧	11.1	6.8	1.9	186.0	砂岩		
15	打製石斧	12.3	4.3	1.8	108.5	砂岩		
16	打製石斧	13.6	4.2	1.4	110.0	砂岩		
17	打製石斧	12.8	5.7	1.6	144.0	粘板岩		
18	打製石斧	11.6	4.5	1.8	116.0	砂岩		
19	打製石斧	15.2	5.1	2.4	203.0	砂岩		
20	打製石斧	12.3	5.0	1.7	110.0	頁岩		
21	打製石斧	12.7	4.9	1.7	130.0	砂岩		
22	磨製石斧	9.5	4.5	3.0	245.0	砂岩	刃部のみ現存	
23	磨製石斧	8.4	5.4	3.5	250.0	凝灰岩	刃部のみ現存	
24	磨製石斧	2.7	5.7	1.8	35.0	砂岩	刃部のみ現存	
25	磨製石斧	13.6	6.5	3.7	533.0	砂岩	基部欠損	
26	磨石	14.5	4.9	4.5	362.0	砂岩		第Ⅱ類b
27	磨石	10.7	4.8	3.9	289.0	砂岩		第Ⅱ類b
28	磨石	5.8	5.0	4.4	234.0	砂岩		第Ⅱ類b
29	叩き石	9.0	2.8	2.3	100.0	砂岩		
30	打製石斧素材礫	5.6	5.6	3.0	118.6	砂岩	欠損	
31	打製石斧素材礫	17.6	11.3	5.9	1370.0	砂岩		
32	石皿	18.2	24.0	8.0	1300.0	砂岩	欠損	第Ⅰ類
33	石皿	20.9	19.6	4.9	3200.0	花崗岩	欠損	第Ⅰ類
34	石皿	28.7	18.0	6.8	3400.0	砂岩		第Ⅱ類
35	石皿	22.6	13.9	3.1	4600.0	緑泥片岩	欠損	第Ⅰ類
36	石皿	19.0	14.9	3.6	1400.0	花崗岩		第Ⅱ類
37	石皿	10.9	18.4	6.4	1216.0	砂岩	欠損	第Ⅰ類
38	石皿	19.3	12.0	5.1	1200.0	緑泥片岩		第Ⅱ類

第3表　22号住居址出土石器計測表

敲石（29）

長さ9㎝の小形棒状礫を素材とし、下端に敲打痕が見られる。

打製石斧素材礫（30・31）

30．断面不整楕円形を呈する礫を使用する。側縁左側に敲打痕が見られ、剥離を行った箇所には「ツブレ」が見られる。折損の加力方向は表面側縁からで、製作途中の欠損と考えられる。

31．炉の側石として使用されており、2点が接合した。上端からの加力によって二枚に分割される。原礫は断面不整四辺形を呈し、礫の稜に剥離を加える。側面右側の分割礫は分割後においても大形であり、更に分割を意識した打撃とも考えられよう。

石皿（32～38）

12点出土したうち7点を図示した。12点のうちⅠが4点（32・33・35・37）、Ⅱが3点（34・36・38）、Ⅲが5点である。またこれらのうち9点が炉の側石として転用されている(32～35)。

32．火ハネのため表面の破損が見られるが、凹みには磨耗によって滑沢した部分が見られる。

35・38．緑泥片岩製。35は磨り面及び磨り面外側、38は中央部に凹面を持つ。35は稜が作出されており、隅丸方形もしくは長円形の大形品であろう。

24号住居址（第29・30図，図版20）

24号住居址より出土した石器は152点を数え、総点数の約14%を占める。

石鏃（1）

本住居址からの出土1は点だけである。左脚部欠損。長幅に比して厚く、ズングリした印象を与える。側縁の調整は深く鋸歯状を呈する。脚部は短かく、基縁の抉りも浅い。

ピエス・エスキーユ（2）

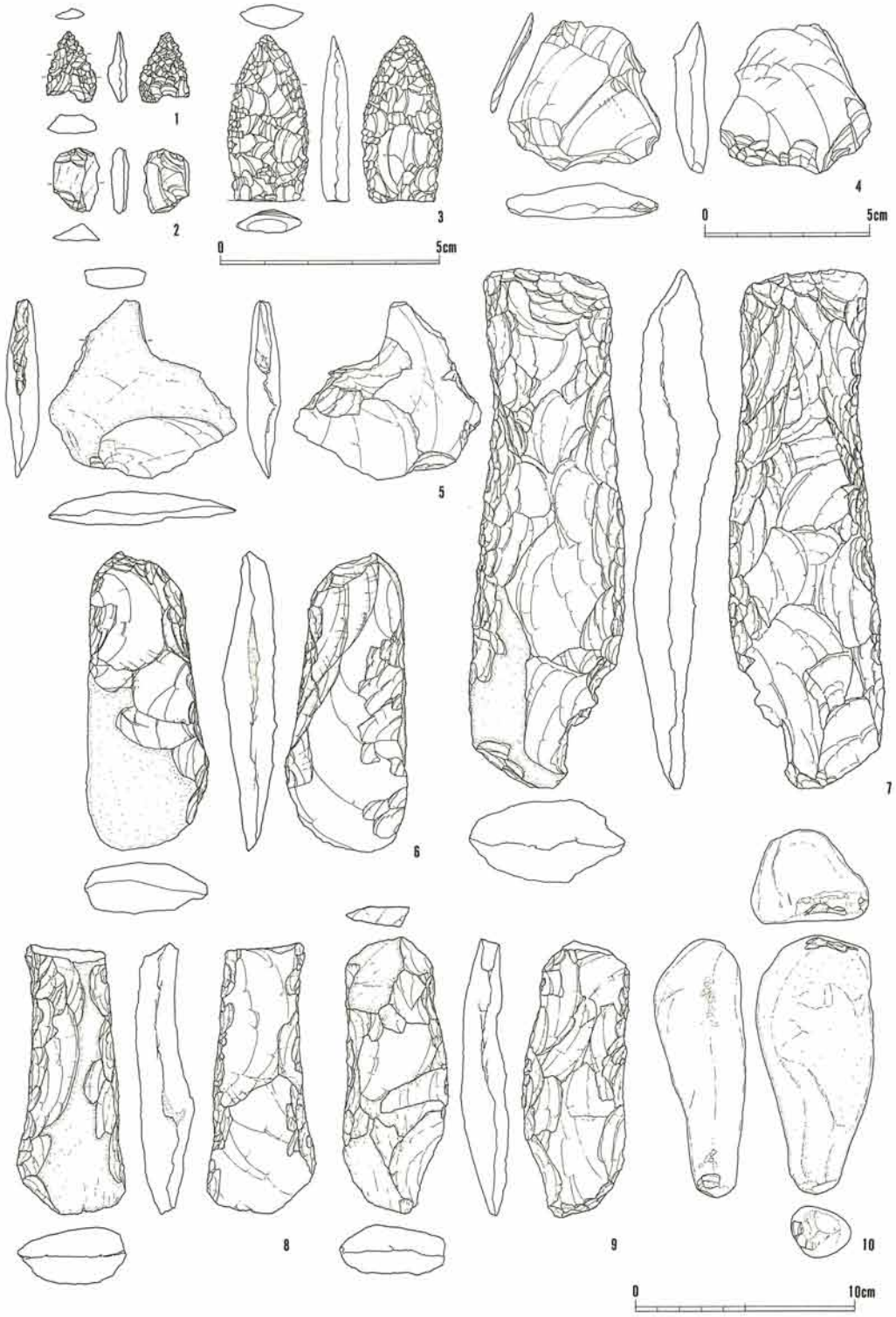
1点出土。側縁が平行する形態である。上下両縁に「ツブレ」を伴なう細かい剥離が見られ、また左側縁には樋状を呈する剥離が見られる。

石槍（3）

黒曜石製の流麗な造りである。基部欠損。身部中央に最大幅をもち、尖頭部は弧状に収束する。厚みのある剥片を素材とし、粗い整形加工の後に細調整を施す。側縁は鋸歯状を呈し、側縁角は50°～60°を測る。

二次加工を有する剥片（4）

横長の剥片を素材とする。下縁に最大幅を持ち、調整剥離を粗く加える。刃部は正面観が不揃いでスクレイパーとしての機能を満たすとは考え難い。



第29図　24号住居址出土石器

石匙（5）

粗製石匙で、横長剝片を素材とする。表裏方向からの打撃により、つまみを作出する。他の調整は肩部に集中し、刃部の調整はほとんど行なわれない。刃部縁辺は剝片の鋭利さが無いことから、使用による磨滅と考えられるが、表面の風化が著しく明瞭ではない。

打製石斧（6～9）

6．横長剝片を素材とする。刃部及び左側縁に自然面を大きく残す。側縁に残る自然面には明瞭な磨耗痕が見られ、磨石を転用したものと推察される。刃部には調整を施さず剝片の縁辺をそのまま利用する。右側縁身部中央に「ツブレ」が認められる。

7．長さ23.6cmを測る大形品である。刃部及び基部に自然面を残す。主要剝離面を残さず、比較的粗い剝離によって整形する。側縁には明瞭な「ツブレ」が認められず、鋭い稜線を残す。刃部右側は整形段階におけるアクシデンタルな剝離痕と考えられる。

8．横長剝片を素材とする。基部より刃部にかけて自然面を残す。裏面上身部には厚さ調整のための剝離が加えられる。側縁の「ツブレ」は細かく連続して見られるが、厚みのある部分は太くなる。基部の折断面は節理で割れているが、磨耗していることから製作段階での意図的な折断と考えられる。

9．横長剝片を素材とする。基部及び刃部に自然面を残し、表面の剝離は自然面は薄く剝がす程度で身の反りは円礫の弧を利用する。表面刃部の自然面と稜線は磨耗して擦痕を強く残す。

磨石（10～13）

10．手頃な原礫をそのまま利用する。上端部は敲打痕を明瞭に残し、下端部は敲打と「磨り」を行う。「磨り」は異方向に行うため稜線を作出する。側面には磨り面を持たない。

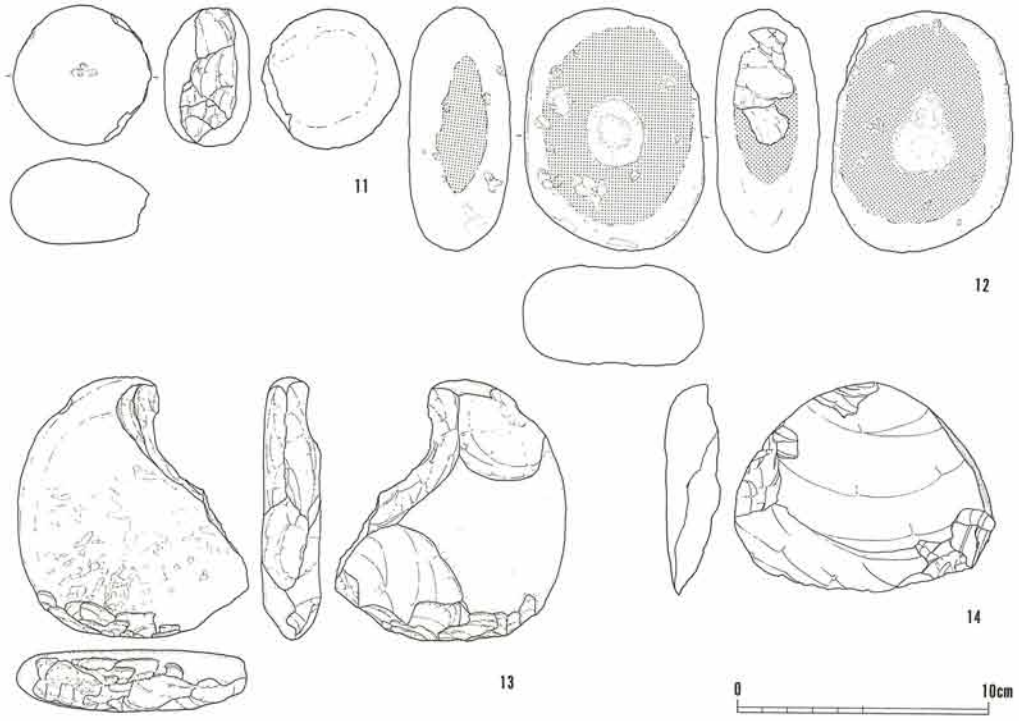
11．平面円形を呈する小形の磨石である。表面に小さな凹面が認められ、また周縁の一部に上下方向からの剝離が認められる。周縁の他の部分には細かい敲打痕が見られるが、礫の輪郭を変えるまでには至らない。

12．両面に凹面をもつ。両面と側面に磨り面を持ち、側縁は平行に近くなる。凹面は浅く深さは2㎜に満たない程度である。

13．偏平な円礫を使用する。両面に磨り面をもつが、特に背面にはアバタ状の鼠歯状痕、擦痕が認められる。また、その使用後、側縁の粗い剝離、下縁の刃部作出を行う。下縁には「ツブレ」が見られることから礫器として使用されたとも考えられる。全面に被熱の痕跡が見られ、特に右側縁は著しく赤化している。

打製石斧素材剝片（14）

薄い偏平な礫を半分に分割したと考えられる。部分的に二次的な剝離が見られるが、素材剝片の形を変えるまでには至っていない。また、表面には何ら調整を加えず、自然面が残るのみである。



第30図　24号住居址出土石器

番号	器　種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石　質	遺存状態	備　考
1	石　鏃	1.6	1.2	0.5	0.6	黒曜石	左脚部欠損	第II類a
2	ピエスエスキーユ	1.5	1.1	0.4	0.5	黒曜石		第III類
3	石　槍	4.9	2.5	0.8	10.3	黒曜石	基部欠損	
4	フレーク	4.5	4.6	1.1	20.8	チャート		
5	石　匙	7.9	8.4	1.3	85.4	安山岩		
6	打製石斧	13.6	5.6	2.5	211.0	砂　岩		
7	打製石斧	23.9	7.1	4.0	531.0	砂　岩		
8	打製石斧	12.3	4.9	2.2	155.0	砂　岩		
9	打製石斧	12.6	4.7	2.0	140.0	砂　岩		
10	磨　石	11.6	5.2	3.6	283.0	砂　岩		第II類b
11	磨　石	5.3	5.3	3.2	140.0	白雲母花崗岩		第III類
12	磨　石	9.4	70	3.9	425.0	花崗岩		第I類b
13	磨　石	10.2	9.0	2.1	294.0	砂　岩		第I類
14	打製石斧素材剥片	8.1	10.1	2.0	208.0	砂　岩		

第4表　第24号住居址出土石器計測表

その他の遺構（第31図，図版21）

石鏃（1）

23号住居址に接するピットより出土した。基部のみ現存し、表面からの加力によって折損する。基縁の抉りは比較的浅い。

ピエス・エスキーユ（2・3）

2．33号土壙出土。上縁が平坦となる典型的な楔形を呈する。上縁を打面とする微細な剝離をもち、又下縁の両面にも多数の微細剝離面が見られる。また左側縁には上下縁を打面とする剪断面が見られる。

3．22号住居址外南側のピットより出土した。硬質の粘板岩を素材とする。本遺跡においてはピエス・エスキーユは黒曜石を素材とするのが通例であり、また他例より大形品であることが異質と言える。四縁より互いに打点を対とする剝離面が見られ、又四縁とも「タタキ」の階段状剝離が見られる。従って側縁も同様に使用されたと考えられる。

石匙（4）

35号土壙出土。大形の粗製石匙である。縦長剝片を素材とする。下縁は尖状となるが意識された作出とは考え難く、素材剝片を剝離した段階の形状をそのまま残す。調整はつまみに集中し、「ツブレ」を作出する。また右側縁の突出部に刃部作出を意識したと思われる調整を施す。また縁辺はこの両突出部のみ磨耗して丸味を帯び、他は素材剝片時の鋭さを保っていることより、突出部が作業面と考えられよう。

磨製石斧（5，6）

5．37号土壙の北側に近接するピットより出土した。基部欠損。身部に最大幅をもち、平面形は棒状を呈する。石材の粒子が粗いため、研磨の状況は定かではないが、各部に小凹が見られるため、全面を敲打して整形し、その後研磨したと考えられる。折損の方向は長軸に対して斜めに傾いている。他例と同様縦斧として使用したものであろう。

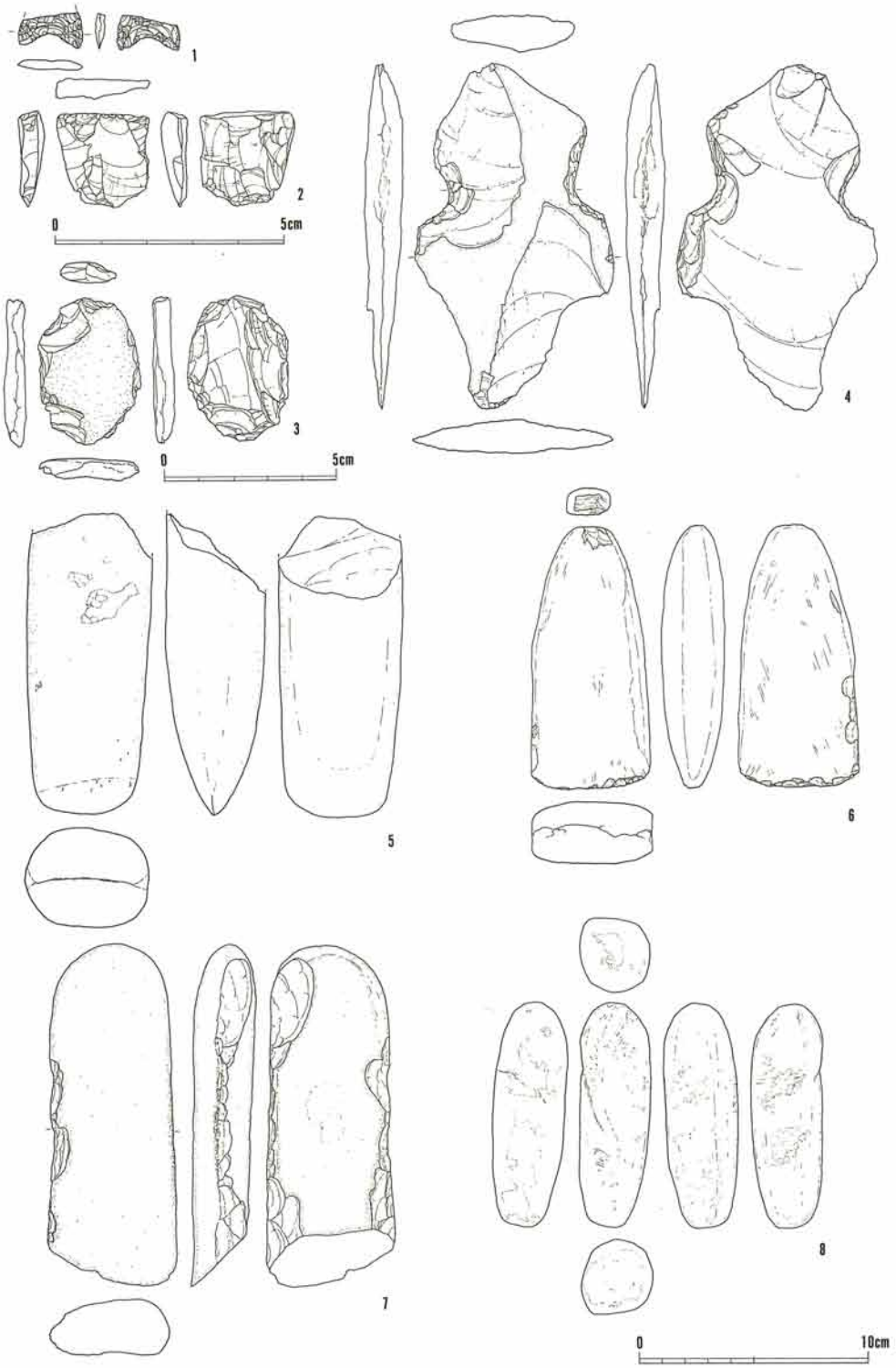
6．41号土壙に接するピットより出土した。刃部に最大幅をもつ定角形である。全面に極めて丁寧な研磨を施し、側縁に研磨以前の敲打痕を残す。刃部には使用による小剝離が見られ、これによって刃部の正面形は直線状にはならない。

打製石斧素材礫（7）

27号土壙に近接するピットより出土した。全面に磨り面が見られ、また裏面中央に凹面の痕跡が見られることから、磨石として使用した後、打製石斧として転用されたと考えられる。下端は節理で折損する。

叩き石（8）

長さ9.6cmを測る小形の棒状礫を素材とする。上下縁に著しい敲打痕をもつ他、身部全面にも敲打痕をもつ。



第31図　その他の遺構出土石器

遺構外出土石器（第32～37，図版22～23）

遺構外より出土した石器は646点を数え、総点数の約60％を占める。

石鏃（1～12）

遺構外からは12点出土した。石質は黒曜石10点、チャート2点である。このうち、完形品は3点、脚部欠損5点、身部中程で欠損するもの4点である。以下形態別に説明する。

Ⅰb（1・2・8）　1は今次の調査では最も大きい。また2は極めて肉厚の作りである。8は尖頭部及び左脚部を欠損し、2と同様肉厚で調整も粗い。

Ⅰc（7）　尖頭部及び左脚部を欠損する。他例に比して肉厚で調整も粗い。

Ⅰd（5）　表面に自然面を残すが、そこに擦痕が看取される。製作以前のものであろう。

Ⅱb（3）　右脚部の折れは右側縁からの加力によるもので、製作途中の折損と考えられる。

Ⅱd（4）　薄手の作りである。右脚部の折損は背面から裏面への加力による。

6・9～12は基部が欠損するため上記の形態分類はできない。6はⅡの何れか、9はⅠの何れかである。10・11は未調整部分を多く残すことから製作途中に折損したものであろう。10は表面からの加力、11は右側縁からの加力により折損する。

ピエス・エスキーユ（13～15）

遺構外より3点出土しており、すべて黒曜石製である。形態分類ではⅠ（14）、Ⅱ（13・15）に二分される。3点とも上下縁に微細な剝離痕が看取され、15は側縁に剪断面をもつ。

掻器（16）

単剝離面を打面とする横長剝片を素材とする。表面には石核時のネガティブ・バルブを残す。二次的な整形剝離は見られず、殆ど素材剝片の原形を保っている。表面には上縁を除く周縁の約⅔に細かな剝離を施し、一部裏面にも剝離が行なわれる。刃縁角は平均73°を測る。

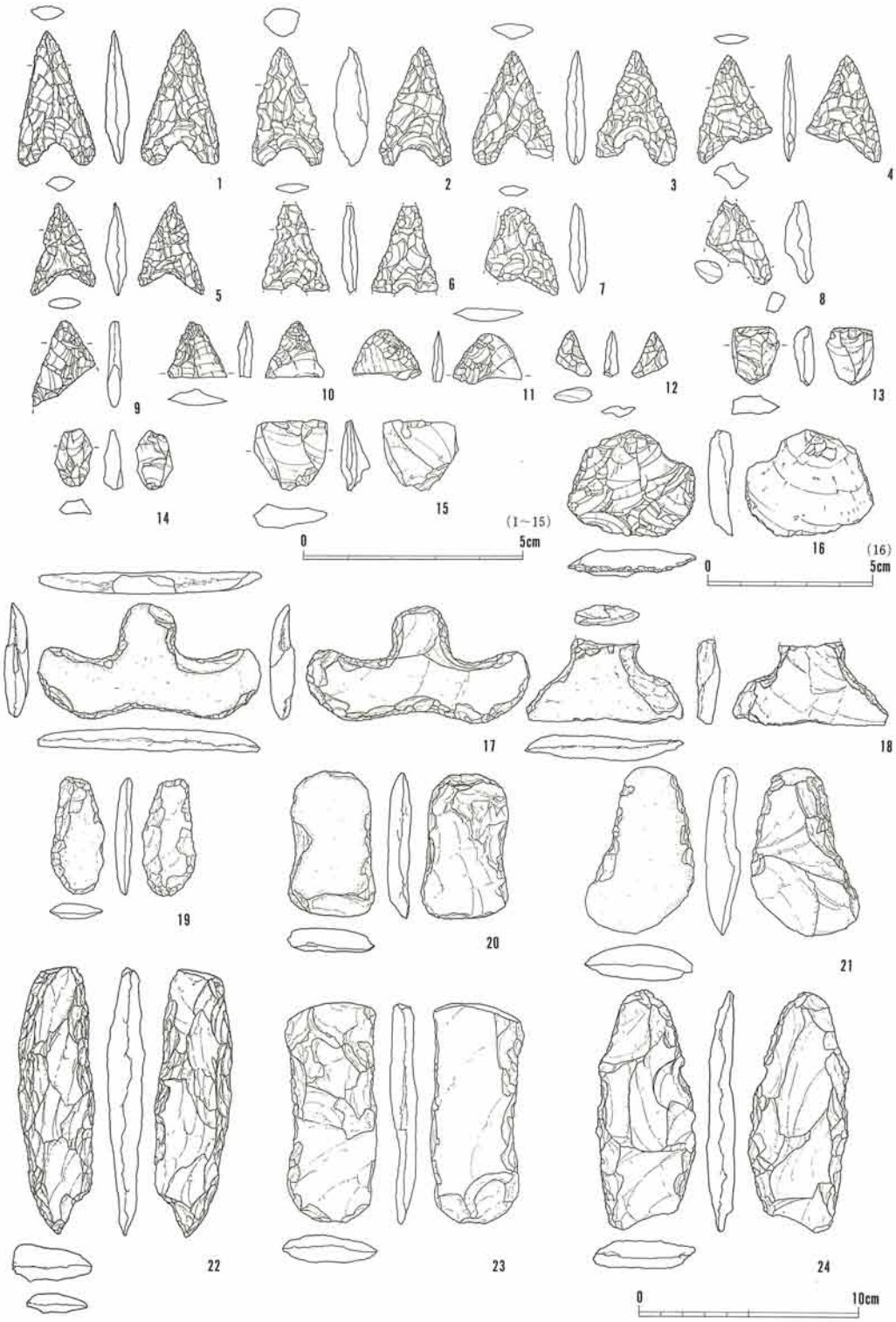
石匙（17・18）

17．1号屋外埋甕の北東付近より出土した。つまみを中心に左右対称を為し、肩部の端が張り出す。刃部は内側に湾曲する。各部の調整は両面から施され、剝離面の終息部は階段状を呈する。つまみの頸部には「ツブレ」が認められる。

18．17と同様左右に対称形をなすが、肩部をもたず三角形を呈する。刃部は直線的で微細な剝離が認められるのみで、調整は頸部に集中し「タタキ」状を呈する。つまみは節理によって折損する。

打製石斧（19～40）

19～21．他例とは異なり、明らかに小形の打製石斧である。19は自然面・主要剝離面を大きく残し、同様に調整を加えるだけで「ツブレ」は看取されない。20は刃縁にネガティブな剝離面を大きく残す片刃の資料で、折損品を更に再生、使用した可能性がある。21は自然面を裏面基部にも残す。扁平な小礫から作出したものであろう。概形を作出した段階の縁辺を刃部に利



第32図　遺構外出土石器

用し、側縁は「タタキ」状の剝離が見られる。

22・25・26．細身の打製石斧である。22は基部に自然面を残す。側縁に調整が集中し、剝離面の終息部は段階状を呈する。また刃部の折損部も階段状を呈し、下方からの水平に近い加力によって折損したと考えられる。25は細身に比して厚手で、刃部は尖状となる。刃部の形状は明らかに意識して作出したもので、他例にない属性と言えよう。

24は薄手の作りで、基部が尖状となる。横長剝片を素材とし、厚さ調整のための粗い剝離と側縁に施された細かい剝離によって整形される。基部は磨耗によって稜がスレている。

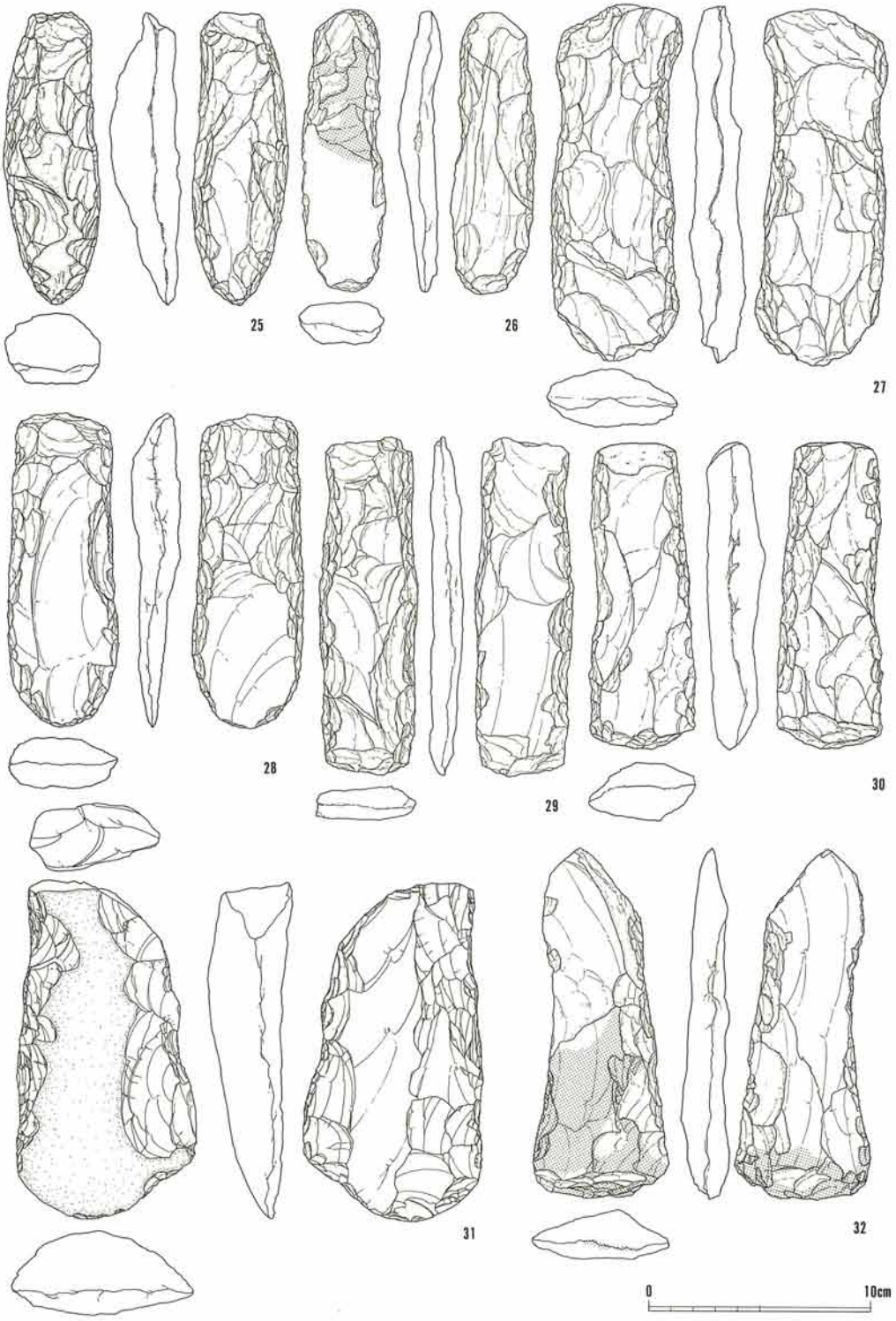
23・27～30．典型的な短冊形である。27は基部に自然面を僅かながら残す。側縁に「ツブレ」が看取され基部が心持ち開き気味になる。28は自然面を残さない。横長剝片を素材とするが、背面にはネガティブな剝離面を大きく残す。剝ぎ取られた剝片も充分素材となる大きさである。29は薄手の作りで、対辺がそれぞれ平行するほぼ長方形を呈する。殆どの剝離面は階段状を呈し、層状に割れている。30は基部に自然面を残す。側縁上部に「ツブレ」が見られる。

31・32．刃部が若干開き気味となる。31は基部を欠損するが他例と比較して大形である。横長剝片を素材とし、側縁に集中的な調整剝離を加えるが、「ツブレ」は看取されない。基部の折損は裏面からの加力による。32は横長剝片を素材とする。身部中央から刃部にかけて極めて明瞭なスレが看取される。刃部の縁辺も磨耗によって丸くなる。別段本例のみが他例と違う機能・用途を有しているとは考え難く、磨製石斧で用いるような軟かい岩質であることが要因であろう。ちなみに僅かながら看取される擦痕は上下方向の運動によることを示す。

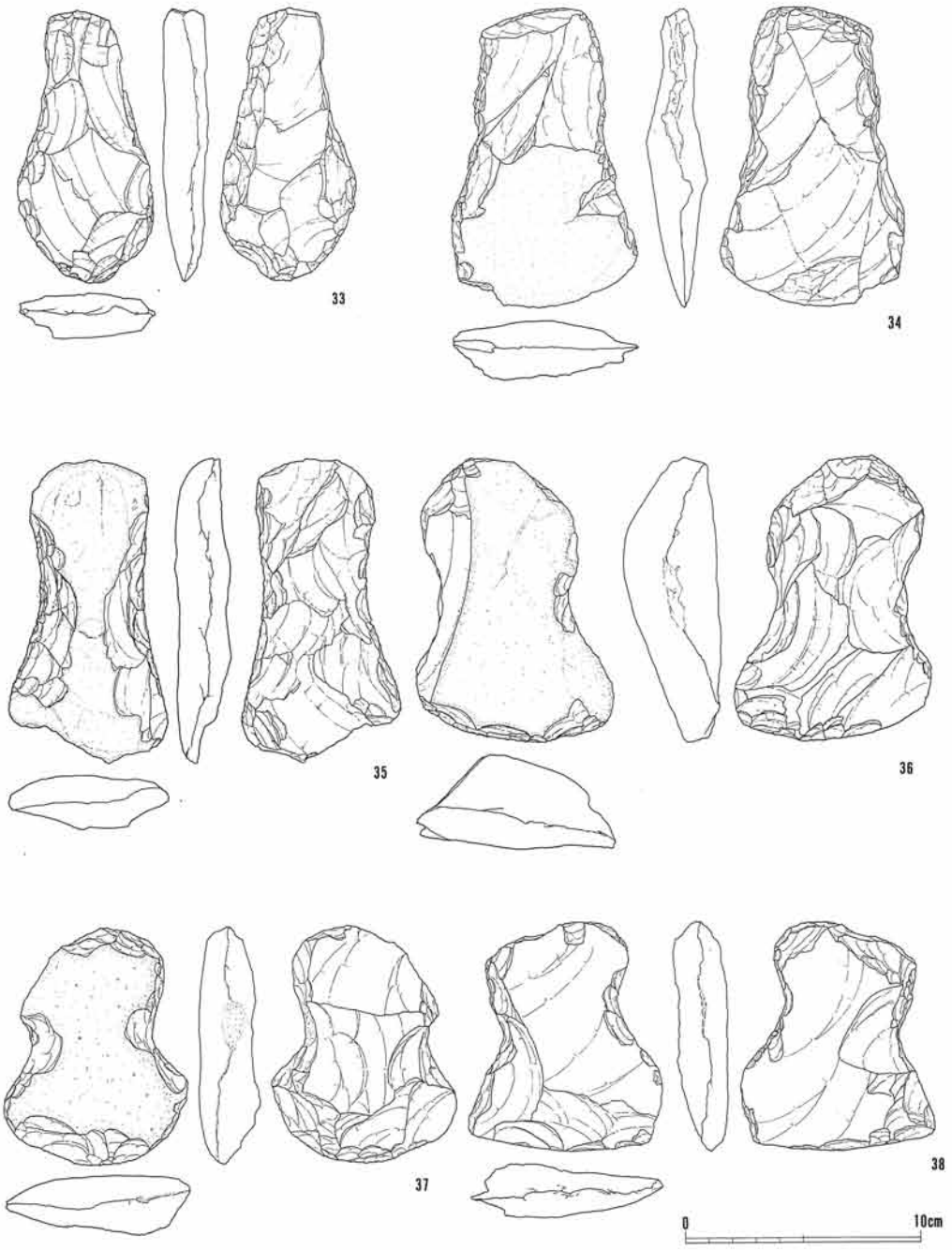
33～40．刃部に最大幅をもつ資料である。36～38は身部中央に抉りをもち、また39・40は撥形の典型例である。33は横長剝片を素材とする。剝片を折断し、その折断面を打面として更に剝ぎ取ることによって基部及び両側縁の概形を作出する。34は自然面を刃部に大きく残し、また剝片の鋭い縁辺を用いて刃部とする。35は刃部が不揃いであるが、34と同様素材の縁辺をそのまま利用している。33～35とも側縁に調整が集中するが、34・35には「ツブレ」・「タタキ」等は看取されない。石質に起因するものであろう。36～38は身部中央に集中的な剝離及び敲打を加え抉りを作出するものである。形態は所謂分銅形に類似するが、頭部に刃縁をもたず、また上下の大きさも不揃いである。39・40は側縁が外反しながら大きく刃部が開く。両側とも粗い剝離によって概形を作出し、細かい調整は側縁に集中する。39は調整を僅かに加える程度で側縁は剝片時の鋭さを保つ。

磨製石斧（41・42）

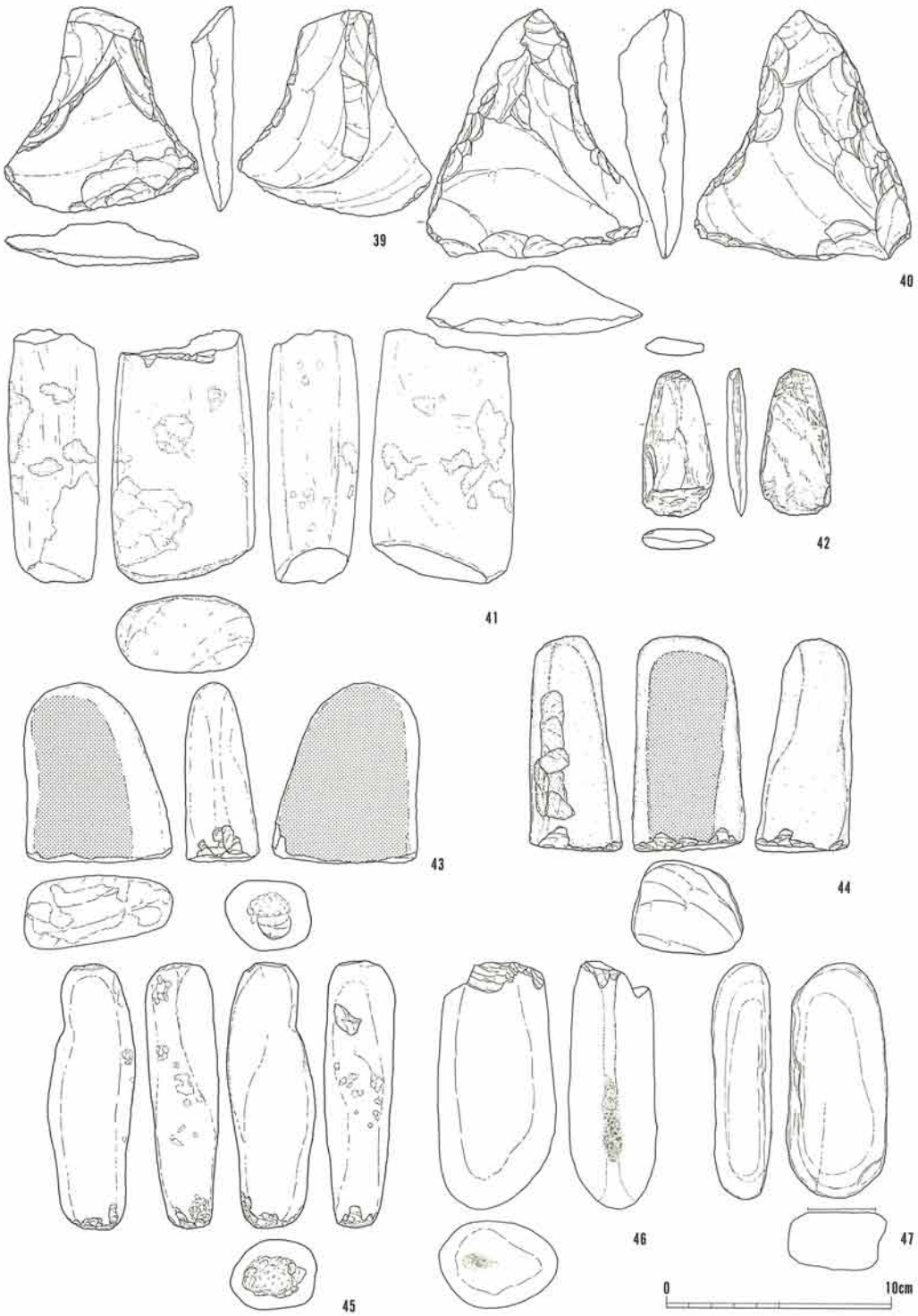
41．刃部及び基部欠損。断面は不明瞭ながら四角形を呈する。全面に敲打を行ない、その後に研磨を行なうが、各面の稜線近くに敲打痕を多く残す。折損面は両面とも断面の対角線上に加力されたことを表わし、用途として縦斧が想定される。また下部の折損面には敲打痕が見られ、刃部再生を意識したものか、またはスタンプ形石器と同様の用途に再利用した可能性がある。



第33図　遺構外出土石器



第34図　遺構外出土石器



第35図　遺構外出土石器

42．小形の磨製石斧である。剝片調整階段の剝離面を両面に残す。表裏両面に研磨を施した後に側縁の研磨を行うが、左側縁は稜が不明瞭である。刃縁には段階状剝離が見られ、更に刃縁を急激な角度で研磨することによって刃部を作出することから、刃部再生が為されたと思われる。ちなみに刃縁の正面観は弱い丸ノミ状を呈する。

スタンプ形石器（43・44）

両者とも礫を打割することによって平坦面を作出する。側縁に殆ど調整を加えないAタイプ（小田1983）に属し、身部両面もしくは片面に磨り面をもつ。平坦面には敲打痕が見られ、特に43は著しい。

敲石（45）

遺構外からは6点出土しており、内1点を図示した。45は長さ12cm弱の手頃な棒状礫を用い、全面に敲打痕をもつが、特に上下両端は著しい。

磨石（46～50，52）

遺構外からは14点出土している。そのうち6点を図示した。

Ⅰb（48～50，52）　48は側縁に著しい敲打痕をもつもので、表面に2個の凹面をもつ。49も同様であるが、側縁の敲打痕はさほど強くなく、また表裏面に一対の凹面をもつ。50は側縁が強い打撃によって剝落している。52は側縁に敲打痕をもつ。

Ⅱa（47）　全面を磨り面とし光沢をもつ。左側縁に溝状の凹みをもつが砥石として用いられたかどうかは不明瞭である。

Ⅱb（46）　側縁及び下端に敲打痕をもつ。裏面よりの加力で折損するが、折損後に数度剝離を加えている。

石皿（54）

遺構外からは32点もの石皿が出土しているが、殆どが破片として出土したためで図示可能或いは分類可能な資料は殆ど無い。

54．極めて小形の石皿である。分類では一応Ⅰに属する。下端の一辺は6cm弱を測る。他例とは明からに趣を異にするもので、特別な用途を考えるべきであろう。

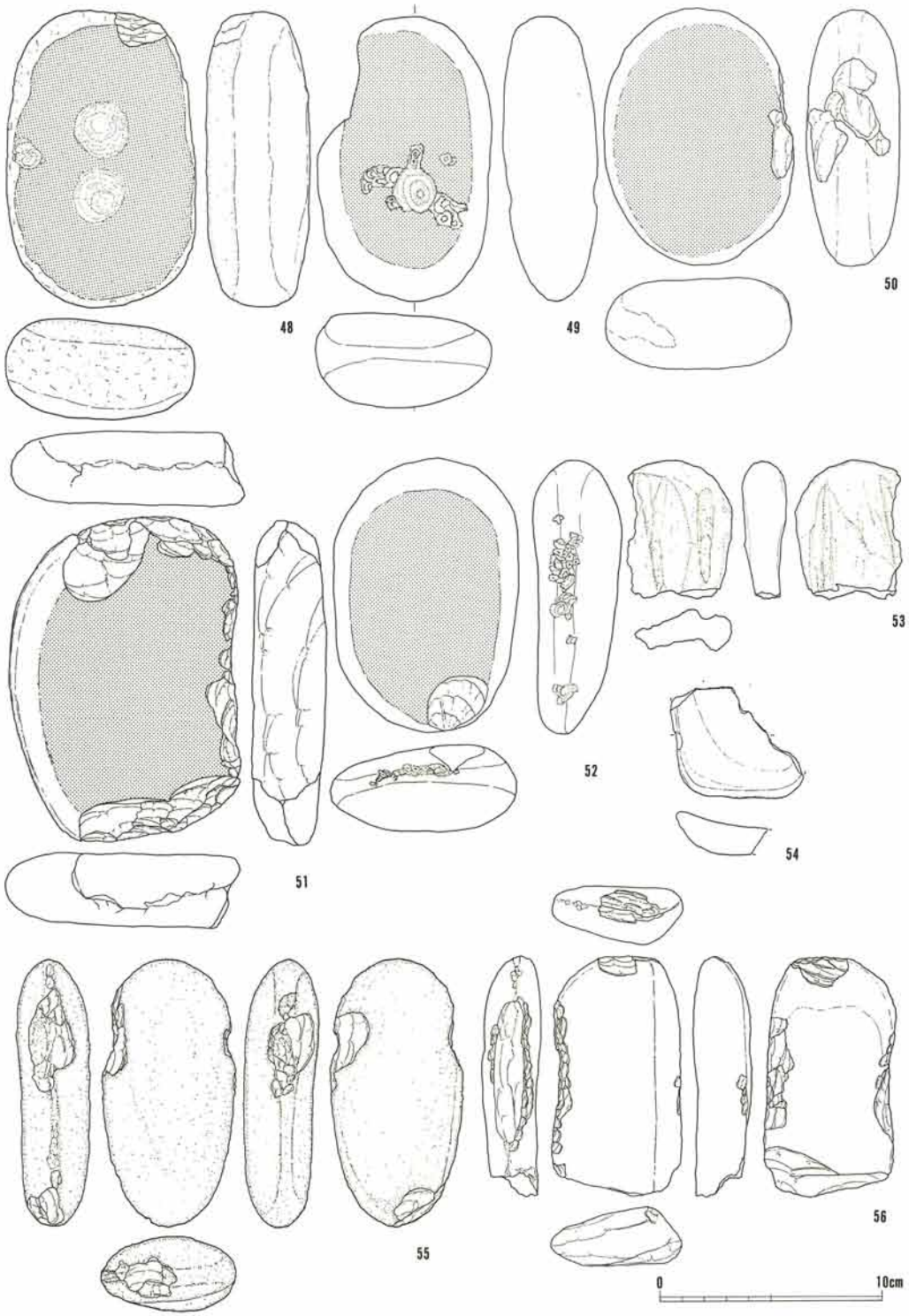
有溝砥石（53）

表面に二条、裏面に二条の溝を有する。この溝以外にも中央部に向かって凹面を持つことから、54と同様の小形石皿としての併用が考えられる。

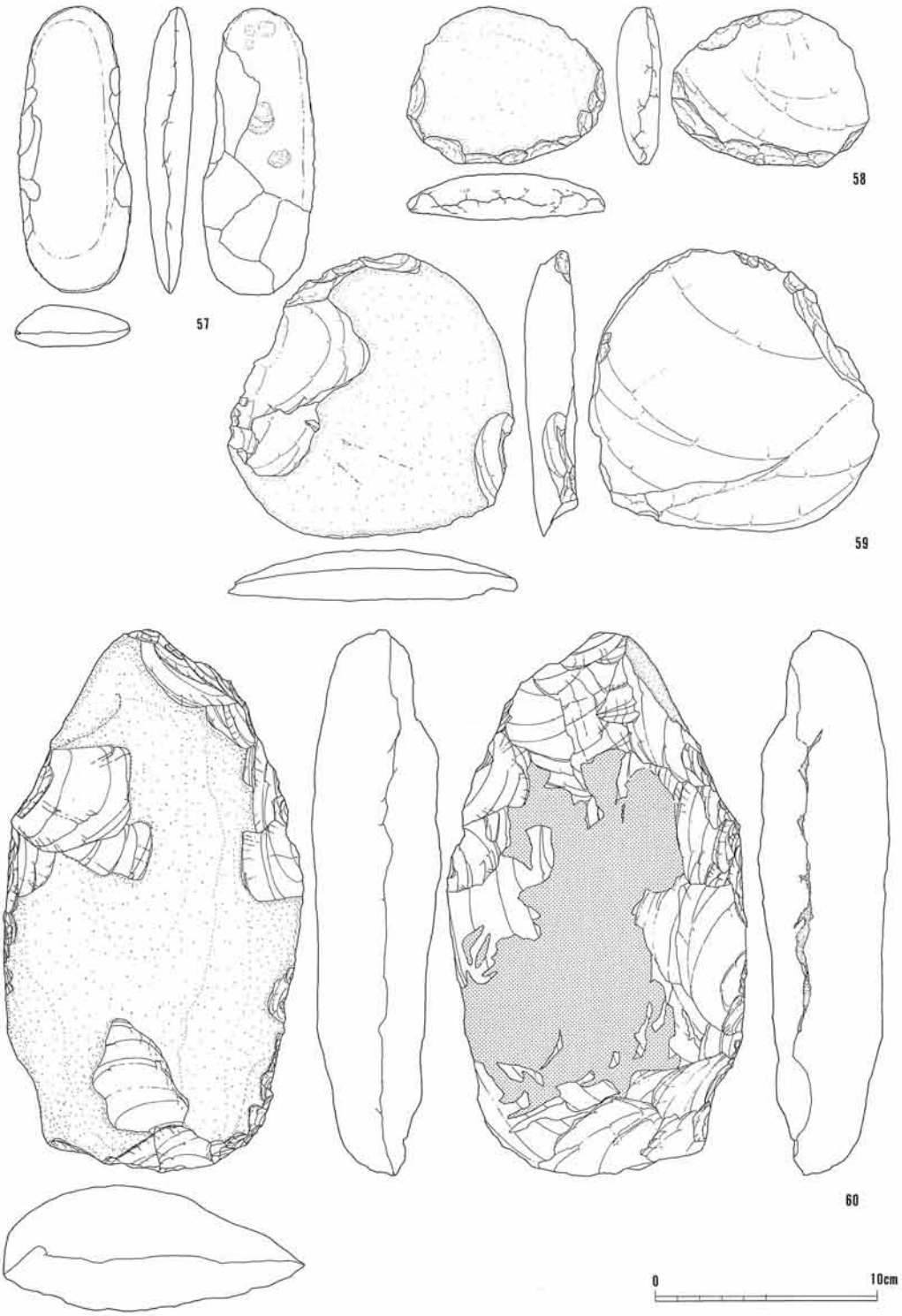
打製石斧素材礫（51・55～57）

4点出土。51は石皿の転用である。

55．扁平な礫を素材とする。側縁上部に当たる部分に剝離が集中する。また左側縁の刃部付近にも剝離が加えられる。



第36図　遺構外出土石器



第37図　遺構外出土石器

56．表面左側に平坦化した磨り面をもつ磨石の転用品である。両側縁と上端に剝離が加えられるが、左側縁部分は節理に沿って割れている。下端は側縁付近からの加力によって折れていることから製作途中の折損と考えられよう。

57．磨耗が著しい。側縁に剝離が加えられるが、石質が花崗岩であるため剝離の状況は把みにくい。刃部が既に鋭くなっているため、或いは完成品とすべきかもしれない。

58・59．両者とも横長剝片に調整を加えている。58は上下縁に「ツブレ」を有していることから、両縁を側縁として使用することを意識したものと考えられる。また59は自然面の縁辺に原礫の稜を有することから、扁平な礫を二分割したものと考えられる。

磨製石斧素材剝片（60）

長さ24.8cm、重さ2.5kgと極めて大形である。横長剝片を素材とするが、自然面を裏面にも残すことから、素材を二分割しただけで平面観は素材の形状を残している。右側縁にツブレを有し、刃部にも急角度の剝離を行なう。当初打製石斧の未製品と考えたが、裏面中央に広く明瞭な磨滅痕をもつことから、磨製石斧の素材（未製品）としておく。何れにしても極めて大形品であるため、器種の判別は流動的である。

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	遺存状態	備考
1	石鏃	0.8	1.4	0.2	0.2	黒曜石		第Ⅰ類a
2	ピエスエスキーユ	1.9	1.9	0.4	2.6	黒曜石		第Ⅲ類
3	ピエスエスキーユ	4.0	2.8	0.4	10.7	粘板岩		第Ⅳ類
4	石匙	15.1	8.7	1.8	183.0	安山岩		
5	磨製石斧	13.4	5.4	4.4	430.0	砂岩	基部欠損	
6	磨製石斧	11.5	5.3	2.8	310.0	硬砂岩		
7	打製石斧素材礫	14.8	5.4	2.5	395.0	砂岩		
8	叩き石	9.6	2.9	3.0	165.0	硅質砂岩		
1	石鏃	2.8	1.6	0.3	1.8	チャート		第Ⅰ類b
2	石鏃	2.5	1.4	0.6	2.2	黒曜石		第Ⅰ類b
3	石鏃	2.4	1.7	0.2	1.3	黒曜石	右脚部欠損	第Ⅱ類b
4	石鏃	2.2	1.5	0.1	0.8	黒曜石	右脚部欠損	第Ⅱ類d
5	石鏃	1.9	1.3	0.2	0.7	黒曜石		第Ⅰ類d
6	石鏃	1.8	1.4	0.1	0.7	黒曜石	尖頭部・脚部欠損	第Ⅱ類
7	石鏃	1.8	1.4	0.2	0.9	黒曜石	尖頭部・左脚部欠損	第Ⅰ類c
8	石鏃	1.7	1.3	0.4	0.9	黒曜石	基部欠損	第Ⅰ類b
9	石鏃	2.0	1.5	0.4	0.6	チャート		第Ⅰ類
10	石鏃	1.3	1.3	0.3	0.4	黒曜石		
11	石鏃	1.1	1.6	0.3	0.4	黒曜石		
12	石鏃	0.9	0.6	0.2	0.2	黒曜石	尖頭部のみ現存	
13	ピエスエスキーユ	1.1	0.8	0.4	0.7	黒曜石		第Ⅱ類
14	ピエスエスキーユ	1.1	0.6	0.2	0.5	黒曜石		第Ⅰ類
15	ピエスエスキーユ	1.4	1.5	0.4	1.3	黒曜石		第Ⅱ類
16	掻器	3.0	3.6	0.5	7.9	黒曜石		
17	石匙	5.0	9.8	0.9	52.0	安山岩		
18	石匙	3.2	6.9	1.2	30.0	粘板岩	つまみ部欠損	
19	打製石斧	5.3	2.2	0.6	10.0	安山岩		
20	打製石斧	6.5	3.9	1.0	50.0	粘板岩		
21	打製石斧	7.4	4.7	1.35	58.0	安山岩		
22	打製石斧	11.9	3.3	1.6	76.0	ホルンフェルス		
23	打製石斧	9.8	4.2	1.4	58.0	粘板岩		
24	打製石斧	11.0	4.5	1.3	63.0	安山岩		
25	打製石斧	13.2	4.4	3.3	196.0	砂岩		
26	打製石斧	12.7	3.6	1.2	95.0	砂岩		
27	打製石斧	16.2	5.6	2.5	265.0	砂岩		
28	打製石斧	14.2	4.9	2.2	175.0	砂岩		
29	打製石斧	15.1	4.3	1.3	132.0	粘板岩		
30	打製石斧	13.7	4.7	2.6	208.0	砂岩		
31	打製石斧	15.5	8.1	3.8	494.0	砂岩		

第5表　その他の遺構・遺構外出土石器計測表

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	遺存状態	備考
32	打製石斧	15.6	5.9	2.0	200.0	凝灰岩		
33	打製石斧	11.5	5.7	2.0	148.0	安山岩		
34	打製石斧	12.5	7.6	2.2	225.0	ホルンフェルス		
35	打製石斧	13.1	6.8	2.1	220.0	安山岩		
36	打製石斧	11.8	8.2	3.9	410.0	安山岩		
37	打製石斧	10.1	7.9	2.6	217.0	砂岩		
38	打製石斧	9.8	8.3	2.2	185.0	砂岩		
39	打製石斧	9.1	8.7	1.9	100.0	砂岩		
40	打製石斧	10.8	9.4	2.6	230.0	安山岩		
41	磨製石斧	11.1	6.2	3.8	592.0	凝灰角礫岩	刃・基部欠損	
42	磨製石斧	6.3	3.0	0.6	26.7	凝灰岩		
43	スタンプ	7.9	6.4	3.1	244.0	花崗岩		
44	スタンプ	9.7	5.0	3.9	310.0	砂岩		
45	叩き石	11.7	3.6	2.9	214.0	硬砂岩		
46	磨石	11.1	5.3	3.9	340.0	砂岩		第II類b
47	磨石	10.3	4.2	2.4	219.0	硬砂岩		第II類a
48	磨石	13.1	8.3	4.5	956.0	花崗岩		第I類b
49	磨石	12.8	7.9	4.3	609.0	砂岩	欠損	第I類b
50	磨石	11.8	8.3	4.0	625.0	花崗岩		第I類b
51	石皿	14.4	10.2	3.1	836.0	砂岩		第I類a
52	磨石	12.4	8.4	4.0	156.9	砂岩		第I類b
53	有溝砥石	6.0	4.6	1.8	48.2	砂岩	欠損	
54	石皿	4.8	5.8	1.8	62.7	砂岩	欠損	第I類
55	打製石斧素材礫	11.9	5.9	3.2	331.0	砂岩		
56	打製石斧素材礫	10.6	5.6	2.5	255.0	砂岩	欠損	
57	打製石斧素材礫	12.6	4.9	2.0	186.0	花崗岩		
58	打製石斧素材剝片	7.0	8.7	2.1	170.0	砂岩		
59	打製石斧素材剝片	12.8	12.7	2.1	490.0	砂岩		
60	磨製石斧素材剝片	24.8	13.5	5.9	2500.0	砂岩		

第6表　遺構外出土石器計測表

打製石斧接合資料（第38図，図版24）

本次調査において出土した打製石斧のうち、約61%は欠損品である。その欠損状況を観察するため接合作業を試みた結果、11本分に当る24点の資料が接合した。内７本分を図示する。

１．遺構外出土。粘板岩質の剝片を素材とし重さは116ｇを量る。刃部を欠損。身部のやや上半を横断し、右側縁よりの加力によって折損する。刃部欠損面も同じく右側縁からの加力によって斜断して欠損する。

２．遺構外出土。砂岩製の横長剝片を素材とする。縁辺、特に側縁に調整が集中し、身上部に弱い抉りをもつ。身部抉りを斜断して、裏面からの加力によって折損している。折損面は節理に沿っている。

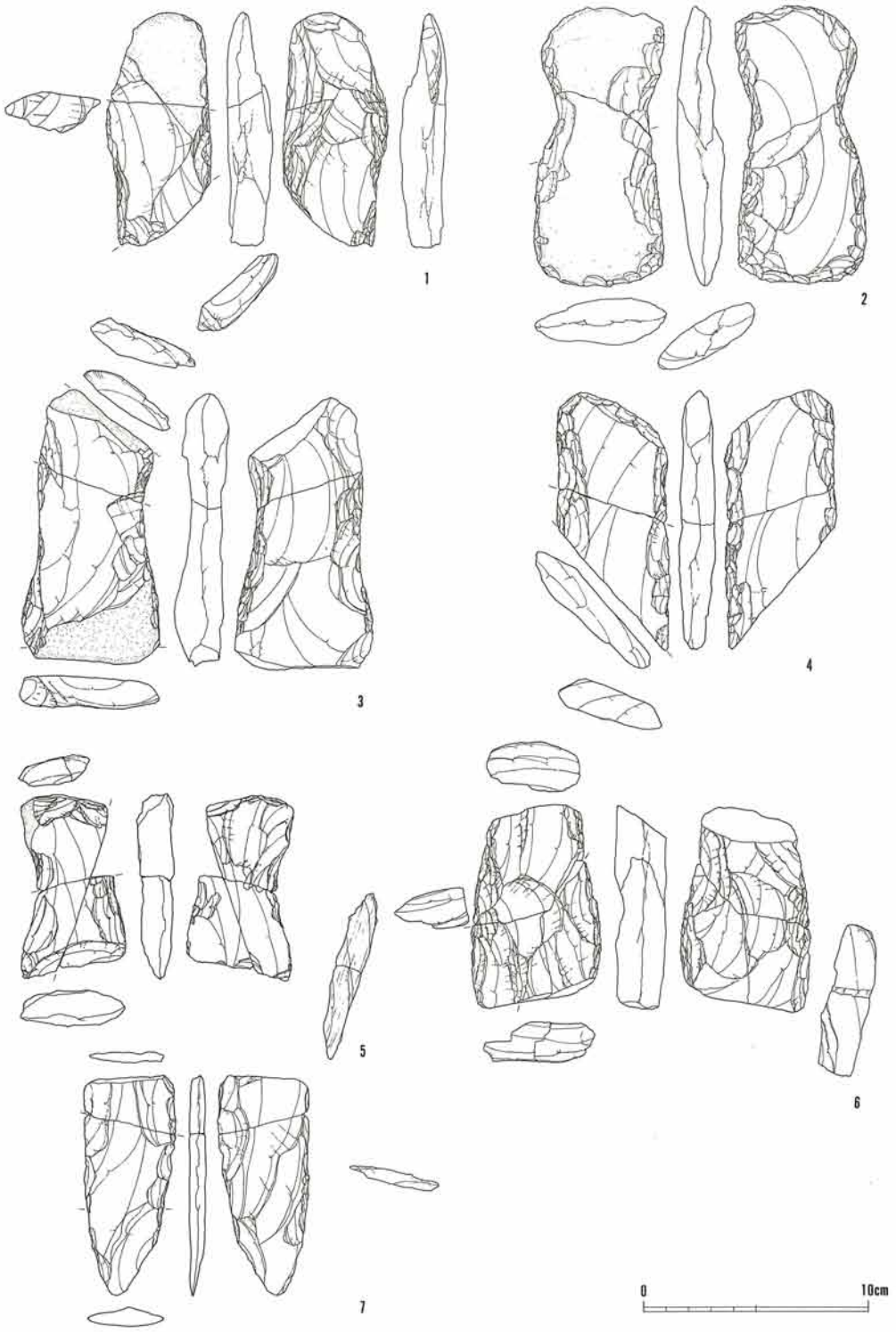
３．遺構外出土。砂岩製の横長剝片を素材とする。表面にネガティブな剝離面を大きく残し、打点の方向は主要剝離面と、表面の剝離面とでは180°反対方向に位置する。基部及び刃部を欠損する。身部やや上半を斜断し、表面からの加力によって折損する。上下両端の欠損面も折損面と同様表面からの加力によって欠損しており、基部と刃部を調整する目的の折断とも考えられる。従って本例は製作途中の折損によって放棄した未製品とも考えられる。

４．９号集石出土。砂岩製の横長剝片を素材とする。身部上半を斜断し、右側縁からの加力によって折損する。また身部下半を斜断する欠損面は裏面からの加力による。本例は折損面・欠損面を含めて全面が被熱赤化しており、打製石斧としての機能を失った段階で集石の礫と同様に使用されたと言える。

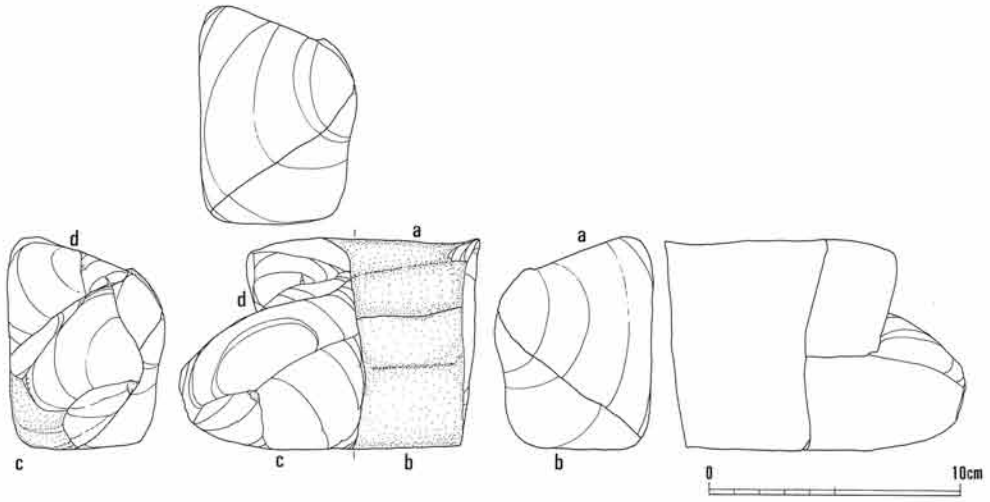
５．遺構外出土。粘板岩質の横長剝片を素材とする。身部中央に横断する折損面は表面からの加力による。基部から刃部に斜断する折損面は節理面によるもので、横断する折損と同時に割れたと考えられる。

６．遺構外出土。砂岩製の横長剝片を素材とする。基部及び刃部を欠損し、更に三分割される。基部の欠損面は裏面からの加力によって節理面から折損している。また、刃部の欠損面は表面からの加力による。身部の折損は節理からの折損もあることから５と同様に同時にクラッシュした状態であろう。また、刃部の欠損面は身部の折損の時期よりも先行する。或いは打製石斧が同時にすべてクラッシュしたとも考えられよう。

７．遺構外出土。安山岩製の横長剝片を素材とし、極めて薄い剝片より作出されている。刃部を節理面で欠損する。身部中央付近を斜断する折損面は裏面からの加力による。



第38図　打製石斧接合図



礫接合資料（第39図，図版24）

22号住居址出土の礫４点が接合した。砂岩製で重量はａは3,020ｇ、ｂは1,050ｇ、ｃは2,200ｇ、ｄは820ｇ、計7,090ｇを量る。原材は接合状態より断面四辺形、平面長楕円形を呈する大形の礫と考えられる。

ａ・ｂに見られる剥離面は同一礫面を打面とし、加力の方向も同一である。従ってａ・ｂ、ｃ・ｄとａ・ｂの右側の大きく三つに分割が行なわれ、しかもその打撃は同時（クラッシュ）である可能性が高い。更に次の段階においてはａとｂ、ｃとｄに四分割されるわけだが、この場合の打点方向は前段階とはほぼ180°転位した形となる。

ｃは分割後に剥片が剥離されており、石質と剥離面の形状から打製石斧の素材となったと考えられる。しかしその剥離面は礫の大きさに比して小さく、またａ・ｂは何ら剥離が行なわれていないなど、打製石斧製作工程における分割段階（「恋ヶ窪遺跡調査報告Ⅲ」）に留まるものであろう。

3）土製品・石製品（第40図，図版25）

耳栓（1）

遺構外（3，23）出土で、上下両端とも½を欠失する。高さ4㎝、直径5㎝を測る。両端がやや外に開く筒形を呈し、両端より中央に凹面を設ける。穿孔は為されない。全面にミガキが施され、特に凹面は丁寧で滑沢がある。胎土に砂粒を含み、焼成良好、色調は淡赤褐色を呈する。

有孔土製品（2）

22号住居址出土。長軸幅6.5㎝、短軸幅4.7㎝、厚さ3㎝、重量66ｇを測り、平面形態は亀の子状を呈する。両端より穿孔されるが（貫通はされていない）左端は損耗が著しいため、痕跡は殆ど残っていない。全面にミガキが施されており、焼成は不良で、遺存状況は悪くグズグズであった。色調は暗褐色を呈する。

器台（3）

22号住居址出土。脚部約⅔を欠損する。高さ8.4㎝、台部径16.6㎝、脚部径20.4㎝を測る。脚部中程に直径3㎝程の穴が現存部で3箇所見られる。脚部下線には指頭圧痕が残り平坦とはならない。台部は板状に割れており、更にその周囲に粘土帯が一本廻る。そしてその部分に粘土帯を巻き上げた痕跡を明瞭に残す。内外面ともミガキが施され、特に内面にその痕跡が残る。また台部には無数の擦痕が認められ、ミガキによる滑沢面は一部に残るのみである。胎土は砂粒を多く含み、焼成良好、色調は淡赤褐色を呈する。

有孔鍔付土器（4）

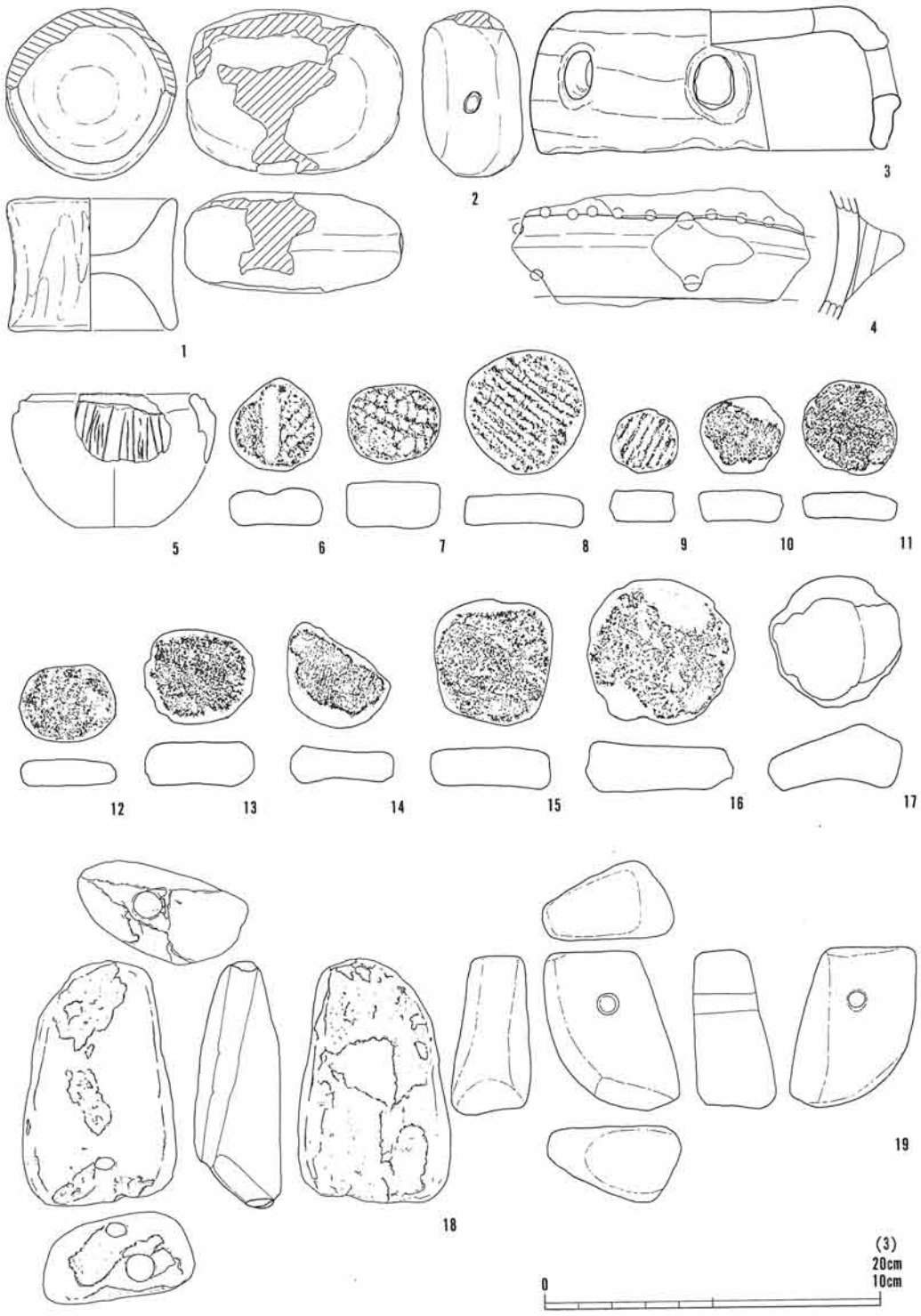
遺構外出土。高1.5㎝、上端幅0.5㎝程の隆帯（鍔）を廻らし、径5㎜の孔を貫通させる。孔は中央欠損部、左端に認められる。また隆帯の上部に沿って幅3㎜程の半截竹管により刺突文が一列施される。内外面とも丁寧なミガキが加えられる。焼成良好、色調は淡赤黄褐色を呈する。

ミニチュア土器（5）

遺構外出土。推定口径4.9㎝、現存高2.1㎝を測り、口縁部約⅙が現存する。口縁直下にミミズ腫れ状の段をもつが、整形時の下方からのナデによるものであろう。胴部にはヘラ状工具による細沈線が施される。

土製円板（6～17）

第12次調査においては19点出土し、うち10点が22号住居址出土（6・9・14・15）、1点が24号住居地出土（13）、他は遺構外出土である。平面形態では円形或いは不整円形を呈するもの12点（6，8，9，11，14，16，17）、四辺形に近いもの6点（7，10，12，13，15）、不整形1点がある。周縁の擦痕については全周に擦痕が認められるもの9点（6～8，10，12，14～16）、一部に擦痕が認められるもの7点（9，11，13，17）、打ち割いたのみのもの3点に分か



第40図　土製品・石製品

れる。径は2㎝前後と3㎝以上の大小二つのグループに大別できる。重量では大形が30ｇ前後、小形が8ｇ前後を量る。器面に残る文様は縄文・撚糸文・無文が多く、再生以前の所属時期を比定できる資料は少ない。僅かに6は加曽利E式期に比定できよう。また17は土器底部を再生したものである。

（遠藤）

硬玉製大珠（18・19）

28号土壙の底面より2個が隣接して出土した。

18．長さ7.4㎝、幅4.5㎝、厚さ2.7㎝、重量141ｇを測る。形態は緒締形に近い長楕円形を呈する。穿孔は長軸方向に2孔穿たれている。上面からの穿孔が下面やや手前に貫け、更にこの孔に連なる様に下面より斜め方向の穿孔を行なっている。上面からの穿孔は片面穿孔で8.1㎜の開孔部径に比べ終孔部径は5.7㎜と狭くなっている。また、終孔部は貫通直前あるいは直後に敲打し孔を整えている。孔壁には回転痕と思われる線条痕が看取される。孔には二つの小さな段が形成されていることから穿孔作業中少なくとも二回の中断が考えられる。下面から穿った孔の終孔部は開孔部に比べ著しく小さく、穿孔具の先端が貫通した時点で作業を終了させている事が窺える。原材は岩の表皮に近い部分を用いており、全面に研磨が加えられるが原材を打ち割いたままの状態に近い部分もある。色調は淡緑色で白濁した部分も認められる。上面右側の孔端には小さな剝離痕が看取され、一方下面は幅5㎜程で孔端より右側縁に向かって磨耗痕が認められる。このことより、右側面を上にして垂らした使用状態が想定され、孔端に残された痕跡は紐擦れと考えられよう。首より垂下した装飾品としては大形で重量感がある。

19．長さ4.9㎝、幅4.0㎝、厚さ2.3㎝、重量70ｇで台形状の不整形を呈する。18より小形の大珠である。穿孔は中央やや上方に穿たれ、孔壁には18と同様に平行な線条痕を見ることができる。開孔部径6.9㎜、終孔部径5.0㎜を測る。終孔部の孔端は穿孔後に整形のための研磨を加えていて丸味をおびやや広がっている。開孔部には認められない状態である。全面に入念な研磨が行なわれている。材質は18より良好で淡緑色を呈し、白濁も認められる。紐擦れ等の痕跡は観察できない。

（広瀬）

Ⅳ　第13次調査

1　縄文時代

(1)　検出遺構

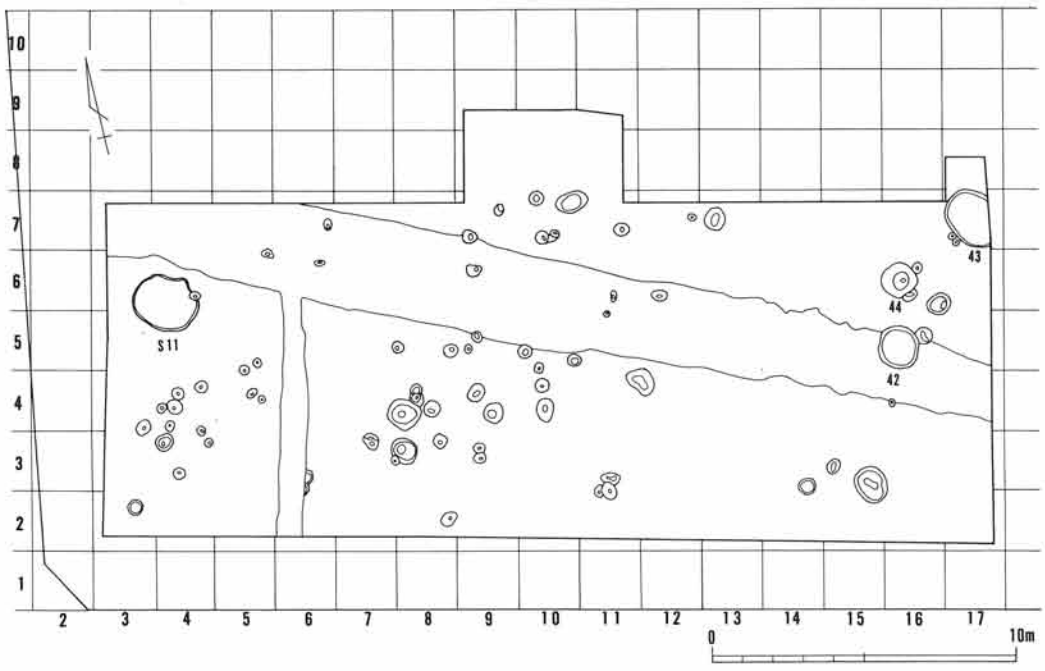
第13次調査は恋ヶ窪遺跡北辺域の調査である。この地域は住居址が数多く構築される集落中心部の外縁にあたり、遺構は希薄な地域である。このため調査で検出された遺構も集石１基、土坑３基、小穴と数は少ない（第82図，図版26）

１）集石

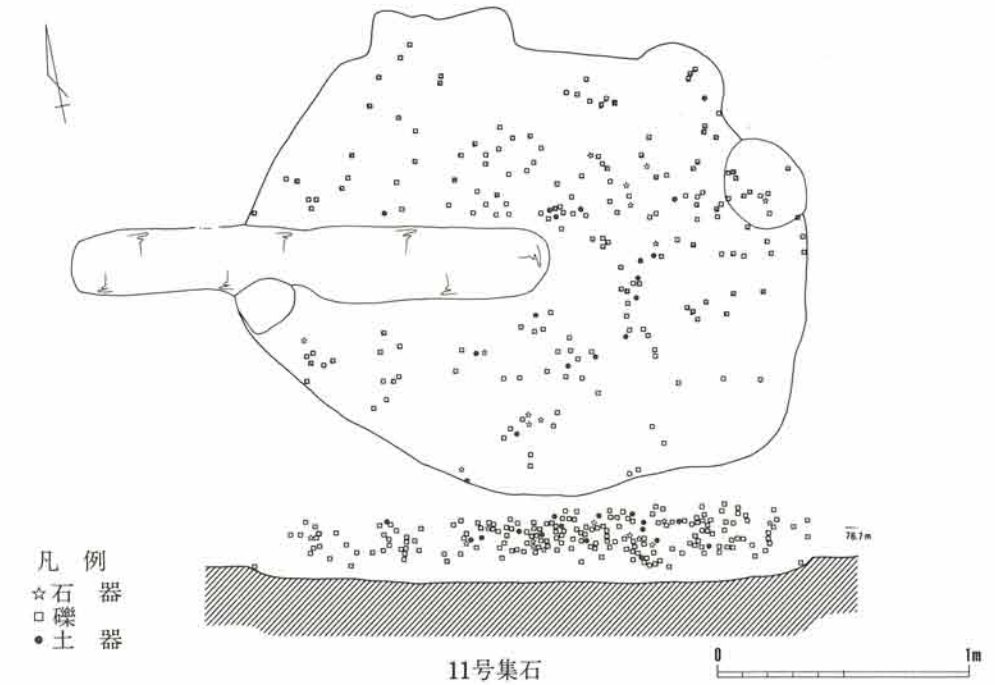
11号集石（第42図，図版26）

〈位置〉　（３～４，６～７）区に位置する。

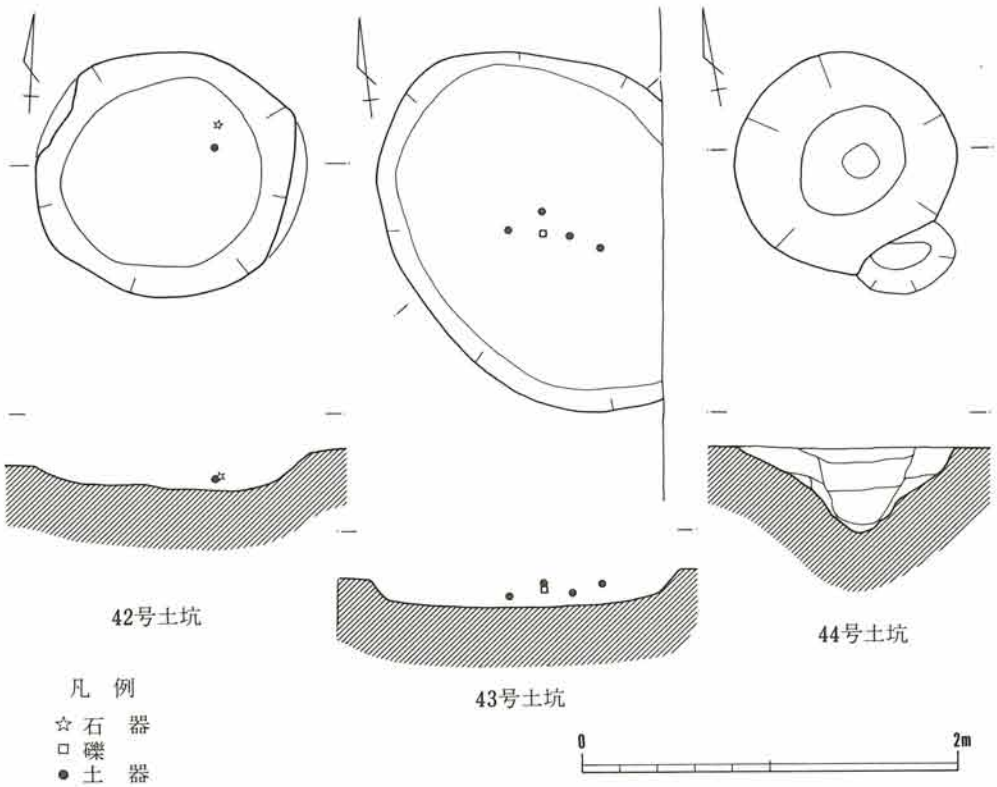
〈形状〉　東西２ｍ×南北1.7ｍの範囲に礫が分布する。分布状態は散漫であるが北東部にややまとまりがある。垂直分布は25㎝前後の幅が認められるが大半は集石下土坑上部15㎝に集中する。集石下部には土坑があり、長径2.3m、短径1.8ｍの不整円形を呈する。礫の分布は土坑内に収まる。遺構確認面からの掘り込みは５～10㎝と浅いが、集石面上部からでは25㎝程になる。断面は皿状を示している。集石内から礫以外に少量の土器、石器が出土している。土器は17点あり、時期が明らかなものは１点を除き勝坂式である。石器は打製石斧３点、打製石斧素材礫１点、剝片１点、黒曜石片５点を数える。これら石器類は僅かに火熱を受けているものの集石の礫ほどではなく、用礫として用いていたか否かは疑問である。



第41図　第13次調査縄文時代遺構全体図



11号集石



第42図　11号集石・42～44号土坑

〈礫の状態〉　用礫総数は189個と少なく、総重量も5.0kgと軽い。個々の礫としては小形の破砕礫が大半で、重量的には20ｇ以下が約60％を占め100ｇ以上の礫は数個しか存在しない。礫の平均重量は26.4ｇとなる。完形礫は12個で殆どは小形の礫である。礫の被熱は弱く、赤色や灰白色に変色したものは少ない。

〈時期〉　集石内出土土器からみて勝坂式期である。

2）土坑

3基の土坑が検出され、調査区の北東部にまとまっている。（第42図，図版26）

42号土坑

〈位置〉　（16，5）区に位置する。

〈形状〉　直径1.3mの円形を呈する。遺構確認面からの掘り込みは20cm前後で浅く、断面形は皿状を示す。

〈出土遺物〉　土坑底面直上より中期土器片1点、剝片1点が出土した。

〈時期〉　中期の遺構であるが詳細は不明。

43号土坑

〈位置〉　（17，7）区に位置し、東側は調査区域外に広がる。

〈形状〉　短径1.6m、推定長径2.2mの楕円形を呈する。10～15cmの深さで浅い土坑である。断面は皿状を示し、底面はほぼ平坦となっている。覆土はスコリア粒を含む暗茶褐色土である。

〈出土遺物〉　土器片4点、礫1点が覆土中から出土した。

〈時期〉　出土土器片すべて勝坂式であり、該期の土坑である。

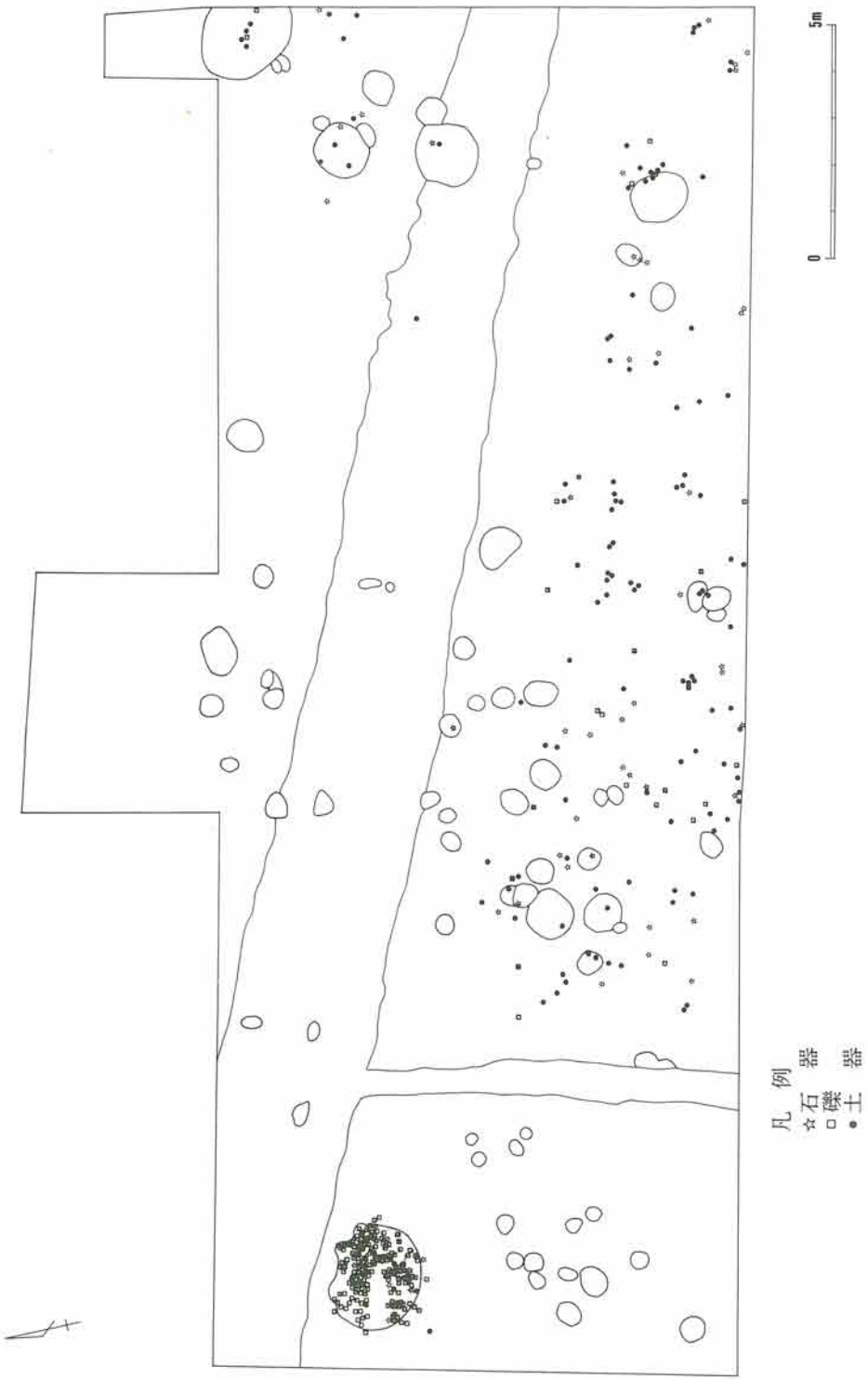
44号土坑

〈位置〉　（16，6）区に位置する。

〈形状〉　直径1.2m弱の円形をなす。遺構確認面からは45cmの掘り込みをもち、断面形は擂り鉢状を示す。覆土は7層に細分したが、中央上部2層が暗茶褐色土の他は暗黄褐色土である。

〈出土遺物〉　中期土器片1点が出土した。

〈時期〉　中期に属するが詳細は不明である。



第43図　縄文時代遺物分布図

3）その他

小穴は50基近く検出されたが、非常に浅い皿状や底面の明確でない擂り鉢状のものが多い。遺物を伴わず、覆土は茶褐色土も僅かに認められるが、ローム粒子、ブロックを含んだ暗黄褐色土が多くを占めている。

(2) 包含層の遺物分布

第43図に調査区の遺物分布を示した。一見して判る様に遺物量は少なく散漫な分布状態となっている。中央南側では疎らでも遺物分布がみられるが、調査区西側や北側では殆ど認められなくなっている。勝坂式、加曽利E式の時期別でも分布の集中性はみられない。ただ、包含層出土で図上復原した土器は互いに近くから出土している。垂直分布では、基本層序Ⅱb層の中程にまとまりを持ち、Ⅱb層下部では殆ど遺物を出土していない。

（広瀬）

(3) 出土遺物

1）土器（第44・45図，図版28）

本調査区では土坑3基、集石遺構1基が検出されている。しかし、これらの遺構に伴う遺物は非常に少なく、且つ遺存状況は悪い。土器総点数1453点中、遺構出土土器は1.6%の23点、他はすべて遺構外より出土している。また、総点数1453点の中で時期比定が可能な土器は417点で、全体の28.7%に当る。そのうち勝坂式期の土器は291点（69.8%）、加曽利E式期は125点（30.0%）、縄文後期は1点を数える。

以下、時期別に出土土器を説明していきたい。なお、土坑出土土器は細片のため、割愛した。

勝坂式期の土器（1～3，5～25）

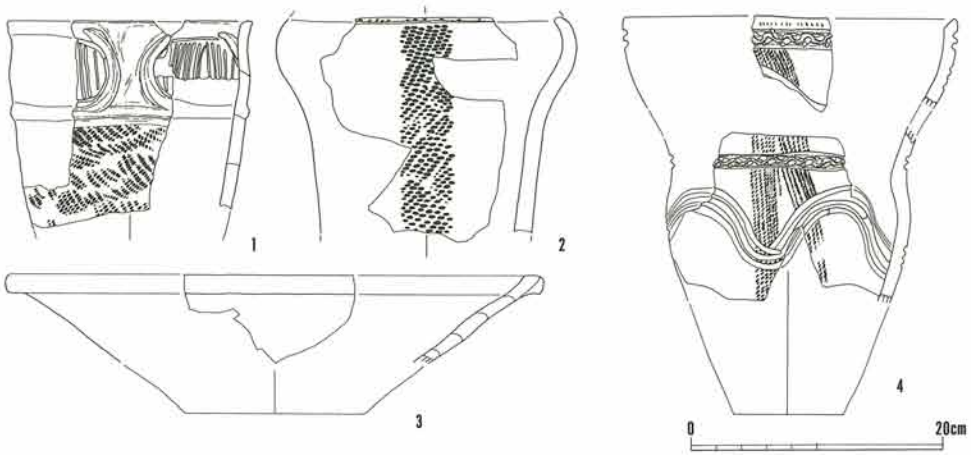
1．口縁部以下¾欠損。推定口径19.2cm・現高16.4cm。円筒形を呈する深鉢である。口縁部に文様帯を設け、隆帯による楕円区画文を推定4単位配す。区画内は浅い平行沈線による集合沈線文が充填される。胴部には縄文RLを転がす。胎土には砂粒を多量に含み、焼成良好、色調は暗黄褐色を呈する。

2．現存の上端径は推定20.4cm、現存高17cm。内湾する胴部上半部に外傾する口縁が乗る所謂“有段口縁”と考えられる。屈曲部（現存部の上端）は疑口縁様を呈する。屈曲部には沈線が引かれ、上端より竹管による刺突文を施す。胴部には縄文RLを縦位に転がす。胎土には角閃石、雲母、長石を含む。焼成は良好で色調は暗褐色を呈する。内面には調整時の擦痕を残し、火ハネによると考えられる凹面を持つ。

3．推定口径42.6cm、現高7cm。皿状を呈する大形の浅鉢である。口縁部に廻らせた隆帯に、稜を作出することにより段を形成する。内面は丁寧な横位ミガキが施され、外面胴部には調整による砂粒の移動が顕著にみられ、土器面に対して右から左方向に調整が為されたことが

種別 / 出土区	深鉢形土器																	浅鉢形土器	不明	合計
	五領ヶ台	勝坂				阿玉台	加曽利E								曽利	後期				
		I	II	III	勝坂		I	II	III	IV(連弧文)		V	VI	VII	加曽利E					
42号土坑																			1	1
43号土坑			2		2															4
44号土坑																			1	1
11号集石			3	2	1										1				10	17
遺構外		4	83	151	39	4	5	11	15	11	(6)	18			61	3	1	14	1010	1430
合計		4	88	153	42	4	5	11	15	11	(6)	18			62	3	1	14	1022	1453

第7表　第13次調査出土土器一覧



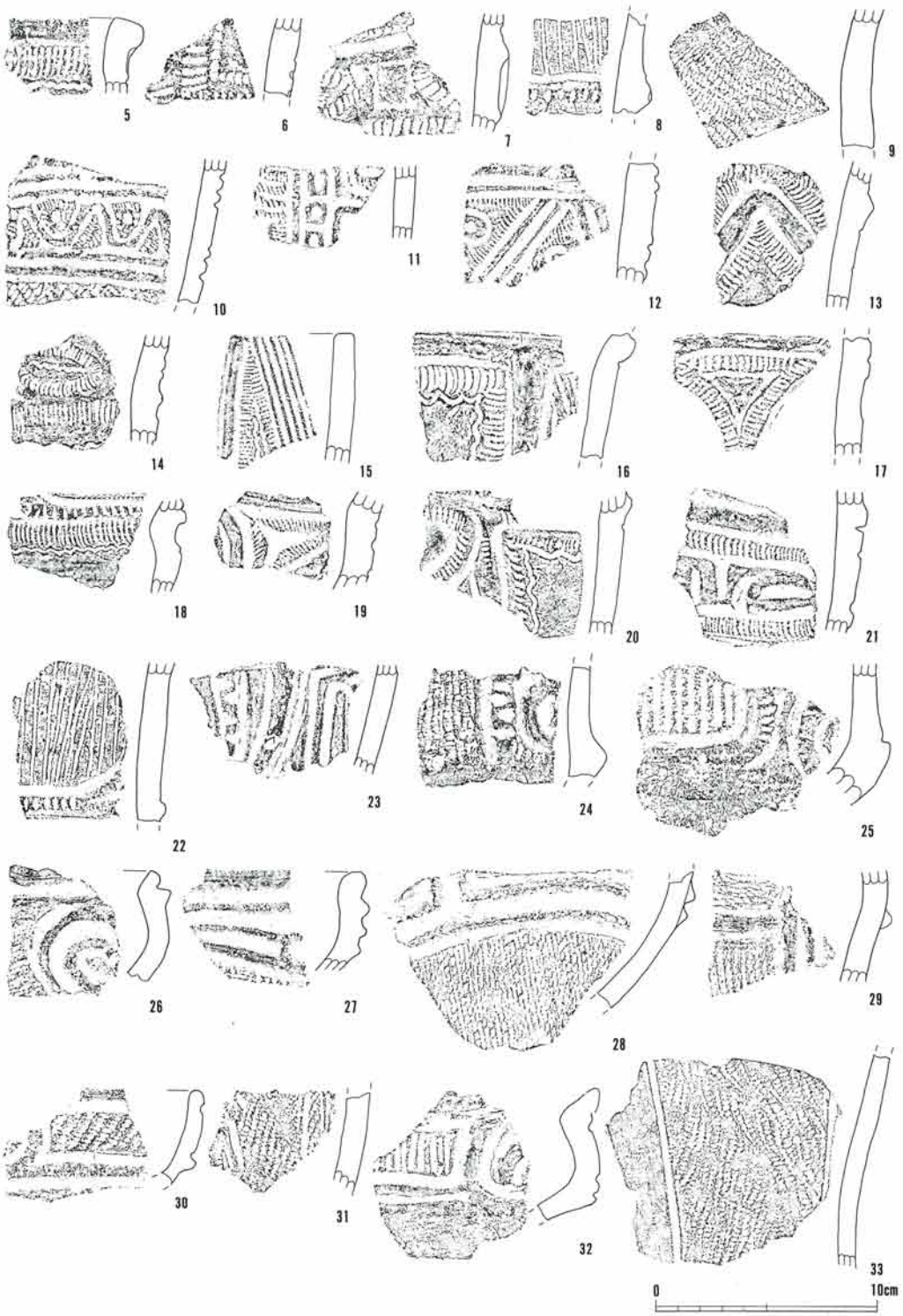
第44図　出土土器

看取される。胎土には砂粒・小礫を多量に含み、焼成は良好である。色調は赤褐色を呈する。

以上の3点は勝坂Ⅲ式に比定される。当該期の資料は勝坂式期の土器の半数を占める。

5～9は集石出土の土器である。6・7は隆帯脇をキャタピラ文・三角押文で加飾する。7は胴下半部に位置する楕円区画文で、区画文脇に三角押文を横位に施す。勝坂Ⅰ式に比定されるが幅広のキャタピラ文を比較的雑に施すなど、「手抜き」の手法が看取される。5はキャタピラ文の脇に波状沈線を施す。また8は楕円区画文内に集合沈線を施す。

10～25は遺構外出土土器である。10・11は同一個体で、11が10より上部に位置すると考えられる。上部の文様帯（11）は更に縦割りの文様区画が為され、花弁状に入り組んだ文様が描かれる。また10は連続三角文を描き、円形刺突文を区画内に施す。空間はすべて刻目文で埋められる。12・15・17・18も同様の刻目文が施される。12は区画内に円形文、15は波状文、17・18は三叉文が描かれる。16・20は重三角文モチーフの隆帯によって区画され、脇をキャタピラ文、波状文によって加飾される。22は集石出土の8と同一個体である。24・25は屈折する底部直上に位置し、24は0段多条Lが転され、これを地文として交互の刻目が加飾された隆帯に


5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
0
10cm

第45図　出土土器

よって渦巻文を垂下させる。

加曽利E式期の土器（4・26～23）

4．同一個体が3片出土した。推定口径25.2cmを測る。器形は口縁部が内湾気味に開き、胴中半で一度窄まり、胴下半でやや膨みを見た後徐々に底部へ移行する。文様は撚糸文Lの地文上に、口縁部・胴括れ部に二条一組の沈線を廻らし、沈線間は交互刺突文を施す。また胴上半部と胴下半部に三本一組（胴上半部は不明）の波状文を表出する。胎土には白色砂粒・雲母を多く含み、焼成は良好、色調は赤褐色を呈する。

26～29は第Ⅰ段階に比定される。26・27は隆帯手法により渦巻文を描くが、脇を沈線が伴なわず、浅い調整が入るのみである。また28の隆帯は断面三角形を呈する。32・33は第Ⅴ段階に比定される。32は鉢形で、区画内は縦位の沈線が埋められる。33は焼成の良好な土器で、胎土に微細な雲母・石英を多量に含む。

2）石器（第46・47図，図版29）

第13次調査区において出土した石器は106点を数えるのみである。器種の内訳は打製石斧（50.0%）、ピエスエスキーユ（2.8%）、石皿（0.9%）、磨石（3.8%）、剝片（39.6%）である。石質は砂岩が圧倒的に多く、次いで花崗岩、粘板岩、黒曜石等がある。

遺構からの出土は総点数の内の7.5%を占めるのみで他は遺構外である。以下器種別に説明していくが、各器種の細分類は第12次調査に準拠する。

ピエス・エスキーユ（1・2）

1．第Ⅲ類。裏面右側縁に剪断面を持つ。上下縁に微細剝離面が集中しており、両縁は原形を失っている。

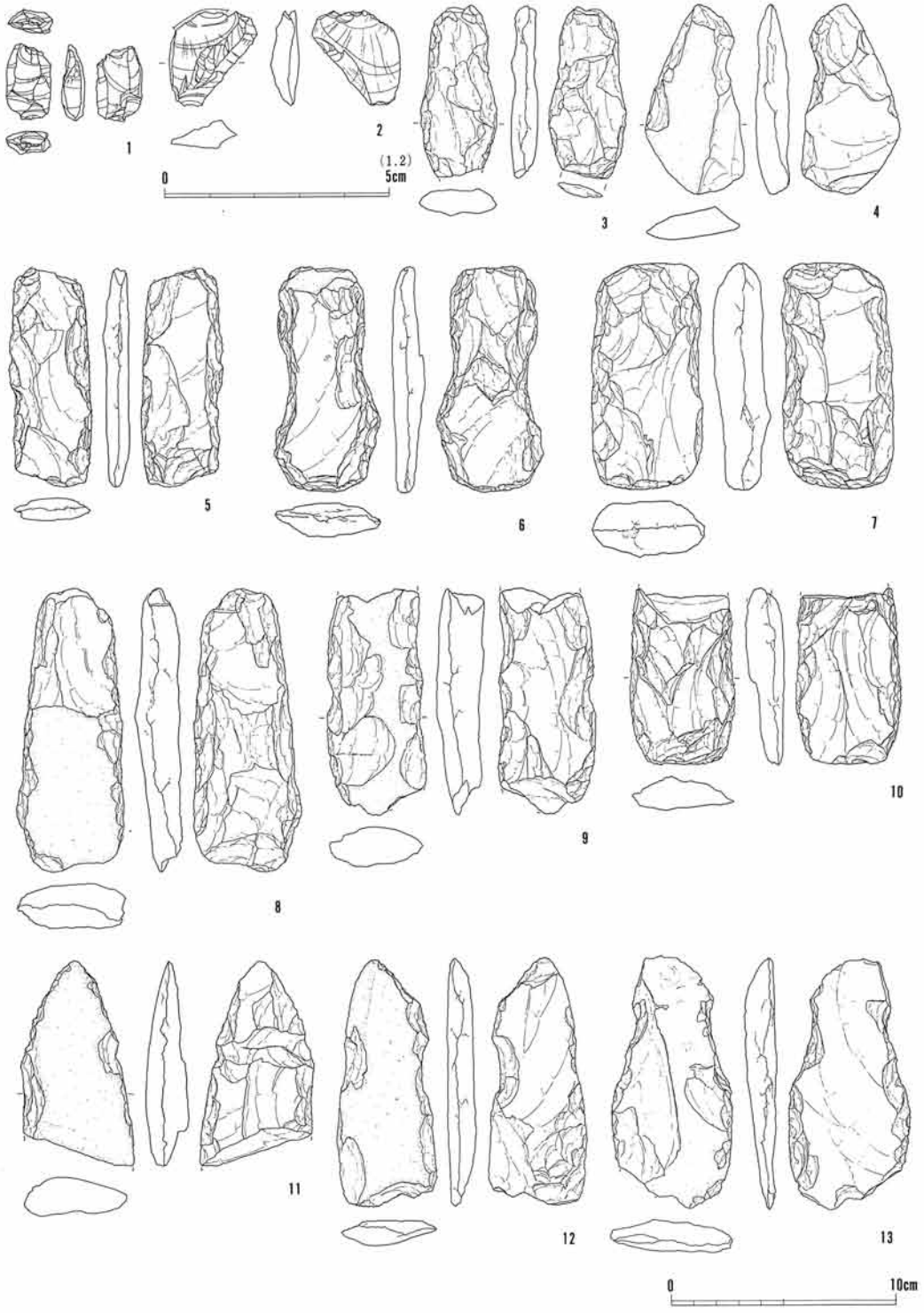
2．第Ⅱ類。両側縁が平行しない。右側縁に剪断面を持つ。左側縁上部に刃こぼれ状の微細剝離が見られることから、他の器種を考えるべきかもしれない。

打製石斧（3～18）

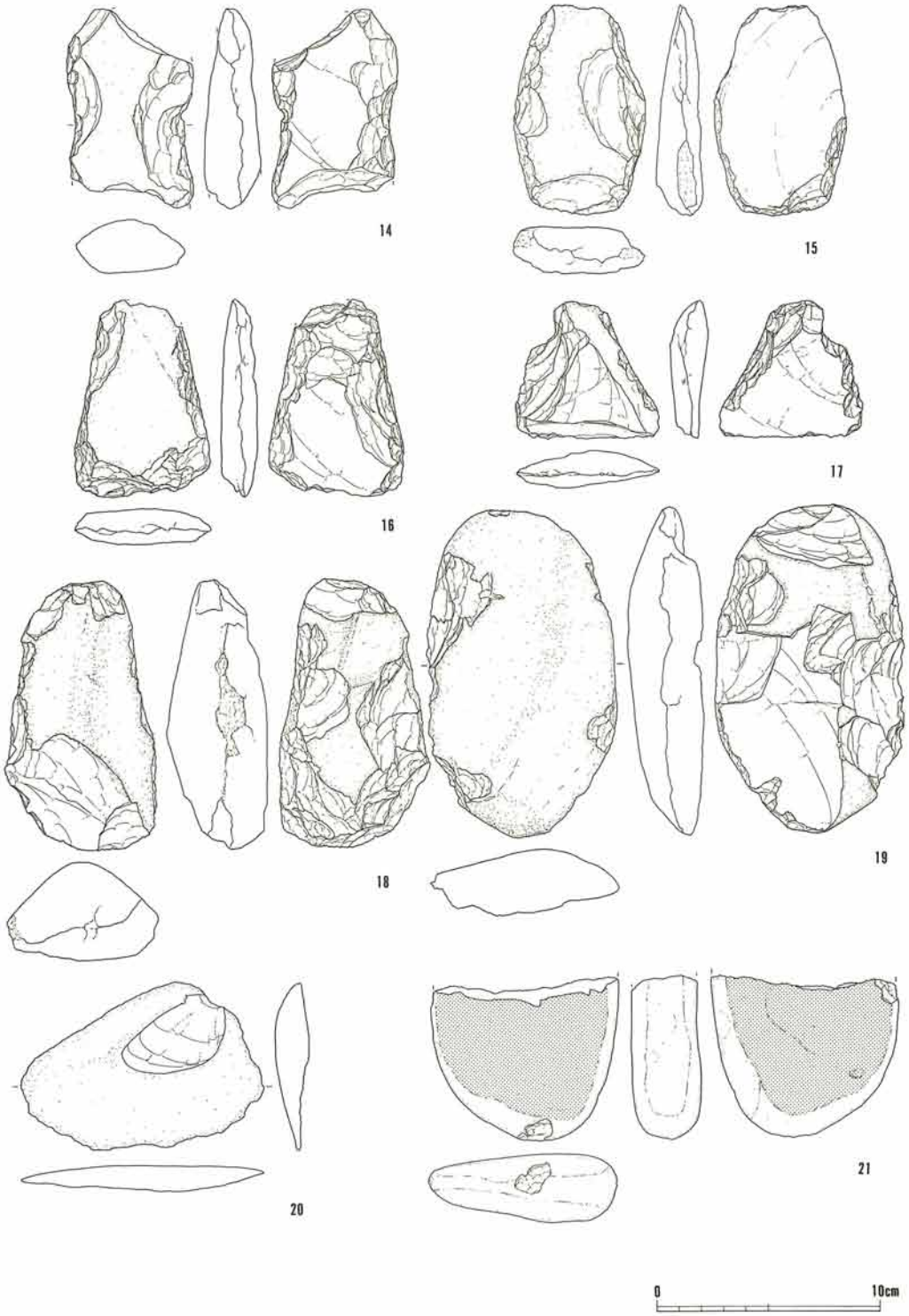
本次調査区より出土した打製石斧は53点で、その内完形品は10点を数えるのみである。

3・4．小形の打製石斧である。3は刃部を欠損する。側縁下部がわずかに膨らみ、刃部は円刃になると考えられる。側縁に入念な調整を加えるが風化が著しい。4は側縁が平行せず刃部も偏る。側縁の調整も粗い。

5～13．短冊形を呈する。5～7は比較的小形で、6は側縁が身部中央で若干括びれる。階段状剝離が密集する「タタキ」状を呈する。7の側縁は「ツブレ」状を呈し一部は基縁にまで及ぶ。8は基部と身部下半に自然面を残す。裏面に調整を集中させることによって整形する。9・10は基部を欠損する。9は裏面から、10は表面からの加力によるもので、10の刃部剝離面の稜には若干スレが認められる。11～13は基部が尖状もしくは偏状になり、若干側縁が開き気



第46図　出土石器



第47図　出土石器

味となる。11の基部には大きな剝離は認められず、剝片時の形状と大差ないであろう。刃部は裏面からの加力によって欠損する。12・13とも横長剝片を素材とし、縁辺に細かな調整を加えるのみである。

14～17は比較的ズングウな形状を呈する。14は身部中央に弱い抉りをもつ。表面に自然面を残し、裏面には主要剝離面を大きく残す。基部及び刃部を欠損し、基部は裏面から、刃部は表面からの加力によるものである。15は側縁刃部付近に「ツブレ」を有する。横長剝片を素材とし裏面への調整は殆ど加えられていない。16・17は刃部に細かな剝離面が見とめられるため完成品としたが、欠損品を更に使い込んだとも考えられる。従って製作時の形状を留めてはいない。

18は両面に自然面を有する。極めて分厚い形状を為すもので側縁に「ツブレ」が認められる。

打製石斧素材礫（19）

扁平な楕円礫を素材とする。片面に調整が集中するが、剝離は節理に沿って行なわれる。裏面左側縁の調整は表面の礫面を打面とする直角に近い打撃である。11号集石出土で、剝離後に被熱赤化する。製作途中の放棄と考えられる。

磨り石（21）

身部中程から欠損する。両面に磨り面を持ち、特に裏面は平滑化する。上端に敲打痕を持つが、使用頻度はさほど高くはない。Ⅰbに属す。

剝片（20）

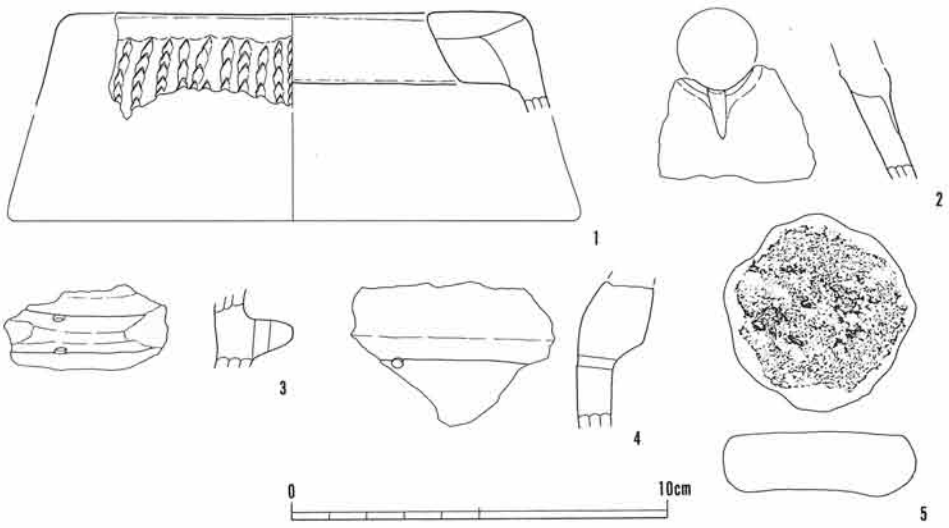
礫面を打面とする横長剝片で、表面と打点を同じくするネガティブな剝離面を持つ。下縁の縁辺が数度にわたって折り取られているが、目的的な調整であるか、偶然の所産であるかは不明である。

種別 / 区	打製石斧 完	打製石斧 欠	磨製石斧	素材打製石斧	石鏃	石槍	掻器	石匙	ピエスエスキーユ	石皿	磨石	形石器スタンプ	叩き石	砥石	石錘	小計	残核	剝片	合計
42号土坑																0		1	1
43号土坑																0			0
44号土坑																0			0
11号集石	1	2		1												4		3	7
遺構外	9	41		2					3	1	4					60		38	98
合計	10	43		3					3	1	4					64		42	106

第8表　第13次調査出土石器一覧

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	遺存状態	備考
1	ピエスエスキーユ	1.7	1.0	0.5	0.9	黒曜石		第Ⅲ類
2	ピエスエスキーユ	2.1	2.0	0.7	1.5	黒曜石		第Ⅱ類
3	打製石斧	7.1	3.9	1.3	37.1	安山岩		
4	打製石斧	8.3	4.4	1.5	55.0	安山岩		
5	打製石斧	9.9	3.7	1.2	52.8	粘板岩		
6	打製石斧	10.1	4.7	1.5	70.0	粘板岩		
7	打製石斧	10.1	5.0	2.5	159.2	砂岩		
8	打製石斧	12.8	4.7	2.0	13.4	砂岩		
9	打製石斧	10.1	4.4	2.2	10.7	砂岩	刃・基部欠損	
10	打製石斧	7.9	4.7	1.7	7.6	粘板岩	基部欠損	
11	打製石斧	9.2	5.1	1.9	6.9	砂岩	刃部欠損	
12	打製石斧	11.0	4.5	1.3	7.0	砂岩		
13	打製石斧	11.4	5.4	1.5	8.9	頁岩		
14	打製石斧	8.9	5.6	2.5	132.9	ホルンフェルス	刃・基部欠損	
15	打製石斧	9.4	5.9	2.1	129.2	砂岩		
16	打製石斧	8.9	6.1	1.6	102.6	砂岩		
17	打製石斧	6.2	6.4	1.7	55.2	粘板岩		
18	打製石斧	12.0	6.8	4.5	39.5	砂岩		
19	打製石斧素材礫	14.8	8.5	3.4	462.5	砂岩		
20	剝片	7.6	10.8	1.5	90.8	砂岩		
21	磨石	7.3	8.4	3.1	290.0	花崗岩	欠損	第Ⅰ類b

第9表　出土石器計測表



第48図　土製品

3）土製品（第48図，図版27）

器台（1・2）

1．遺構外出土で、台部約⅛のみ現存する。推定台部径11.4cm、現存高7.2cmを測る。台部は幅2.5cmの平坦面を持つのみで、中央部分はドーナツ状に穿く。脚部はストレートに外に開くと考えられる。三角押引文を縦位に施すが、施文角度が深く且つ粗い。勝坂Ⅲ式に比定できよう。胎土には白色の砂粒を多く含み、焼成良好。色調は黒色を呈する。

2．脚部破片。推定径2cmの孔を有する。孔部には竹管状工具による刻目状の沈線が施される。遺構外出土。

有孔鍔付土器（3・4）

3．高さ1.5cm、幅1cm程の隆帯が廻り、隆帯の裾部に穿孔される。孔の径は4mm。遺構外出土。

4．肥厚する口縁部の段下の器面を貫通する。或いは有孔土器とするべきかもしれない。孔の径は4mm。遺構外出土。

土製円板（5）

5．土器底部を再生したもの。径4.5cmを測る。平面形態はほぼ円形を呈し、周縁は一部に擦痕が認められる。

（遠藤）

2．歴史時代

(1) 検出遺構

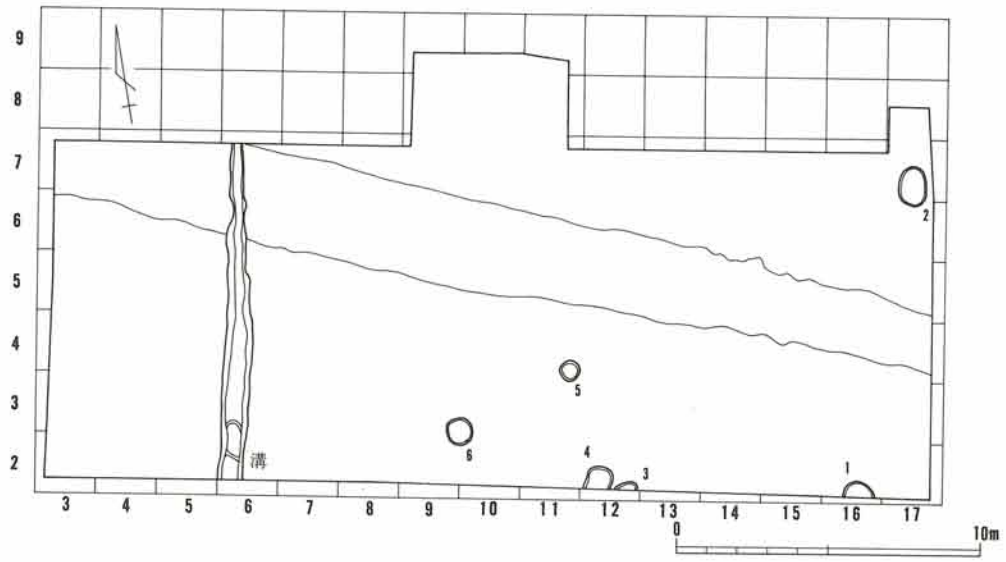
第13次調査で検出された歴史時代の遺構は溝跡１条、土坑６基である（第49図）。この内溝跡は武蔵国分寺より連なる道路跡であることが整理作業中の検討により判明した。

１）溝跡（第50図　図版27）

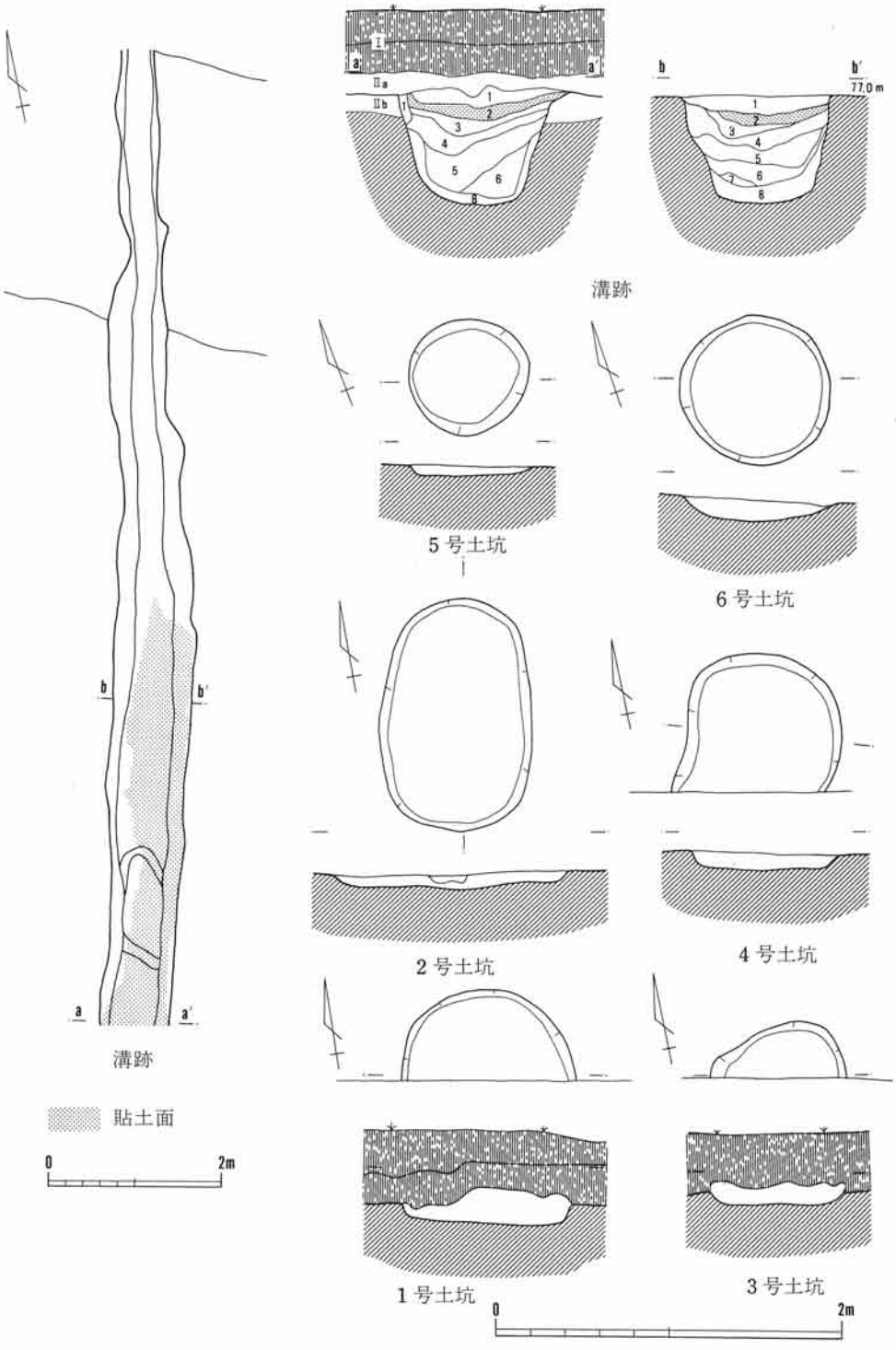
〈位置〉　（６，２～７）区に位置する南北溝である。

〈形状〉　上面幅80～90cm、底面幅30～60cmでⅡｂ層上面からの深さは60～70cmを測る。断面はU字状を示す。溝底面は凹凸があり、北側では底面幅が狭まる。溝上面に茶褐色土の硬質貼土（２層）が認められた。この貼土は最大８cmの厚みをもち、溝の外側に広がることはない。覆土は８層に分けられ、２層の貼土下は茶褐色土（３・５層）と黒褐色土が互層となっている。底面及び壁際にはローム質の黄褐色土が堆積している。貼土上の１層はⅡａ層に類似した土層である。

〈出土遺物〉　なし。



第49図　歴史時代遺構全体図



第50図　溝跡・1～6号土坑

この溝跡は武蔵国分寺跡で検出されているＳＦ１道路跡の延長線上に位置することが整理作業中に解った。既往の調査（第８次調査）やその後の調査（第27次調査）でも同一軸線上に溝跡が検出され、形状なども類似している事からＳＦ１道路跡の延長と判明した（第51図）。

ＳＦ１道路跡は武蔵国分寺僧寺・尼寺の中間を南北に走る道路跡である。道路跡は幅12ｍを測り、両側に溝を掘っている。道路部分はやや凹み硬質面も部分的にみられる。溝は底面に凹凸があり土坑が連続した様な形状をなしている。現在までに数箇所の調査地点でこの道路跡が検出され、府中市域より寺域北方の武蔵野台地上まで伸びることが明らかとなっている（国分寺市史　1986）。

今回恋ヶ窪遺跡で道路跡と判明した調査地点は３箇所である。第27次調査は「恋ヶ窪谷」より国分寺崖線を上がった地点にあたる。幅40～50㎝の溝が11ｍの間をもって検出され、その間はやや凹み硬質面となっている。硬質面下にも２本の溝が検出されている。第８次調査は今報告である第13次調査の北方300ｍに位置する。12ｍの間隔をもった２本の溝が検出されており、報告（恋ヶ窪遺跡調査報告Ⅱ）では時期不詳の溝と記載している。第13次調査はこの中間に位置している。検出された溝は道路跡の東側溝となる。遺物は第27次調査の硬質面面下で検出された溝より土師器片が僅かに出土したのみで他では出土していない。この３地点の成果によりＳＦ１道路跡は今までの延長800ｍから一気に1900ｍ以上に伸びることとなった。但し、武蔵国分寺跡と恋ヶ窪遺跡との間には野川の開析谷である「恋ヶ窪谷」が存在している。道路跡はこの谷部を直行しているので、この部分でどの様な状況となっているのかは今後の調査を待たねばならない。また、第８次調査の北方への連なりについても同様である。

２）土坑

６基の土坑が検出され、類似した形態を示す（第50図）。即ち、直径１ｍ前後の円形を呈し、深さは10㎝程で、覆土は基本層序のⅡａ層に類似する。尚、この土坑は基本層序Ⅱｂ層上面で検出され、図の断面に示した斜線はローム層でなくⅡｂ層を表している。何れも遺物は出土していないが、確認面や覆土の状況から歴史時代の遺構と判断した。

１号土坑

〈位置〉　（16，２）区に位置し、南半は調査区域外に広がる。

〈形状〉　直径１ｍ以上の円形を呈す。約10㎝の深さで覆土は粒子の粗い黒色土である。

〈出土遺物〉　なし。

２号土坑

〈位置〉　（17，７）区に位置する。

〈形状〉　長径1.3m、短径90㎝の楕円形を呈す。深さは約10㎝、覆土は黒色土である。

〈出土遺物〉　なし

第51図　ＳＦＩ道路跡

3号土坑

〈位置〉　（12，2）区に位置し、南側の調査区域外に広がる。

〈形状〉　直径80cm以上の円形をなす。深さは10cm弱である。覆土は黒色土となっている。

〈出土遺物〉　なし。

4号土坑

〈位置〉　（12，2）区で3号土坑と近接する。

〈形状〉　短径90cm以上の楕円形をなす。深さは約15cmで黒色土で覆われている。

〈出土遺物〉　なし

5号土坑

〈位置〉　（11，4）区に位置する。

〈形状〉　直径70cmの円形で、深さは5～7cmと浅い。覆土は黒色土である。

〈出土遺物〉　なし

6号土坑

〈位置〉　（9～10，2～3）区に位置する。

〈形状〉　直径90cmの円形をなし、深さ10cmの掘り込み内を黒色土が覆っている。遺物はない。

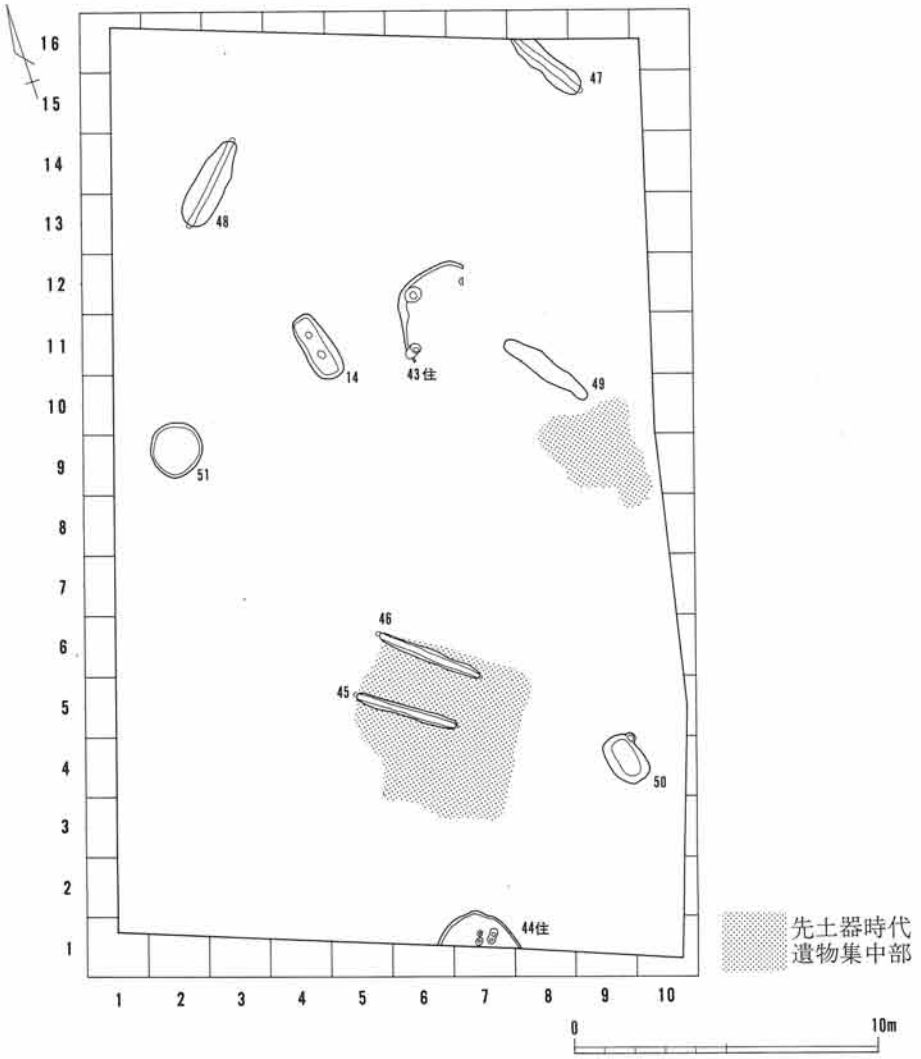
（広瀬）

V　第15次調査

1　先土器時代

(1)　遺物の出土状況（第52～56図，図版30）

検出された石器集中部は（8～10，8・9）区（第1集中部）、（6・7，4・5）区（第2集中部）の2ヶ所より検出されている（第52図）。両集中部は互いの中心で約10m離れており、出土層位はⅢ層中位に位置する。遺物総数は503点を数える。それらは9種の同一母岩に分類されるが、あくまで肉眼による同定であるため、更に母岩がまとめられる可能性はある。なお、剥片類は細片が多く、接合作業を試みたものの殆ど接合は困難であった。



第52図　第15次調査遺構全体図

1）第1集中部（第53～55図）

総数430点を数える。内訳は尖頭器9点（未製品2点）、ナイフ形石器1点、微細剥離痕を有する剥片35点、残核2点、剥片・砕片383点（作出剥片95点）である。集中部やや東側にまとまり、西側は比較的希薄である。遺物相互の高低差は30cm以内にほぼおさまり、殆ど時間差はないと考えられよう。

母岩別資料No.1（第54図上）

〈石質〉　チャート、色・気泡の疎密などから更に3種に分類が可能であるが、個々に比較すると識別が困難であるため一括することとした。

〈遺物組成〉　尖頭器6点、ナイフ形石器1点、微細剥離痕を有する剥片32点、残核2点、剥片・砕片266点（作出剥片76点）、総点数307点。第1集中部の遺物総数の72.7%を占める。

〈分布状況〉　南北2箇所に分布の中心をもつ。南側は剥片・砕片が殆どで微細剥離痕を有する剥片が加わる。北側は尖頭器・ナイフ形石器などが集中して分布する。また、本母岩の尖頭器は第1集中部の縁辺にも点在する。

垂直分布は20cm以内の高低差しかなく、断面はほぼフラットに分布する。

〈接合状況〉　本母岩からは2点の残核が出土しているが、他の剥片の殆どが細片のため、接合は困難であった。

母岩別資料No.2（第54図下）

〈石質〉　玄武岩

〈遺物組成〉　尖頭器2点、微細剥離痕を有する剥片1点、剥片・砕片36点（作出剥片6点）、総点数39点。

〈分布状況〉　集中部北東側に偏在するが、その密度は疎である。尖頭器2点は東側縁辺より検出された。

垂直分布はNo.1と同様高低差20cm以内で、形状はフラットである。

母岩別資料No.3（第55図上）

〈石質〉　チャート

〈遺物組成〉　尖頭器1点、剥片・砕片5点、総点数6点と少ない。

〈分布状況〉　集中部中央に点在。

母岩資料No.4（第55図上）

〈石質〉　珪質泥岩

〈遺物組成〉　微細剥離痕を有する剥片1点、剥片・砕片12点、総点数13点。

〈分布状況〉　集中部北側に偏在するが密度は疎である。

母岩資料No.5（第55図下）

〈石質〉　頁岩

〈遺物組成〉　微細剥離痕を有する剥片１点、剥片・砕片64点（作出剥片13点）、総点数65点。

〈分布状況〉　（６・７，５）区を中心に集中部北側に偏在し、南側にも点在する。高低差は最高25cmであるが殆どの遺物は20cm以内に集中する。

〈接合状況〉　９点・４組が接合したが、すべて折断面での接合や、打点を残さない剥片の接合であるため、剥片剥離工程の復原には至らない。

２）第Ⅱ集中部（第56図）

総点数55点が出土した。内訳は尖頭器３点、ナイフ形石器１点、微細剥離痕を有する剥片４点、剥片・砕片47点（作出剥片６点）である。東南に傾いてほぼ楕円形に分布するが、分布密度は疎である。高低差は最高30cmを測り、東南隅から北西に向けて僅かに傾斜する。

母岩別資料No.６

〈石質〉　チャート

〈遺物組成〉　尖頭器２点、微細剥離痕を有する剥片２点、剥片・砕片29点（作出剥片６点）、総点数33点。第２集中部の遺物総数の78.9％を占める。

〈分布状況〉　ほぼ楕円形に分布するが、３の尖頭器は北東部に若干離れて検出された。

母岩別資料No.７

〈石質〉　チャート

〈遺物組成〉　微細剥離痕を有する剥片１点、剥片２点、総点数３点。

〈分布状況〉　No.６の分布域内に含まれるが、３点は互いに近接しない。

母岩資料No.８

〈石質〉　頁岩

〈遺物組成〉　尖頭器１点、剥片11点、総点数12点。剥片はすべて石核より剥離した一次剥片である。

〈分布状況〉　集中部東南隅に偏在する。

母岩別資料No.９

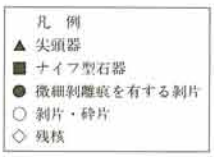
〈石質〉　珪質頁岩

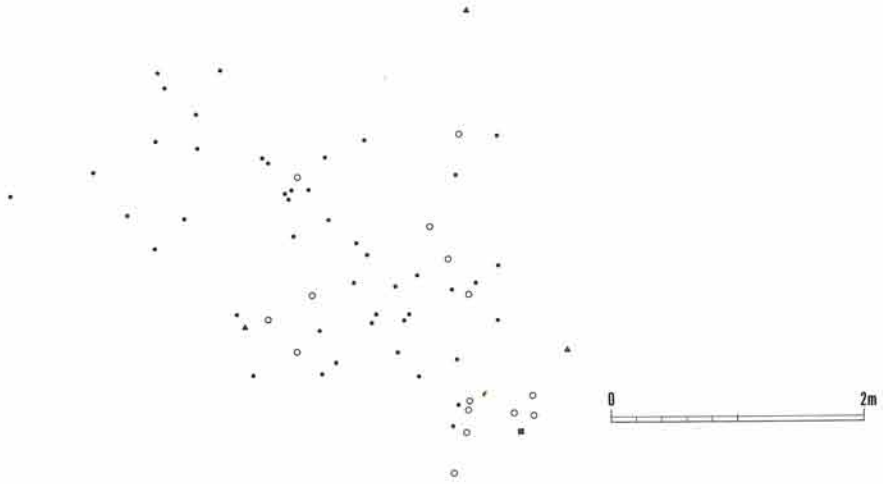
〈遺物組成〉　ナイフ形石器１点、剥片６点、総点数７点

〈分布状況〉　No.８と同様東南隅に偏在する。

以上の他、黒曜石１点（第Ⅰ集中部）・花崗岩１点（第Ⅱ集中部）など、グループとして把握し得ない資料や、極めて微細な資料など18点がある。

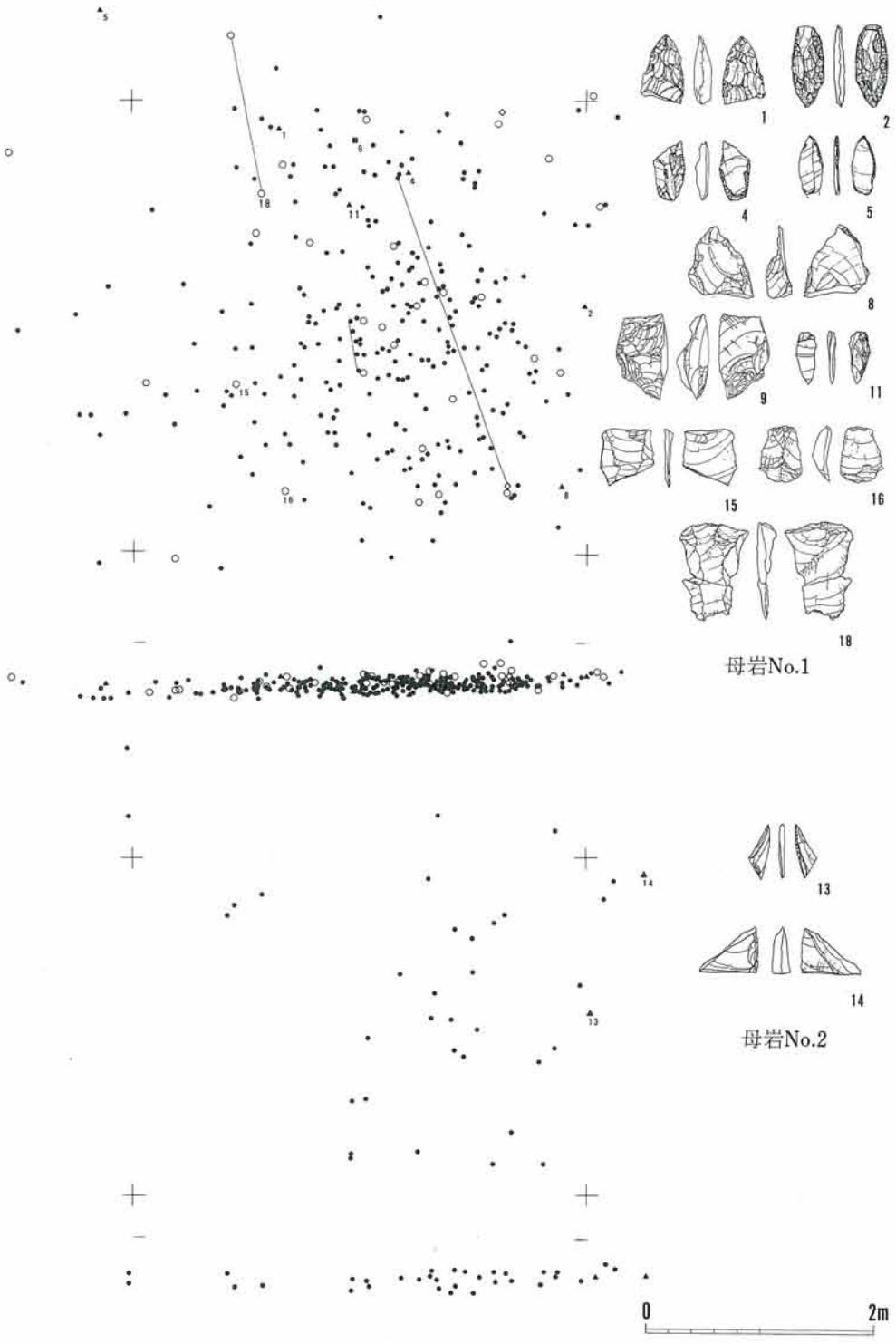
第１集中部



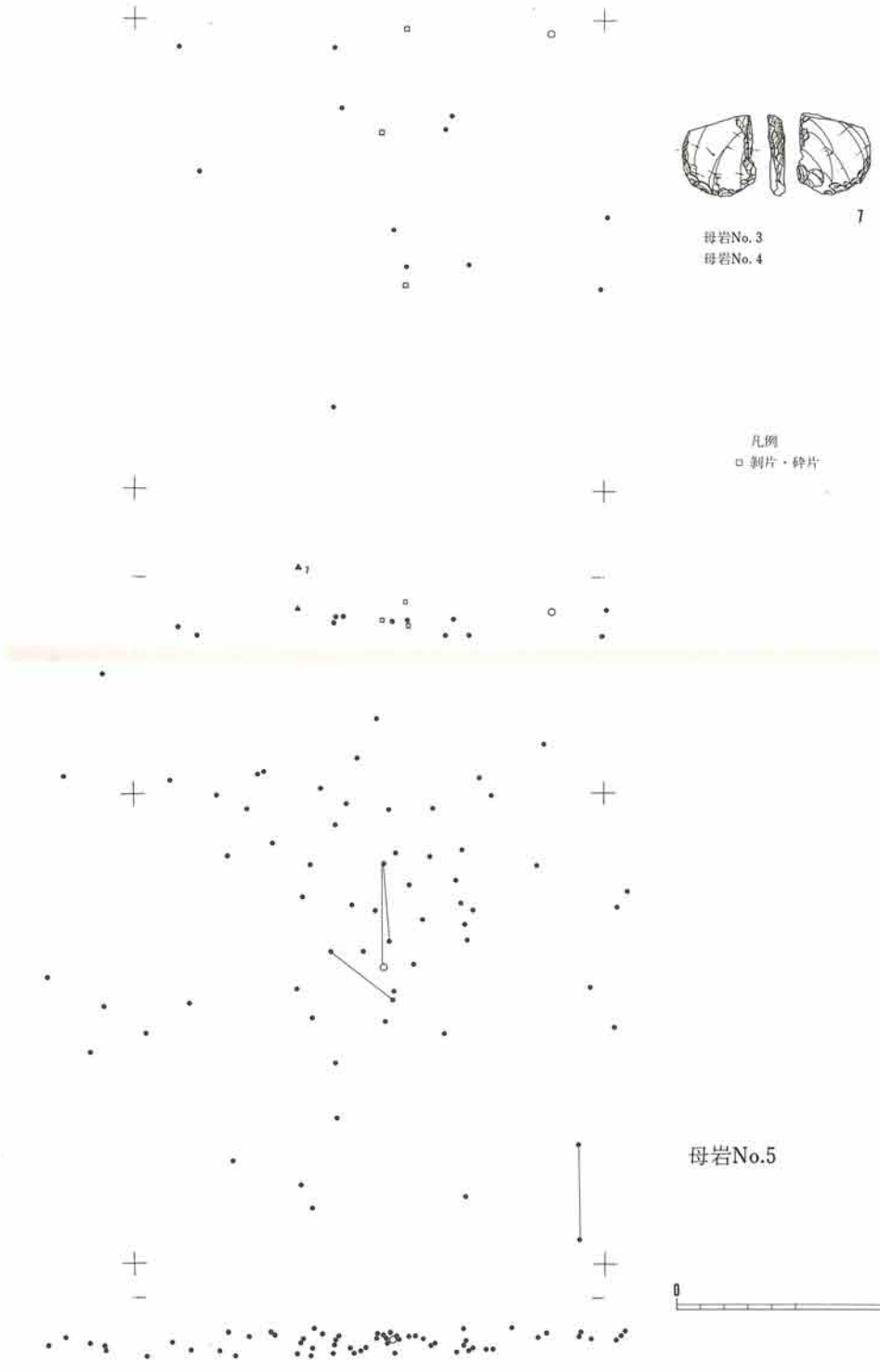


第２集中部

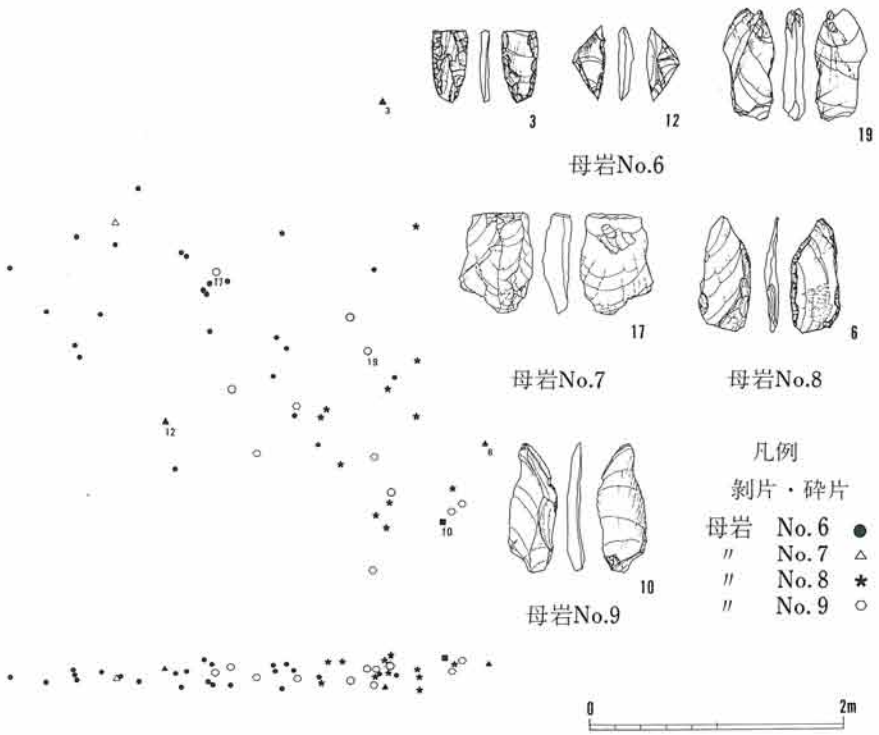
第53図　先土器時代遺物分布図



第54図　先土器時代遺物分布図



第55図　先土器時代遺物分布図



第56図　先土器時代遺物分布図

(2)　出土遺物（第57・58図，図版33）

尖頭器（1～8，11～14）

1．基部を欠損する。大形の肉厚な作りで、調整の剝離は他と比較して粗く、側縁は直線状にならない。ネガティブ・バルブの観察より、裏面の調整が後に行なわれたことが看取される。裏面右側縁の調整は器面に対して直角に近い加圧を施す。裏面に節理面を残し、本資料は節理面と平行に剝離された剝片を素材とすることがわかる。同一母岩である残核は節理面或いはそれに平行する剝離面を打面として剝片剝離が行なわれる。従って本資料は打面調整剝片或いは別の石核より剝離した剝片を素材とすると推察されよう。

2．両面を調整する。横長剝片を素材とし、基部は入念な調整によって尖状を呈する。裏面の調整が表面に先行する。上端の剝離面は主要剝離面を切るが、細部調整の剝離面に切られており、未製品と考えられよう。

3．両面を調整する。縦長剝片を素材とし、裏面に主要剝離面を大きく残す。表面より見て右側縁の調整は裏面が先行し、左側縁上部は表面が、下部は裏面が先行する。

4．両面を調整する。基部は折断によって調整される。右側縁の剝離は階段状を呈し、角度は鋭い。裏面の左側縁の調整は上部に及ばず、基部調整のみの尖頭器であるか又は製作時のア

クシデントによって途中放棄したものか何れかであろう。

5．基部欠損。素材段階の剝離面を大きく残す。縁辺にブランティングを行なうもので、上記4点とは趣を異にする。

6．横長剝片を素材とする。側縁を折断することによって粗く整形し、その後に細調整を行なう。形状は左右非対称を呈する。

7．基部のみ現存。比較的大形の尖頭器であろう。横長剝片を素材とし、打面を取り除いている。左側縁は器面に直角に近い剝離を行ない、緩いノッチ状を呈する部分がある。表面より右斜めに抜ける加力によって折損する。

8．未製品と考えられる。複剝離面を打面として横長剝片を得る。表面には側縁からの比較的大きな剝離を施すことにより厚さを調整し、また、打面部の厚さを取ろうとする細かい剝離も見られる。下部の折断面は上からの加力によるもので、これが要因となって製作を放棄したと考えられよう。

11～14．何れも尖頭器の欠損品である。11は上方からの加力によって折損する。左側縁は基部より尖端部付近まで現存すると考えられ、長さ3㎝にも満たない極めて小型の尖頭器ということになる。13・14は側縁に急角度のブランティングを行なう。

ナイフ形石器（9・10）

9．縦長剝片を素材とする。基部や右側縁など部分的にブランティングを行なう。上方からの折断により、打点部を取り除いている。

10．大形の剝片を素材とする。一側縁に折断面をもち、その折断面に数箇所の加工を施している。もう一方の側縁と、基部には急角度のブランティングを施す。

微細剝離痕を有する剝片（15～19）

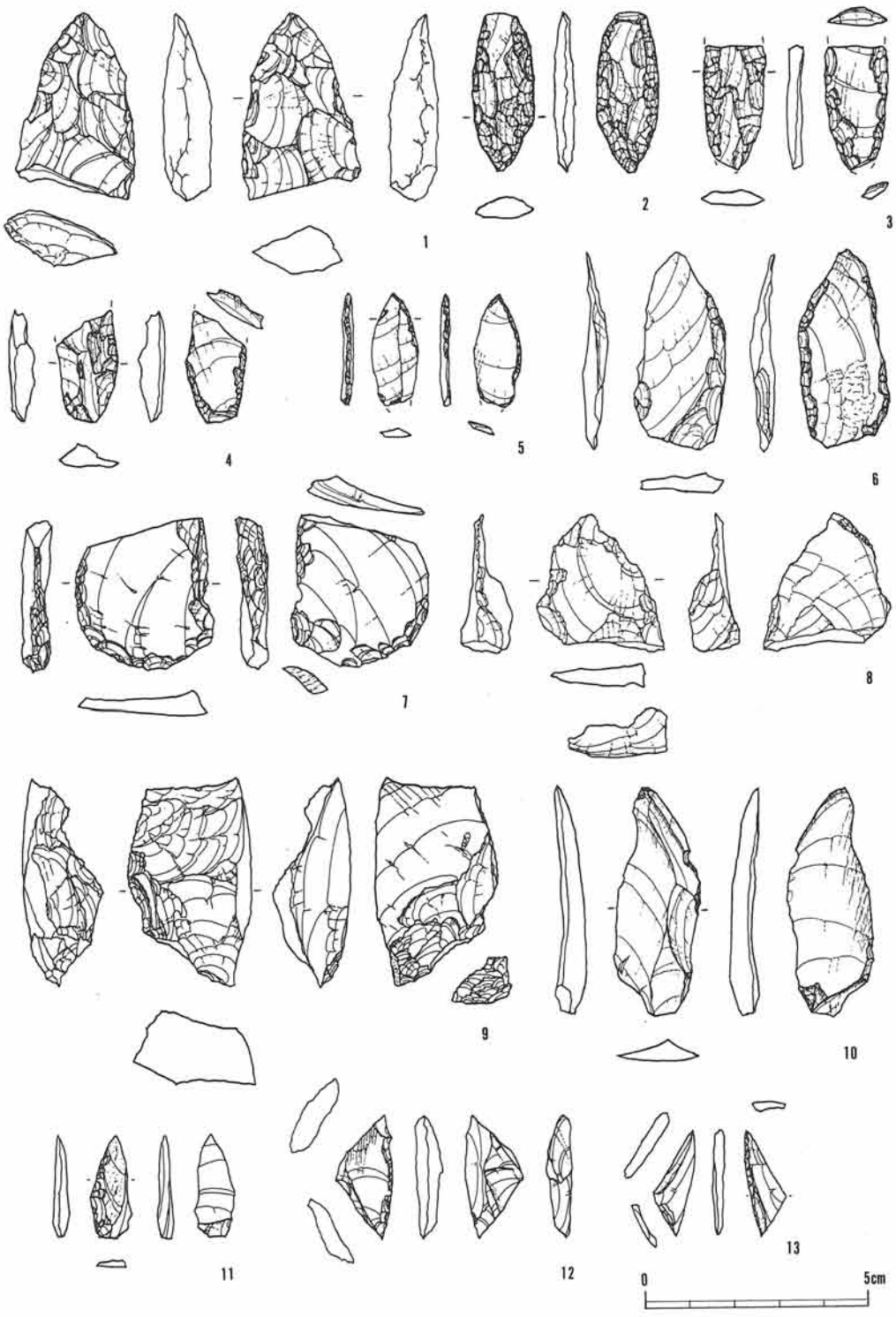
15．単剝離面を打面とする縦長剝片を素材とする。左側縁に幅0.2㎜に満たない微細な剝離痕が連続する。下端の折断面にも刃潰し様の急角度な微細剝離を行なうものである。

16．ヘラ状を呈する剝片。素材剝片を得た後、打面を細剝離によって取り除き、裏面下端に剝離を施す。下端や側縁の一部に多数の細かい折れが見られる。スクレイピングを行った痕跡と考えられる。当初「ヘラ状石器」と考えたが、刃部に意識的な剝離が見られないこと、刃部の角度が23°と鋭いことから一応本類とした。

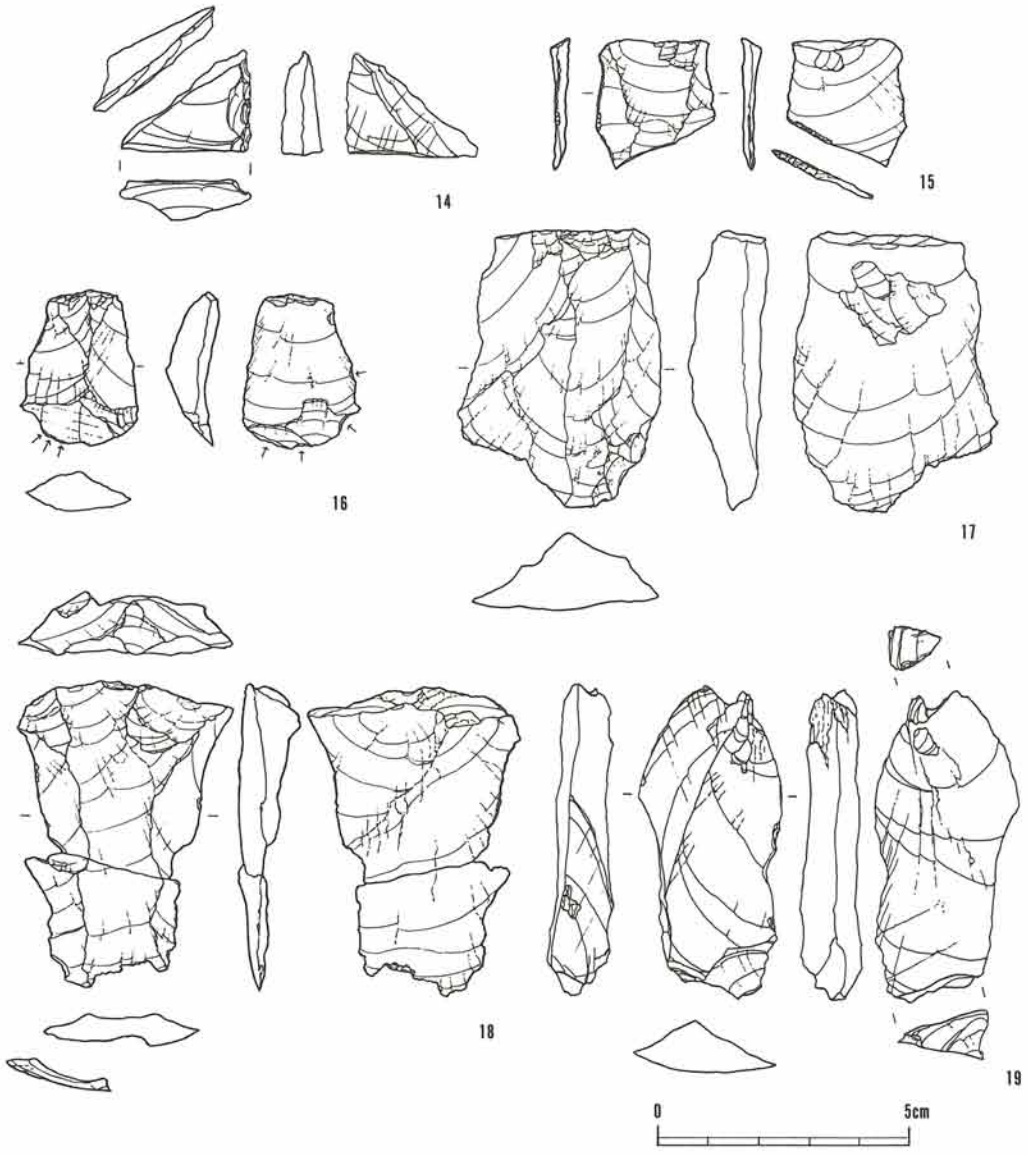
18．複剝離面を打面とする縦長剝片の接合資料。上方からの加力により折断される。上部の剝片には側縁に微細な剝離が見られ、下部の剝片下端のノッチ状を呈する部分にも微細剝離が見られる。両者に跨る剝離が見られないことから、折断後個々に用いられたと考えることもできよう。

19．縦長剝片を素材とする。側縁に微細な剝離をもち、特に右側縁は明瞭に残す。

（遠藤）



第57図　先土器時代出土石器



第58図　先土器時代出土石器

番号	器　種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	遺存状態	石　質	母岩	集中部
1	尖頭器	4.2	2.7	1.1	12.2	欠	チャート	1	I
2	尖頭器	3.6	1.4	0.5	2.9	未	チャート	1	I
3	尖頭器	2.8	1.5	0.4	2.0	欠	チャート	6	II
4	尖頭器	2.6	1.4	0.6	1.7	欠	チャート	1	I
5	尖頭器	2.6	1.1	0.3	0.7	欠	チャート	1	I
6	尖頭器	4.5	2.0	0.6	5.1		頁　岩	8	II
7	尖頭器	3.5	3.2	0.7	8.0	欠	チャート	3	I
8	尖頭器	3.2	2.9	1.2	5.7	未	チャート	1	I
9	ナイフ形石器	4.8	2.8	1.8	21.3		チャート	1	I
10	ナイフ形石器	5.2	2.0	0.7	4.9		硅質頁岩	9	II
11	尖頭器	2.4	1.0	0.4	0.6	欠	チャート	1	I
12	尖頭器	2.8	1.4	0.6	1.6	欠	チャート	6	II
13	尖頭器	2.5	0.5	0.3	0.5	欠	玄武岩	2	I
14	尖頭器	2.1	2.7	0.8	3.2	欠	玄武岩	2	I
15	剥　片	2.6	2.4	0.4	1.8		チャート	1	I
16	剥　片	3.1	2.4	1.1	5.1		チャート	1	I
17	剥　片	5.6	4.1	1.6	29.5		チャート	7	II
18	剥　片	6.2	4.3	1.2	17.6	接合	チャート	1	I
19	剥　片	6.3	2.9	1.2	19.1		チャート	6	II

第10表　先土器時代出土石器計測表

2．縄文時代

(1) 検出遺構

第15次調査地点は恋ヶ窪遺跡西辺域に位置する。第13次調査地点同様に集落の外縁部にあたり遺構が希薄な地帯で、検出遺構は住居址２軒、土坑８基と少ない（第52図）。尚、本地点は「恋ヶ窪遺跡調査報告Ⅱ」で報告した第６次調査地点と一部重なっており再検出した遺構もある。調査区全体が畑耕作等により攪乱され殆ど表土層のみとなっているため出土遺物も極めて少ない。

１）住居址

43号住居址（第59図・図版31）

〈位置〉　（６～７，11～12）区に位置する。

〈形状〉　北壁から西壁にかけての一部を検出したのみで規模、形状等は不明な点が多い。大半は近代以降の攪乱により壊されている。推定では直径３～４ｍの小形住居址と考えられる。遺構確認面からは10㎝前後の掘り込みで壁面や床面も不明瞭である。

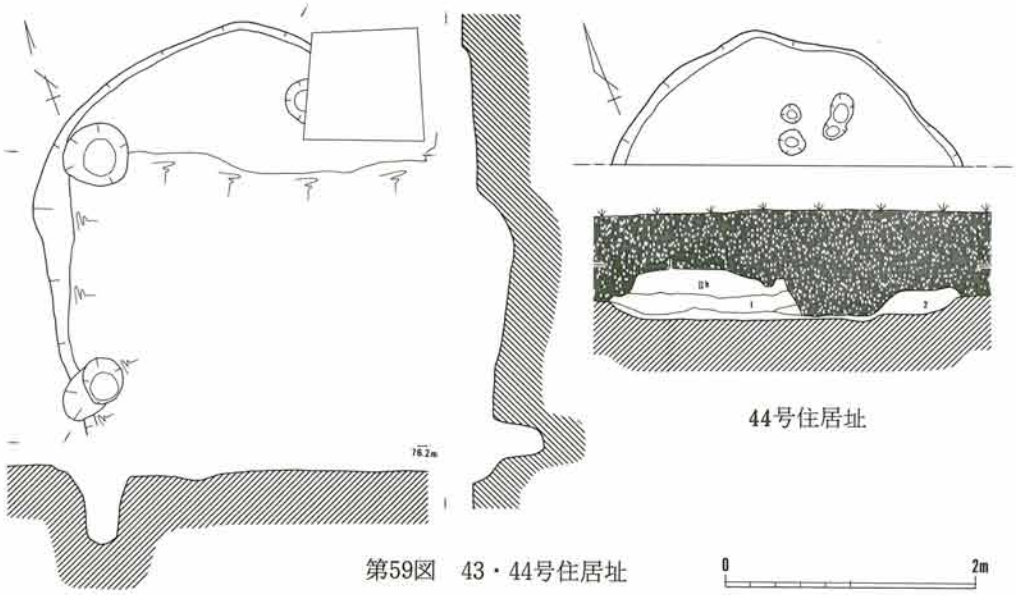
〈覆土〉　部分的な検出のみで明らかにし難い。

〈炉〉　攪乱により壊されてしまったと考えられる。

〈柱穴〉　３本検出され、西壁際の２本は床面からの深さが50㎝を超える。

〈出土状態〉　住居址出土遺物の殆どは攪乱部から出土した。しかし、周辺の状況から住居址出土遺物と判断した。

〈時期〉　勝坂Ⅲ式期である。



第59図　43・44号住居址

44号住居址（第59図・図版31）

〈位置〉　（6～7，1）区にあり、大半は調査区域外の南側に広がる。

〈形状〉　北壁寄りの一部調査であり、規模、形状等は明らかでない。43号住居址同様直径3～4mの小形住居址と考えられる。

〈覆土〉　床面近くの覆土下部の状況であるが、最下部に暗黄褐色土（2層）が堆積し、その上部は茶褐色土（1層）となっている。

〈炉〉　調査範囲では検出されていない。

〈柱穴〉　小さな柱穴が4本検出され、1本を除き床面からの深度は50cm以上を測る。

〈出土状態〉　出土遺物は土器6点、石器1点のみである。出土土器の細別は五領ヶ台式2点、中期時期不詳4点である。

〈時期〉　五領ヶ台式2点をもって該期の住居址とは言い切れない。現時点では中期の住居址という事に止めておきたい。

2）土坑

8基が検出され、形態により3類に分けられる。

Ⅰ類　「Tピット」と呼ばれている幅が狭く溝状に細長いもの（45～49号土坑）

Ⅱ類　Ⅰ類より幅広で長さが短く長方形または楕円形を呈するもの（14，50号土坑）

Ⅲ類　円形を呈するもの（51号土坑）

Ⅰ類の土坑は48号を除いて主軸方向が類似し、詳しくみると45・46号と47・49号の2つのグループがある。Ⅱ類の2基も主軸方向が近似する（第63図）。

14号土坑（第62図・図版32）

〈位置〉　（4～5，11）区に位置する。第6次調査で検出した土坑で、今回再発掘した。

〈形状〉　Ⅱ類。上面長2.3m、上面幅90cm、底面長1m、底面幅50cmの隅丸長方形を呈する。ローム面からの掘り込みは80cmを測り深い。覆土は上部が炭化物を含む黒色土、下部がローム質の黄褐色土と報告している。底面に径20cm、深さ50cmのピットが2つ穿たれていて底面を等分している。

〈主軸方向〉　N－12°－W（北－南）

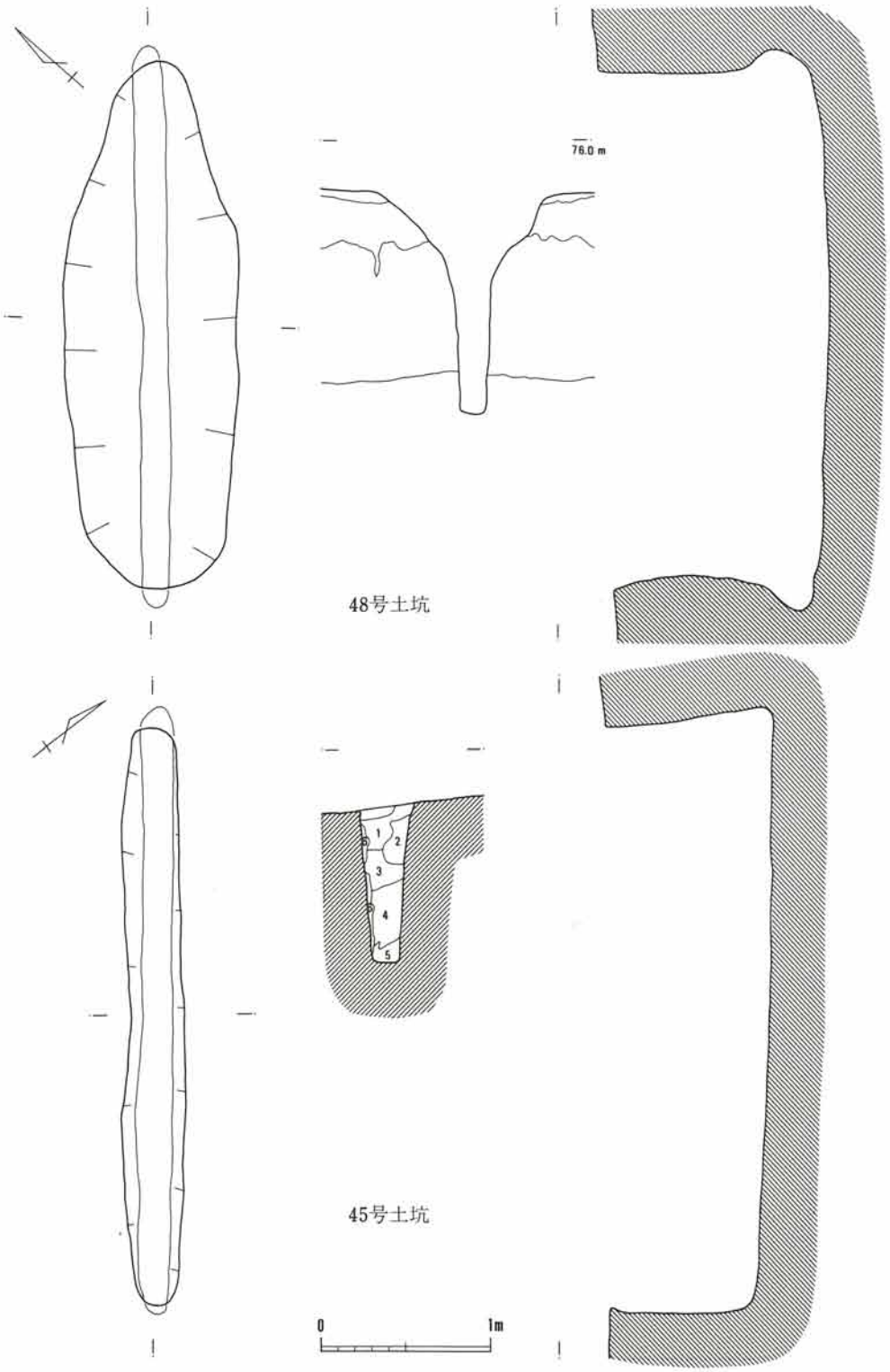
〈出土遺物〉　なし

〈時期〉　不詳

45号土坑（第60図・図版32）

〈位置〉　（5～6，5）区に位置し、46号土坑と並行する。

〈形状〉　Ⅰ類、上面長3.4m、上面幅35cm、底面長3.6m、底面幅15cmの細長い溝状を呈する。



第60図　45・48号土坑

底面は上面より長くオーバーハングしている。ローム面からは0.9～１ｍと深い掘り込みである。覆土は６層に分けられ、上部は茶褐色土（１層）中程は黄褐色や暗黄褐色土（２～４層）、最下部は黒色土（５層）となっている。底面に下部施設はない。

〈主軸方向〉　Ｎ－43°－Ｗ（北西－南東）

〈出土遺物〉　なし

〈時期〉　不詳

46号土坑（第61図・図版32）

〈位置〉　（６～７，６）区に位置し、45号土坑の北側1.6mにあり並行している。

〈形状〉　Ⅰ類。上面長3.6m、上面幅35cm、底面長3.8m、底面幅10～15cmの細長い溝状を呈す。底面が上面より長くオーバーハングとなる。ローム面からの掘り込みは0.9～１ｍを測る。この様に形状は45号土坑に酷似する。覆土は上部の１～３層が茶褐色土、中程の４層は黄褐色となり最下部の５層は黒色土となっている。覆土の状態も45号土坑に似ている。

〈主軸方向〉　主軸方向も45号上坑と酷似し、Ｎ－47°－Ｗ（北西－南東）を示す。

〈出土遺物〉　なし

〈時期〉　不詳

47号土坑（第61図・図版32）

〈位置〉　（８～９，15～16）区に位置し、北側調査区外に伸びる。

〈形状〉　Ⅰ類。上面長2.6m以上、上面幅60～70cm、底面長2.7m以上、底面幅15～20cm。45・46号土坑同様に底面が上面より長くなっている。上面幅がやや広く、断面形はＶ字状となる。ローム面からの掘り込みは1.4～1.5mと非常に深い。覆土は７層に分けられ、上部の１、２層は暗茶褐色土で、その下部は茶褐色土（２～４層）となり、壁際は暗黄褐色土である。ロームブロックの６層をはさんだ最下部は黒色土となっている。

〈主軸方向〉　Ｎ－29°30’－Ｗ（北北西－南南東）

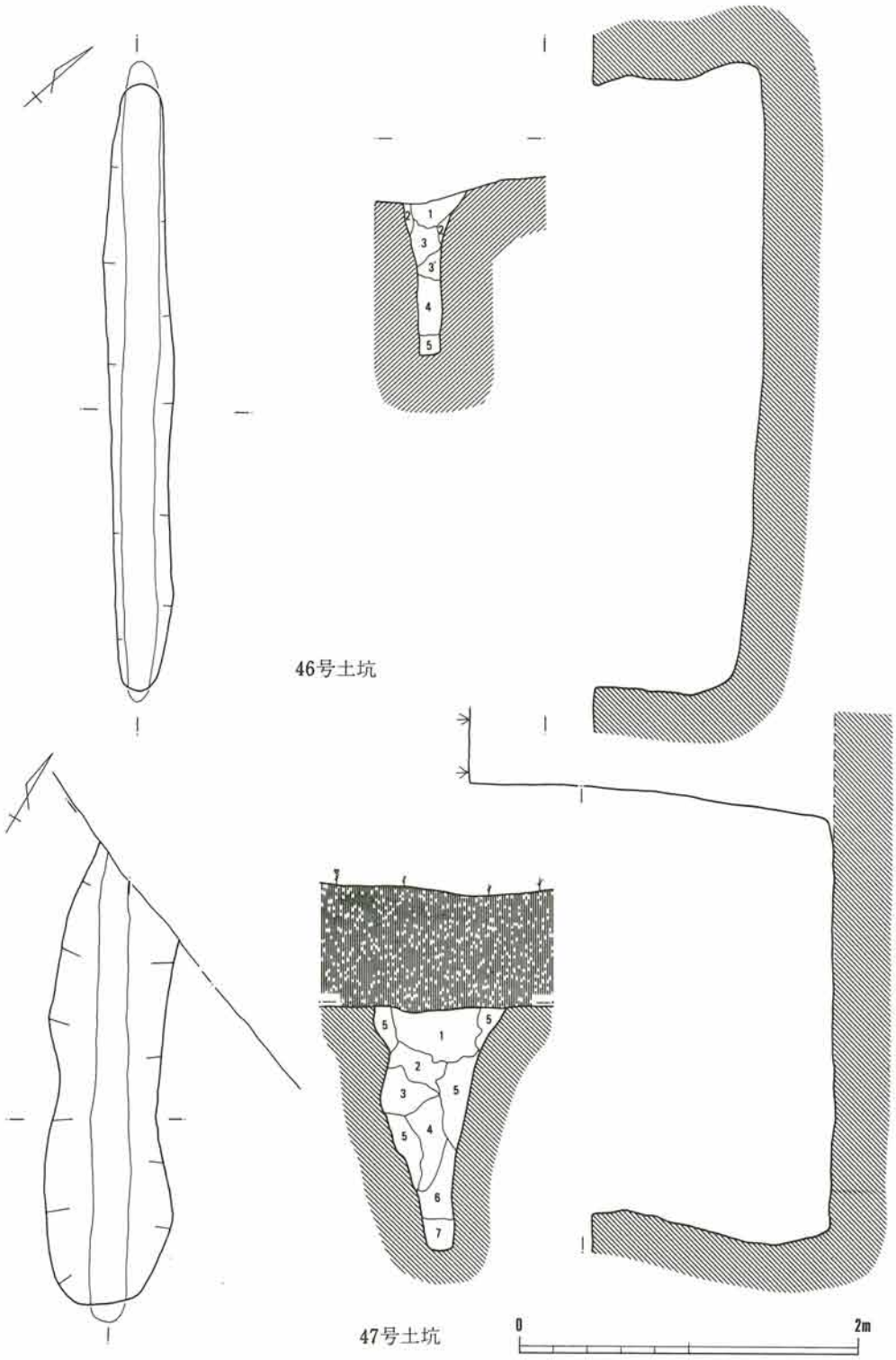
〈出土遺物〉　なし

〈時期〉　不詳

48号土坑（第60図・図版32）

〈位置〉　（２～３，13～14）区に位置する。

〈形状〉　Ⅰ類。上面長3.1m、上面幅1.0m、底面長3.3m、底面幅15～20cmを測る。他の１類土坑に比べ上面幅が広く、断面形はＶ字状をなす。底面長が上面より長くオーバーハングしている。ローム面からの掘り込みは1.2～1.3mと深く立川ローム層第Ⅰ黒色帯（ＢＢⅠ，Ⅴ層）ま



第61図　46・47号土坑

で達している。覆土は上部に暗茶褐色土が積もり、中程以下には暗黄褐色土等が堆積している。

〈主軸方向〉　N－49°－E（北東－南西）。Ⅰ類で本土坑のみが東傾し主軸方向を異にしている。

〈出土遺物〉　なし

〈時期〉　不詳

49号土坑

〈位置〉　（8～9，10～11）区に位置する。

〈形状〉　Ⅰ類　周囲の事情により上面での確認に止まる。上面長3.2m、上面幅50～60cm。

〈主軸方向〉　N－34°－W（北北西－南南東）

〈出土遺物〉　なし

〈時期〉　不詳

50号土坑（第62図・図版32）

〈位置〉　（9～10，4）区に位置する。

〈形状〉　Ⅱ類。上面長1.8m、上面幅1.1m、底面長1.4m、底面幅65cmの長楕円形を呈する。ローム面からの掘り込みは65～70cmでⅠ類土坑に比べ浅く、同じⅡ類の14号土坑とは近似する。覆土は8層に分けられ、上部の1、2層は暗茶褐色土で、以下には暗黄褐色土が厚く積もっている（3～6層）。底面近くの壁際に黒褐色土が僅かにみられる（7層）。

〈主軸方向〉　N－9°－W（北－南）で同じⅡ類の14号土坑と近い。

〈出土遺物〉　なし

〈時期〉　不詳

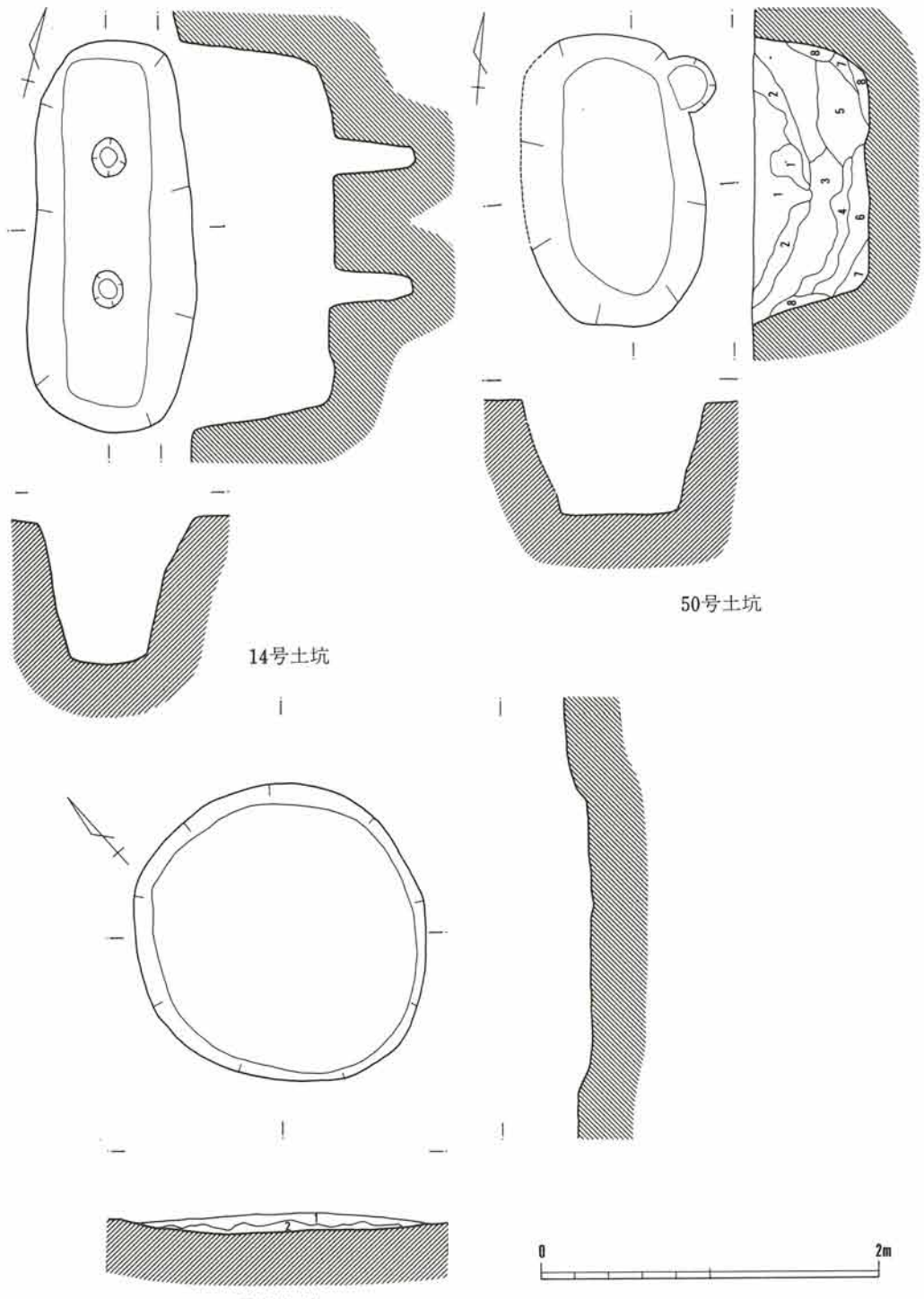
51号土坑（第62図・図版32）

〈位置〉　（2，9～10）区に位置する。

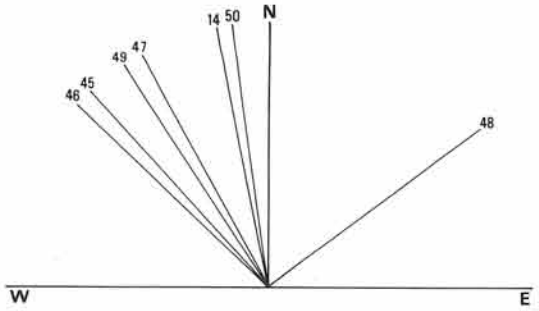
〈形状〉　Ⅲ類。直径1.7～1.8mの円形を呈する。ローム面からの掘り込みは5～10cmと非常に浅い。断面は皿状をなす。覆土は暗茶褐色土（1層）で、底面直上にローム粒子・ブロックを含む茶褐色土が堆積している。

〈出土遺物〉　覆土内より9点の土器片が出土したが、時期が判明したものは五領ヶ台式1点、勝坂式2点である。

〈時期〉　出土遺物が微量で時期決定は難しい。恋ヶ窪遺跡における状況を考えると勝坂式期の土坑である蓋然性の方が高いかもしれない。　（広瀬）



第62図　14・50・51号土坑



第63図　土坑主軸方向

種別 / 出土区	深鉢形土器																浅鉢形土器	不明	合計
	五領ヶ台	勝坂				阿玉台	加曽利E								曽利	後期			
		I	II	III	勝坂		I	II	III	IV(連弧文)	V	VI	VII	加曽利E					
43号住居址			4	53	1	3		6	3									150	220
44号住居址	2																	4	6
47号土坑				2										1				2	5
51号土坑	1				2													6	9
遺構外			2	4														15	21
合計	3		6	59	3	3		6	3					1				177	261

第11表　第15次調査出土土器一覧

種別 / 区	打製石斧		磨製石斧	素材打製石斧	石鏃	石槍	掻器	石匙	ピエスエスキーユ	石皿	磨石	形石器スタンプ	叩き石	砥石	石錘	小計	残核	剝片	合計
	完	欠																	
43号住居址	3	4											1			8		1	9
44号住居址		1														1			1
合計	3	5											1			9		1	10

第12表　第15次調査出土石器一覧

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	遺存状態	備考
1	打製石斧	8.6	2.9	1.6	48.5	ホルンフェルス	刃部欠損	43号住居址
2	打製石斧	8.3	4.1	1.3	49.7	凝灰岩質砂岩		43号住居址
3	打製石斧	7.2	4.9	1.9	72.0	安山岩		44号住居址
4	打製石斧	9.5	5.4	2.1	120.0	砂岩		43号住居址
5	打製石斧	10.3	5.4	2.5	133.9	砂岩		43号住居址
6	打製石斧	9.5	4.8	1.0	52.4	砂岩	刃部欠損	43号住居址

第13表　出土石器計測表

(2) 出土遺物

1）土器

本調査区から出土した土器は総点数261点を数えるのみである。その中で43号住居址出土土器は住居址覆土及び攪乱部を合わせて220点となり、総点数のほぼ85％を占めることとなる。

43号住出土土器（第64図1・4～9・図版34）

本住居址より出土した時期決定可能な資料は、勝坂Ⅲ式に比定されるものが大半を占める。

1は底径8㎝、現高21.8㎝を測る深鉢である。胴部はほぼ円筒形を呈し、口縁部が強く外傾する器形と考えられる。頸部屈曲部に一条の隆帯を廻らし、上下より交互に押圧することにより波状文を表出する。胴部には地文として撚糸文Rを転がす。頸部屈曲部より二条の隆帯を垂下させ、下端を渦巻とする。二条の隆帯上には突起状の貼付文を施し連結させる。また上端も逆U字状に連結する。底部付近には施文後に強い整形を行なった痕跡が認められる。胎土には砂粒・小礫を含み、焼成良好、色調は淡赤黄褐色を呈する。

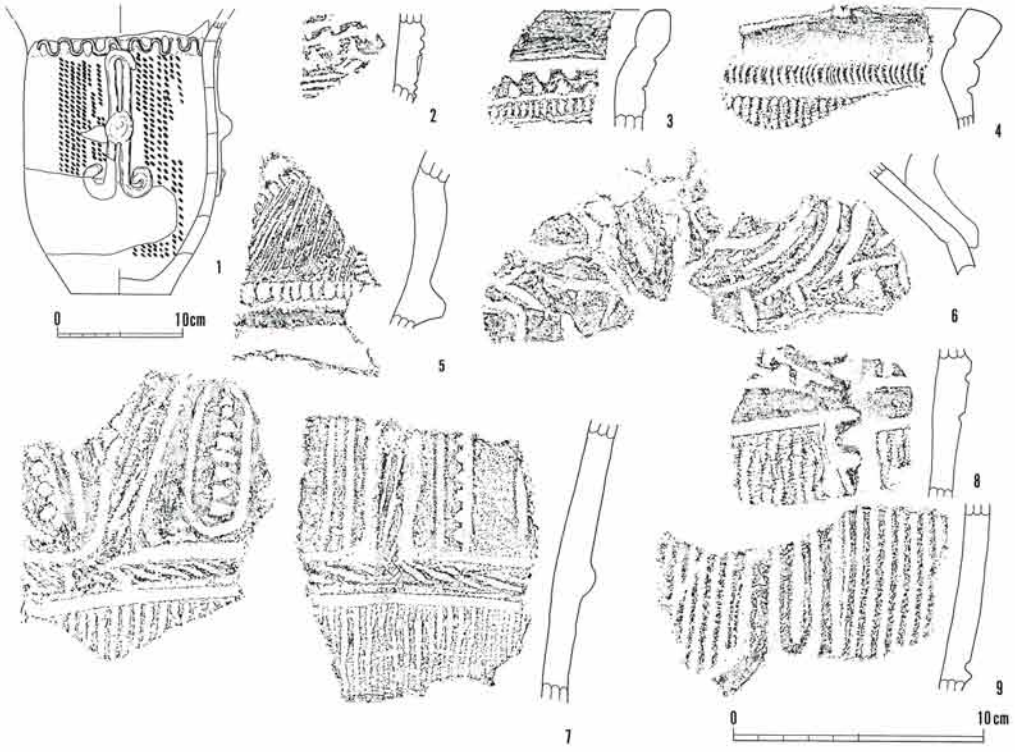
4は肥厚する無文の口縁を持つ。屈曲部に施された半隆起線上の爪形文はC字形を呈し、（可児　1969）のBs′が用いられる。口唇部には剝落痕が認められ、突起を付けた痕跡が認められる。6は口縁部が急激に内屈する器形と考えられる。7は同部位の破片が2点出土している。円筒形を呈する器形と考えられる。隆帯で三角形区画文を描き、区画内に沈線文・刺突文が描かれる。胴下半部は撚糸文Lを縦走させる。また縦・斜位の隆帯上にも撚糸文を転がし、横位隆帯には斜めの押圧が加えられる。これらはすべて同じ原体を用いている。8は7と同様の器形を呈し、隆帯による基本文様単位が配されるが、隆帯は交互刺突文・逆ハの字状の刻目文が加飾される。下半部は縦走する0段多条Lの縄文が施される。9は1に近似する渦巻文を懸垂させると考えられるが、空間に縦位の半隆起線を密に施す。

5は阿玉台Ⅳ式に比定される口縁部付近の砂片である。大形の山形把手が付く大波状口縁と考えられる。隆帯脇にはキャタピラ文を施し、区画内には条線を充塡させる。

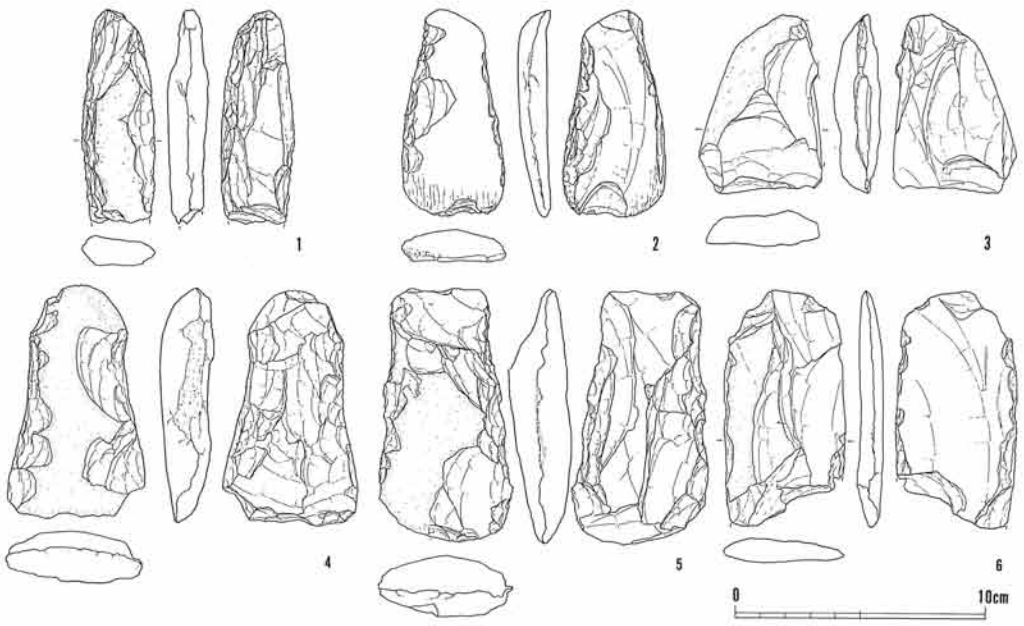
44号住出土土器（2）

本住居址の出土土器は6点と極めて少ない。文様は半隆起線文・印刻文・交互刺突文等で構成される。印刻文は残部が半円形となることを意識しており、北陸地方における“連華文”に近い。また交互刺突文によって加飾される半隆起線は6㎜、下部の横位半隆起線は幅4㎜と、二種類の原体を用いている。五領ヶ台式に比定されよう。他は無文・縄文のみであり、他時期に比定される資料は出土していない。いずれにしてもこれら断片的な資料のみでは本住居址の所属時期を確定することはできない。

以上の他、51号土坑より勝坂Ⅲ式が出土している（3）。無文の口縁直下に交互刺突文を廻らせる。沈線間には刻目文が施される。施文手法は（可児　1969）のC3である。



第64図　出土土器



第65図　出土石器

2）石器（第65図，図版34）

第15次調査において出土した石器は総点数でも10点と極端に少ない（第12表）。その内９点は43号住居址攪乱より出土したもので、44号住居址は打製石斧１点のみである。

その内、打製石斧のみ６点を図示した。５は44号住居址出土、他は43号住居址出土である。

１．刃部を欠損する。細身で基部両縁が先細る形状を成す。左側縁は節理に沿って打ち割られている。欠損は表面からの加力による。

２．表面に自然面を多く残す。刃部に最大幅を持ち、基部は自然面をそのまま使用する。左側縁は１と同様に裏面から折り取られる。その後にそれを打面として調整が加えられる。刃部には著しい「スレ」が見られ、殆ど潰れている稜もある。擦痕は上下の方向に残る。

３．右側縁を欠損する。基部から左側線にかけて自然面を残し、刃部は節理によって片刃状となる。細かな調整は殆ど見られず、製作途中の未製品とも考えられる。

４．表面に自然面を多く残し、側縁は「ハ」の字状に外反する。楕円状の偏平礫の端部を打面として素材剥片を作出する。調整は側縁に集中し、外反部に「ツブレ」が認められる。

５．身部及び刃部に自然面を残す。刃部が僅かに開く短冊形で、基縁は側縁に直交する。素材に横長剥片を縦位に用いる。側縁に「ツブレ」をもつが、さほど著しい敲打は行なわず特に左側縁は鋭い縁辺を保つ。

６．刃部欠損。身部左側に自然面を残す。横長剥片を素材とするが極めて薄い剥片を使用する。左側線は「ツブレ」をもつが、右側縁は細かい剥離を僅かに施すのみである。欠損は裏面からの加力による。

（遠藤）

Ⅵ　ま　と　め

1　遺構について

(1)　恋ヶ窪の遺跡の広がりと構造

恋ヶ窪遺跡の広がりや集落構造については既に「恋ヶ窪遺跡調査報告Ⅲ」で触れたことがある。現在でもその大略に変更は認められないが、以後の調査成果を加え再度若干の検討を加えてみたい。

まず、遺跡の広がりを各調査地点の所見から考えたい（66～68図）。検出遺構の中で住居址が主体を占める地域として第１・５・10次調査地区、第14次調査地区、日立中研地区等が挙げられる。第14次調査地区は遺跡の中央やや北側に位置し、40軒弱の住居址が重なり合って検出されており、正に集落居住域の一様相を示している。日立中研地区は第14次調査地区の東方約100mにあたる。住居址は調査区南西部に限られ居住域の東辺を示している。第１・５・10次調査地区は台地南縁に近い調査地区である。他地区同様数多くの住居址が検出されている。

この住居址群の内側で遺跡のほぼ中央に位置するのが第４・12次調査地区である。今報告の第12次調査地点では土壙、集石、屋外埋甕といった遺構がまとまって検出されている。明らかに集落居住域とは違った「場」を想定できる。但し、第12次調査地点では南側の第１・５・10次調査地区へ広がる方向で３軒の住居址が見つかっており、居住域から集落中央部に位置する「場」への移行部といえよう。

住居址群の外側に位置する調査地区は遺跡北辺の第８・13次調査地区と西辺の第６・15次調査地区等がある。北辺域の調査結果では遺構・遺物の希薄性が特徴として挙げられる。今報告の第13次調査地点でも集石１基、土坑３基といった状況であり、北方の調査地点では更にこの傾向が顕著となる。西辺域の調査地点でも遺構・遺物は比較的少ない。但し、第15次調査地点では「Ｔピット」と呼ばれる陥し穴状土坑等の他に住居址も２軒検出されており、北辺域とはやや趣を異にしている。東辺域は日立中研地区がその状況を示している。前述の様に住居址群は調査区南西端にまとまり、その外側は西辺域である第15次調査と同様に「Ｔピット」と呼ばれる土坑等が散在する程度となっている。調査地区の東方に小支谷が認められる事も勘案すると遺跡の東限と推測できよう。

以上が恋ヶ窪遺跡の各地区毎での調査概要である。これから想定される遺跡範囲は直径400m程となり、遺跡面積は約135,000㎡である。この中に住居址や土坑等の各種遺構が多数構築される集落中心域が形成されている。それは東西300m、南北200m程度の範囲と推測され、台地地形に沿った楕円形の形状を呈する（第66図）。俯瞰図でみると緩斜面の崖線を前面に持った台地南西域に集落が形成されているのが読み取れる。ここからは谷低地への崖線を経らずに北方に広がる武蔵野台地へ直線的に向かうことができる。遺跡から他の遺跡・地域への通り道

第66図　遺跡の立地と遺構分布

といった事を考えても好地に占地しているといえる。これは遺跡北辺域に遺構・遺物が少ないといった調査成果とも相反しない事であろう。尚、湧泉帯は集落南東部崖下にある。同一台地上に立地する羽根沢遺跡は台地南東部の一角を占有するのであろう。

次いで住居址の時期からみた遺跡の変遷をみていく。昭和63年1月現在84軒の住居址が検出されていてすべて縄文中期中葉から後葉にかけてのものである。その内訳は未整理もあり概数であるが、勝坂Ⅰ式0軒、同Ⅱ式1軒、同Ⅲ式31軒、加曽利E式第Ⅰ段階2軒、同第Ⅱ段階4軒、同第Ⅲ段階4軒、同第Ⅳ段階5軒、同第Ⅴ段階15軒、同第Ⅵ・Ⅶ段階0軒、時期不確定22軒となっている。

勝坂式期の住居址は集落北側居住域である第14次調査地区・日立中研調査地区にまとまっている（第67図）。南側の調査地区でも同時期の住居址は検出されているがその数は少ない。しかし、北側の住居址群もかなりの重複・隣接関係が認められるので、ある程度の時間幅を有していて同時性の住居址としては少なくなるであろう。これに対し、加曽利E式期の住居址は北側・南側の居住域を問わず検出されている（第68図）。これを各段階別にみると前半の第Ⅰ～Ⅲ段階までは検出数がやや少なく数軒ずつが比較的近寄った位置関係にあり、同第Ⅳ段階もこの傾向を持ち集落中央部にまとまる傾向が窺える。次の第Ⅴ段階では前段階に比べ急激に住居址数が増加し、数軒ずつが近接するという関係はこの段階でも認められる。最終段階の第Ⅵ・Ⅶ段階の住居址は今の所未検出であるが、過去の調査において崖線中等で敷石住居址が検出されているのでそれまでの台地上集落とは占地状態を変えて存在すると思われる。全体的には勝坂式期に比べ加曽利E式期の住居址群の方が集落内でより内側に構築される傾向がある。これは住居址分布のみの検討であり、集落内の墓域・共同広場や多種の付随遺構を含めた全体的な空間配置を今後とも詳細に分析していかなくてはならない。居住域と集落内墓域の関係については第12次調査地点と同辺調査地区との比較検討を後述する。

恋ヶ窪遺跡における集落形成は縄文中期勝坂式期に始まり加曽利E式終末にその終りを遂げる。集落形成以前では早期前半・前期後半・中期初頭期の土器片が散見されるだけである。一方集落廃絶以後では後期称名寺式から加曽利B式器の土器が少量出土している。形成以前に比べると出土量は多いが明確な遺構は存在しない。まさに、武蔵野台地における縄文中期集落の典型といえよう。

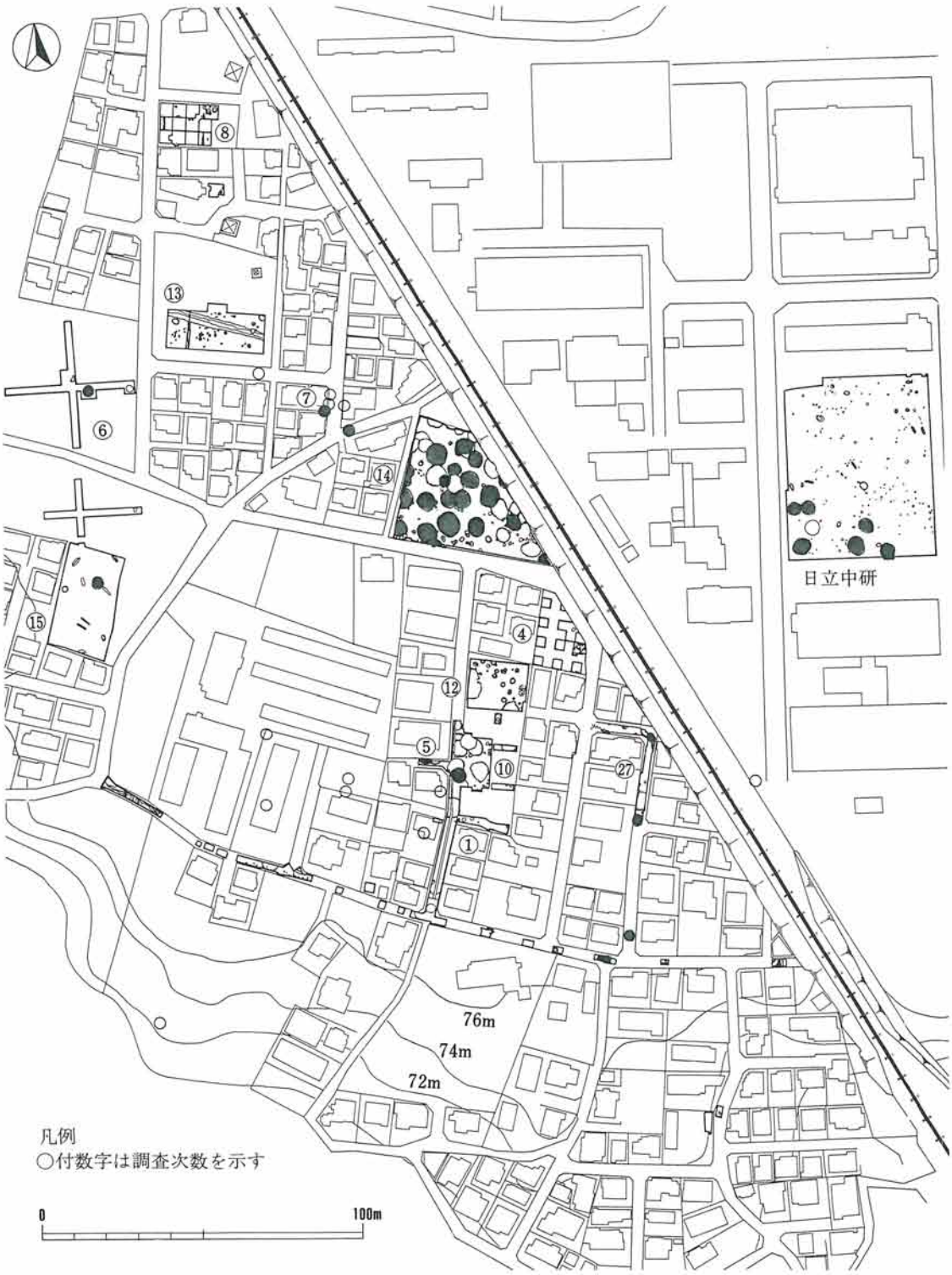
(2)　住居址群と墓域

第12次調査地点は遺跡の中央域に位置し、土壙・集石・屋外埋甕といった遺構が主体をなしている。この地点は住居址群の内側にあたる事、土壙どうしが重複することなく構築され硬玉製大珠や粗製石匙といった副葬品と考えられる遺物が伴っている事、屋外埋甕等葬送に関する遺構が存在することなどから集落内側に設けられた「墓域」と考えられる。南側の第1・15・

10次調査地区では住居址がまとまって検出されているので、両地区の関係を検討し住居址群と墓域について考えてみたい。

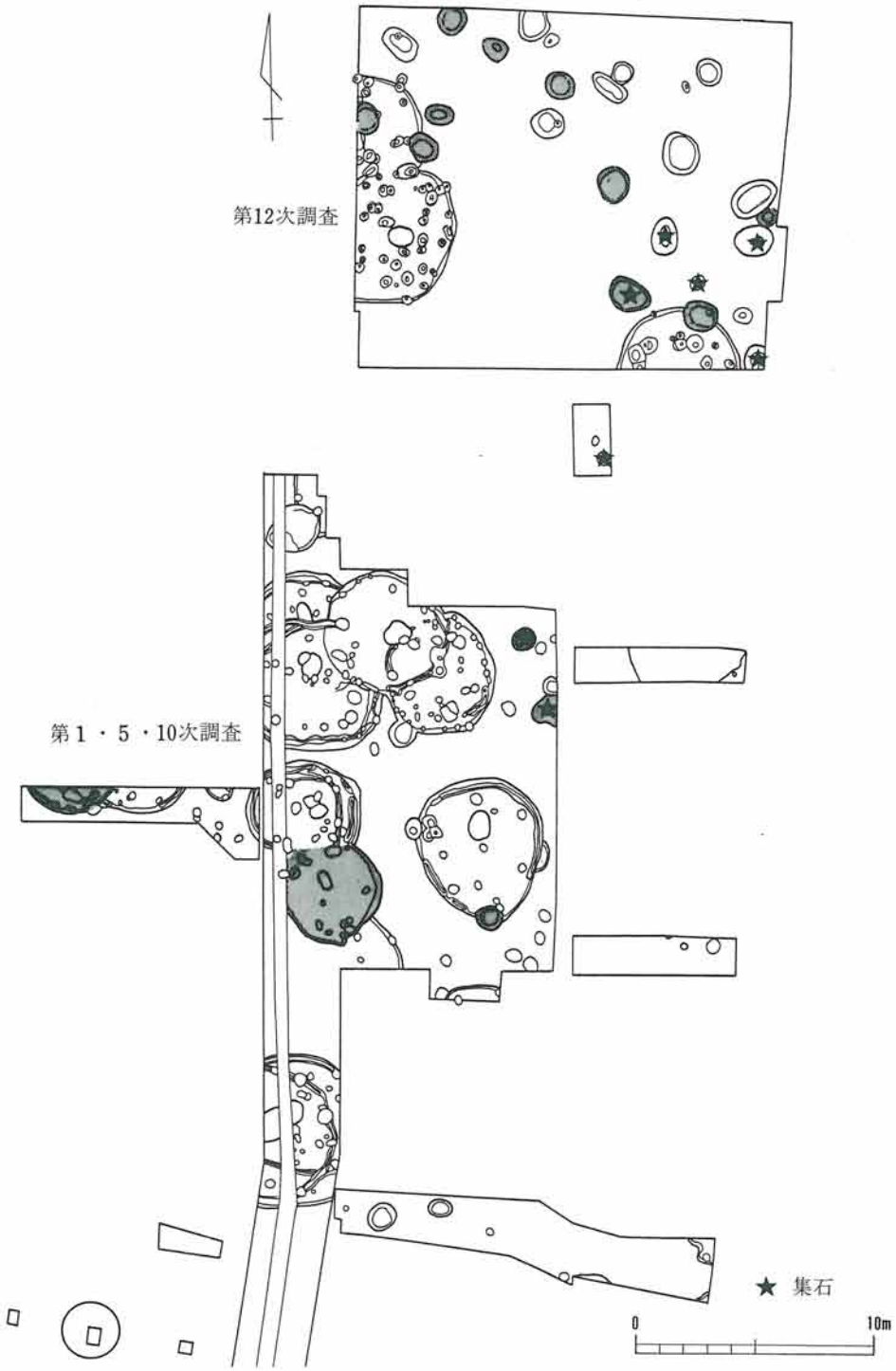
第69・70図は両地区の時期別遺構分布図である。勝坂式期（第69図）は南側の第１・５・10次調査地区に住居址２軒、集石２基、土坑１基があり、北側の第12次調査地点では住居址がなく土壙９基、集石１基といった遺構分布となっている。土壙や集石はいずれも住居址の内側に位置する。住居址と土壙群とはやや離れて分布しており、集石は土壙群の際から住居址との間にかけて分布する。土壙は直径１～1.5mの円形で、遺構確認面から30～60cmの掘り込みをもつ形態である。35号土壙からは粗製石匙、39号土壙からは大形の深鉢が出土している。時期不確定の土壙の中には勝坂式期の土壙と類似する形態を示すものが多いので当該期に属するものが多いと思われる。硬玉製大珠を出土した28号土壙も32号土壙に似た形状を示しており勝坂式期に比定されるのかもしれない。第10次調査で検出された２基の集石は、断面タライ型の土坑の覆土上部に焼礫をもつ形態である。土坑覆土中からは小形台付土器や深鉢・浅鉢形土器が出土している。土坑内出土土器は副葬品と考えられよう。谷口康浩氏はこの種の集石土坑を１類Ｃ種（配置型集石土坑）と形態分類し、「集石墓壙」と性格付けている（谷口　1986）。第12次調査で検出した集石は５基であるが、時期が判明したのは勝坂式期の10号集石１基のみである。10号集石の形態は、断面タライ型で焼礫が覆土上部にまとまり土坑底面近くに間層を持つもので、典型的ではないが谷口氏の１類Ｃ種に類似する。遺物がなく時期決定が難しい集石の中で７号集石は断面タライ型土坑の覆土上部に焼礫が詰まっているもので、10号集石と同じ型態である。他の３基の内８・９号集石は断面が擂り鉢状を呈す土坑をもち、焼礫が比較的土坑内にまで入り込んでいるものである。土坑底面上に礫を含まない層がある点は７・10号集石と共通する。６号集石は礫集中部より少しずれてピット状の土坑があるもので、第10次調査で検出された４号集石と似ている。この様に土壙群の近くには８基もの集石がまとまって存在している。「集石墓壙」や葬送に関係して行われた集石遺構といえよう。時期的には時期不確定のものも含めて勝坂式期と考えておきたい。一般的な土壙（墓壙）と「集石墓壙」がどのような違いを持たせて設置されたのかは明らかにし難い。ここでは二者の存在を指摘するに止めておきたい。

加曽利Ｅ式期（第70図）は第１・５・10次調査地区に第Ⅱ～Ⅴ段階の住居址が10軒とまとまって分布し、他に土坑が２基ある。北側の第12次調査地点では第Ⅲ・Ⅴ段階の住居址が３軒、土壙２基、屋外埋甕３基が検出されている。土壙や屋外埋甕は勝坂式期と同様に住居址群の内側に位置している。しかし、勝坂式期のように住居址群と土壙群とがやや離れて分布するという事は認められず、土壙は住居址群のすぐ側に構築されている。これは既に述べた様に加曽利Ｅ式期の住居址群が勝坂式期に比べ集落内側に分布することと関係するのであろう。内側に住居址群が入った為、土壙群と間に空間を持てなくなったのであろう。第12次調査で検出された土壙で加曽利Ｅ式期と判明したものは２基である。いずれも隅丸長方形を呈し、主軸方向

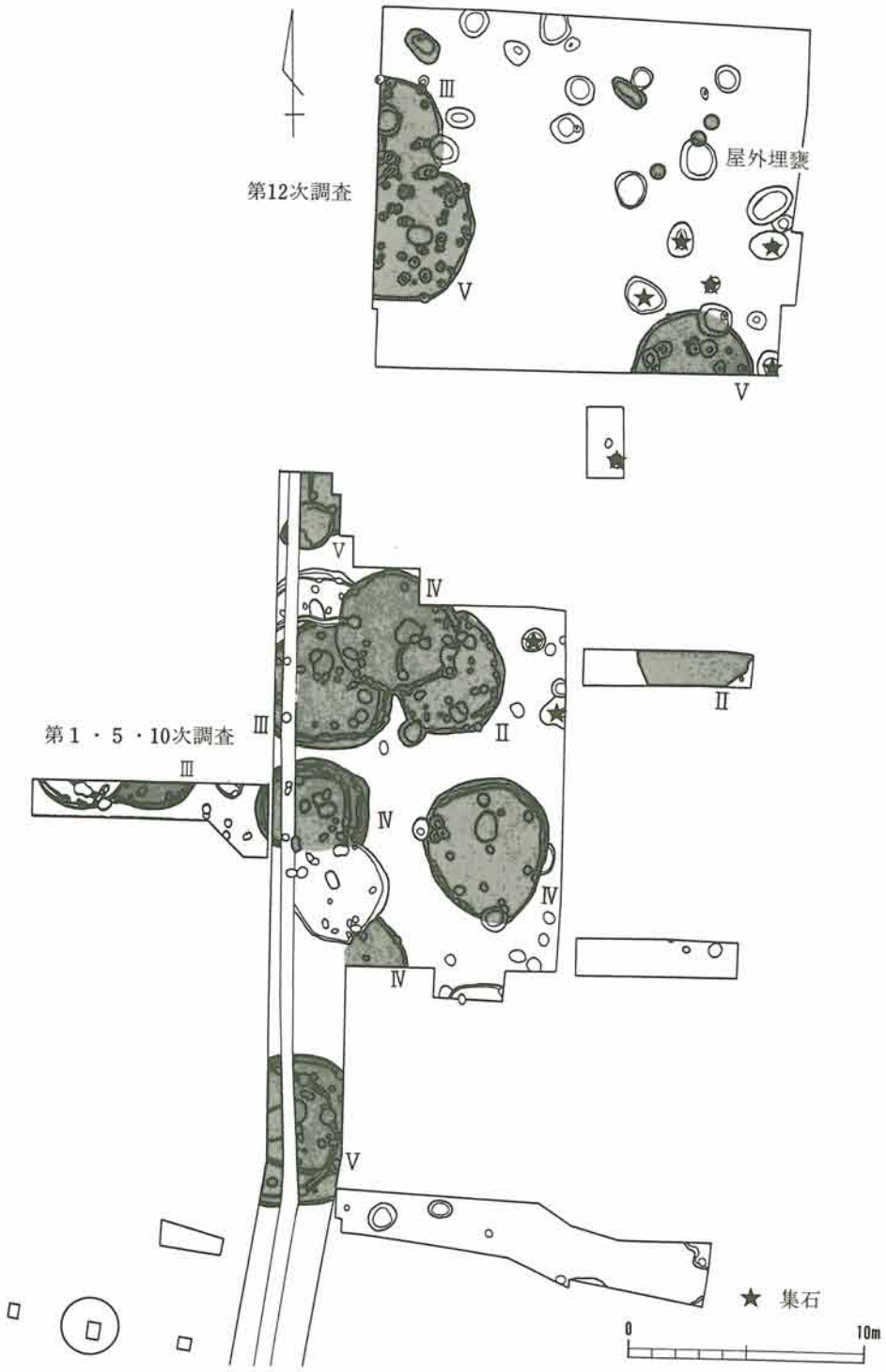


第67図　恋ヶ窪遺跡全体図（勝坂式期）

第68図　恋ヶ窪遺跡全体図（加曽利Ｅ式期）



第69図　時期別遺跡分布図（勝坂式期）



第70図　時期別遺構分布（加曽利E式期）

が北西―南東を示す。土壙内からは土器片が出土したのみである。屋外埋甕は第Ⅵ段階のもので3基が近接して検出されている。屋外埋甕については「埋葬用容器・施設と祭祀に関わる容器・用具・施設」で、埋葬は幼児を主体とした甕棺葬と考えられている（山本　1977）。土壙墓（土葬）と甕棺葬をその対象に応じて用いていたのかもしれない。但し、恋ヶ窪遺跡では第Ⅵ段階の住居址が明らかでなく、集落との関係は今後検討されねばならない。尚、恋ヶ窪遺跡周辺では羽根沢遺跡(未報告)や花沢西遺跡・本町(国分寺村石器時代)遺跡(国分寺史　1986）でも同時期の屋外埋甕が検出されている。いずれも3基が近接しており本町遺跡では集石を伴っている。

以上が勝坂・加曽利E式期の住居址群と墓域の関係である。要点を取りまとめると次の様になる。

墓域は住居址群の内側に位置し、勝坂式期・加曽利E式期とも同じ場所に設定されている。勝坂式期では住居址群と土壙群との間に空間があるが加曽利E式期では認められず住居址群と土壙群が接近する。勝坂式期の墓域には土壙墓と「集石墓壙」の二者がある。加曽利E式期では土壙墓と屋外埋甕となっている。

今のところこの程度が明らかになったのみである。墓域の広がり、墓域以外の集落内部の空間利用など不明な点は多々数え挙げられる。現在進行中である下水道敷設に伴う調査などにより徐々に明らかにされる部分も多かろう。下水道に伴う調査では住居址の他に墓壙と考える土坑も検出されつつある。耳栓や粗製石匙を覆土中から出土したものもある。土坑群は第12次調査地点の東側部分にまとまりそうである。また、住居址群の中で検出されている土坑などについても一考を要しよう。北側居住域である第14次調査地区にも略完形の土器を出土した土坑が数基ある。集落全体における「場」の中で解決しなければならない問題である。今後の検討課題としたい。

(3)　集落外縁部の様相

第13・15次調査地点は集落の外縁部にあたる。西辺の第15次調査では1類と分類した「Tピット」が5基とまとまって検出された。東辺の日立中研調査地区でも5基が検出されている。「Tピット」は北海道・東北地方を中心に分布する土坑で「陥し穴」と考えられ、時期的には縄文中期から後期が多いと言われている。恋ヶ窪遺跡では集落居住域である住居址群の近くに位置している。集落域で「わな猟」を行なうとは考えにくく、集落の境界を意味付けるなどの別の機能を考えても良いのではないだろうか。2基ずつが主軸方向を類似させており、数回の構築が推察される。崖線などの地形との関係も定かでない。集落外縁部にこうした土坑が存在することを提示しておきたい。

（広瀬）

2　遺物について

(1)　打製石斧

打製石斧は縄文時代中期、特に勝坂式・加曽利E式期において急増し、該期の石器組成の中で占める割合は非常に高い。第12次調査においてもその例に漏れず、22号住居址が約22.1%、24号住居址が約22.4%、第12次調査全体でも25.6%と高率を占める。また残核・剝片類を除いた決定器種のみで占める割合は更に高く、約65%にも及ぶ。この打製石斧の量の多さが縄文時代中期の特徴の一つであり、それ故縄文人の生活行動を研究する上で重要な資料たり得るのである。

さて、「恋ヶ窪遺跡調査報告Ⅲ」では打製石斧の製作工程・形態・使用過程について分析し、特に形態においては各個体の正面輪郭線を重ね合わせることにより、各住居址における打製石斧の共通形態を導き出している。今回は更に打製石斧の形態・法量について分析を進めていきたい。

打製石斧の平面形態は大山柏氏の「短冊形・撥形・分銅形」の三分類（大山　1927）以来、更に細分を進める方向と、三分類を踏襲する方向とに二極分化している。これらの詳しい研究史は（斉藤　1983）においてまとめられておりここでは割愛するが、問題は「各中間形が余りに多過ぎ」る点が（大山　1927）で指摘されて以来、それらが何ら解決されないことにある。近年、鈴木次郎氏によって法量を中心とした分類が行われた（鈴木　1983）。これによると、分銅形は身部中央に抉り込みをもつもので上下両線に刃部をもつもの、撥形は長さが最大幅の2.0倍未満で刃部幅や基部幅の1.5倍以上のもの短冊形は前の二者以外、つまり長さが最大幅の2.0倍以上、刃部幅が基部幅の1.5倍未満のもの、と分類している。視覚的な形状にとらわれない分類の一方法ともいえようが、氏の表わした尾崎、早川天神両遺跡例の長幅関係のグラフを見る限り、長幅比２：１の線によって分布の集合が分断されており、「中間形」を振り分ける便宜的な基準にしかなり得ていない。

本文においても法量を基準とした分析・分類を行なうものであり、これによって平面形態との相関関係、更に他遺跡例との比較等についても触れていきたい。

長さと刃部幅について（第71図１）

図中で使用した資料は第12次調査で出土した完形資料116点中、計測に適当な106点である。□は第34図36～38の資料、つまり身部中央に抉りをもつ分銅形、○は第35図39・40の資料で、撥形の典型例、●は前出の二者以外のものを示した（以下「分銅形」、「撥形」、「短冊形」とのみ表記する）。

「短冊形」は、長さは約５～24cmまで分布しさほど集中があるとは言えないが、ここで注目すべきなのは刃部幅が約３～5.5cmに集中することである。「短冊形」資料101点中、この範囲内

には83点が集中し、他の資料は1cm前後に分布する。このことは作業面である刃部において規格性があったことを示し、この意識を前提として作出がなされたと考えられよう。

このことは本例に限られず、既報告の5・14・15号住居址でも同様の集中が見られ、15号住居址例では特に5cm前後に濃密な集中が見られる。また本遺跡以外においても調布市飛田給遺跡（小野崎・赤城　1983）では約4cm～5.5cm、東久留米市自由学園南遺跡（成瀬・伊藤ほか1983）では約3～6cm、また他県例では神奈川県尼崎遺跡（鈴木　1983）では約3.5～6cm、同早川天神森遺跡（鈴木・岡木　1983）でも約3.5～6cm、埼玉県台耕地遺跡（鈴木・西井ほか1983）では第Ⅰ～Ⅲ形態を併せて約3.4～6cm、同北塚屋遺跡（黒坂・西井ほか　1985）では約3.8～6cmに集中する。このように各遺跡例とも本遺跡例と同様の値に集中するということは、遺跡を超えて打製石斧に関しての規格を共有していたと考えることができよう。

なお、これら「短冊形」には極めて大形の例（第29図7）や、小形（第32図19～21等）、細身（同図22等）の例など、点数は少ないが法量によって他資料と分離される資料がある。資料の蓄積を待ってこれらの分析も必要となろう。

「撥形」及び「分銅形」は刃部幅において各々平均9.2cm・8.2cmと、「短冊形」と比較して極めて広く、明確な分離が可能である。また刃部幅を1とすると、長さは「短冊形」が1.5以上となるのに対し、「撥形」は1.1、「分銅形」が1.3前後に分布する。これらが三形態を分類する基準の一つと言えそうである。また「撥形」と「分銅形」における刃部幅の規格については今後の分析によって幾らかの変動が予想される。

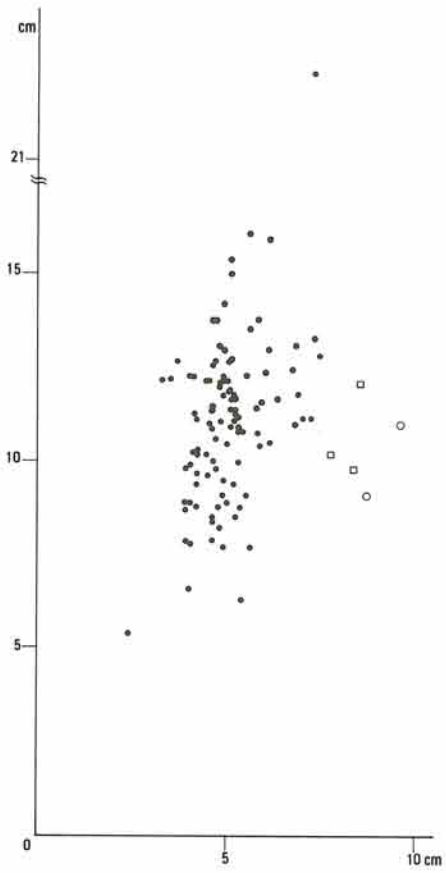
刃部幅と基部幅について（2・3・5）

次に側縁の開き具合、つまり基部・刃部比について見ていきたい。グラフ2を見ると「短冊形」が基部・刃部比1：1.0～1.5に濃密な分布状態を示しており、また「撥形」は1：2.0以上に分布し、両者は明確な分離が可能である。

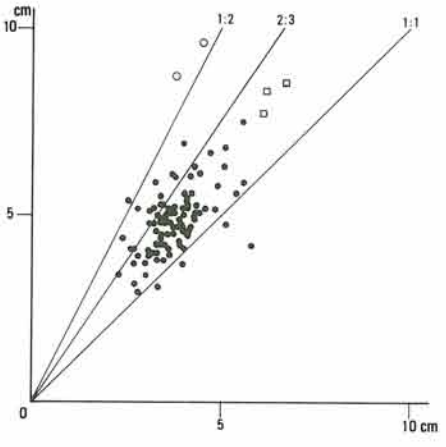
グラフ3は基部を1とした場合の刃部の値とその個体数を表したもの、また5は基部・刃部の比率を模式的に表わしたものである。これを見ると「短冊形」は1.0～1.5に殆どの資料が含まれ、特に1.2をピークとする極めて漸移的な移行を示すことがわかる。従って「短冊形」としたグループ内においては基部・刃部比による数量的な細分は困難である。

また「撥形」とした2点はこれらとは離れてもう一つのピークを形成すると考えられよう。全体的に資料が少ないため、このグラフより「短冊形」と「撥形」との明確な変換点を把握することは難しいが、1.6～1.8の資料はグラフ1より「短冊形」の刃部幅の範囲内に含まれることから、2.0以上を「撥形」として分離することが可能であろう。資料が増えれば更にこの傾向は明確になると考えられる。

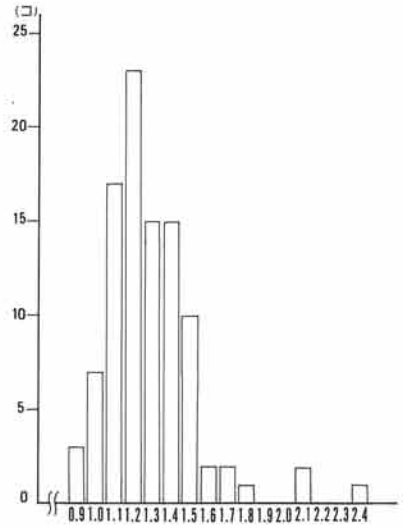
本グラフからはまた、基部幅において刃部幅と同様に濃密な分布を示す範囲がある（基部幅3.0～4.7cm）。基部が着柄と重要な関連性をもつことは言うまでもないことであり、基部に関



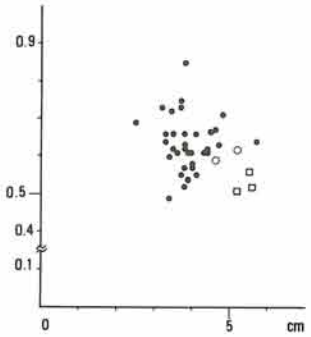
1．最大幅と長さ



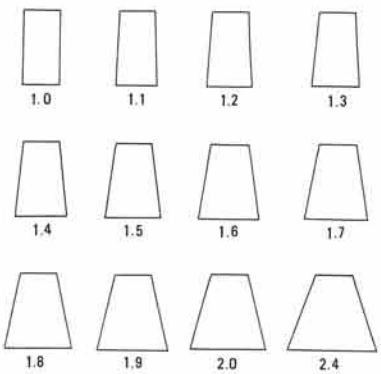
2．基部幅と刃部幅



3．基部幅を１とした場合の刃部比と個数



4.抉り幅と抉りの位置



形態模式図

第71図　打製石斧計測グラフ

して見られる規格性は柄の幅と密接な関連を窺わせる。更にこの分布範囲には「短冊形」だけでなく「撥形」も含まれることがわかる。つまり「撥形」は基部幅においては「短冊形」と共通するが、刃部に向かって急激に開き、刃部幅において「短冊形」と明確な差をもつのである。ここで2点の資料（第35図39・40）を見直して見ると、側縁は中程までは短冊形と共通した調整を行なうが、刃部には素材剝片時の剝離面を大きく残しており、剝片時の形態を変えるまでには調整が至らない。つまり意識的に刃部幅を残したわけであり、ここにもう一つの規格が存在することになる。

側縁と抉りについて（4）

グラフ4は側縁に抉りをもつ資料（第26図19等）や側縁に最小幅を有する資料（第34図35等）、また「撥形」及び「分銅形」を用いて、それらの幅と全長を1とした場合の刃部からの位置を示した。位置はほぼ0.6～0.7前後に集中し、また幅は3.2～4.7cmに集中する。幅はグラフ2における基部幅の集中と共通し、刃部よりの位置は緊縛の位置を示す。また側縁に抉り等を有さない他の資料を見てもこれに共通する部位に「ツブレ」や「タタキ」を有するものが多い。「ツブレ」・「タタキ」は緊縛する紐等が擦り切れるのを防ぐための面取りという目的と、柄の幅と対応させて緊縛部の幅を調整するという目的の二者が考えられ、後者は抉り等をもつ前述の資料において更にその意識が強い。「短冊形」とした資料の中でこれ　側縁の形状によって細分することも可能であるが、今回用いた法量の分析（特に作業面とし　の刃部）では明確に分離し得ず、側縁の形状が製作時に範型としてイメージされていたのか、また単に着柄時における二次的な調整であって結果的に範型から逸脱した形となったのかなど、今後の分析の課題としていきたい。

さて、所謂分銅形は「中央部両側縁に大きな抉りが存在し、この抉りの上下両端がほぼ均等に調整加工が施され、上下両端を刃部とする」（鈴木　1983）と定義づけされる。本文で「分銅形」とした3点は皆上部が下部より小さく（グラフより下部は上部の1.2倍）、「長軸・短軸に対して線対称」（小薬・小島　1986）とはならない。また第34図38以外は上端に刃部を形成しているとは必ずしも言い難い。しかし、刃部幅・基部幅・中央の抉り部幅、また図示しなかったが器厚からも他の形態とは明確な区別が可能であり、他遺跡に見られる分銅形とそれらの属性では共通する。また、従来分銅形は長軸に直行して着柄し、斧・鉞等の用途に使われたと想定することが多い。しかし伐採するという機能を考えれば、両縁に刃部をもつことが第一義的な定義とはなり得ない。従って「分銅形」には両縁に刃部を形成するグループと片縁にのみ刃部を形成するグループの二態が存在することを前提とした分析が必要と言えよう。

小結

以上、打製石斧の法量と形態の相関関係について概略的に述べた。ここで要点をまとめてみたい。「短冊形」は長さが刃部幅の1.5倍以上で、刃部幅は約3～5.5cmに集中する。また基部幅

に対して刃部幅は1.5倍未満で、基部幅も約３～4.7㎝に集中する。「撥形」は長さが刃部幅の1.1倍前後、基部幅の2.0倍以上で、刃部幅が約9.2㎝と「短冊形」と比較して広い刃部をもつ。また「分銅形」は身部中央に抉りをもち、長さが刃部幅の1.3倍、刃部幅8.2㎝と「撥形」同様広い刃部をもつ。更に「分銅形」は上下両縁に刃部をもつものと片縁にのみ刃部をもつものとがある。これらの諸属性は本報告（第12次調査）の資料のみを分析した結果であり、他遺跡の分析によっては若干数値の変動は予想されるが、大略上記の結果と違わないものと思われる。なお刃部幅等の数量的な規格性は本遺跡の整理が更に進む過程で変化するであろうし、本来各々の形態の定義とはなり得ないものである。製作者としての縄文人個人の規格性として把握し（一括資料の分析）、遺跡内・遺跡間、更に地域性へと発展的な研究を進める上で有効な一方法である。

さて、従来打製石斧の形態を巡って問題とされた「中間形」はすべて本文における「短冊形」と属すこととなり、「撥形」は極めて数が少ない結果となった。前述した「大形」・「小形」・「細形」のグループと同様「短冊形」と比較した場合の機能差・用途差の把握、また「分銅形」を含めた新器種の設定など、課題は多い。これら打製石斧の分析を進めていくことにより、恋ヶ窪遺跡の一面を示すことが可能となろう。

（遠藤）

引用参考文献

赤沢威・小田静夫・山中一郎　1980「日本の旧石器」　立風書房

秋山道生・斉藤基生ほか　1978「貫井」　小金井文化財調査報告書5

安孫子昭二ほか　1974「貫井南遺跡」　小金井市貫井南遺跡調査報告

安孫子昭二・可児通宏ほか　1969「№46遺跡」　多摩ニュータウン遺跡調報告Ⅶ

安孫子昭二・可児通宏ほか　1971「平尾遺跡調査報告Ⅰ」　南多摩群平尾遺跡調査会

安孫子昭二・秋山道生・中西充　1980「東京・埼玉における縄文中期後半の編年試案」　神奈川考古10

安藤文一　1983「硬玉製品出土遺跡」　考古遺跡・遺物地名表—原始・古代—柏書房

石岡憲雄　1980「所謂「Tピット」について」　土曜考古2号

市川健二郎　1949「武蔵国分寺恋ヶ窪敷石遺跡発掘調査報告」　学習院史学会報1

伊藤富治夫　1976「前原遺跡」　前原遺跡調査会

今村啓爾　1983「陥穴（おとし穴）」『縄文文化の研究2』　雄山閣

今村啓爾　1985「五領ヶ台式土器の編年」　東京大学文学部考古学研究室研究紀要4

今村精一・千代肇ほか　1977「函館空港第4地点・中野遺跡」　函館市教育委員会

内山真澄ほか　1977「S267，268遺跡」　札幌市文化財調査報告書XⅣ　札幌市教育委員会

江崎輝彌　1957「所謂硬玉製大珠について」　銅鐸13

大山　柏　1927「神奈川県下新磯村字勝坂遺物包含地調査報告書」　史前学会

岡崎完樹ほか　1975「中山谷」　中山谷遺跡調査会

岡本孝之・鈴木次郎ほか　1977「尾崎遺跡」　神奈川県埋蔵文化財調査報告13

岡本孝之・鈴木次郎ほか　1983「早川天神森遺跡」　神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告2

小田静夫　1976「縄文中期の打製石斧」　どるめん10

小田静夫　1983「スタンプ形石器」『縄文文化の研究7』　雄山閣

小野崎満・赤城高志　1983「調布市飛田給遺跡」　調布市教育委員会・調布市遺跡調査会

黒坂禎二・西井幸雄ほか　1985「北塚屋(Ⅱ)」　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書48

恋ヶ窪遺跡調査会　1979「恋ヶ窪遺跡調査報告Ⅰ」

恋ヶ窪遺跡調査会　1980「恋ヶ窪遺跡調査報告Ⅱ」

恋ヶ窪遺跡調査会　1982「恋ヶ窪遺跡調査報告Ⅲ」

小薬一夫・小島正裕　1986「分銅形」打製石斧の系譜（覚書）」　東京考古4

国分寺市　1986「国分寺市史　上巻」

国分寺市遺跡調査会　1985「武蔵国分寺跡発掘調査概報Ⅷ」

国分寺市遺跡調査会　1987「恋ヶ窪南遺跡発掘調査概報」

小林達雄　1973「多摩ニュータウンの先住者—主として縄文時代のセトルメント・パターンについて—」

月刊文化財第112号

小林達雄　1975「タイポロジー」『日本の旧石器文化１』　雄山閣

斉藤基生　1983「打製石斧研究の現状」　信濃35－４

佐原　真　1977「石斧論―横斧から縦斧へ―」　考古論集

十菱駿武ほか　1982「堂ヶ谷戸遺跡Ⅰ・Ⅱ」

鈴木次郎　1983「打製石斧」『縄文文化の研究７』　雄山閣

鈴木敏昭・松村和男ほか　1983「台耕地(1)」　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書27

鈴木保彦　1978「下北原遺跡」　神奈川県埋蔵文化財調査報告14

鈴木保彦　1986「勝坂式土器の展開」　日本大学芸術学部紀要15

瀬川司男　1981「陥し穴状遺構について」　紀要Ⅰ　岩手県埋蔵文化財センター

谷井彪・宮崎朝雄ほか　1982「縄文中期土器群の再編」　研究紀要　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

谷口康浩　1986「縄文時代「集石」に関する試論」　東京考古４

田村壮一　1987「陥し穴状遺構の形態と時期について」　紀要Ⅶ　岩手県埋蔵文化財センター

多摩市遺跡調査会　1985「和田・百草遺跡群・落川南遺跡」　多摩市埋蔵文化財調査報告８

多摩都市計画道路事業１・３・１号線関連遺跡調査会　1986「和田・百草遺跡群」　多摩市埋蔵文化財調査報告10

多摩市遺跡調査会　1987「向ヶ丘・落川南遺跡」　多摩市埋蔵文化財調査報告13

寺村光晴　1965「硬玉製大珠論―源流と攻玉技術と文化―」　上代文化35

西村正衛　1972「阿玉台式土器編年研究の概要―利根川下流域を中心として―」　早稲田大学大学院文学研究科紀要18

広瀬昭弘　1984「硬玉製大珠について」　東京の遺跡５

広瀬昭弘・秋山道生・砂田佳弘・山崎和巳　1985「縄文時代集落の研究―野川流域の中期を中心として―」　東京考古３

松浦宥一郎・伊藤恒彦・成瀬晃司ほか　1983「自由学園南遺跡」　自由学園

三上徹也　1986「中部・西関東地方における縄文時代中期中葉土器の変遷と後葉土器への移行」　長野県考古学会誌51

三鷹市遺跡調査会　1983「三鷹市立第五中学校遺跡」　三鷹市埋蔵文化財調査報告８

八幡一郎　1942「関東地方先史硬玉製品目録」　人類学雑誌57－11

山口　明　1978「縄文時代中期初頭土器群の分類と編年」　駿台史学43

吉田　格　1951「武蔵国分寺町八幡前遺跡概観」　武蔵野33－３・４

吉田　格　1957「東京都国分寺町恋ヶ窪竪穴住居址の土器に就いて」　銅鐸12

吉田　格　1962「東京国分寺町中期縄文式住居址調査概報」　武蔵野41－３・４

和田　哲　1975「西上遺跡」　昭島市教育委員会

あ と が き

恋ヶ窪遺跡の学界への紹介は、大正11年の三輪善之助氏による石囲遺構に始まる。これを受けて大正14年には八幡一郎氏が、青森県天狗岱遺跡の人骨出土例をあげ、長野県広畑遺跡と共に本例のように土器に自然石を廻らしたものを、石囲墓であろうと推定している。日本の考古学がまだ前期的様相にあるなつかしい時代のことである。昭和に入っては12年に後藤守一氏が敷石住居址を発掘紹介している。恋ヶ窪遺跡はこのように早くから知られていたものであり、戦後間もなく各地で発掘が行われ始めたと共に、恋ヶ窪はじめ周辺での調査も相次ぎ、多くの遺構・遺物も発掘されてきた。

このような趨勢の中で、やがて国分寺史跡地にまで開発が及んでき、更に武蔵野線開通とそれの中央線との交点に「西国分寺駅」の開設するのを契機として、市に常設の調査組織が置かれた。一つを国分寺址、他を恋ヶ窪を主とする調査団とし、後者の指導を永峯光一氏に託した。

本書に報告する調査はその時期のものである。恋ヶ窪遺跡は、国分寺市域の石器時代を語るためには重要なもので、時期は縄文中期を主とし、性格は住居址と墓壙を含む縄文人の生活を物語るものである。広域にみた恋ヶ窪付近遺跡の中で、恋ヶ窪遺跡と名付けた範囲は台地南西域で、その中心と思われる300×200mに遺構が集まり、第12次はこの地区で加曽利E式の住居址3、土壙17、集石5、屋外埋甕3を発掘している。ここで特記するのは居住区である住居址群の内側に墓域と考えられるものがあることで、土壙の中には硬玉製大珠や粗製石匙などが出土したものもあることである。なお、集石はまとまって存在し墓域に関係するものと思われる。

次ぎに第13次調査で、国分寺址から北に延びるＳＦＩ道路跡と推考できるものが発見されたことも特記しなければならない。これは、国分寺址の南北溝と多少方位を異にして北進し、僧寺・尼寺両址の中間を断ち割るようにして、さらに北に延びている道路と推考されるものでそれの延長がこの地に及んでいるとすれば、その解釈を如何になすかという重要な資料である。

国分寺市の埋蔵文化財は、従来より武蔵国分寺址をもっているために、とかくそれに目を奪われがちであったが、石器時代研究上も先土器から始まり縄文遺跡に及ぶ優れたものが見られ、近隣地域を含めて貴重な研究資料を提供している。近時都市化が急速に進み、遺跡が危機にさらされることも多く、市の対応も容易ではない。そこで、市は従来の二つの調査会を統合し市として一本で市域の調査に当たる事を上策とし、61年春新体制にはいった。調査に当たった広瀬昭弘氏ほかの諸氏の並々ならぬ努力が本書にはにじみ出ている。関係者の一人として厚く感謝するものであり、同時に地域のかたがたの御協力に御礼申し上げる次第である。

（滝口　宏）

恋ヶ窪遺跡調査会組織

（調査当時）

会長	興津精二	国分寺市教育委員会教育長
副会長	星野亮勝	国分寺市文化財保護審議会委員長
理事	滝口宏	東京都文化財保護審議会委員
	永峯光一	東京都文化財保護審議会委員
	坂詰秀一	東京都文化財保護審議会委員
	吉田格	国分寺市文化財保護審議会委員
	藤間恭助	国分寺市文化財保護審議会副委員長
	江崎昭彦	東京都教育庁社会教育部文化課埋蔵文化財係長
	坂本喜市	国分寺市社会教育委員会議議長
	進藤文夫	国分寺市教育委員会次長
監事	山田弘	国分寺市教育委員会社会教育参事
事務局長	山下実	国分寺市教育委員会文化財課長（昭和56年２月逝去）
	安田暉	国分寺市教育委員会文化財課長（昭和56年２月）
事務局員	安田暉	国分寺市教育委員会文化財課庶務係長（～昭和56年２月）
	小林文治	国分寺市教育委員会文化財課庶務係長（昭和56年２月～）
	鈴木晃	国分寺市教育委員会文化財課員

調査団

調査団長	永峯光一	前出	
顧問	滝口宏	前出	
参与	吉田格	前出	
調査員	広瀬昭弘	国分寺市教育委員会文化財課員	
	秋山道生		（昭和55年10月退出）
	小松眞名		（昭和55年３月退出）
	砂田佳弘		
	実川順一		

国分寺市遺跡調査会組織

（昭和62年12月現在）

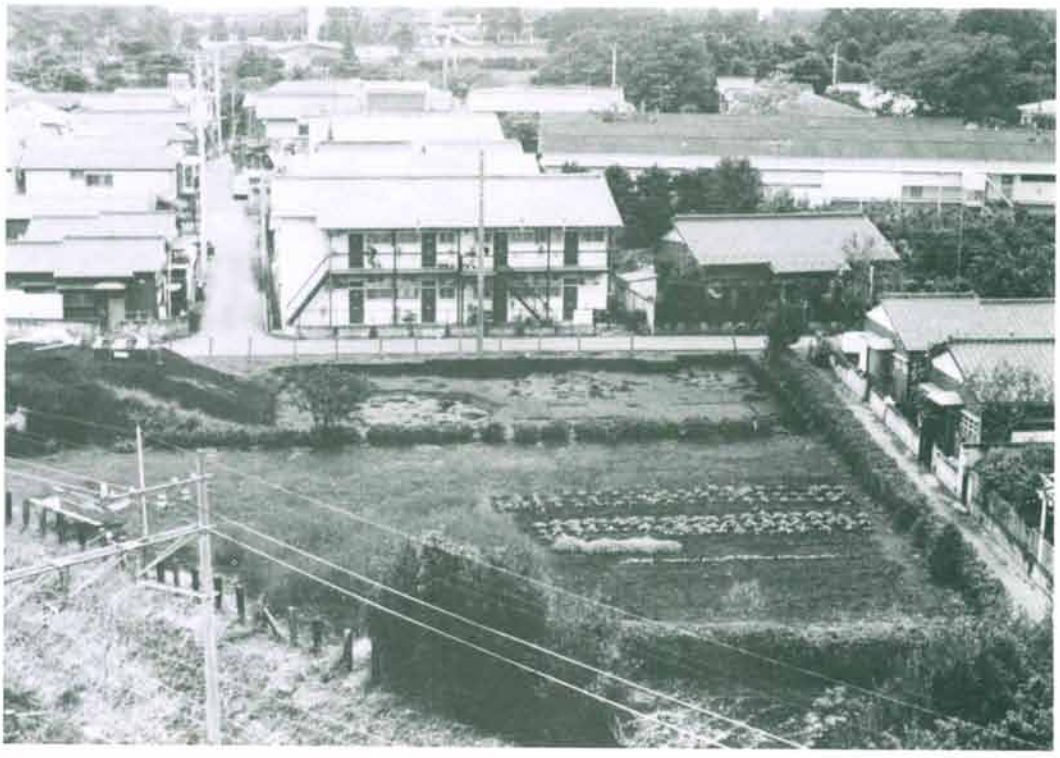
会長	星野亮勝	国分寺市文化財保護審議会委員長
副会長	滝口宏	東京都文化財保護審議会会長
理事	永峯光一	東京都文化財保護審議会委員
	坂詰秀一	東京都文化財保護審議会委員
	大川清	国士館大学教授
	本多良雄	国分寺市長
	内野孝治	国分寺市教育委員会委員長
	興津精二	国分寺市教育委員会教育長
	坂本喜市	国分寺市社会教育委員会議議長
	藤間恭助	国分寺市文化財保護審議会委員
	佐藤敏也	国分寺市文化財保護審議会委員
	松井新一	国分寺市文化財保護審議会委員
	吉田格	国分寺市文化財保護審議会委員
	佐々木護	東京都教育庁社会教育部文化課副主幹
	山田弘	国分寺市教育委員会社会教育部長
監事	浅見正平	国分寺市社会教育委員
	高津喜三雄	東京都教育庁社会教育部文化課埋蔵文化財係長
事務局長	関口信良	国分寺市教育委員会文化財課長
事務局員	田倉武市	国分寺市教育委員会文化財課庶務係長
	鈴木晃	国分寺市教育委員会文化財課庶務係員

調査団

調査団長	滝口宏	前出
主任調査員	有吉重蔵	国分寺市教育委員会文化財課文化財保護係長
調査員	福田信夫	国分寺市教育委員会文化財課文化財保護係員
	広瀬昭弘	国分寺市教育委員会文化財課文化財保護係員
	上村昌男	国分寺市教育委員会文化財課文化財保護係員
	三木弘	
	上敷領久	
	遠藤佐	

図　　版

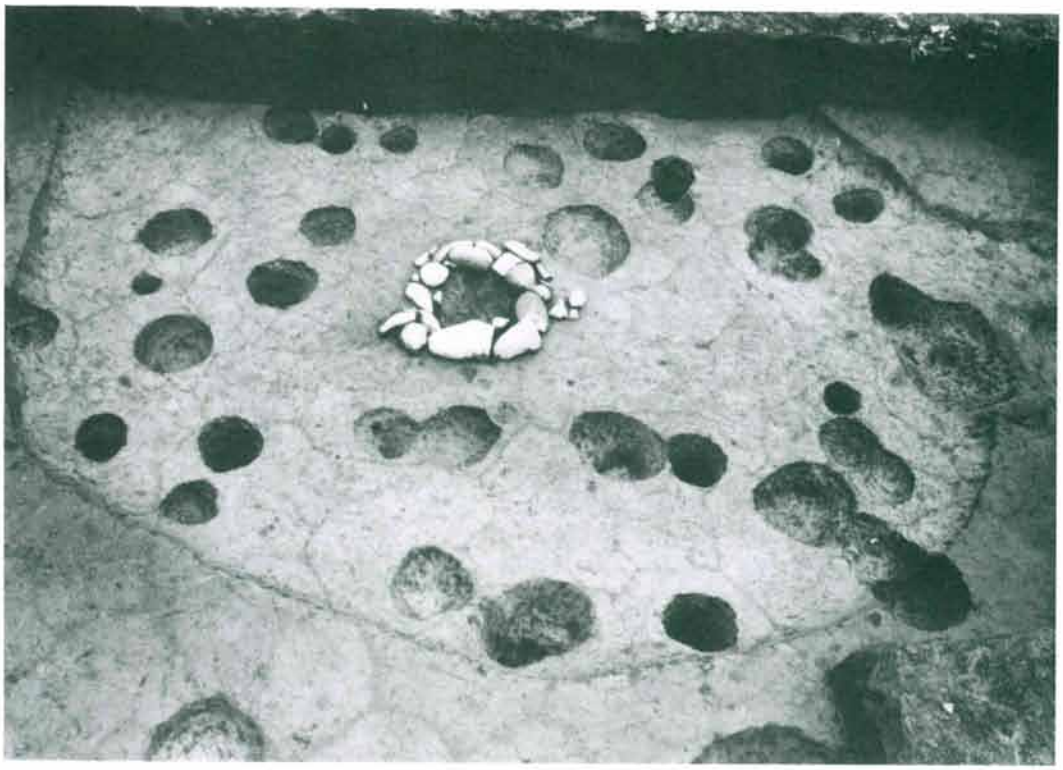
遺跡付近　航空写真



遺跡近景(日立中央研究所より)

第12次調査　調査区南半(西から)

同北半(東から)



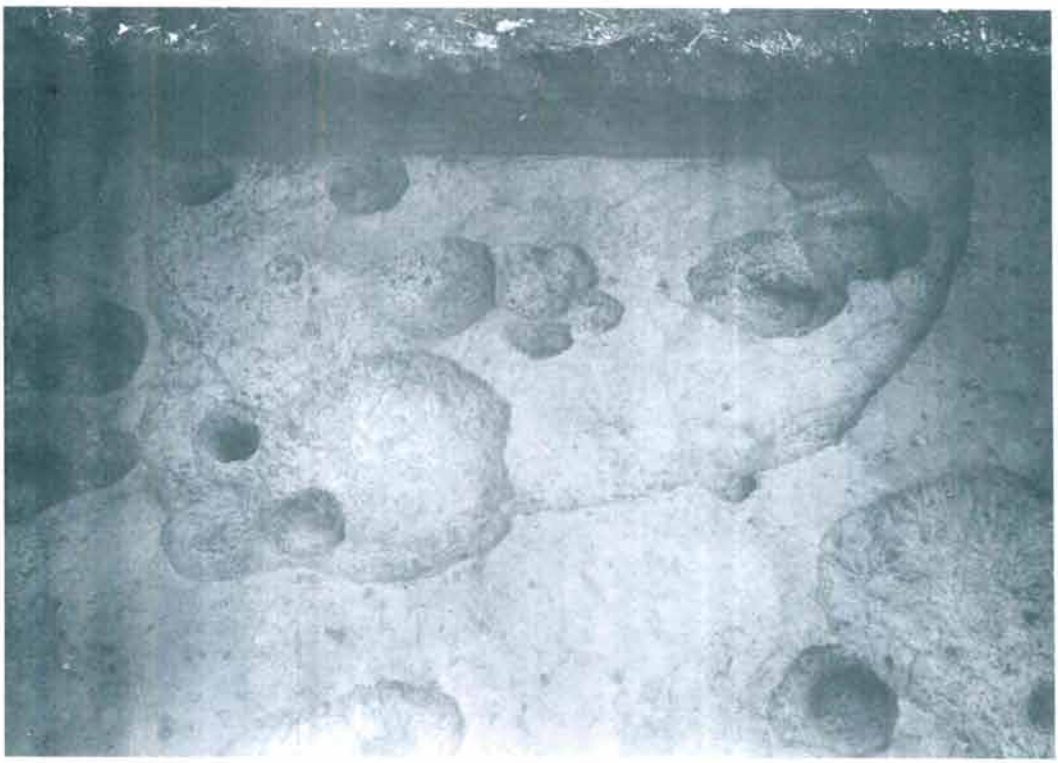
22号住居址

出土状態

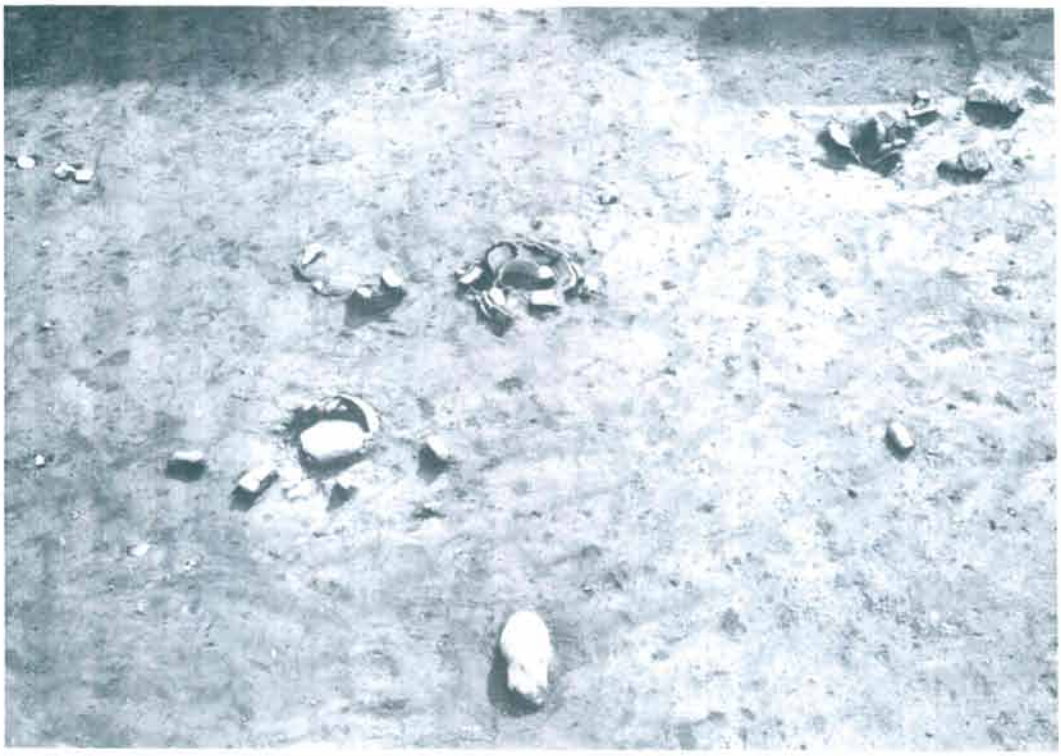
器台出土状態

炉址

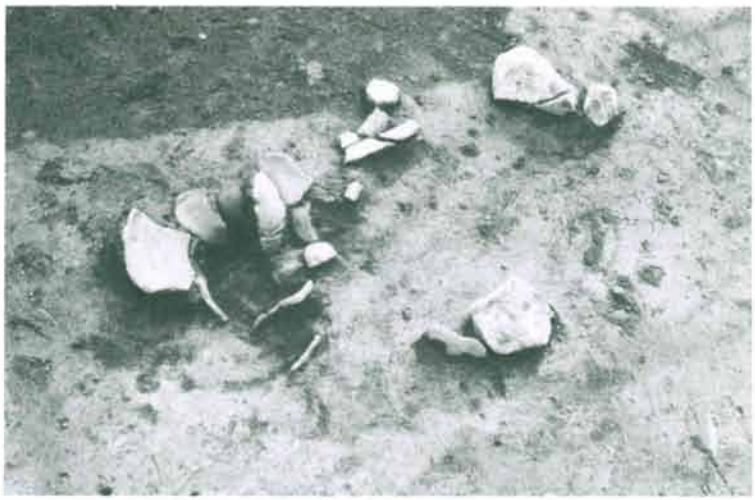
住居址内埋甕



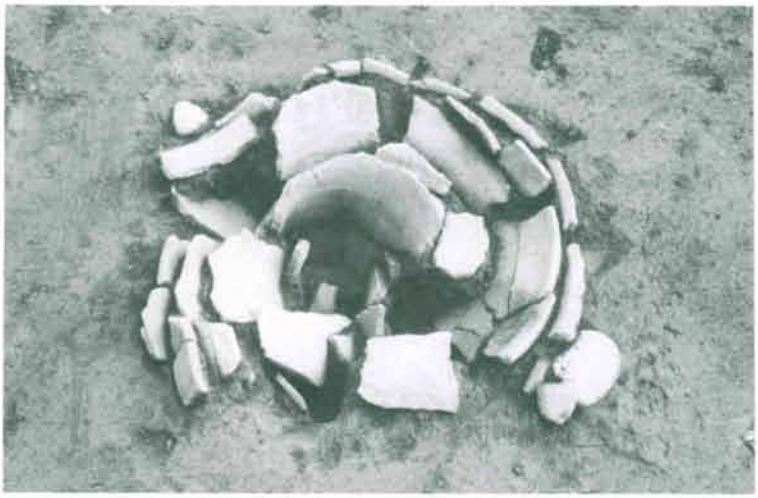
24号住居址



屋外埋甕全景



1号屋外埋甕



2号屋外埋甕

3号屋外埋甕

集石全景

7号集石

7号集石断面

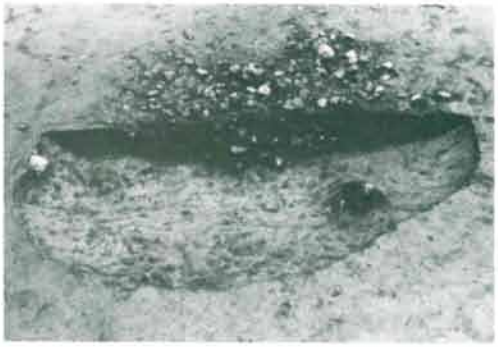
8号集石

8号集石断面

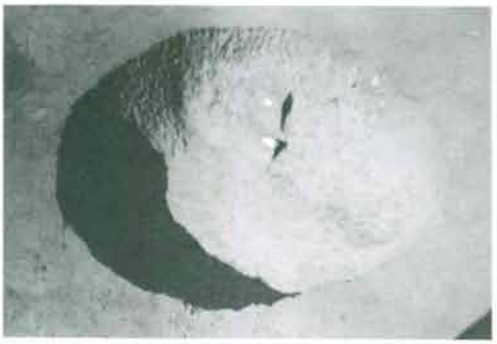
6 号集石

9 号集石断面

10号集石



10号集石断面

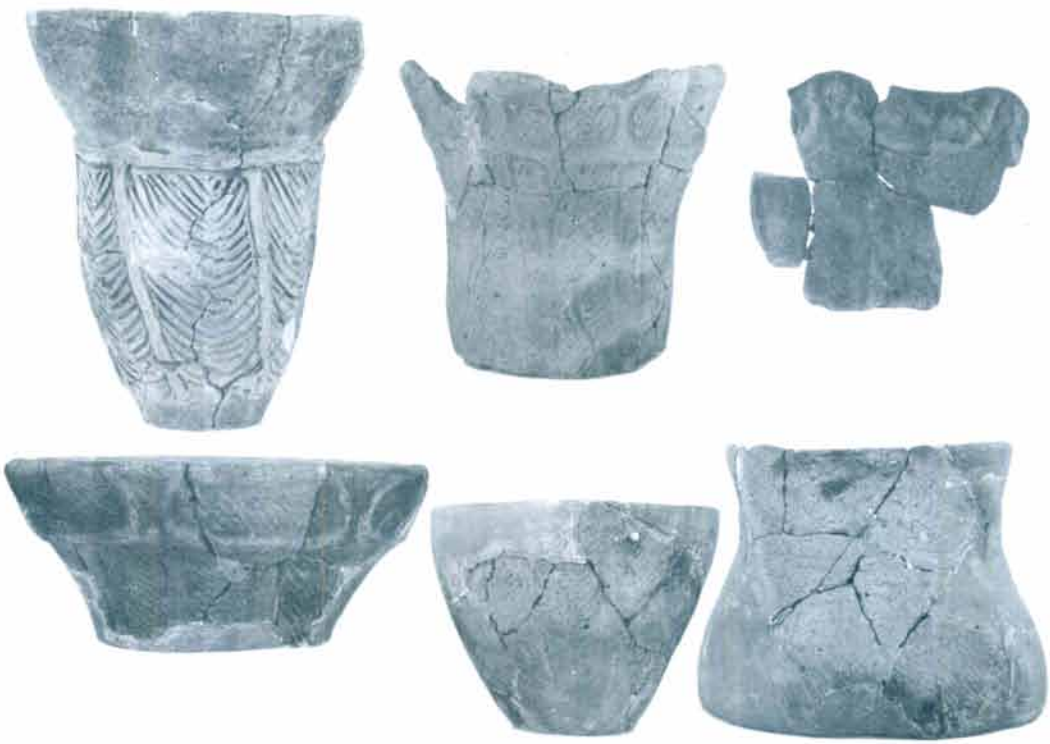


28号土壙

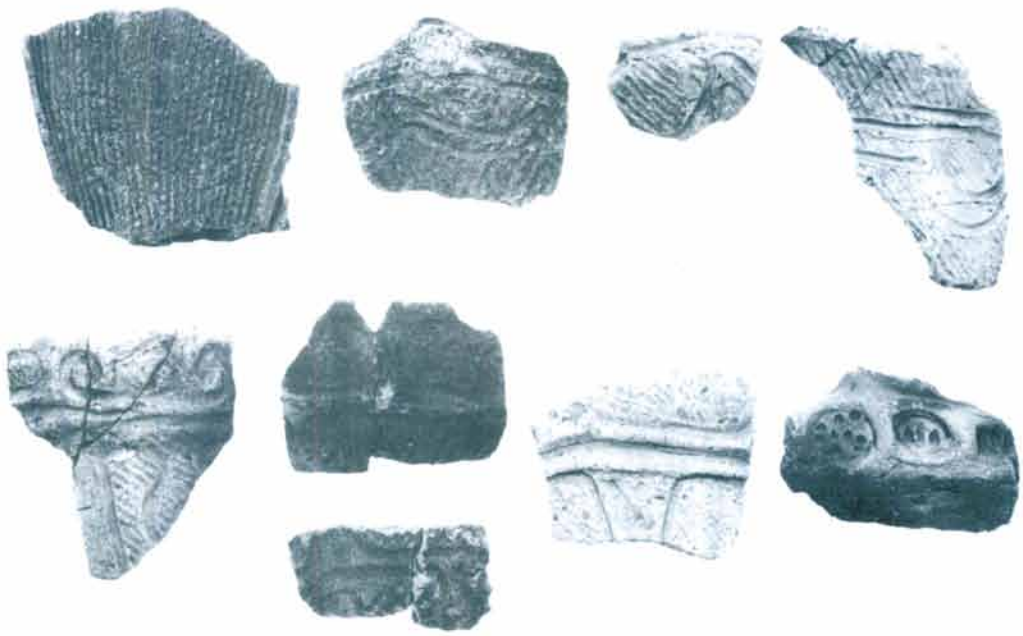
硬玉製大珠出土状態

35号土壙

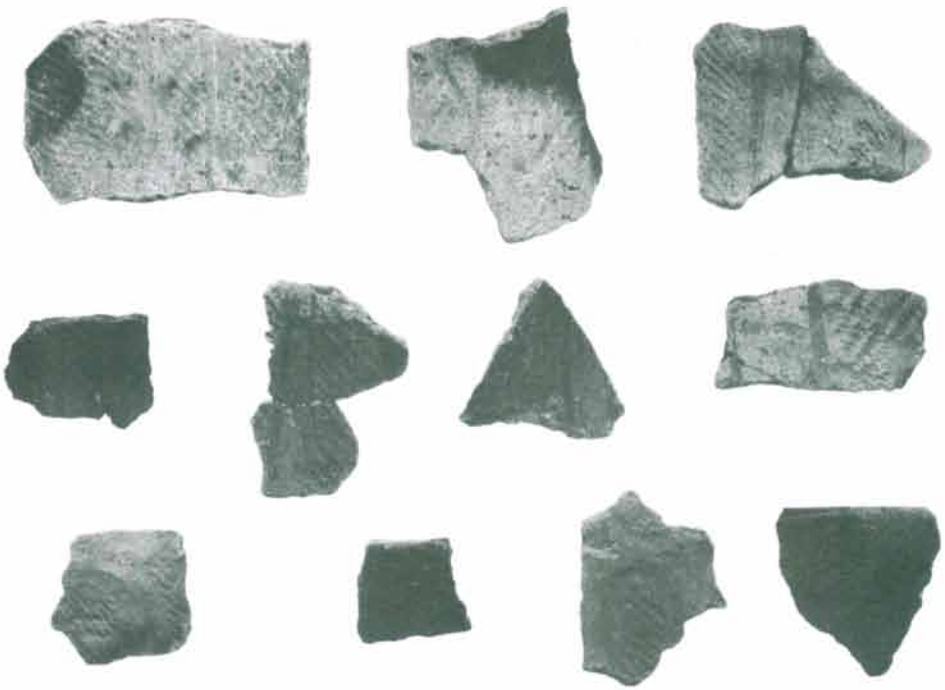
発掘風景



22号住居址出土土器

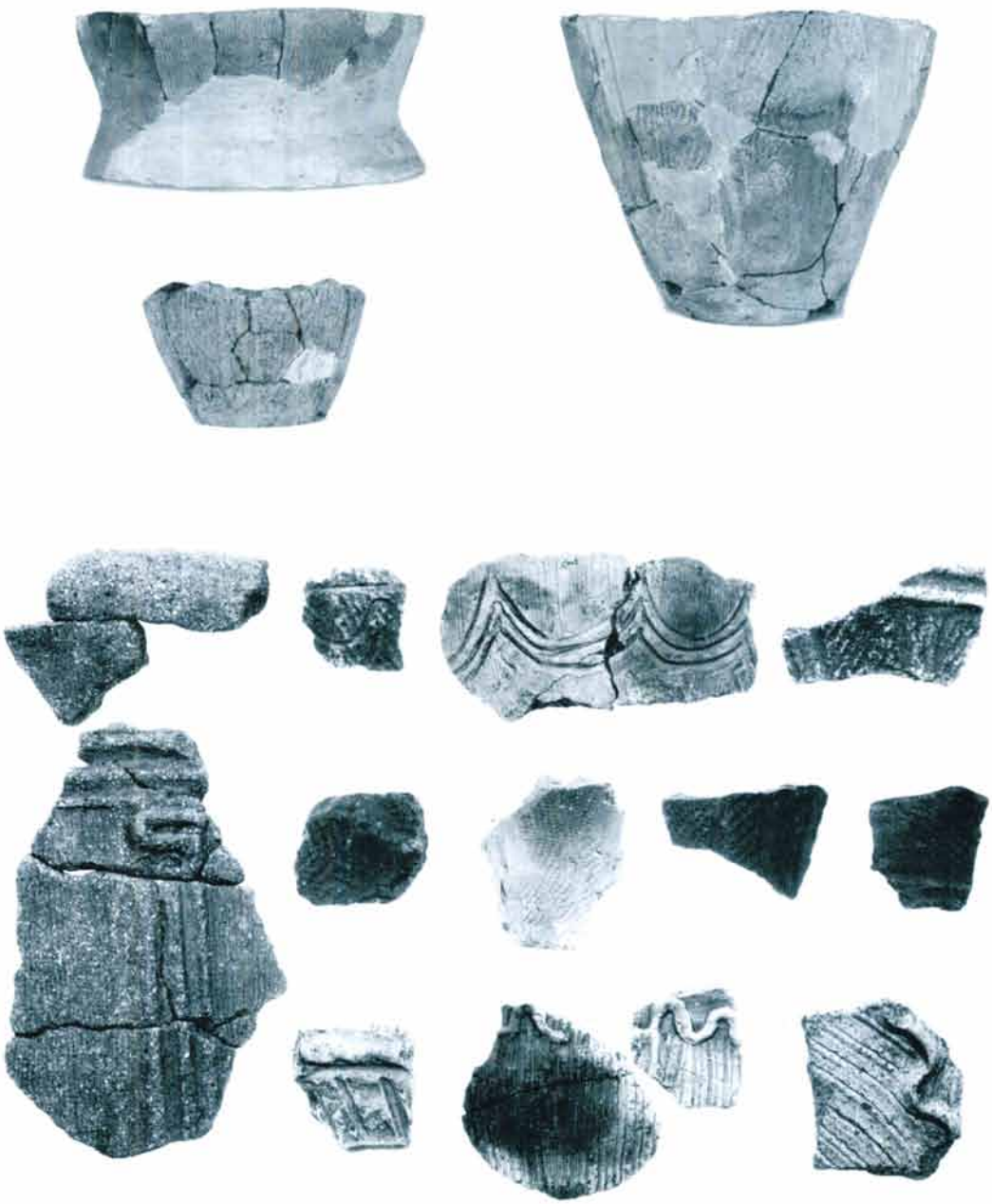


22号住居址出土土器



22号住居址出土土器

22号住居址出土土器



24号住居址出土土器

1号

2号

2号

2号

3号

屋外埋甕出土土器

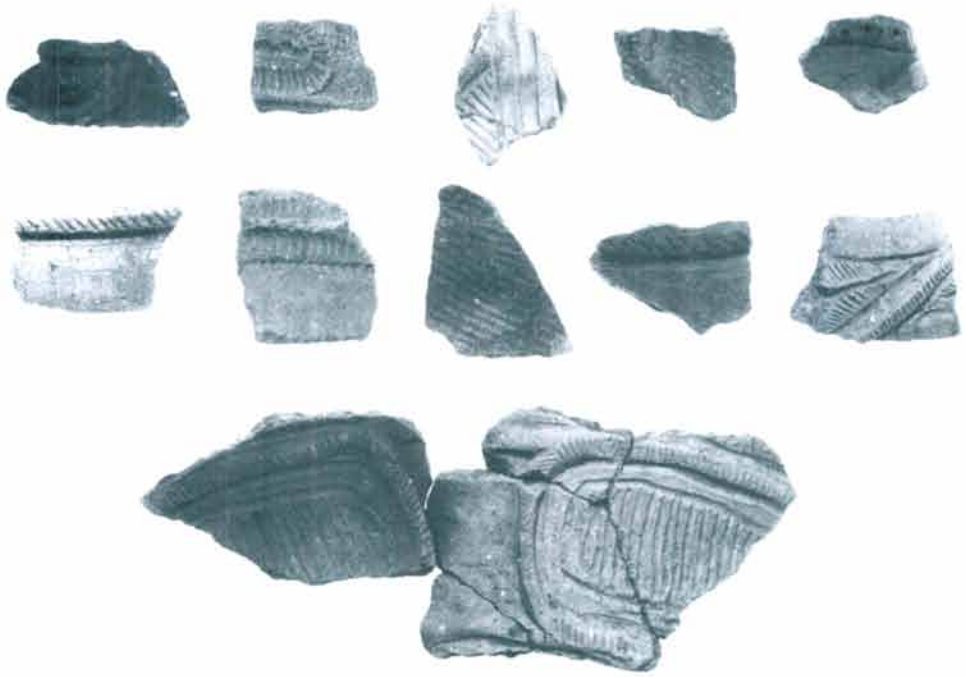
20号土壙

その他の遺構・遺構外出土土器

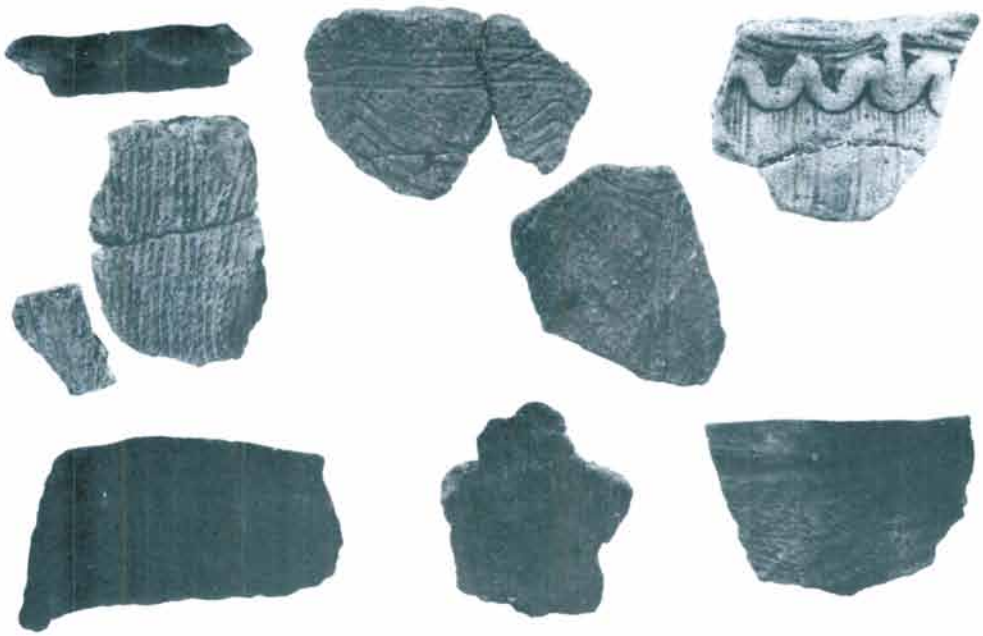
後期

器台

その他の遺構、遺構外出土土器

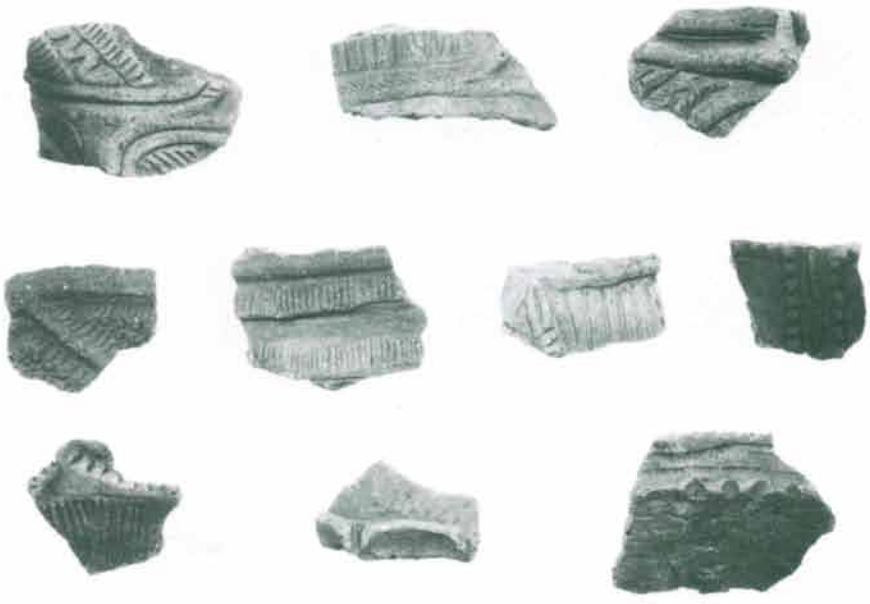


遺構外出土土器

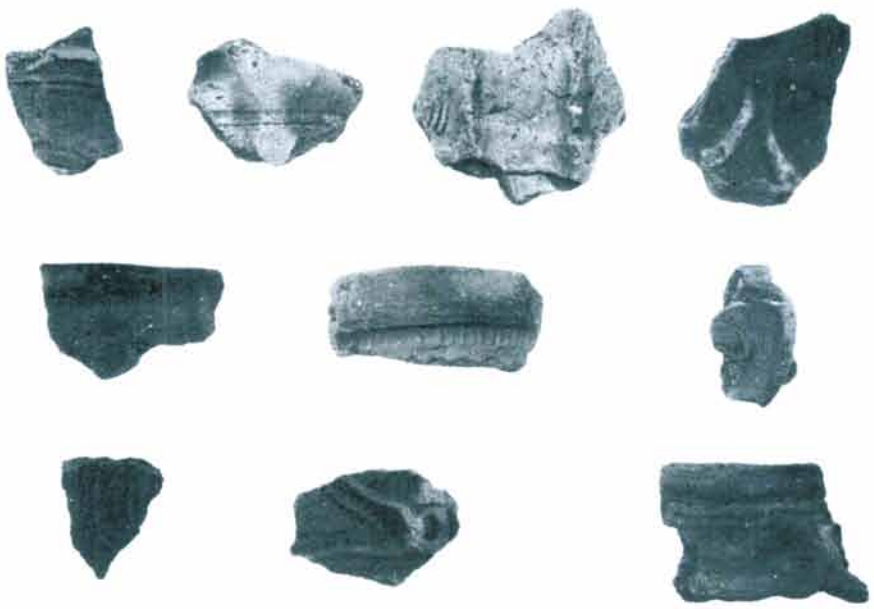


遺構外出土土器

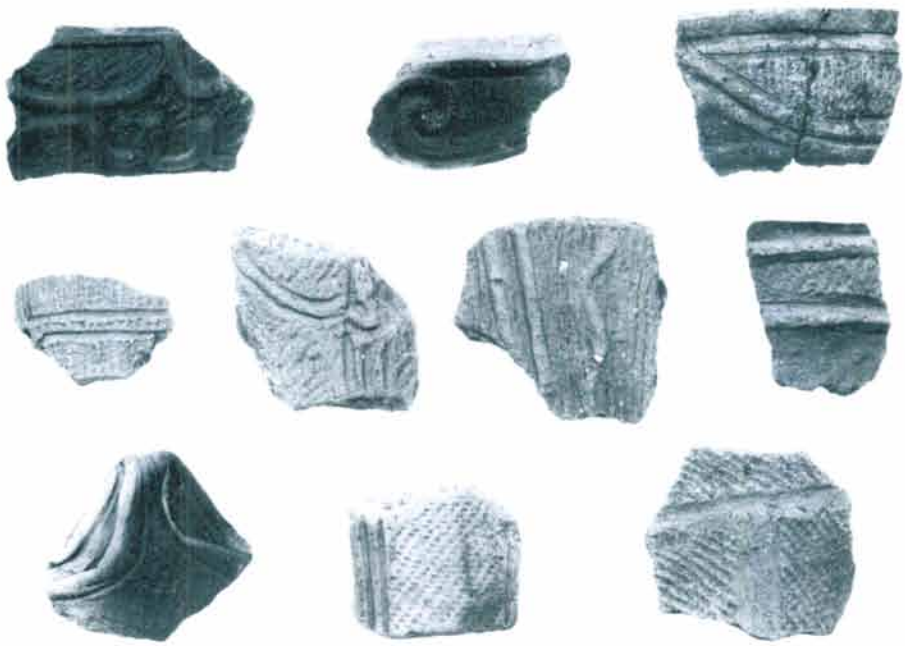
遺構外出土土器



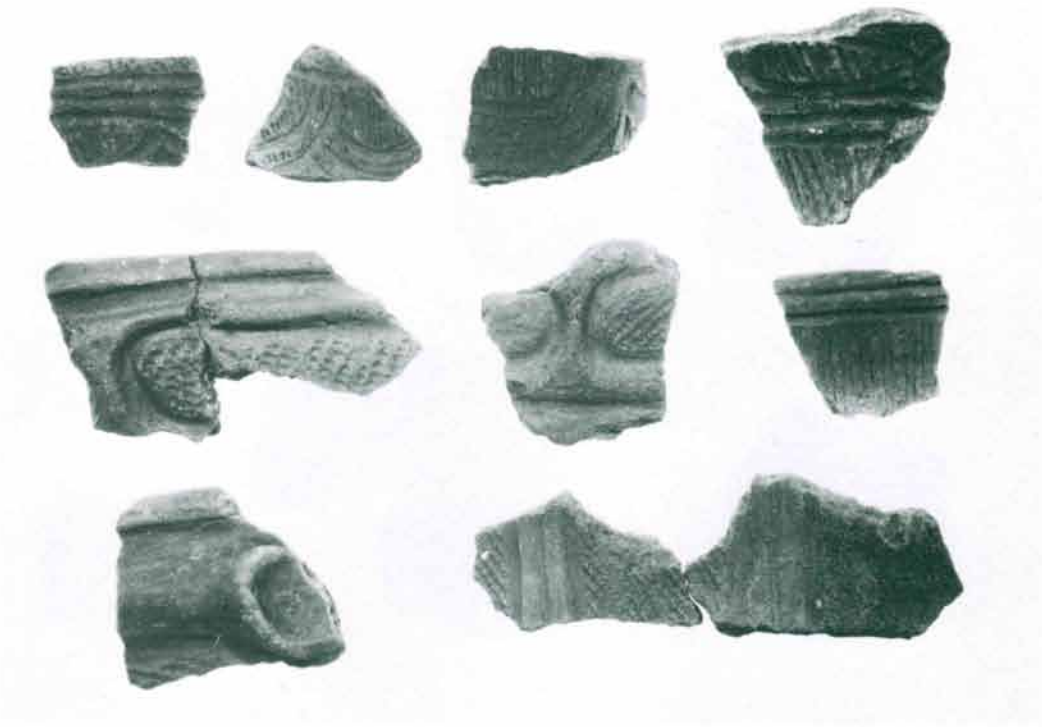
遺構外出土土器



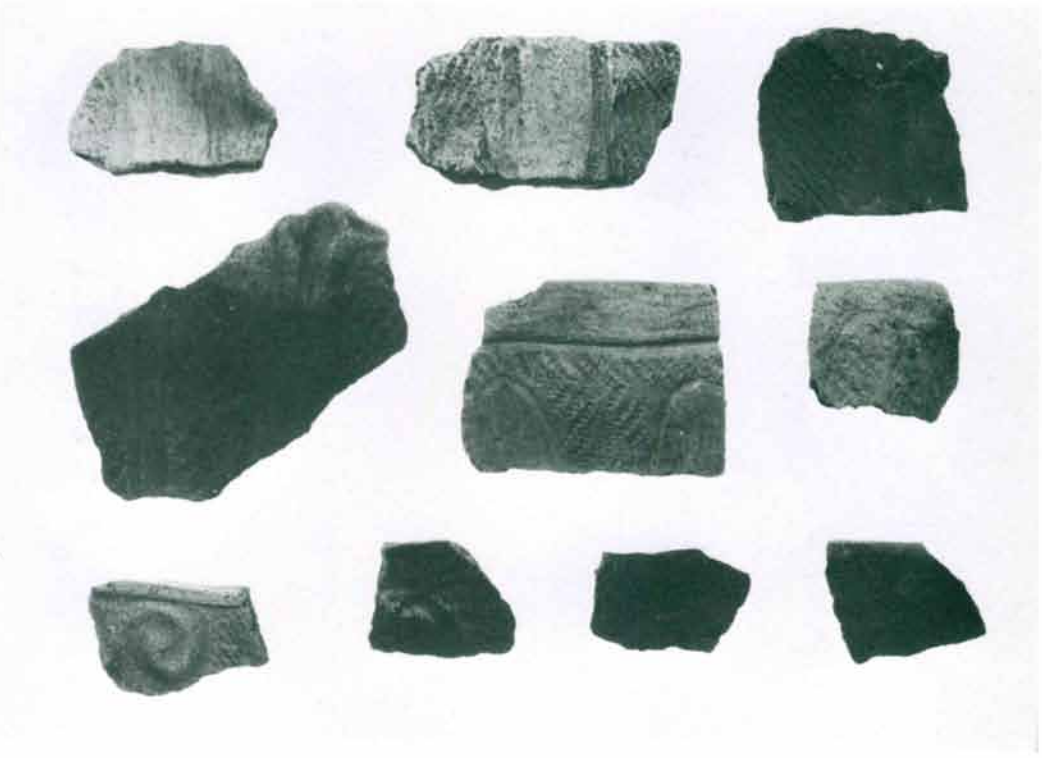
遺構外出土土器



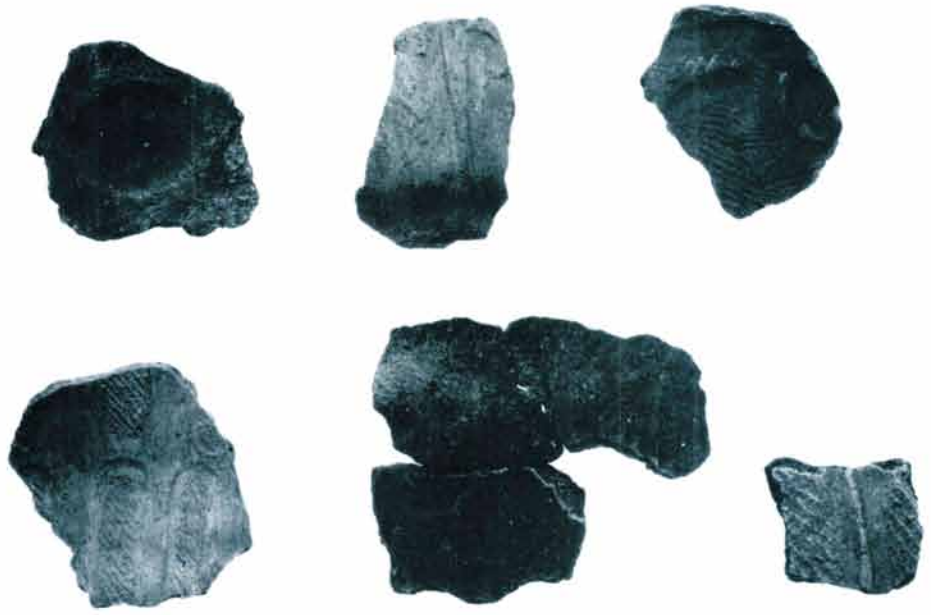
遺構外出土土器



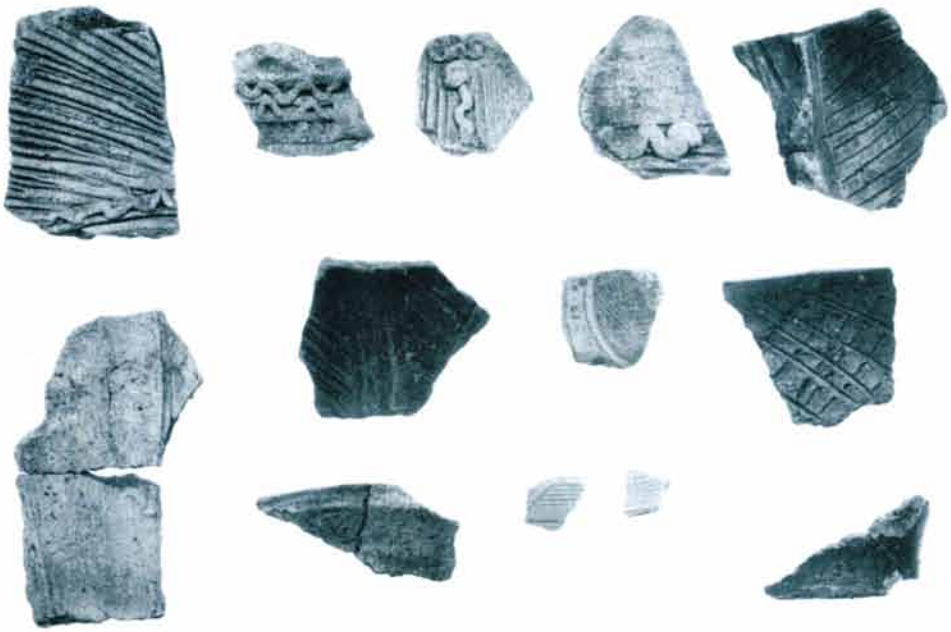
遺構外出土土器



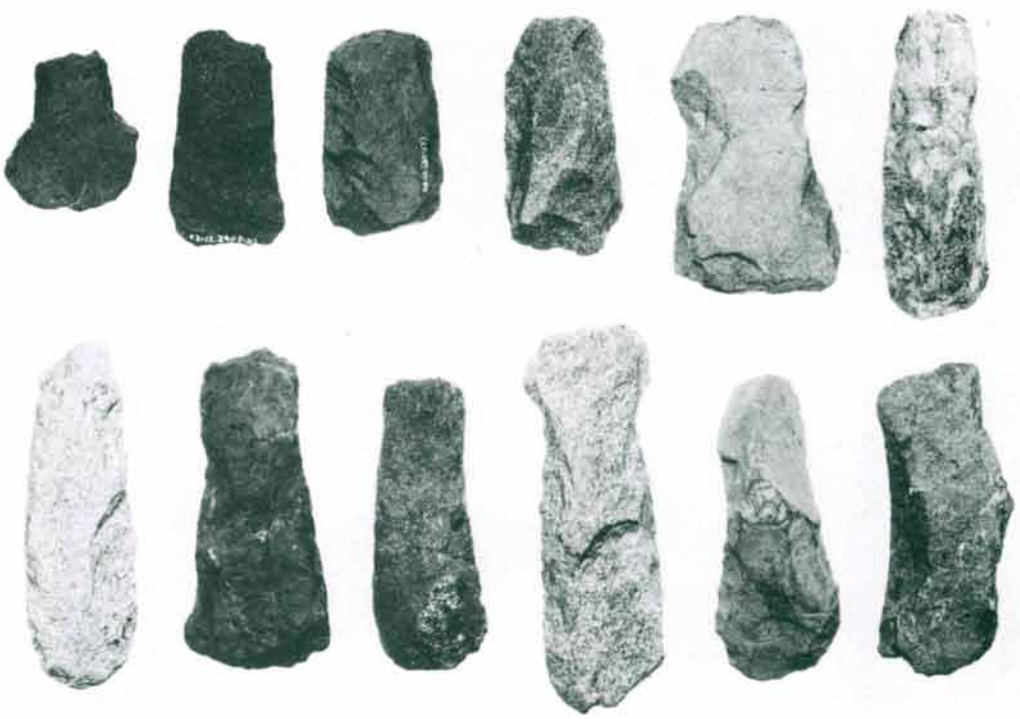
遺構外出土土器



遺構外出土土器

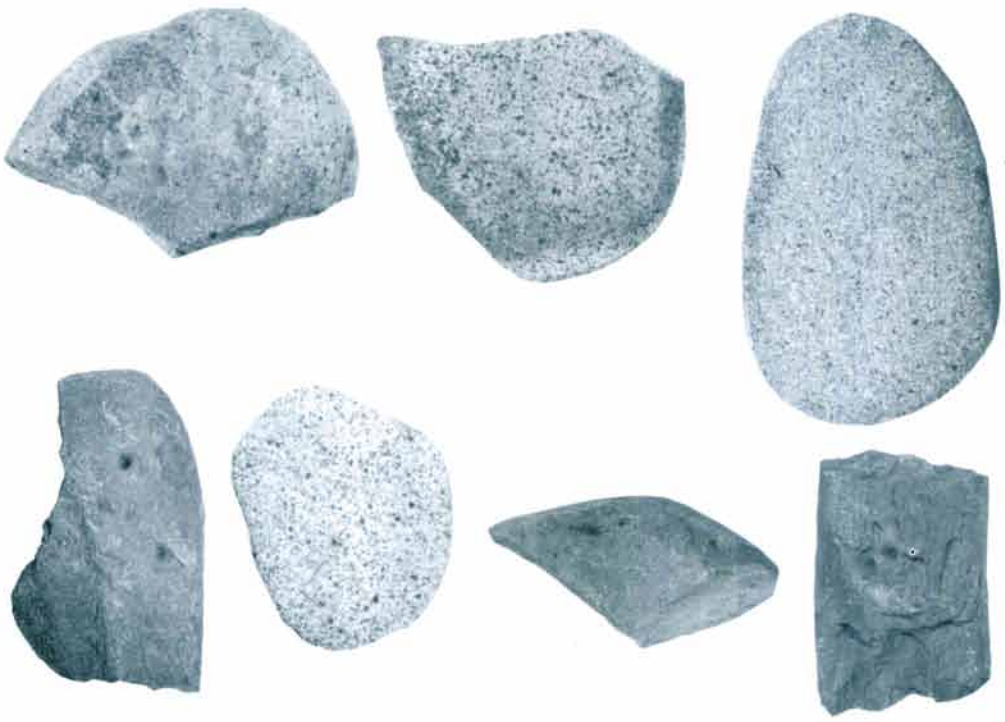


遺構外出土土器

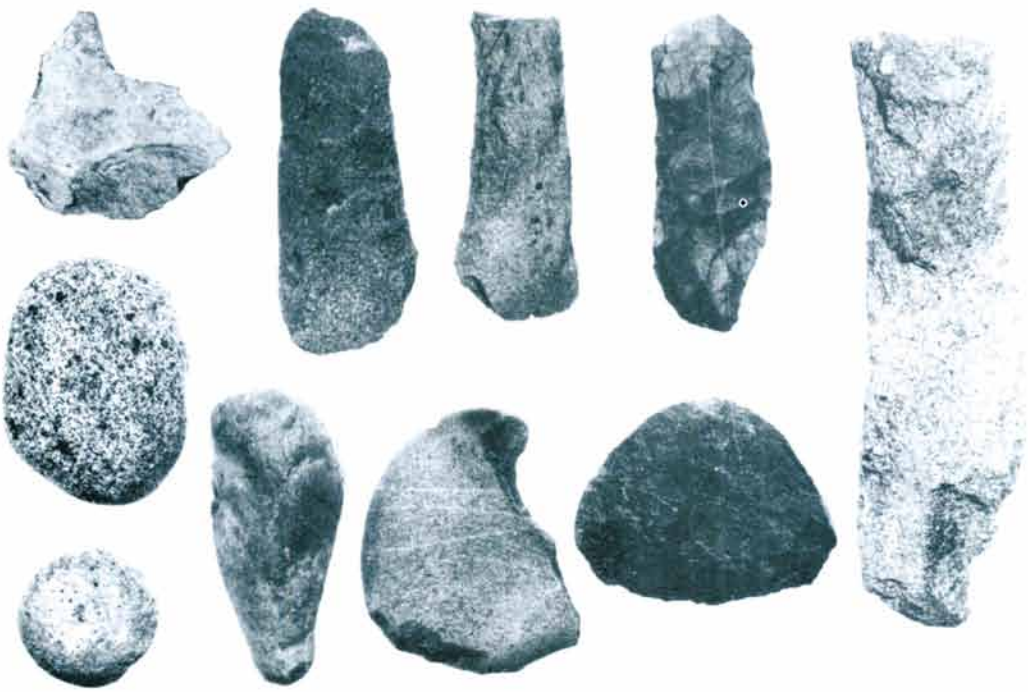


22号住居址出土石器

22号住居址出土石器

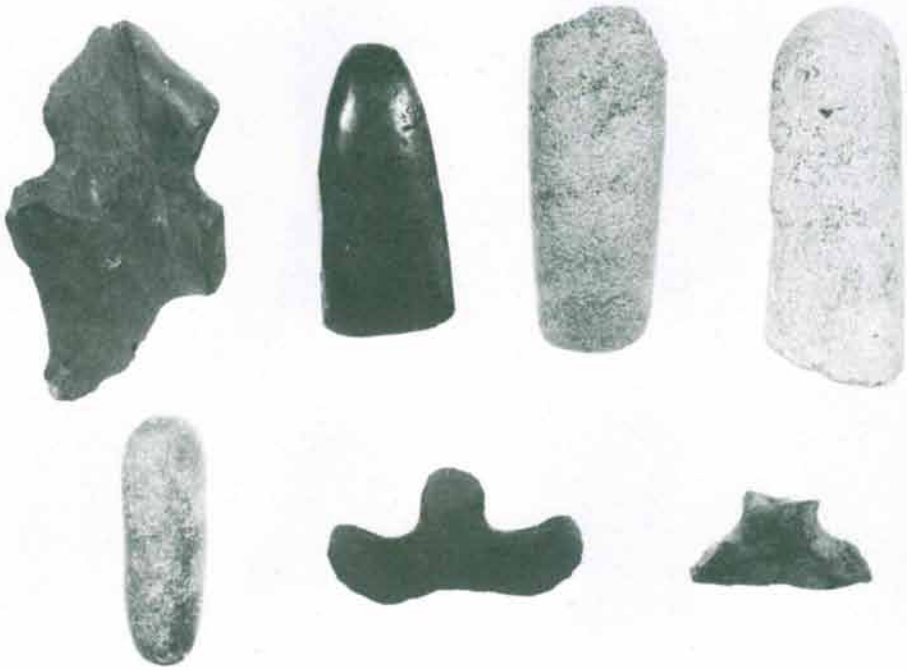


22号住居址出土石器

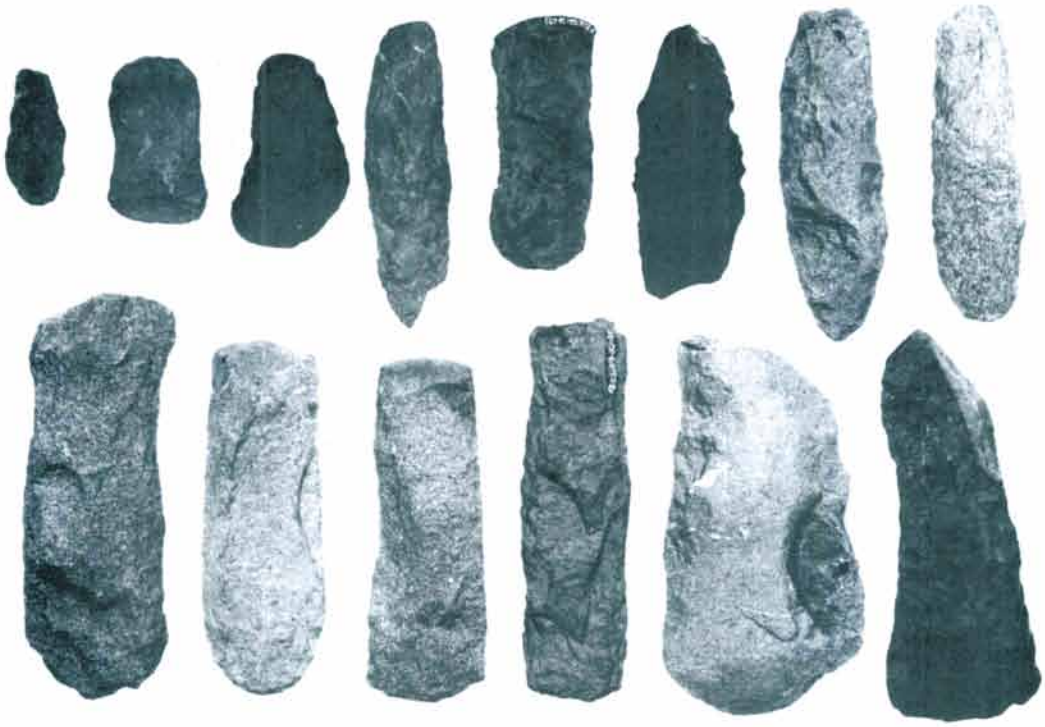


24号住居址出土石器

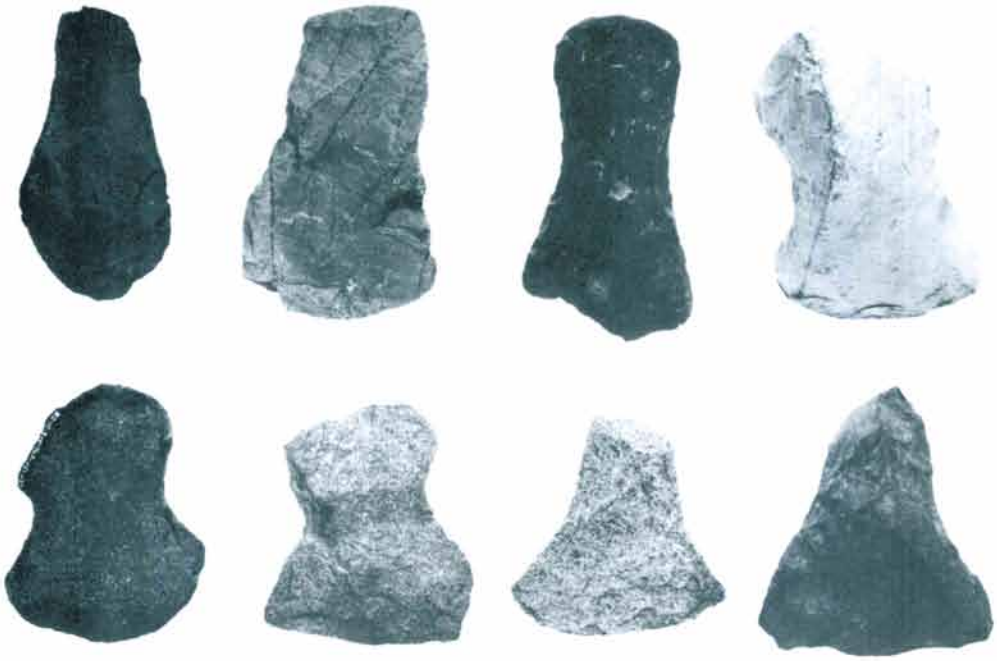
出土石器(第13次を含む)



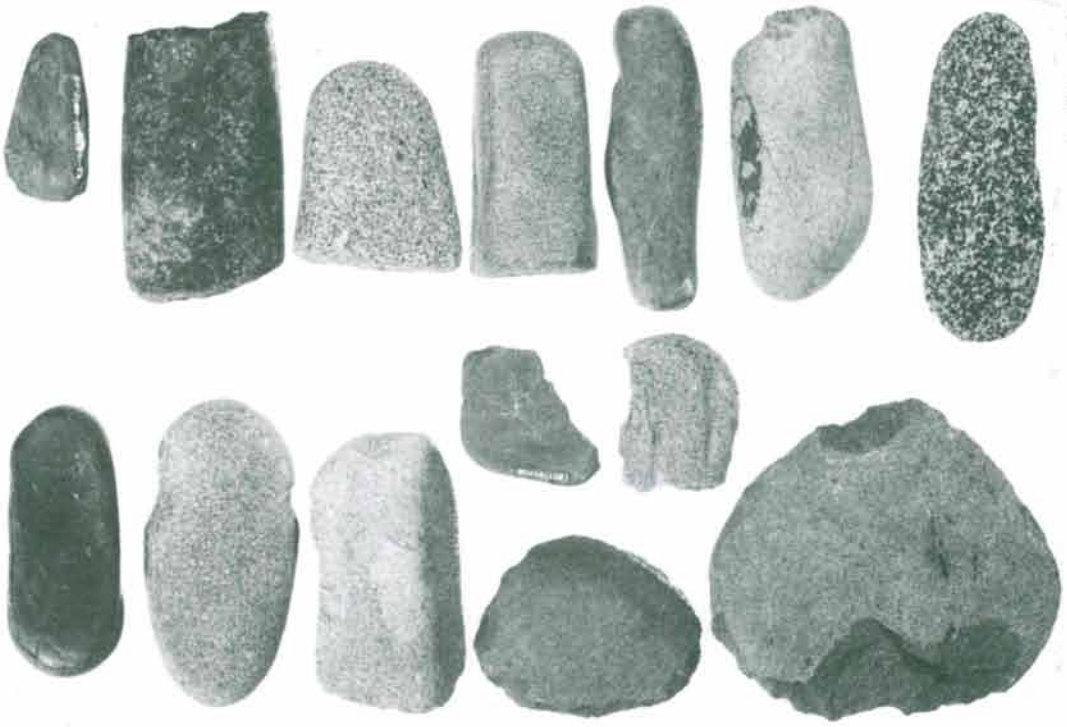
その他の遺構出土石器



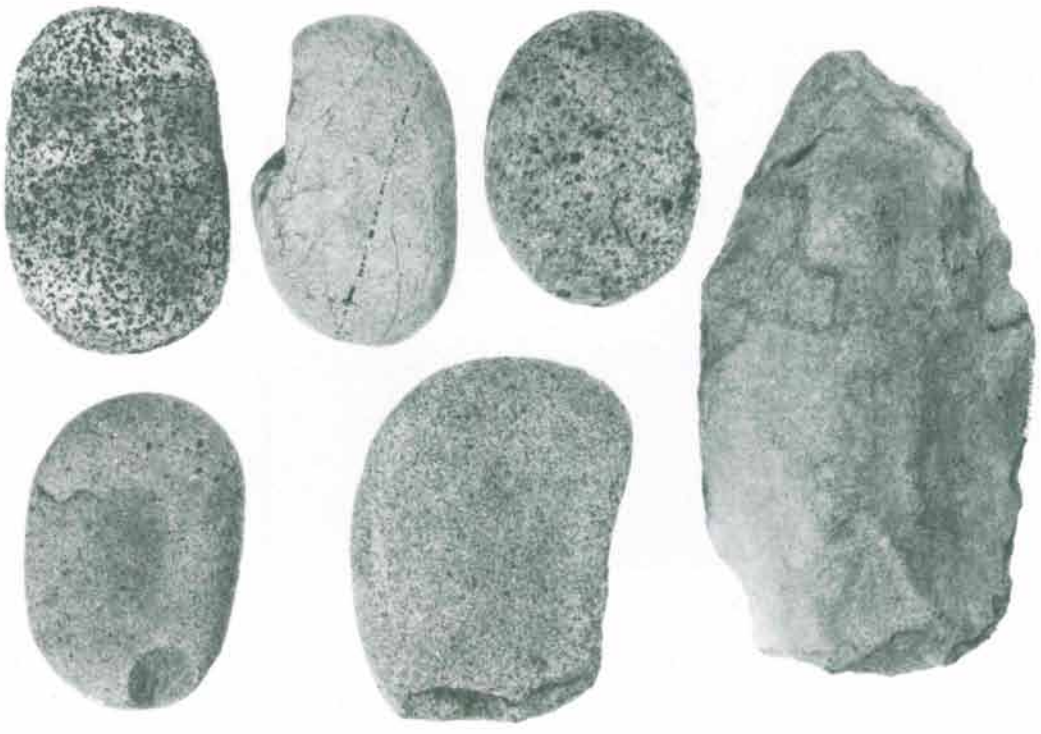
遺構外出土石器



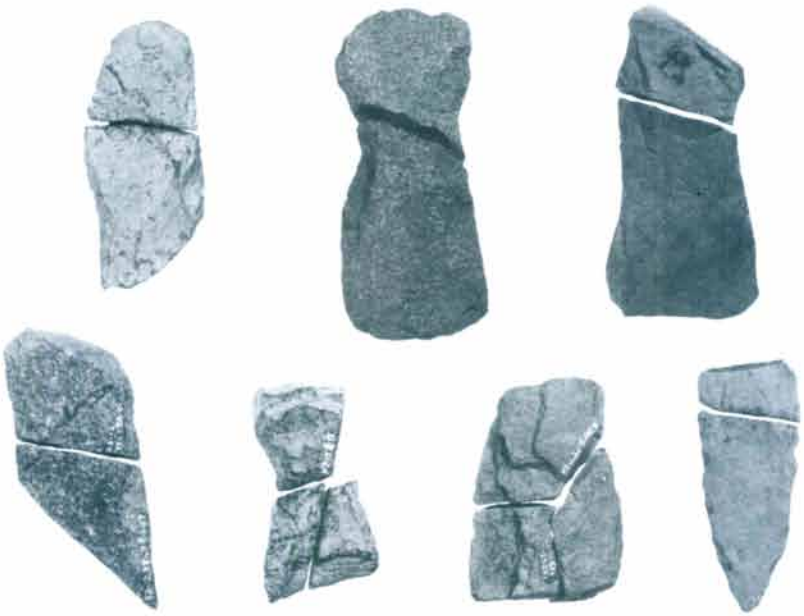
遺構外出土石器



遺構外出土石器

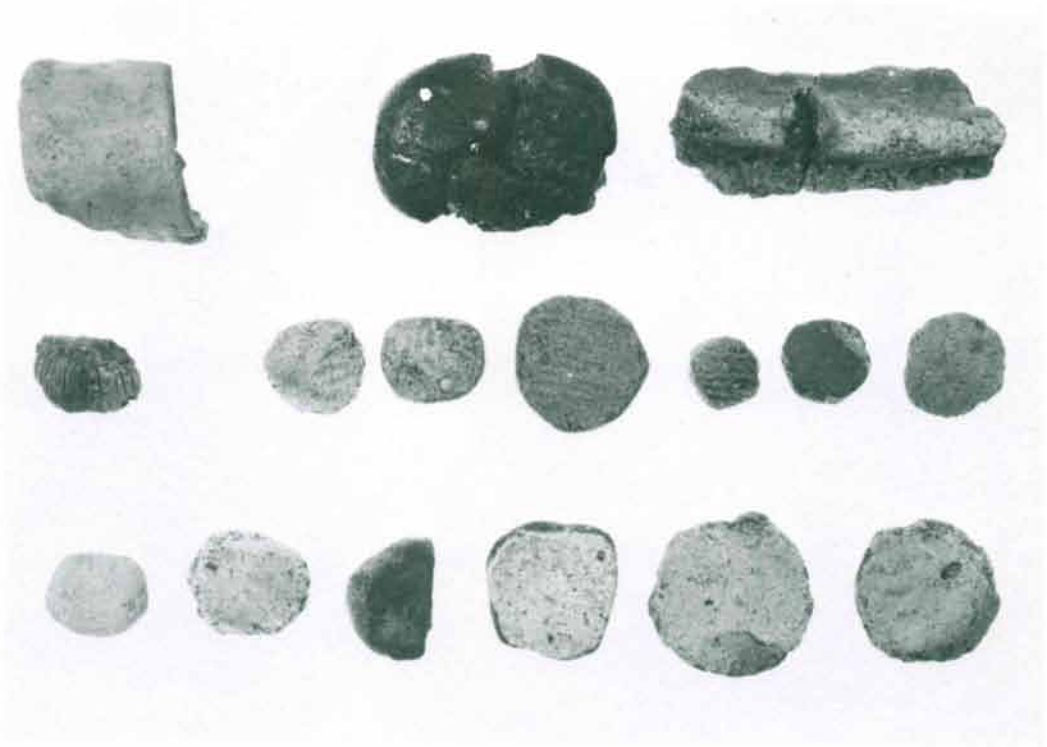


遺構外出土石器



打製石斧接合資料

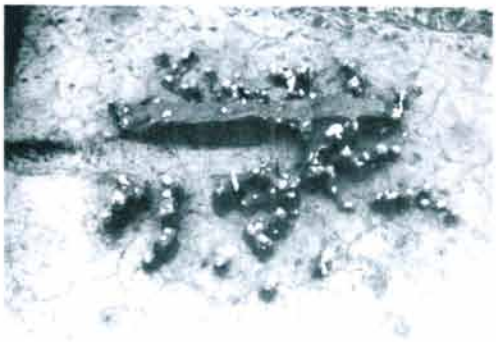
分割礫接合資料



土製品

硬玉製大珠

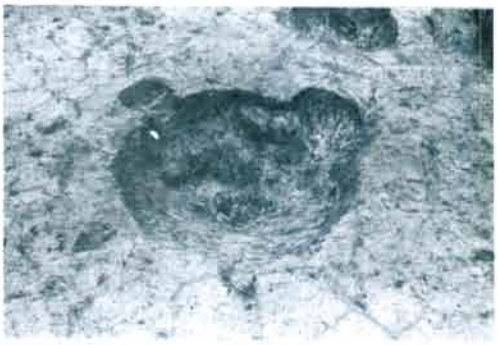
第13次調査調査区全景（西から）



11号集石

42号土坑

43号土坑

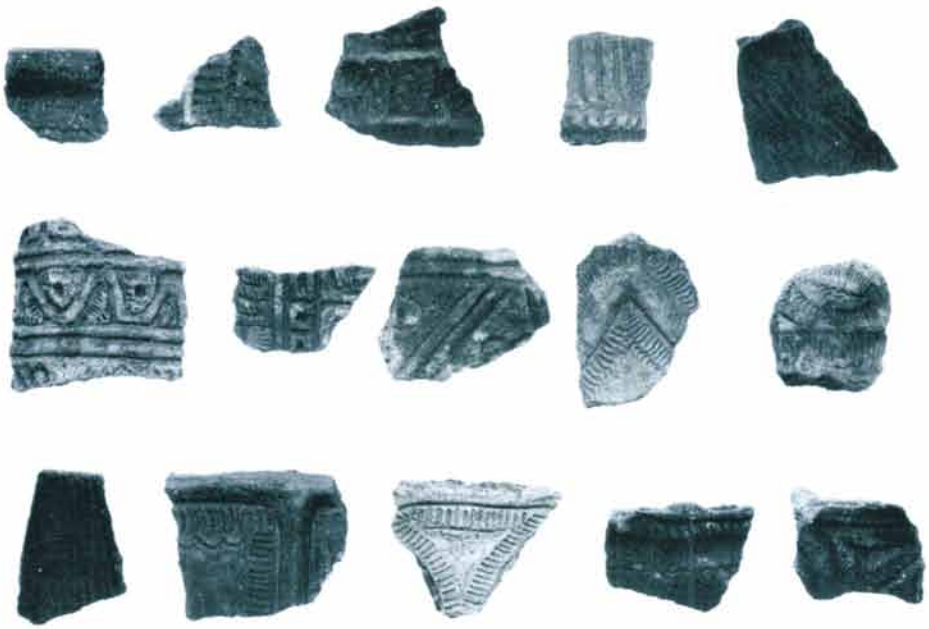


44号土坑

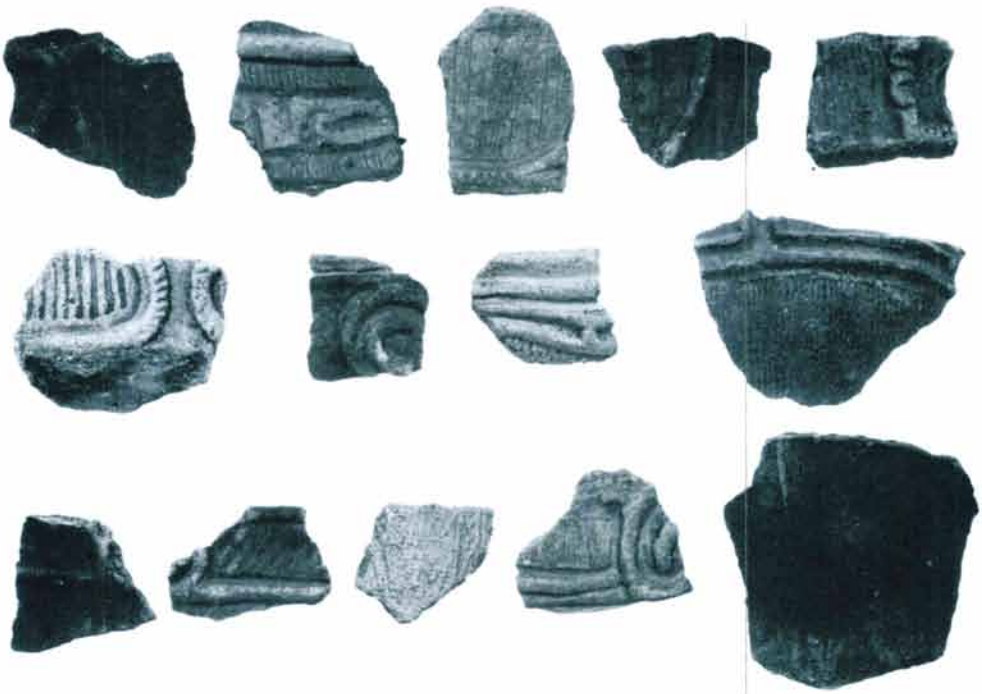
図版　二十七

面取・溝状

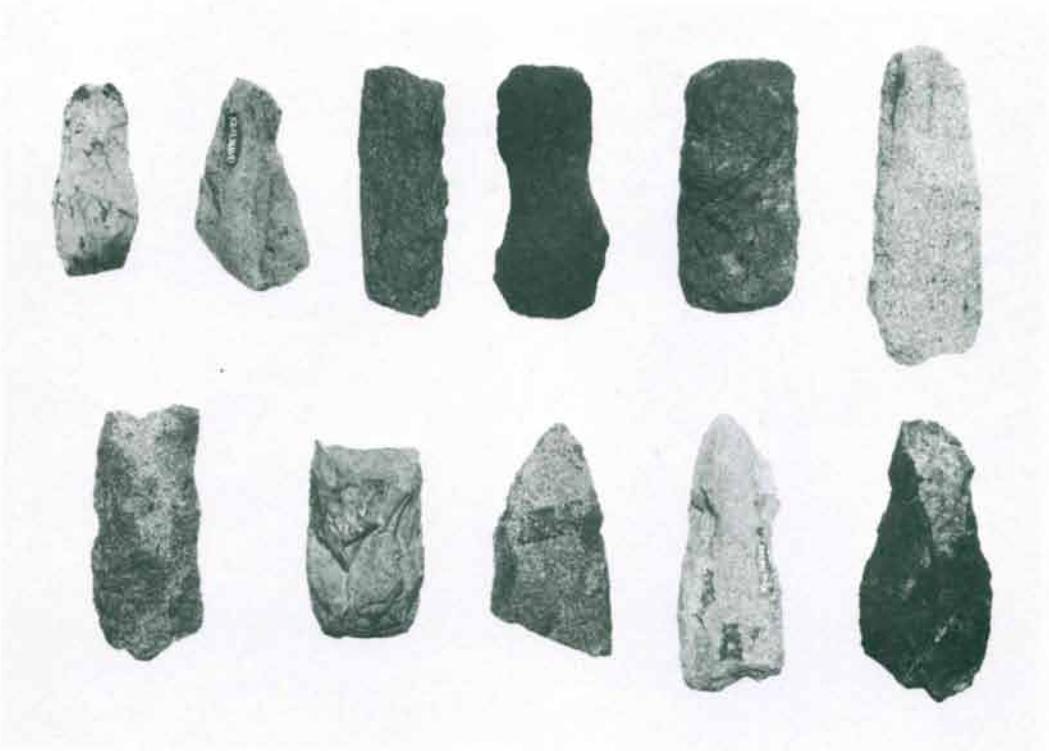
出土土器・土製品



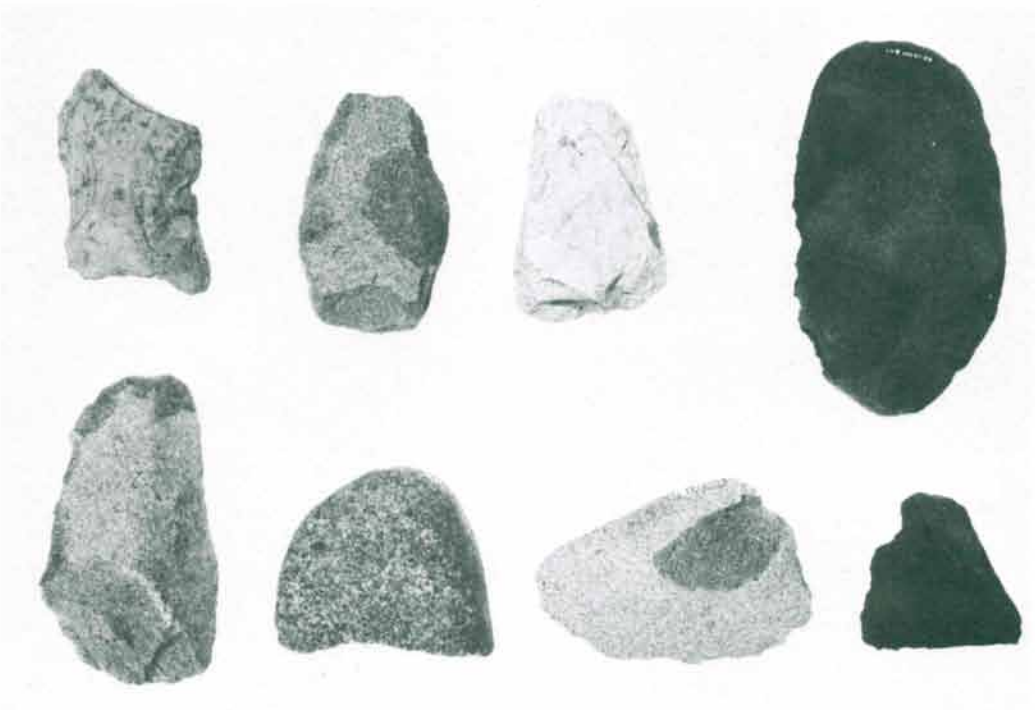
出土土器



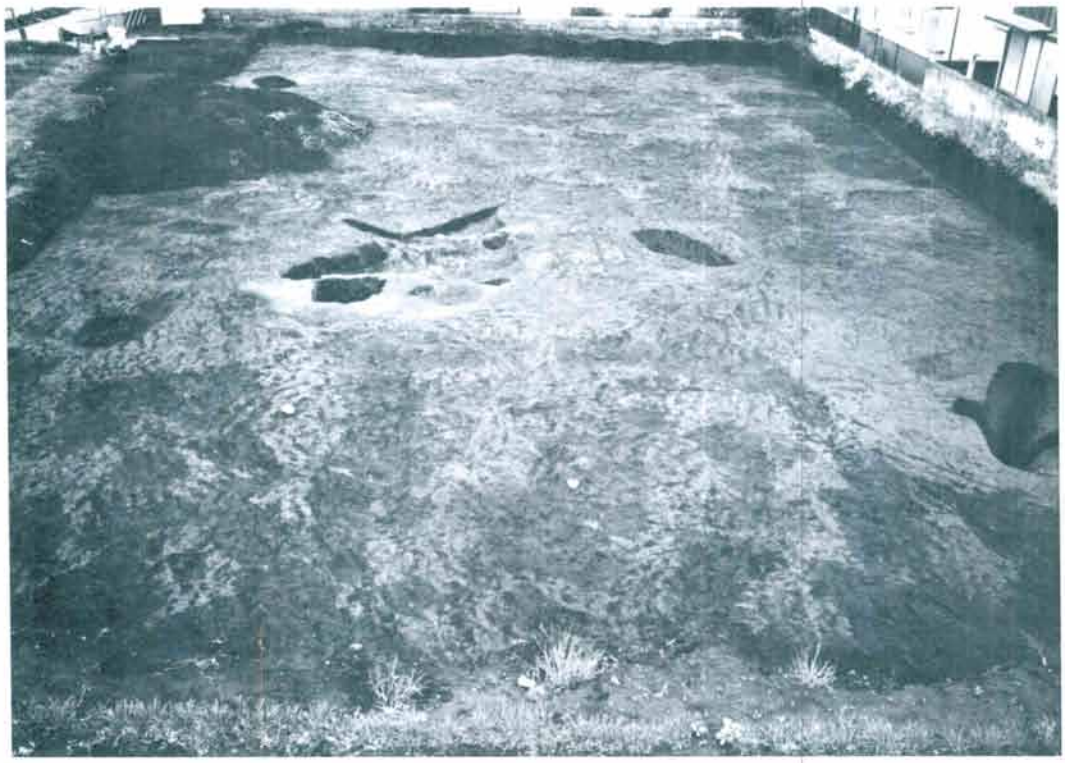
出土土器



出土石器



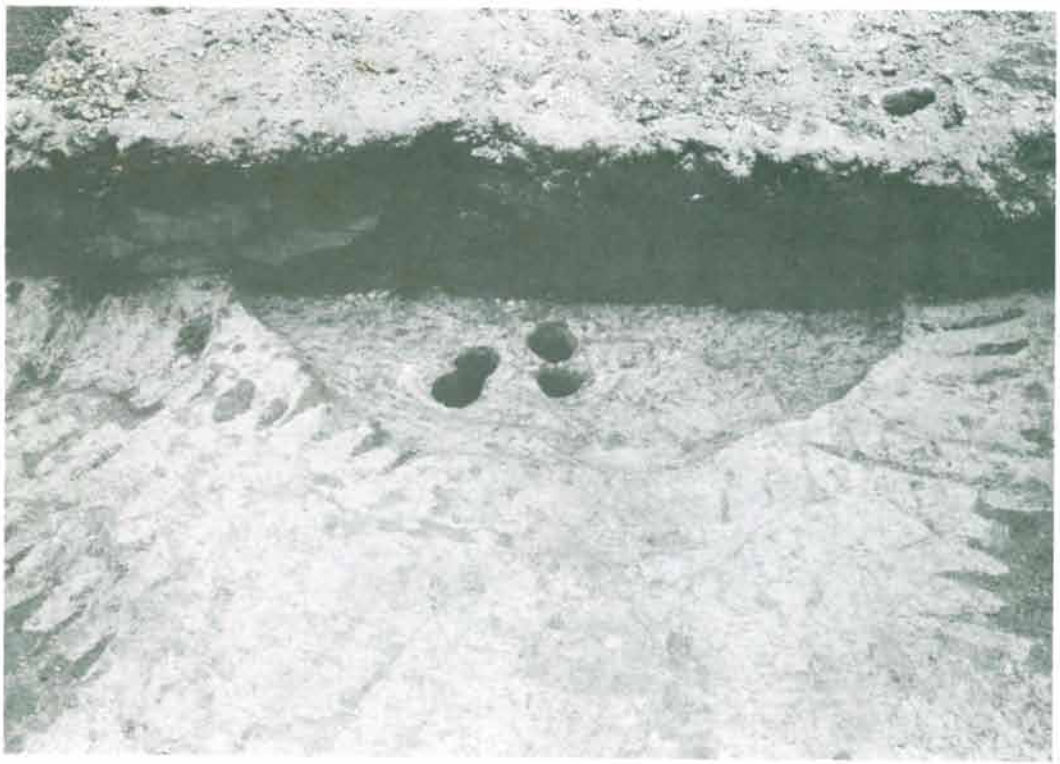
出土石器



第15次調査　調査区全景

先土器時代遺物集中部

43号住居址



44号住居址

図版 二十三

45号土坑

45号土坑断面

46号土坑

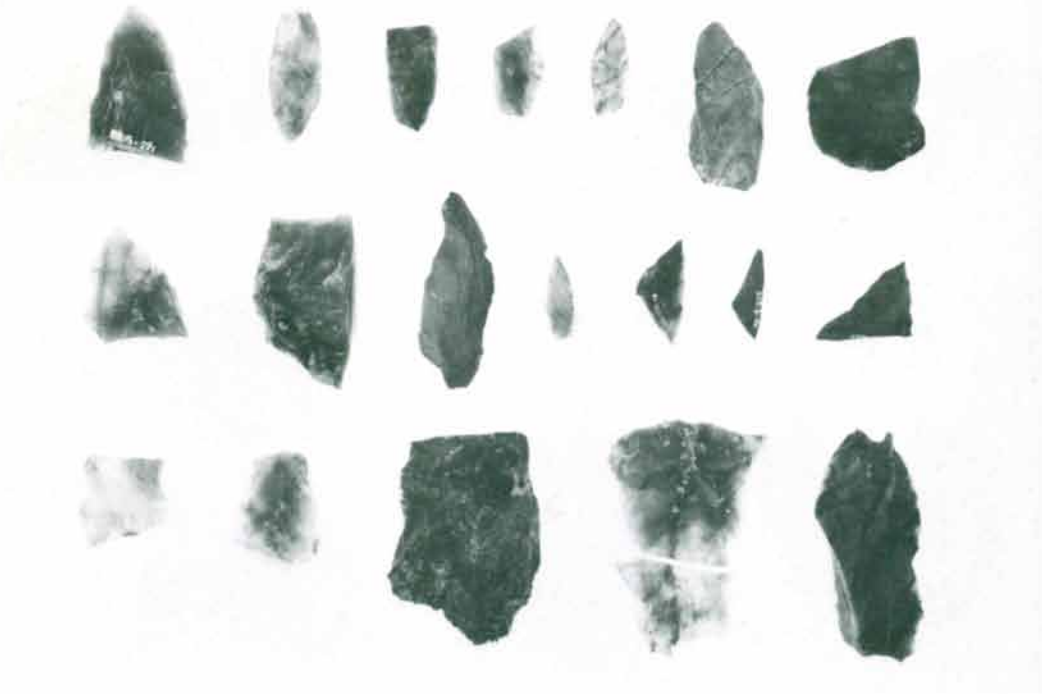
47号土坑

48号土坑

14号土坑

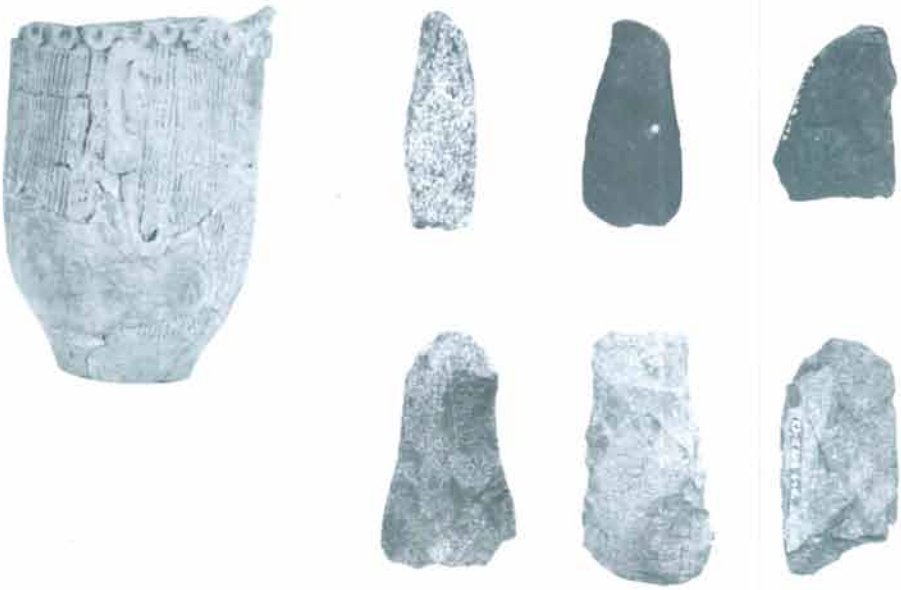
50号土坑

51号土坑



先土器時代出土石器

残核・剥片類



出土土器・石器

1．打製石斧使用痕（磨耗）

2．打製石斧使用痕（擦痕）

2．磨製石斧素材礫(磨面)

3．叩き石(敲打痕)

4．有溝砥石溝部

5．有孔土製品穿孔部

6．大珠穿孔部

7．大珠穿孔部

恋ヶ窪遺跡発掘調査報告Ⅳ

発行日　昭和63年３月31日
編著者　国分寺市遺跡調査団
© （団長　滝口　宏）
発行所　国分寺市遺跡調査会
国分寺市西元町１－15－15
東京都国分寺市教育委員会
〒185 国分寺市戸倉１－６－１
TEL 0423－25－0111（代表）
印刷所　統計印刷工業株式会社

令和４年（2022）３月８日　デジタル版作成
底本はＢ５版。